

# 第77回日米学生会議

The 77th Japan-America Student Conference



開催地：京都・大阪・熊本・東京

本会議：8月1日～8月21日

# 第 77 回日米学生会議

## 日本側報告書



第 77 回日米学生会議  
日本側実行委員会

## 実行委員長挨拶

“Upholding Dignity: Bilateral harmony through respectful dialogue”

戦後 80 年を迎えた 2025 年 8 月、第 77 回日米学生会議は京都・大阪・熊本・東京の 4 都市で会議を開催した。日本と米国が 80 年にわたり歩んできた歴史を振り返るとともに、未来の歴史の担い手となる私たちが、人生を通してどのような選択を重ねていくのか。その価値観や信念、社会の捉え方を再考する機会となる会議づくりを志した。各分科会では、2025 年の国際社会が直面する諸課題、ならびに日米が協力して取り組むべき問題について、日米双方の代表者が建設的かつ真摯な議論を重ねた。3 週間にわたる対話と、寝食を共にした日々は、参加者一人ひとりにとって、今後の人生の中で幾度となく思い返される記憶の一部、原点となることを願ってやまない。

報告書の冒頭挨拶にどのような言葉を記すべきか悩んだが、ここでは、大学 4 年間の学びと日米学生会議にかけた思いを、率直に綴ることとする。

まず前提として、日米学生会議の歴代実行委員長の多くは、いわゆる名門大学に在籍してきた。その中で、私は兵庫県豊岡市、日本海側に位置する地方都市にある小さな大学に在籍していた。同大学は、文部科学省が 2019 年度に導入した専門職大学制度に基づき創設された新たな教育機関であり、私はその第 1 期生でもある。そうした背景を持つ私が実行委員長を務めたことは、学歴社会や都市一極集中といった既存の構造においては、異例の出来事であったかもしれない。しかし、実行委員として活動する中で、それが可能であったのは、先輩方が 90 年にわたる歴史の中で守り育んできた議論の土壌があったからこそだと気付かされた。日本の未来について真剣に考える若者に広く門戸を開き、異なる意見の表明を歓迎する姿勢こそが、時代ごとの諸課題を取り上げる学生会議として、日本社会を変革する人材輩出の役割に寄与してきたのではないだろうか。

大学 4 年間、私は演劇教育の第一人者である平田オリザ学長のもとで学び、芸術文化と観光という新たな学問領域から、人間がより心豊かな人生を送るための社会の在り方を探求してきた。それは同時に、「我々がどのような生き物なのか」、向き合うことでもあった。知能、言語、表現、思考力といった能力に恵まれた人間が、より「人間らしく」生きることとは何か。その一つの答えが、対話を継続することにあると考える。学長は常に、「私たちは『わかりあえないことから』対話を始めなければならない」と強調していた。異なる意見が存在するからこそ、論破や表面的な会話にとどまるのではなく、合意点を模索する能力が求められる。これは、分断が進行する現代社会において、特に重要な能力であるといえる。したがって、第 77 回日米学生会議実行委員会は、先人たちが築いてきた伝統を受け継ぎ、肩書きや地位にとらわれず、何者でもない学生が自由に発言し、対等に議論できる環境を整えることに尽力した。

さらに、日本開催として、地方開催地の充実に注力した。これは、地方の大学で 4 年間を過ごしたからこそ実感したその魅力を、日米双方の参加者に伝えたかったからである。今、地方はかつてないほどに活気付いている。インバウンド観光の増加や、コロナ禍以降のテレワーク

の普及によって、都市部に居住することの必然性は薄れつつある。また、地方創生に取り組む人々も増加傾向にある。一方、食糧自給率や外国人労働者の受け入れ、子育て支援という社会課題についても、少子高齢化問題を抱える日本は真剣に考える必要がある。

第 77 回では、初めて熊本県を開催地に選定した。事前準備として、民間企業、地元住民、教育機関への挨拶まわりから始まった。特に、天草市でのホームステイを実現するにあたっては、市役所の深い理解と協力が不可欠であった。地方に暮らす人々はしばしば「何もない」と口にするが、東京都で育った私にとって、地方には、都心部が失ったものの「すべて」があるように感じられる。地元住民が支えるコミュニティ、豊かな自然に育まれた日本の風土、季節の移ろいを感じさせる祭り、そして地域に根ざした伝統文化。これらは、画一的な都市空間には見られない、地方にしかない多様で固有の価値である。こうした魅力は、決して簡単に言葉で語り尽くせるものではない。だからこそ、天草市でのホームステイと熊本県内での学びの場は、日米双方の学生にとって、かけがえのない経験となり得ると信じて、実行委員長として真摯に活動に取り組んだ。当初は、そのビジョンを実行委員会内で共有し、理解を得ることに困難を感じる場面もあったが、実際にプログラムとして形にし、参加者へ提供する中で企画の趣旨と意義が伝わったことを、心から嬉しく思う。また、熊本県での準備活動を通じて、私自身も同地への愛情が芽生え、今では心から応援したい地域の一つとなった。地方と都市、日本と米国、それぞれの違いを超えて人と人が出会い、共に経験と感動を共有することこそが、文化交流の本質的な意義ではないだろうか。

これから社会に出ていく私たちは、それぞれの信念を大切にしながら、自らが望む未来を描くために、勇気をもって議論し、行動を起こしていく必要がある。その姿勢こそが、日米学生会議に参加し、さらには実行委員を務めた者に課された使命であると私は考える。第 77 回会議を成功に終えるため共に最後まで尽力してくれた実行委員をはじめ、参加者一人ひとりに心より感謝する。そして、それぞれが歩む未来が、明るく、生きがいに満ちたものであることを、心から願う。

最後になりましたが、第 77 回会議開催に際して多大なご協力をいただきました外務省、文部科学省、日米協会、地元での開催をご支援くださいました熊本県の皆様、ご賛助賜りました財団・企業の皆様、日頃から手厚いご指導を賜りました国際教育振興会の皆様、そのほか、様々な形でご支援いただきました全ての皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

第 77 回日米学生会議実行委員長 北原真悠

# Contents

## 本文中の用語対照表

### 第一章 日米学生会議概要

日米学生会議とは (7)

日米学生会議の歴史 (7)

### 第二章 第77回日米学生会議概要

概要 (9)

参加者名簿 (11)

広報 (15)

選考 (19)

JASC77 グッズ (19)

### 第三章 事前・事後研修

春合宿 (21)

フィリピン研修 (29)

安全保障研修 (37)

直前合宿 (42)

福島研修 (44)

### 第四章 勉強会/FT

びーすふるファーム 斎藤和平様 (46)

一般社団法人 スローフード協会 (47)

前法務大臣 牧原秀樹様 (48)

越川和彦前駐フィリピン特命全権大使勉強会 (49)

日本空港ビルディング株式会社 (50)

駐日フィリピン共和国大使館 Mylene Garcia-Albano 大使表敬訪問 (51)

日本女子大学 田邊和子教授 (52)

スペイン・コルドバ大学 Dr. Gisella Policastro Ponce (53)

東京大学 川島真教授 (54)

特定非営利活動法人 TABLE FOR TWO (55)

認定NPO 法人 全国子ども食堂支援センター・むすびえ (56)

防衛大学校 石川卓教授 (57)

外務省 川口耕一郎様 (58)

株式会社 JERA 倉持あゆみ様 (59)

びーすふるファーム訪問 (60)

「高畑勲展ー日本のアニメーションを作った男」訪問 (61)

農林水産省 大臣官房政策課・食料安全保障室 平田和也様 (62)

霞こずえ様 (63)

熊本サイト事前勉強会 (64)

松乃鮫4代目 手塚良則様 (65)

厚生労働省 (66)

東京大学医学部 特任研究員 今井けい様 (67)

大阪大学大学院工学研究科博士後期課程3年生 藤原悠様 (68)

デジタルグリッド 豊田祐介様 (69)

外務省 小野建様 (70)

東京都スタートアップ戦略推進本部 松本克己様 (71)

東海原発訪問 (72)

### 第五章 本会議

第1サイト：関西（京都・大阪）(74)

第2サイト：熊本 (88)

第3サイト：東京 (106)

## 第六章 分科会

- 戦略の時代の経営・経済 (120)
- 食と文化・社会 (126)
- 環境イノベーションと事業創造 (134)
- 科学技術と倫理 (142)
- コミュニケーションのあり方 (152)
- デザインとメディアにおける美学 (162)
- インド太平洋地域における国際政治 (170)

## 第七章 第77回からの新規企画

- タスクフォース交流会 (178)
- 熊本サイト企画委員 (179)
- 熊本サイト事前勉強会 (182)

## 第八章 後援・協賛・賛助・共催・協力

- 主催及び後援団体協力者 (184)
- 選考活動 (186)
- 広報活動 (186)
- 事前研修 (186)
- 勉強会 / FT (実施日時順) (188)
- 本会議 (188)

## 第九章 実行委員あとかぎ

- 北原 真悠 (第77回日米学生会議 日本側実行委員長) (194)
- 赤瀬 朋基 (第77回日米学生会議 日本側副実行委員長) (196)
- 小川 志穂 (第77回日米学生会議 日本側副実行委員長) (198)
- 石賀 悠 (200)
- イビネディオ 嶺 (202)
- 甲斐 聖人 (204)
- 多田野 真仁 (206)
- 野添 葉音 (208)
- 熊本サイト企画委員 (212)

## 第十章 第78回日米学生会議のお知らせ

- 開催概要 (214)
- 第78回日米学生会議実行委員会紹介 (218)
- 第78回日米学生会議 日本側実行委員長からのご挨拶 (220)

## 編集後記

## 本文中の用語対照表

略語	説明
JASC	日米学生会議 (Japan-America Student Conference)
JASCer	日米学生会議現役参加者及び過去参加者
デリ	参加者 (Delegate)
ジャパデリ	日本側参加者 (Japa-Dele)
アメデリ	米国側参加者 (Ame-Dele)
EC	実行委員 (Executive Committee)
JEC	日本側実行委員 (Japanese Executive Committee)
AEC	米国側実行委員 (American Executive Committee)
IEC	日本側主催団体：一般財団法人国際教育振興会 (International Education Center)
ISC	米国側主催団体：International Student Conferences Inc.
アラムナイ	日米学生会議過去参加者 (Alumni)
サイト	本会議中に訪れる地域
FT	分科会の研究テーマについての理解を深めるための、政治家・政府機関・国際機関・企業・大学・NGO・NPO 及び研究所などへの訪問研修 (Field Trip)
RT	分科会 (Round Table)
経営・経済/BMS	戦略の時代の経営・経済分科会 Japan-US Business Strategies RT
食/CAKE	食と文化・社会分科会 Food, Culture, and Society RT
環境/EIE	環境イノベーションと事業創造分科会 Environmental Innovation and Entrepreneurship RT
科学技術/TEAH	科学技術と倫理分科会 Technology, Ethics, and Happiness RT
コミュ/MENTION	コミュニケーションのあり方分科会 Means and Meanings of Communication RT
デザイン/MAD	デザインとメディアにおける美学分科会 Aesthetics in Design and Media RT
国際政治/PIP	インド太平洋地域における国際政治分科会 International Politics in Indo-Pacific RT
KSC	熊本サイト企画委員 (Kumamoto Site Committee)

## 第一章 日米学生会議概要

### 日米学生会議とは

日米学生会議は「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。学生もその一翼を担うべきである。」という理念のもと、満州事変を契機に悪化していた日米関係を憂慮した4人の日本人学生により1934年に創設された、90有余年の歴史を持つ国際学生交流プログラムである。

会議の本懐は、会議終了後も続く、生涯にわたる友情、信頼関係を構築し、莫逆の友をつくることにあり、歴史を通してその会議の形態は変化をしつつも、日米両国の学生の相互理解に寄与してきた。この草の根の交流を通し、日米両国のみならず世界の平和実現のために各分野で活躍する卒業生を輩出している。

### 日米学生会議の歴史

#### 1934年～1940年 初期の日米学生会議

日米学生会議は1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも4名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。日本側の努力と熱意に感銘したアメリカ側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

#### 1947年～1954年 戦後の日米学生会議

戦争の終結によって会議は再開を試みたものの、戦前とは異なり、1953年までは日本のみでの開催となった。翌1954年、戦後初の米国開催として第15回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は1955年から1963年まで再び中断された。

#### 1964年～今日の日米学生会議

1964年、OB/OGからの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並治が理事長を務める一般財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第16回会議はリードカレッジで開催され、77名の日本人学生と62名の米国人学生が参加した。1973年の第25回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を一ヵ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。また、各界に著名人を輩出したことにより、その名声が広がった。

90年の歴史を持つこの会議において、最も意義のあることは、創設以来、その企画、運営を両国の学生が主体的に行っていることである。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。特に新型コロナウイルスの流行により社会が根本から変わる機会となった2020年は会議創始以来、初となるオンライン開催となった。画面越しに白熱した議論が行われ、会議の灯を次の世代へ繋いだ。これらを踏まえ

日米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。



## 第二章 第 77 回日米学生会議概要

### 概要

#### 【総合テーマ】

Upholding Dignity: Bilateral harmony through respectful dialogue  
 尊厳を守る ～敬意ある対話が紡ぐ日米の調和～

日米学生会議は 1934 年に創設された日本初の国際学生交流プログラムとして、日米両国の学生の相互理解と一生の友情を育み、両国と世界に向けて確かな貢献と発信を続けている。国際情勢が複雑化する現代において、尊敬心に基づく対話がより一層重要になっていることから、「尊厳」を会議の核として設定した。さらに、戦後 80 年という節目に、日米の学生たちは、未来の国際社会でいかに尊厳を保ち、平和で持続可能な関係を築くことができるかを模索した。本会議では、実体験に価値を置き、現地の人々の声を聞き、一次情報から学ぶことを重視した。最終フォーラムは、多角的な議論をもとに社会実装へ向けたビジョンを提言する機会となるように設計し、地理的、文化的な境界を越えた環境の中、瞬間的ではない、将来に繋がる深い人間交流のもとでグローバル・リーダーシップを育ててほしいという願いを込めた。これからの国際社会を担う日米両国の学生たちが、持続可能な未来に向けたビジョンを共有することで、両国関係はさらに強固になり、世界全体にもその影響が広がるだろう。会議の終わりが新たな始まりとなり、参加者が共に深めた議論を一人ひとりの尊厳が尊重される未来へと還元していくことを期待する。

#### 【主催】

一般財団法人国際教育振興会 / International Student Conferences, Inc.

#### 【企画 / 運営】

第 77 回日米学生会議実行委員会

#### 【後援】

外務省、文部科学省、在日米国大使館、一般社団法人日米協会

#### 【開催期間】

事業実施期間 : 2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日

本会議開催期間 : 2025 年 7 月 31 日～8 月 21 日

#### 【参加者】

日本側 : 34 名 (実行委員 8 名を含む)

アメリカ側 : 36 名 (実行委員 8 名を含む)

計 70 名

#### 【開催地】 →詳細は第五章

第一開催地 : 関西 (京都・大阪) 7 月 31 日～8 月 7 日

大阪は「未来志向」を象徴する都市であり、2025 年に開催される万博では各国の最先端技術が集結し、未来の社会像の提示に期待が寄せられている。また、IR 計画の推進や SDGs の先進都市としての取り組みが活発な大阪は、経済発展と社会課題の解決を両立する都市となるであろう。加えて、食文化やエンターテイメントといった訪れる人々を魅了する独自の文化が発展している。

一方、京都は歴史と文化が色濃く残る「伝統志向」の都市であり、豊かな文化遺産を背景に、時代を超えた美と風格を体現する。両都市を通じて、未来を見据えた革新と、長い歴史によっ

て紡がれた日本の伝統文化を体験できることは、参加者にとって、過去・現在・未来にわたる日本の魅力を再発見する貴重な機会となるであろう。

### 第二開催地：熊本 8月7日～8月14日

熊本サイトは、日本の過去と未来に向き合う学びの場として注目される。滞在期間中には、半導体関連の産業振興に触れるとともに、日本社会が抱える少子化や過疎化、災害復興などの課題についても理解を深める。また、原爆投下に関する歴史的事実を振り返りつつ、日米の学生で平和への思いも共有したい。参加者は、学生を含む地元住民との交流を通じて、熊本固有のローカルな視点を議論に取り入れることが期待される。さらに、豊かな自然や歴史文化を有する熊本県に身を置き議論を深める中で、日本の地方社会の魅力と未来への可能性を再発見できるだろう。この新しい視座をもって、本滞在を地域社会の持続可能性について考察する機会とし、8月13日の公開サイトフォーラムにて学びや議論の成果を地域と共有することを目指す。

### 第三開催地：東京 8月14日～21日

戦後80年、焼け野原だった東京は現代における日本の政治・経済・文化の中枢を担う世界有数の大都市であり続けている。数多くの政府機関や各国の大使館、企業が存在を背景に、ヒト・モノ・情報が高度に集積しており、国際都市としての存在感も依然として大きい。参加者は京都・大阪そして熊本で学んだ日本の現状を踏まえ、国内および対外関係における取り組みの最前線を学ぶ。第77回会議の最終開催地として、これからの日本について再考する機会となることを期待する。また、約3週間にわたる本会議の集大成であるファイナルフォーラムでは、次世代の日本を担うリーダーとして分科会での議論の成果を広く社会に発信してほしい。

### 【分科会】 →詳細は第六章

日米学生会議では、参加者が日本側5名（うち実行委員1名）+アメリカ側5名（うち実行委員1名）を基本形とする7つの分科会に分かれて、3月より勉強会・議論を中心とした様々な活動を行い、8月の本会議に臨む。第77回は、以下の7つの分科会によって構成された。

1. 戦略の時代の経営・経済分科会（イビネディオン）
2. 食と文化・社会分科会（野添）
3. 環境イノベーションと事業創造分科会（多田野）
4. 科学技術と倫理分科会（石賀）
5. コミュニケーションのあり方分科会（小川）
6. デザインとメディアにおける美学分科会（甲斐）
7. インド太平洋地域における国際政治分科会（赤瀬）

## 参加者名簿

### 【日本側実行委員】

(氏名、所属、担当役職、分科会)

 <p><b>北原 真悠</b> 芸術文化観光専門職大学4年 実行委員長 / 財務 / 熊本 / フィリピン研修 / 関西業務 / 報告会 / 報告書</p>	 <p><b>小川 志穂</b> 東京外国語大学言語文化学部3年 副実行委員長 / 選考 / 熊本 / 報告書 春合宿 / 保健 / 定例会 コミュニケーションのあり方</p>
 <p><b>赤瀬 朋基</b> 学習院大学法学部4年 副実行委員長 / 選考 / 京都 / 大阪 東京 / フィリピン研修 / 安保研修 関西業務 / 報告会 インド太平洋地域における国際政治</p>	 <p><b>野添 葉音</b> 上智大学総合人間科学部2年 選考 / 京都 / 大阪 / 報告書 / 定例会 JASC COMEBACK / 関西業務 食と文化・社会</p>
 <p><b>多田野 真仁</b> 北海道大学経済学部4年 広報 / 東京 / フィリピン研修 JASC COMEBACK / 報告書 環境イノベーションと事業創造</p>	 <p><b>石賀 悠</b> 早稲田大学先進理工学部2年 広報 / 京都 / 大阪 / 報告会 / 春合宿 安保研修 / 保健 科学技術と倫理</p>
 <p><b>甲斐 聖人</b> 国際教養大学国際教養学部4年 広報 / 熊本 / 報告会 / 春合宿 / 保健 JASC COMEBACK デザインとメディアにおける美学</p>	 <p><b>イビネディオ 嶺</b> 明治大学法学部3年 財務 / 東京 / フィリピン研修 業務効率化 / JASC COMEBACK 報告書 / 福島研修 戦略の時代の経営・経済</p>



【アメリカ側実行委員】

(Name, Affiliation, Position in charge, RT)



**Sam Helman**  
Wake Forest University  
Chair/Kumamoto



**Mao Kobayashi**  
Duke University  
Vice Chair/Tokyo/Interpreter  
Technology, Ethics, and Happiness



**Andrew Lei**  
Osaka University  
Treasurer/Kansai  
Food, Culture, and Society



**Emile Shah**  
University of California, Berkeley  
Secretary/Tokyo  
Environmental Innovation and  
Entrepreneurship



**Hudson Pitchford**  
Washington and Lee University  
Kumamoto  
International Politics in Indo-Pacific



**Amy (Qiyun) Wu**  
Smith College  
Photographer/Kansai  
Means and Meanings of  
Communication



**Brandon Rivera De Leon**  
University of Wisconsin-Madison  
Recruitment, Publicity and  
Technology/Kansai  
Japan-US Business Strategies



**Rachel Collins**  
Washington and Lee University  
Recruitment, Publicity and  
Technology/Kansai  
Aesthetics in Design and Media



## 【日本側参加者】

氏名	所属	参加分科会
水野 遙	名城大学薬学部 6年	経営・経済
小野 萌絵佳	早稲田大学法学部 3年	経営・経済
滝沢 丈	防衛大学校人文社会科学群 4年	経営・経済
田中 遼弥	九州大学農学部 4年	食
手塚 颯一郎	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士 1年	食
山川 心春	早稲田大学政治経済学部 1年	食
長嶺 泰己	東京科学大学物質理工学院 4年	環境
杉本 幹太	大阪大学基礎工学部 3年	環境
木築 のぞ美	早稲田大学文化構想学部 2年	環境
大谷 葉月	立教大学観光学部 4年	環境
岡崎 ヴィクトリア瞳子	早稲田大学先進理工学部 3年	科学技術
伏谷 飛鳥	京都大学工学部 3年	科学技術
大橋 莉央	トリニティ・カレッジ（ダブリン大学）教養課程コース 1年	科学技術
宇賀 智徳	早稲田大学政治経済学部 3年	科学技術
田中 大輔	早稲田大学院スポーツ科学研究科修士 2年	コミュ
森 聡子	広島大学教育学部 4年	コミュ
伊達 早和花	慶應義塾大学法学部 2年	コミュ
中田 怜	京都大学法学部 3年	コミュ
美坂 茉柚	国際教養大学国際教養学部 3年	デザイン
毛利 園子	早稲田大学文化構想学部 2年	デザイン
江副 聡真	東京外国語大学国際社会学部 3年	デザイン
今田 真子	東京外国語大学国際社会学部 3年	デザイン
久保木 廉	防衛大学校人文社会科学群 4年	国際政治
田代 明衣	慶應義塾大学法学部 1年	国際政治
上田 理紗	東京大学教養学部 3年	国際政治
守屋 旺次朗	早稲田大学法学部 4年	国際政治

## 【アメリカ側参加者】

Name	University	Round Table
Samir Thomas Singh	Carleton College	BMS
Laura Salas	Williams College	BMS
Maya Hsu	George Washington University	BMS
Mingjie Lin	Wake Forest University	BMS
Angela Jung	Wake Forest University	CAKE
Kingwell Ma	Georgetown University	CAKE
Taravat Nil Nyah	Duke University	CAKE
Maya Hiromi George	Trinity College	CAKE
Sameer Ahmed Ameen	University of California, Berkeley	EIE
Isabella Braughn Ferrate	Washington and Lee University	EIE
Shengwei Lei	Duke University	EIE
Juliet Luce Crane	Cornell University	EIE
Hyerin Cha	George Mason University	TEAH
Maxwell Stern	University of California, Berkeley	TEAH
Ella Jiang	University of Wisconsin-Madison	TEAH
Giovanni Camilo Suarez	University of Southern California	TEAH
Eleanor Hiroko Kakimoto Meunier	Colgate University	MENTION
Dylan Graff	Cornell University	MENTION
Marlena Zoraida Word	Smith College	MENTION
Akiko Jindo	Williams College	MENTION
Smeera Nikhil Zaveri	University of Wisconsin-Madison	MAD
Ava Aguiar	University of California, Berkeley	MAD
Gerald Reiling	Duke University	MAD
Lucie Kristine Freeman	University of Minnesota - Twin Cities	MAD
Zoe Rebecca Hoksbergen	University of California, Berkeley	PIP
Holden Tsai	Pomona College	PIP
Rebecca Faber	Harvard University	PIP
Dan Yamaguchi	Georgetown University	PIP

## 広報

本年度の広報においては、受験者数 = ①認知者数 × ②応募率とし、①と②の最大化を目指して活動を行った。

本年度は、より広範かつ確実に広報活動を行うべく、全国の教育機関の連絡先や担当者を改めて調べ上げた。昨年度リーチしていた大学に加え、抜けもれていた大学、高等専門学校、高等学校にも広報協力を依頼した。連絡がつかない学校は過去実行委員の意見を参考に、可能な限り直接広報に出向いた。さらに、第76回の参加者や実行委員の人脈を駆使して、学生団体や各種プログラムへの広報にも力を入れ、広報自体の規模の拡大に努めた。

SNSを用いて、大学の壁を超えてより多くの学生への周知を行う一方で、説明会については、①世間で同グループとして一般的に括られることの多い大学群別説明会、②地方学生の応募促進を目指した地方別説明会、③誰でも参加可能な全体説明会の三つをバランス良く展開した。

### 【SNS 戦略】

#### 1. Instagram

昨年度と同様に、大学生の使用率が最も高い Instagram アカウント運営においては、学生との接点を増やすために、デザインや投稿内容の改善を図った。特に、投稿内容に関しては、団体内部のメンバーが実際に活動している様子や1月のトライラテラル会議の様子を掲載することで、学生にとって身近で親しみやすい内容を発信した。このような取り組みは、参加者募集の Instagram リール動画の累計再生数が昨年の 87.5K から 100.4K へ変化したことから、その効果を一定程度認められる。また、大学別の広報を強化するため、早稲田大学情報局や同志社大学情報局など、各大学内のメディアを積極的に活用し、ターゲット層に直接アプローチする方法を採用した。これにより、学生層への認知度を大きく高めることができた。

#### 2. X (旧 Twitter)

昨年度と同様に、11月からは2～3日に1回、2週間前からは毎日のペースで投稿を行った。また、12月2日の報告会広報・最終応募者募集の際は各学生団体へメールを送り、協力を依頼した。また、Xの投稿後すぐのいいね数が多いと、投稿が様々な場所に表示されやすくなる性質を利用し、各実行委員が3～4のアカウントをもち、公式アカウントの投稿に保持する全てのアカウントですぐにいいねを行った。また、新たな取り組みとして留学や教育分野で著名なアカウントとコンタクトを取り本会議を紹介する投稿をしていただいた。結果として、5つの団体・著名アカウントがXでの広報にご協力してくださり、いずれもインプレッションが1000から10000の間で推移した。

#### 3. Facebook

10月から基本的に週3回、締切10日前から毎日投稿を行った。目的として主にアラムナイの方々への広報協力依頼があった。内容としては、報告会開催・実行委員及びサイト紹介・エントリー開始・各説明会・締切8日前からは実行委員のコメントがついたカウントダウンの投稿を行った。また、日米学生会議アラムナイグループでは、各種SNSの周知等を行った。投稿を行うにあたり、ユーザーが閲覧するであろう夕方～夜の時間帯に投稿することを心掛けた。

#### 4. 選考に向けて

プレエントリー者の参加意欲を高めるために、応募締め切り2週間前以降に応援メッセージやリマインドメールを定期的を送信し、参加者とのコミュニケーションを密にした。これにより、参加者からの反響も増え、募集活動の効果が高まったと考える。

【印刷物発行】

パンフレット・チラシに関しては、第76回会議における広報手段を踏襲した。第76回報告書(P.15)を参照。そのほか、①参加者募集、②本会議中フォーラム参加、③熊本・天草ホームステイ募集など、異なる対象者に向けた発信を紙媒体にて試みた。その成果として、「第76回日米学生会議報告会兼第77回日米学生会議説明会」では対面参加者とオンライン参加者合わせて125名が参加したほか、熊本サイトフォーラムでは地元高校生30名ほどの参加、そして天草ホームステイ事業実施にあたり34家庭ものホストファミリー確保に至った。

**第77回日米学生会議in熊本**

**8月13日(水)熊本サイトフォーラム開催決定!**

9時～12時00分 学生×地域住民ディスカッション

13時30分～17時00分 熊本サイトフォーラム

熊本から見つめ直す日本【自然と人為】共存の軌跡

当会議の90年の歴史の中で初めて、熊本県が開催地として選出。日本総勢約80名の学生が豊かな自然と歴史文化を誇る熊本で何を学び、何を考えるのか。熊本の明るい未来のために、世代・地域・国を超えた対話に挑む仲間を求めます!

**日米学生会議とは**

概要：1934年に創設された日本初の国際的學生交流プログラム。日米72名の學生が夏季3週間夏合宿を共にし、様々な議論/活動を実施。理念：“世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を學生も担うべきである。”

目的：日本社會の理解を深めるため、地方へ、参加者たちが会議で得た成果を長期的に社會貢獻、社會還元していく。

**熊本の研修内容**

8月7日：阿蘇院野(夜宿) | 雲英と復興  
8月8日～10日：天草ホームステイ(地方) | 復興  
8月11日：平和学習、熊本城・熊本博物館  
8月12日：菊陽町視察(半導体産業と地域振興)  
8月13日：熊本サイトフォーラム

お問い合わせ先：実行委員 小川志穂  
(TEL:090-8182-8588/MAIL:jmc77.sogawa@gmail.com)

**2025年**

**8月8日(金)～8月10日(日)**

2泊3日、みんなのお家で一緒に生活しながら、**天草の歴史と文化について学びたいです!**

お兄さん、お姉さんたちと一生の思い出を作る楽しい3日間!

日本の大学生が日本語と英語を喋れるから安心!

みんなも学校で学んだ英語で話しかけてみてね～

一緒に生活するお家を36家庭ほど、集める必要があります。小学生のみんなに協力して欲しいです!

(家族に相談して、アンケートにお答え願います。)

全国各地から集まる日本の学生と  
全米から集まるアメリカの学生に  
天草の魅力をいっぱい教えてネ!

【動画発信】

年間事業の活動を長編動画でまとめて報告会などで発信するほか、実行委員それぞれが担当する分科会の説明を動画にて公開することで、参加後の活動の様子を具体的にイメージできるように工夫した。



**【説明会】**

2024年12月7日から2025年1月16日にかけて計24回の説明会を行った。「夜型説明会」を除いて全ての回でアラムナイのご登壇を実施することができた。説明会参加者にとって親和性の高いアラムナイ（大学卒業生・興味のある業界で働く方）と交流する機会は、日米学生会議により興味を持つ機会となった。

アラムナイの皆様には、ご多忙の中、ご協力いただいたことに感謝申し上げます。

**【説明会の目的】**

質疑応答の際は、選考についての質問は選考担当が、分科会については該当分科会担当者が回答した。

**1. 全体説明会**

アラムナイの方々をお招きし、日米学生会議の威厳を感じていただく会。日米学生会議がその後のキャリアに与えた影響を知って帰ってもらうことが目的。

**2. 学校群別説明会**

所属する大学および世間で括られることの多い大学群からの過去参加者にお話いただくことで、会議をより身近に感じてもらいモチベーションのアップを図ることを目的とした。

**3. 地域別説明会**

日本全国より応募のある日米学生会議の強みを伝える機会。異なる専攻、異なる地域、異なる文化背景を持つ学生が交流する意義と東京一極集中のイメージを変える目的を持つ。

**【実施説明会一覧】****1. 全体説明会（全8回開催）**

- 第一回全体説明会（12月12日 21:00-22:00）
- 第二回全体説明会（12月15日 22:00-23:00）
- 第三回全体説明会（12月23日 21:00-22:00）
- 高専・高校生対象説明会（12月26日 21:00-22:00）
- 第四回全体説明会（12月27日 21:00-22:00）
- 第五回全体説明会（1月5日 22:00-23:00）
- 夜型説明会（1月10日 24:00-25:00）
- 第六回全体説明会（1月16日 21:00-22:00）

**2. 学校群別説明会（全10回開催）**

- 関関同立説明会（12月10日 21:00-22:00）
- 外大説明会（12月11日 21:00-22:00）
- 芸術系、音楽系大説明会（12月13日 21:00-22:00）
- 防衛大学校対象説明会（12月14日 22:00-23:00）
- 東京一工説明会（12月16日 22:00-23:00）
- GMARCH説明会（12月17日 22:00-23:00）
- 早慶上理説明会（12月18日 22:00-23:00）
- 旧帝国大（12月19日 22:00-23:00）
- 全国医学部生対象説明会（12月20日 22:00-23:00）
- AIU/ICU/APU説明会（12月22日 22:00-23:00）

**3. 地域別説明会（全5回開催）**

- 中国・四国地方大学対象説明会（1月6日 22:00-23:00）
- 中部・近畿地方大学対象説明会（1月7日 22:00-23:00）
- 北海道・東北地方大学対象説明会（1月8日 22:00-23:00）
- 関東・甲信越地方大学対象説明会（1月9日 22:00-23:00）
- 九州・沖縄地方大学対象説明会（1月10日 22:00-23:00）

**【ご協力いただいた大学・大学院・専門学校】**

高知大学、水産大学校、明治学院大学、愛媛大学、東京藝術大学、追手門学院大学、横浜市立大学、岡山大学、神戸女子大学、一橋大学、中京大学、多摩美術大学、南山大学、鹿児島大学、神戸市外国語大学、関東学院大学、中部大学、沖縄国際大学、立教大学、佐賀大学、奈良大学、長崎県立大学、福岡工業大学、叡啓大学、群馬県立女子大学、東京女子大学、藤田医科大学、神戸市外国語大学、長崎総合科学大学、名古屋芸術大学、京都外国語大学、東京大学、京都大学、北海道大学、青山学院大学、千葉大学、上智大学、明治大学、会津大学、早稲田大学、慶應義塾大学、創価大学、小樽商科大学、長崎外国語大学、大阪大学、関西大学、神戸女子大学、立命館大学、京都理科大学、京都工芸繊維大学、国際教養大学、京都産業大学、芸術文化観光専門職大学、東北大学、東京外国語大学、金城学院大学、県立広島大学、福井大学、玉川大学、法政大学

## 選考

毎年、日米学生会議は広報と連携し、日本全国から多数のご応募をいただく。参加者数の都合上、選抜を実施しなければならないのは断腸の思いである。第77回日米学生会議の詳細な選考内容等については秘密保持のため割愛するが、厳正なる審査の結果、会議方針に合致した意欲ある学生を参加者として迎えることができた。第77回日米学生会議の選考は、以下の日程で行った。

一次選考（書類）締切 2025年1月19日（一次選考料3,500円）

二次選考 2025年2月19日（水）～2月23日（日）（二次選考料7,000円）

合格者発表 2025年3月10日

末筆ながら、選考にあたって会場をご提供いただいた法政大学、選考を補助いただいたアラムナイの方々、並びにご応募いただいた全ての学生の皆様に心より感謝申し上げます。

## JASC77 グッズ

日米学生会議では、期間中の円滑な活動や帰属意識啓発等を目的とし、いくつかのJASCグッズを参加者に提供している。そのデザインや内容を紹介する。

### 1. 横断幕（参加者個人への提供はなし）

集合写真撮影の際に用いる、第77回日米学生会議のテーマが記載された横断幕である。



### 2. JASC ピン

ビジネススタイル等の正装をする際、胸に装着する金属製のピンである。

### 3. JASC トートバッグ（実行委員のみ）

JASCのマークが記載されたトートバッグであり、業務用の備品を運ぶのに用いる。

### 4. JASC ステッカー

各参加者に配布されたノートと併せて、第77回ではバラエティあるステッカーを配布。



### 5. JASC T シャツ

実行委員とデリゲートで、基本の構成は統一しつつ、色合いを少し変化させている。(実行委員は紺色、デリゲートは臙脂色)。本会議中を中心に活用した。



### 6. 名刺

勉強会やイベント等で交流する外部・アラムナイの方々との円滑な自己紹介を企図して作成されている。



## 第三章 事前 / 事後研修

### 春合宿

3月上旬に合格が決まった参加者は一か月半のオンライン期間を経て、5月初旬の2泊3日の合宿にて初めての顔合わせを行った。合宿では、日米学生会議の歴史を学び、夏の本会議に向けての議論を行った。日米学生会議の基礎を抑えるとともに交流を深めることを目的とした。

**日程** 2025年5月4日～6日

**滞在場所** 国立オリンピック記念青少年総合センター

**行程** 3日間

5月4日：写真撮影・アイスブレイク

5月5日：RT 議論・RT 混合外食・ようこそ先輩

5月6日：RT 議論・春合宿最終発表

#### 1日目（5月4日） 開会式、写真撮影、分科会議論、アイスブレイク、自由交流

春合宿初日、デリが初めて対面で顔合わせを行った。緊張感と期待に胸を高鳴らせるデリもいたが、昨年と比較して、打ち解けるのが早いようであった。開会式に始まり、写真撮影を済ませた後、アイスブレイクして自己紹介企画を実施した。隙間時間を見つけて、お互いの人生史について語り出すデリを見て、とても微笑ましかった。

#### 第77回日米学生会議 春合宿開会式 式次第

1	開会の辞	第77回日米学生会議 日本側実行委員長	北原 真悠
2	アメリカ側主催団体 挨拶（映像）	International Student Conferences, Inc. Executive Director	Bahia Simons-Lane 様
3	日本側主催団体挨拶	国際教育振興会 代表理事	金野 洋様



### ＜参加者感想＞ 春合宿 1 日目

緊張と期待を胸に 31 名のジャパデリが集結し、春合宿が始まった。開会式ではまず、金野洋代表理事および北原真悠実行委員長より、日米学生会議の歴史、歴代のアラムナイ、そして今年度のジャパデリに求められる姿勢についての話があった。先の大戦や戦後の混乱期を乗り越え、国内外で活躍する多くの人材を輩出してきた日米学生会議の一員として選ばれたことに誇りを感じるとともに、筆者自身の士気も一層高まった。

続いて、各 EC から担当するサイトごとの研修計画が発表された。それぞれの地域でどのような経験をし、何を見聞きし、何を議論することになるのか、想像を膨らませる時間となった。

開会式と集合写真の撮影を終えると RT ごとの活動時間に移った。筆者の所属する RT「食と文化・社会分科会」では代々木公園を散策し、公園内で開催されていた「カンボジアフェス」に立ち寄った。フェスではカンボジアの民族衣装や食文化、伝統に関する多彩なブースが展示されていたが、筆者たちはとりわけ「食」に注目した。昆虫食を扱うブースの前では、「昆虫食はどれくらい広がっているのか？」という話題で盛り上がり、またカンボジア料理に加えて他のアジア料理の店も出ている様子を見ながら、「それぞれの食文化の境界線はどこにあるのか」といった議論も交わされた。日頃から社会や文化に対して深い関心を持つジャパデリばかりだったこともあり、自然と「食」をテーマに活発な議論が展開された。

RT 別活動を終えた後は、全体での自己紹介の時間となった。デリたちはそれぞれ、興味深いキャリアや個性的な趣味を持っており、春合宿や本会議を共に過ごすことが今からますます楽しみになった。

夜には RT 単位での議論の時間が設けられた。筆者の RT ではこれまでオンライン上で議論を行ってきたが、対面で長時間じっくりと議論するのは今回が初めてであった。付箋や蛍光マーカーを使ったブレインストーミングなど、対面ならではの手法を用いた議論は大いに盛り上がり、デリ各自が多くのアイデアを出し合うことができた。あっという間に 3 時間近くが過ぎ、残りの議論は翌日に持ち越すことになった。

これまで大学生活の中で学生同士の議論に参加する機会があったが、日米学生会議のように一定期間にわたり集中して議論に取り組むことのできる機会は貴重である。今日の議論は筆者にとって大きな刺激となり、多くの学びを得る時間となった。春合宿 1 日目を終えた時点ですでに非常に充実した経験となっており、これからの研修と本会議がますます楽しみでならない。

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程 1 年 手塚 颯一朗



## 2 日目 (5 月 5 日) 分科会議論、RT 横断ランチ、ようこそ先輩

春合宿 3 日目の RT 発表に向け、各分科会での議論を進めた。一方、交流が RT 内に限定されてしまうことを避けるため、RT 混合のデリ 4 名～5 名で構成されるグループを作り、自由に外食に行ってもらった。真剣に議論する姿とは異なる一人ひとりを知る機会となった。

夕方は、アラムナイの方々を招いて「ようこそ先輩」を実施した。先輩方から脈々とバトンを渡されてきた 90 余年の歴史を感じる瞬間であった。



### <参加者感想> 春合宿2日目

早朝、JASCの参加者たちの挨拶をする声で目を覚ました。前日の疲れも取れぬまま朝食会場に向かったが、ゴールデンウィークの盛りであったため、クラブ活動の合宿と見られる小学生たちが長蛇の列をなしており、我々はなすすべなく半刻ほど立ち並んでいた。人混みに紛れて、私は既に満身創痍であった。

困憊した私は休む間もなく午前の議論のための支度をはじめ、ポツポツと言葉を出し始める。心なしか、今日のみんなの開口一番は鈍かった気がする。なんとなく鈍いスタートを切った我々だが、議論を進めていくうちに徐々にその言葉の切れ味がましていった。ZOOMで議論を行っていた頃はメンバー間でも距離を感じていたため、なかなか真に迫る議論ができなかったが、対面になるといくらか互いの距離が縮まり強い論調の発言も可能になったのは、我々にとって好都合な潤滑油であった。

昼食は「ごちゃまぜ外食」にて他分科会のメンバーととり、全体の親交も深めつつなんととも充実した様相。美味なるハンバーガー。

午後は短めの議論を行い発表に向けた最終準備に取り掛かり始める。ほんの1時間ではあったが、ヒートアップした午前の議論をまとめるちょうどよい機会であった。その後は皆待ちかねたアラムナイとの交流会に足を運んだ。多様な職種につかれているアラムナイの方々との交流は、将来の進路の輪郭の多少の把握や、日米学生会議の脈々と続く人の流れを改めて実感した。初めての宿泊行事ということもあり、各々疲れが目立っていた様子だが、新たにできた友人やアラムナイの方々との交流を燃料にして、残りの合宿をやり遂げようという気概が見えた。

早稲田大学文化構想学部2年 毛利 園子

### <参加者感想> ようこそ先輩

「ようこそ先輩」は、春合宿二日目の夜に行われ、過去の日米学生会議参加者と立食形式で懇談し、親睦を深めるイベントである。各分野で活躍されるアラムナイの方々のお話を聞き、様々な世代のJASCerと知り合うことができる機会であるため、春合宿の目玉イベントである。

「ようこそ先輩」は私が春合宿にて最も楽しみで、最も緊張していたイベントであった。様々な人のお話を聞くことはとても楽しみであったが、同時に偉大なアラムナイの方々とお会いするにあたって、正しい方法で名刺を交換できるか、お話についていけるか、様々なことが不安であった。しかし、実際に参加してみると、アラムナイの方々はとても気さくで、日米学生会議での経験や、現在のキャリアについて無知の私にも詳しく教えてくださった。私はアメリカ政治に興味があるのだが、最前線でアメリカ政治を研究しているアラムナイの方や、お仕事の都合で長年アメリカに住んでいた方からアメリカ政治に関するお話を聞くことができ、自分の興味分野に関する知見が広がったと感じた。どの方も、学生の私の話を真摯に聞いてくださった上、豊富な人生経験から私の見たことのない世界についてのお話を伺うことができ、大変有意義な時間を過ごすことができたと感じている。

慶應義塾大学法学部政治学科2年 伊達 早和花



### 3日目（5月6日）分科会議論、最終発表

最終日は、午後の最終発表に向けて、朝から RT ごとに最後の議論とプレゼン準備を進めた。午後に実施した最終発表では、各 RT が 3 月から春合宿までの議論の成果を発表し、続く質疑応答も活発に行われた。工夫を凝らした発表と活気溢れる質疑応答に、本会議への期待が膨らんだ。



#### <参加者感想> 春合宿3日目

「敬意ある対話」それは、第77回日米学生会議における根幹の精神である。

この精神を、ただ言葉としてではなく、実際に春合宿の現場で体現できたことは、社会という大海原へと漕ぎ出そうとする我々にとって、視野を拡張する決定的な体験となった。

春合宿最終日の今日までに、我々は8時間を超える討議を重ねてきた。その蓄積は知見とともに疲労も生み、迎えた最後の2時間には、誰もが集中力の限界を感じていた。だからこそ、いかにしてこの時間を有意義に過ごすか。それに対する唯一の答えが、「敬意ある対話」だった。

ある分科会の発表が触れていたように、対話とは常に双方向である。参加者の一人でも意識が逸れ、内面から退席した瞬間、その場の対話は終了する。

発信者は、自身の頭の中にある構造をいかに明確な言葉と図像に変換するかを問われ、受信者は、その意味をどこまで掴み、どこから取りこぼしているのかを自覚し、相槌や質問という形で応答する。そこに初めて、真正の「対話」が成立する。

そこには、互いへの敬意が不可欠なのだ。

私が所属する「インド太平洋地域における国際政治分科会」では、4月の発足以来、中国という重要アクターに対し、軍事・経済・思想・制度といった多角的観点から独自の課題設定を行い、膨大な資料と向き合いながら討議を重ねてきた。その時間は、4月だけでも13時間を超える。

最終日の発表は、各分野を貫く共通の思想や戦略を抽出し、一つの物語として紡ぐ作業だった。

だが、そのような抽象的な思考には高い集中力が求められ、特に二日目の午後以降、我々4人それぞれが、どこかで「敬意」を欠き始めていた。

その反省を胸に、最終日のリフレクションでは、5月以降の議論に向けたルールを定めた。

集中力が切れかけたとき、一人で静かに離脱するのではなく、正直に全員に伝えて休憩を取る。そうすることで、再び「敬意ある対話」の輪へ戻れるのだと。

各地の大学や専門分野で高度な議論を重ねてきた仲間たちと、極限まで集中し、語り合い、ぶつかり合い、尊重し合えたこと。

それは、単なる知識や技法以上に、「対話とは何か」を私に教えてくれた。

我々は、これまでの対話から一步を踏み出し、交渉と調整の時代を生きる者としての「敬意ある対話」の階段を、確かに登り始めたのだ。

防衛大学校国際関係学科4年 久保木 廉



## 春合宿全体を振り返って

### <参加者感想>

During the three-day Spring Camp from 4–6 May, twenty-eight delegates of the 77th Japan-America Student Conference converged in Tokyo for our first face-to-face encounter, determined to test the theories we had exchanged through glowing screens.

The camp carried a dual mandate: sharpen proposals for the Japan-US Business Strategies RT and forge the trust indispensable to candid transpacific dialogue.

Expectancy hushed the three-hour-long opening photo shoots, yet restraint dissolved and the instant debate began. Delegates were quick-thinking, candid, and hungry for sparks that leap from minds colliding. As a salvo of arguments ricocheted, my own assumptions cracked, letting cleaner light pour through.

Our schedule blended rigor with delight. RT forced us to refine questions, disagree productively, and distill two days of debate into a joint presentation. Beyond those walls, we roamed Yoyogi' s backstreets, swapped jokes, and sealed friendships over drizzled gelato.

The self-introduction program, though simple, uncovered facets of people I thought I knew and set an emotional baseline for deeper nighttime sessions. By the second evening, talk was no longer tentative; it truly flowed, mixing challenges, references, and laughter long after laptops had shut down.

Day two intensified the rhythm. We tightened frameworks, rehearsed slides, and discovered the peculiar exhaustion only unbroken dialogue delivers. Over Haitian curry, several of us confessed half-serious doubts about our thoughts; the admission felt less like weakness and more like permission to experiment.

Another highlight was the alumni greeting, where thirty-three graduates spanning generations and professions shared stories of policy work, journalism, entrepreneurship, and art.

Their refrain, “Once a JASCer, always a JASCer,” carried weight I had not anticipated. Having moved often, I rarely feel an anchor; seeing this program endure convinced me its network can become one.

The final day crowned our effort. Each RT stood before the cohort to articulate questions, evidence, and tentative recommendations, proud yet humble in knowing this was only the first checkpoint. A trace of self-critique trailed me offstage, but I believe our presentation captured the ripe fruit of Spring Camp and outlined seeds for further growth.

Equally important were the quieter lessons. I discovered the generative power of exhaustion, the clarity born after thirty minutes of honest, sometimes abrasive, dialogue. Once, I caught myself replying too swiftly; an instinctive retort that may have obscured richer inquiry.

The lapse nudges me toward disciplined listening, a reminder that reflection often outpaces reaction. I learned that intellectual rivalry and genuine care can reinforce each other. Above all, I sensed how swiftly a dispersed group can breathe as a truly single organism when given space to eat, walk, and laugh together.

These insights will travel with us to the summer conference, where each site will demand sharper analysis and broader perspectives. I leave Spring Camp with renewed curiosity, fortified resolve, and a belonging I did not foresee.

Thanks to every delegate, to alumni who underscored our lineage, and to the Executive Committee—especially Shiho, Masato, and Haruka—whose persistence untangled logistical thorns.

An unshakable conviction remains: the conference ahead will not merely succeed; it will flourish, because those who will shape it have already begun.

上智大学総合グローバル学部2年 下蘭 洸太郎

#### <実行委員感想>

第77回会議の春合宿は、5月4日から6日にかけて国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催された。これは、参加者にとって初の公式行事であり、実行委員にとっても本会議の予行演習として位置付けられる重要なイベントである。そのため、準備にあたっては大きなプレッシャーがあった。開会式を迎え、初めて参加者全員が一堂に会した際には、期待と緊張で胸が高鳴った。実行委員の活動が始まった9月から参加者を迎えるまでは、事前研修や本会議の準備に勤しみつつも、どこか先の見えない感覚を抱いていた。しかしながら、春合宿で参加者と向き合ったことで、不明瞭だったゴールが明瞭になり、改めて身の引き締まる思いがした。

この度の春合宿では、前回と異なる点として「リフレクション」を導入した。リフレクションとは、日米学生会議で伝統的に行われてきた「振り返り」の活動であり、コロナ禍以前の会議では毎年実施されていた。参加者全員で一つの大きな円を作り、各々がそれまでの日々を振り返り、感じたことや考えたことを全員に共有する。一人あたりの発言時間に制限を設ける、指名せず参加者が自発的に発言する等、以前実施されていたリフレクションのルールをアラムナイから伺い、最終日に実施した。参加者からは、「本会議に向けた期待や不安を他の参加者と共有することができた」等の肯定的な意見が得られ、春合宿後の自主研修や本会議でもリフレクションを実施することとなった。全ての参加者が対等な立場で思いを共有することのできるリフレクションは、参加者間の心理的安全性の担保や議論の土壌形成につながり、第77回会議のスタートを切る上で非常に有意義な時間となった。

春合宿担当の実行委員として、3日間大きなトラブルなく終わることができたことに安堵すると同時に、ロジスティックスの詰めの甘さや緊急時の連絡体制など運営の課題点が浮き彫りとなり、8月の本会議に向けて万全の体制で臨まなければならないと強く感じた。また、2日目に行われた「ようこそ先輩」でアラムナイと現役参加者が世代を超えて話に花を咲かせる姿からは、JASCが初期から変わらず重視している「対話」や「人と人との繋がり」の大切さを実感し、今後もそのような繋がりを生み出す最善の環境を整えたいという使命感を抱いた。

参加者にとっては、この度の春合宿が脈々と受け継がれた歴史ある日米学生会議の一員になったことを自覚する機会となったことと思う。様々な分野で活躍するアラムナイの姿から、本会議へのモチベーションを高めることができていれば幸いである。3日間という短期間で議論をまとめ、スライドの準備を進めることは容易ではなかったと察するが、最終発表会での工夫を凝らしたプレゼンテーションや活発な質疑応答からは、本会議に向けた期待が非常に高まった。

末筆ながら、春合宿の開催にあたりご尽力いただいたアラムナイの皆様をはじめとする全ての方々に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

東京外国語大学言語文化学部3年 小川 志穂





## フィリピン自主研修

本自主研修の趣旨は例年と同様、本会議の準備および今後の議論の一助とすることである。日米学生会議は創設以来、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」という理念を掲げ活動を行ってきた。しかし、グローバル化はもとより我々が今日撃しているのはアジアの経済成長および国際社会における存在感の高まりである。日本が提唱した「自由で開かれたインド太平洋」という外交構想に代表されるように、日本とアメリカが共有する平和の舞台はもはや太平洋だけにはとどまらない。フィリピンは歴史的に日米と深い関係を持つことに加え、近年では中国との関係にも注目が集まる。日本開催である点、および本会議中の議論が日米関係のみにフォーカスしがちである点に鑑みれば、フィリピンでの学習・経験は参加者に極めて有用な視点を与える。本研修での経験・学びを夏の本会議で存分に活かすべく、政府機関や NGO・現地大学に至るまで、実地での学びを重視する第 77 回会議のテーマに沿った訪問を企画した。

**日程** 2025 年 6 月 3 日～6 月 6 日

**滞在場所** RED PLANET HOTELS BGC THE FORT

**行程** 計 4 日間

6 月 3 日：移動日（成田→マニラ）

6 月 4 日：フィリピン大学アジアセンター、独立行政法人国際協力機構表敬訪問

6 月 5 日：NPO 法人アクション、在フィリピン日本国大使館表敬訪問

6 月 6 日：移動日（マニラ→成田）

### 事前活動内容

詳細は「第四章 勉強会」の項目に記載があるが、フィリピン研修を行うにあたって、フィリピンや日比関係についての理解を深めるための事前勉強会を行った。ご登壇いただいた方々に、この場を借りて御礼申し上げたい。

1. 前駐フィリピン特命全権大使 越川和彦様 オンライン勉強会
2. 駐日フィリピン共和国大使館 表敬訪問
3. 在日フィリピン留学生協会と日米学生会議交流会（お好み焼き・もんじゃ食事会）

### 1 日目（6 月 3 日） 移動日（成田→マニラ）

セブパシフィック航空のご協力のもと、団体予約をすることが出来た。日米学生会議の自主研修では初めての東南アジアの国での研修。昼頃に成田空港を出発し、夕方にマニラ空港に到着。予約した観光バスに乗り、ホテルへ向かう。今回の研修が初めての海外渡航となる学生も少なくなく、実行委員としても気が引き締まった。



<参加者感想> フィリピン研修1日目

第77回日米学生会議のフィリピン研修では、首都マニラを訪問し、東南アジアにおける経済発展と社会課題についての現地調査を行った。本報告は、成田からマニラへの移動日初日に得られた所見をまとめたものである。成田からマニラへの移動のみで完結した研修初日であったが、空港から市街地へ向かう車窓の風景は、フィリピン社会の複雑な様相を考察する上で示唆に富むものであった。

第一に、慢性的な交通渋滞に象徴される交通インフラの現状は、日本のそれとは著しい差異があった。これは単なる利便性の問題に留まらず、急激な都市化に社会基盤の整備が追いついていない現状を示唆している。

第二に、そして最も印象的であったのは、近代的な高層ビル群が立ち並ぶ商業地区のすぐ隣に、いわゆるスラムが隣接して広がる都市景観の二極化である。この著しいコントラストは、経済成長の恩恵が一部に集中し、多くの人々はその過程から取り残されているという、富の偏在を空間的に可視化している。物乞いの存在も散見され、貧困問題が日常生活レベルで顕在化している現実を突きつけられた。

この初日の移動体験は、きらびやかな発展の影に存在する社会構造の不均衡を浮き彫りにした。帰国後もこのフィリピンで目の当たりにした「開発のアンバランスさ」という視座を維持し、持続可能な社会のあり方について議論を深めていきたいと思う。

国際教養大学国際教養学部3年 美坂 茉柚



**2日目（6月4日） フィリピン大学アジアセンター、JICA 表敬訪問**

2日目は、フィリピン大学において各教授の授業を受けるほか、日比関係に興味を持つ学生との交流が行われた。また、午後には独立行政法人国際協力機構（JICA）への表敬訪問をし、現地で働く職員と意見交換をする貴重な機会を頂いた。

**ご協力いただいた教授陣：**

講義①Dr. KARL IAN CHENG CHUA, “Overview of the Japan-Philippines relations”

講義②Dr. JOCELYN O. CELERO, “The national security of the Philippines”

意見交換：フィリピン大学の学生と日米学生会議の学生による座談会



### <参加者感想> フィリピン大学アジアセンター

Dr. Karl Ian Cheng Chua からは、日本とフィリピンの歴史的関係について、フィリピンと関わりの深かった歴史上の日本人を例に挙げながら紹介していただいた。登場した人物たちは、幕府を支えた大名や科学者など多岐に渡り、日本とフィリピンの関係が歴史的にさまざまな分野に及ぶことを実感する内容であった。続いて、Dr. Jocelyn O. Celero からは、フィリピンの国家安全保障についての講義があった。特に、フィリピン海域法やフィリピン群島航路法を取り上げながら、フィリピンが海洋安全保障を強化するための具体的な法整備や、他国との協力体制についての説明があった。フィリピン政府は、周辺国に対する存在感を増大するため、新たに形成されつつある枠組みの中で沿岸警備隊や海軍の強化をしていく方針であることが明らかになった。学生間の交流では、好きなフィリピン料理、大学生活や留学制度について話が盛り上がった。特に、フィリピン大学の学費が無料である一方で、進学者の多くが高額な学費を必要とする私立高校出身であることから、教育機会の平等という点で日本との課題の共通項を発見できた。

防衛大学校人文社会科学群4年 滝沢 丈

### <参加者感想> JICA

JICA（国際協力機構）を訪問し、JICA 職員の方と現地での取り組みについて、座談会形式でお話を伺う貴重な機会をいただきました。今回の訪問を通じて、開発途上国に対する政府開発援助（ODA）の重要性を改めて実感いたしました。フィリピンは7,000を超える島々から構成されており、こうした地理的要因も相まって、生活環境や識字教育の普及状況に顕著な違いが見られます。特に、マニラ首都圏と地方部とでは、地域間で教育やインフラの整備状況に大きな格差が存在している現状を目の当たりにしました。こうした課題に対し、JICAは海外青年協力隊の派遣をはじめ、教育・保健・技術支援など多岐にわたるアプローチで支援を展開しており、現場のニーズに即した活動が行われていることを学びました。また、JICAの特徴として、多様なステークホルダーと連携しながら事業を推進している点が挙げられます。職員の方からは「それぞれの立場で思いを持ち、真摯に課題に向き合うことが、活動の原動力になっている」という言葉が印象に残りました。私たち自身も、今回の経験を糧に、それぞれの場所、そして分野で社会課題に向き合い続けていきたいと思えます。

名城大学薬学部6年 水野 遥



### 3日目（6月5日）NPO 法人アクション、在フィリピン日本国大使館表敬訪問

3日目は、NPO 法人アクションの取り組みについて講義を通じて学ぶとともに、ナボタス市のスラム地域スタディツアーを行った後、地域の子供達との交流会を実施した。午後には、在フィリピン日本国大使館の表敬訪問を実施し、遠藤和也大使閣下のご講義と質疑応答という大変貴重な機会を頂いた。この機会を調整して下さったアラムナイかつ二等書記官を務める向川友理絵さんに感謝申し上げたい。



#### <参加者感想> NPO 法人アクション

フィリピン研修三日目、この日も変わらず7時集合だったが、先日と異なるころはというと私はすごく緊張していた。この日は朝からスラム地域を訪れる予定であったが、写真でしか見たことのないスラム地域に対して、うまく想像できないところや自分たちの住むところを興味本位で見に来る観光客に対してどのような反応をされるのかがわからないなど未知数すぎることからの不安や緊張を感じていた。私は緊張をまといながらバスに乗り込んだ。1時間ほどバスに揺られた後、まず、NPO 法人 action 様の事務所に到着し短いレクチャーを受けてから、再びバスに乗り、そこから10~20分のほどの場所にあるスラム地域を訪れた。着いた直後、そのままの足で、スラム地域を巡回するような形で見学をしたが、海の上に建つ住居、1枚の板でつながる住居の数々、水面を覆いつくすようにたまるプラスチックごみ、目の前に映るすべてに衝撃を覚えた。おそらく、あるルートを1周するような形ではあったが、中は入り組んだ迷路ようになっており、住居などが果てしなく、ここには数えきれない人数の人々が住み、フィリピンにおける貧困問題の重症度のようなものを感じた。

スラム地域を出た後、そこに住む子供たちと触れ合うこととなった。事前に声をかけていた子供たちよりも多くの子供たちが集まってくれたらしく、私たち観光客に対する好奇心や期待を感じ、うれしく思ったと同時に、スラム住居の中を歩いているときに感じた大人からの懐疑心のようなものを一切感じない子供たちからの明るいパワーで出発前に感じていた緊張が吹き飛んだ。時間は飛ぶが、帰国後、父親から、私は恵まれていたと思うか？と質問された。これに対し即答することはできなかったが、彼らは私たちとは異なるベクトルで少なくとも幸せを感じていたのではないかと思う。子供たちの親ともコミュニケーションをとり、多少なりとも会話もできたのだが、これは子供たちだけではなく彼らの親も今の生活に十分ではないかもしれないが満足はしている様子だった。この経験は、自身の今後のキャリアを見つめなおすきっかけにもなり、彼らの今の状況を支援するという名で壊すことで彼らが現状に対して不満と感ずることにつながってしまわないか、これが本当に善なのかと感じた。しかし、かといって彼らに外の世界を伝えないことも正義だとは感じない。これらの経験から、彼らには私と違い、選択肢がなくその生活を選ばざるを得ないのだと改めて感じた。その中で彼らは幸せを見つけていたとは思いますが、彼らに選択肢を与えることのできる、そのような

将来の選択を私もしたいと感じた。

余談ではあるが、大使館を訪れた後の自由時間で、私を含めた4人のJASCerでSmoky-Mountainを訪れた。昼に訪れたスラム地域とは比にならないほどの様相であった、というのが率直な感想だ。行く場所行く場所、ゴミを燃やしたときにでる煙で大気が濁っており、ゴミのにおい、何かが腐ったようなにおいも充満していた。Smoky-Mountainに向かうタクシーから降りた直後、いてはいけないう雰囲気を感じ、すぐに離れたい気持ちになった。少なくとも私はその場に対して、朝感じていたような緊張、恐怖を改めて感じていたのだが、他のJASCerはというと、そのような状況を物ともせず、スラム地域に足を踏み入れようとしており、私はそんな彼らの好奇心なるものに対しても恐怖を感じた(>\_<“(^\_^;)。しかし、同時に、その好奇心が日々の文化活動にもつながっているのだと感じ、彼らと同じ立場に立っていることに謎の誇りを持つようになった(\*^\_^\*)。私たちはSmoky-Mountainを直接訪れることは諦め、周囲にあった貧困家庭の方の為に建てられた市営住宅を訪れたが、そこではやはり周囲からの疎外感と邪魔者へと向けられるような視線のようなものを感じ、ここでもフィリピンの貧困問題を目の前で感じる事ができた。このように、3日目は1日を通して日本では絶対に経験できない海外だから、フィリピンだからこそその経験ができた。この後スコールが降り、あまざらしの中タクシーを探した時間、タクシーが見つからず正直内心帰れないかもと大焦りしていた時間、走る自動車の間を走り抜けて道路を横断した時間などこれからも忘れられない、忘れたくないものとなった。

東京外国語大学国際社会学部2年 江副 聡真

#### <参加者感想> 在フィリピン日本国大使館

3日目の大使館表敬訪問では、第77回日米学生会議が在フィリピン大使館を訪問した。外務省で国際協力局長のご経験もある、遠藤和也在フィリピン日本大使よりご挨拶をいただいた。日フィリピン国交正常化70周年という記念すべき年を前に学生による表敬訪問を心から歓迎されていた。フィリピンでの戦争において生命を落とした日本人も数十万人いるということで、今回のような学生の訪問の意義を深く感じていらっしやう。学生からODA(政府開発援助)に関する質問がでた際には、日本におけるODAの取り組みに加えて、日本の法令や公的資金がフィリピンに投入される構造化や、格差のある社会に対して層ごとに分解した上で個別具体に対応することを目指すことで日本企業がより参入しやすくなるのではないかというご見解を示された。また、日本独自の産業に強みを見出す必要性に関しても言及されていた。国際社会における日本の立ち位置を考慮し、技術力や島国における海底ケーブル作りなど主に複雑で巧みな日本の技術が世界で活用されていることを強みとして挙げられた。しかし、弱みとしては高齢化社会における介護、看護の必要性や、世界基準でみた英語力の低さ、そして日本語教育を行える人材の少なさがあげられる。弱みを克服する際には、「行きたい国であり続けられるには、我が国が移民先として選んでもらうには」という視点が必要であると強調された。アメリカでは400万人以上、カナダでは90万人以上のフィリピン人が移住している一方、日本では移民受け入れにおける規制が厳しいという排他的な国内の仕組みが課題になっている可能性についても触れられた。大使との交流の後には、日本大使館職員の方々との交流時間をいただき、職員の方を学生が囲む形で、現地での仕事内容、現在のフィリピンにおける日本の外交へのご見解、そしてキャリアパスといった幅広い分野のお話を伺うことができ、現地でご経験を積まれている外交官の方々と活発な意見交換を行った。

慶應義塾大学法学部法律学科2年 田代 明衣



## フィリピン自主研修全体を振り返って

### <参加者感想>

The study program in the Philippines was a truly remarkable opportunity to broaden the delegates' perspectives on international diplomacy through firsthand engagement and cultural exchange.

The program began in high spirits. Delegates gathered early at Narita Airport, passports and boarding passes in hand, amid an electrifying atmosphere of excitement. After a smooth check-in, the delegates split into their respective roundtables to explore the terminal before boarding their flight to Manila. During the flight, some enjoyed local Filipino cuisine, like beef adobo served by Cebu Pacific, while others passed the time in eager anticipation. Upon arrival, they were welcomed warmly at the hotel and the delegates formed cross-roundtable groups for dinner and exchange, where many of these groups found themselves diving straight into Filipino culture with their first taste of Jollibee's famous chicken and gravy sauce.

The second day was centered on learning and dialogue. At the University of the Philippines, delegates attended a lecture on Japan-Philippines relations and national security, joined by graduate students in the field. Over lunch, they broke into smaller groups for discussion, forming meaningful connections through shared insights and cultural exchange. The day concluded with a visit to JICA, reinforcing the program's diplomatic focus.

Day three was more hands-on. In partnership with nonprofit ACTION, the delegates visited a slum area, engaging with local children through games and conversation. Laughter and joy echoed through the alleyways, even as the visit shed light on the deep-rooted societal challenges many families face. This was followed by a courtesy visit to the Japanese Embassy, where the Ambassador shared his views in a Q&A session, accompanied by informal exchanges with embassy staff over the Filipino delicacy of cheese bread at the reception.

On the final day, some delegates took morning walks or visited local cafes before departure. During the ride to the airport, each delegate shared their reflection on their most memorable moments and how the experience had expanded their view of the world. At the terminal, souvenirs were bought and final memories made before returning to Japan.

This program offered an invaluable opportunity to encounter the realities of Japan-US-Philippines relations, security issues, and international cooperation beyond the scope and depth of any textbook. We are sincerely grateful to everyone who made this opportunity possible.

早稲田大学先進理工学部3年 岡崎 ヴィクトリア 瞳子





## 安全保障研修

日本の安全保障政策と日米関係の根底をなす日米同盟に学びを深めるため、防衛大学校を訪問した。現地では、地政学をテーマにした特別講義を受ける他、コロナ禍以降初となる宿泊や訓練体験を通じて同学校の学生と豊富な対話の機会を得た。一般の大学生とはおよそ異なる学生生活を送り、将来的には国防の最前線を担うであろう彼らに対する敬意を表するとともに、身近に感じにくい安全保障について解像度高く理解することができた。

**日程** 2025年6月26日～6月27日

**滞在場所** 防衛大学校（コロナ禍後初めての宿泊）

**行程** 計2日間

6月26日：防衛大学校学長によるご講和、資料館見学、防衛学講義①、訓練体験

6月27日：防大生との交流議論、防衛学講義②

第77回日米学生会議には防衛大学校の学生2名が参加していたこともあり、プログラム企画にあたり手厚い協力をしてくれた。その成果もあり、去年以上に参加者より満足度と質の高い研修を提供することができた。概要は以下の通りである。

- 久保文明 防衛大学校学長によるご講和
- 防衛大学校資料館見学
- 防衛大学校食堂において防大生とともに昼食
- 特別講義① 防衛学群 1等陸佐 足達 好正
- 特別講義② 人文社会学群 教授 神谷 万丈
- 訓練体験（「気をつけ」「右向け右」「回れ右」等）
- 防大生との交流議論
- 防大生との夕食・交流会（宿泊体験）



<参加者感想> 安全保障研修1日目

Noblesse Oblige — 高い身分には義務が伴う —

これは、防衛大学の資料館を見学していたときに出会った言葉である。幹部自衛官を育成する場にふさわしく、この精神が研修全体を通して私の心に強く残った。1日目の研修では、学校長表敬訪問、資料館見学、特別講義、訓練体験、学生間討議と多様なプログラムが用意されていたが、そのすべてにこの言葉の意味が通底していると感じた。

学校長による講話では、幹部自衛官に求められる資質として「人がついてくるリーダー」であることが挙げられた。寮での共同生活や厳しい訓練、行事を通じて、自ら誠実に行動し、互いに信頼し合う中で、リーダーシップとフォロワーシップが生まれていくという話が印象的だった。ただ指示を出すのではなく、率先して責任ある行動をとり、仲間の信頼を得ることの大切さを学んだ。

足達一佐による特別講義では、地政学的観点から日本の安全保障が語られた。日本を取り巻く国際情勢は複雑であり、戦前・戦後での国力の変化や、各国がそれぞれの立場や歴史観から世界をどのように捉えているのかについて、改めて考えさせられた。安全保障とは何か、それをどう確保するのかという問いは、一つの正解があるものではなく、国家間の緊張と協調のバランスの中で模索されていくものだと感じた。異なる価値観や利害が交錯する現実の中で、日本がどのように自国の安全を守っていくのか。その難しさと重要性に向き合う視点を得た講義だった。

訓練体験では、実際に制服に着替え、基本教練を体験した。敬礼、右向け右、回れ右——見簡単そうに思えたが、いざ自分でやってみると想像以上に難しかった。さらに集団で動きを揃えることの大変さも実感した。夜点呼の見学では、防大生の一挙手一投足が揃った動作に美しさを感じるとともに、その背後にある規律や強い責任感を垣間見た気がした。

学生間討議では、防大生と分科会に沿ったテーマやリーダーシップについて議論を行った。リーダーシップの在り方や国家を支える使命感について語る彼らの言葉からは、国や国民のために思いを巡らせ、日頃から深く考え行動している覚悟が伝わってきた。与えられた役割に真摯に向き合い、自らの責任を果たそうとする姿勢に、強い意志と誇りを感じた。

こうした経験を通して、改めて特権と義務は表裏一体であると感じた。私はこれまで、恵まれた環境の中で学び、多くの人に支えられてきた。そして現在は、日米学生会議という貴重な機会に参加し、この研修に関わることができた。Noblesse Oblige の精神を、今の自分の立場にも引き寄せて受け止めたい。また、教育を学ぶ者として、子どもたちの学びを支える立場を目指す私にとって、「教える」という行為そのものも特権を伴うものであると感じている。だからこそ、教える者としての言動に責任を持ち、自分自身が学び続ける姿勢を忘れてはならないと感じた。

与えられた環境に感謝しながら、自分を律する意識を大切に、これから得ていく知識や経験を自分の中に留めるのではなく、誰かのために活かしていけるよう、一つひとつの行動に責任を持って向き合っていきたい。

広島大学教育学部4年 森 聡子



### ＜参加者感想＞ 安全保障研修 2日目

夕焼けに染まる美しい横須賀の海を一望した翌朝、僕は同部屋の身支度する音で起きた。この日は防衛大学生たちの点呼を見学しなければならないため、朝 5:30 ごろに起床し、朝靄のかかる防衛大学寮の前で目をこすりながら待っていた。そして、ちょうど 6:00、ラッパの音とともに窓の内側の生徒たちが準備をはじめ、けたたましい AC/DC の音楽とともにぞろぞろと寮から出てきて整列を始めた。これが噂に聞く朝の点呼か ... とひとしきり感動したのちに、朝食を食べて防衛大学生とディスカッションを行う。1 日目のディスカッションでは防衛大学生たちの研究テーマや関心分野、また自身の分科会のテーマである「戦争芸術のあり方」についての議論を行うことができた。しかし、なかなか防衛大学生との距離を縮めつつ、そのような一歩踏み込んだ議論をどのように行えばいいのかわからなかったため、無意味な会話に終始しがちであった。二日目ではこの「議論をする」という目的の場所に側した話題を考えようと思い、防衛大学生の防衛大学という組織に対する批判を聞かせてもらい、彼らの芯にある考えを聞き、思考する大変いい機会となった。その後の講義では、神谷教授によってトランプ 2.0 が我々に与える影響について安全保障の観点から非常にわかりやすく講義をしていただいた。僕は日頃ソフトパワーの重要性や文学・芸術分野が社会に与える影響についてもっともらしく主張しているが、そもそもハードパワーが現状どのように国際社会で用いられているのか、また現状起きている多様な問題に対して実学の分野がどう寄与しているのかを全く知らないことを認識した。此度の安全保障研修は今後、自身がどのような学びを得ていくべきなのかを再考する貴重な機会であったと思う。

早稲田大学文化構想学部 2年 毛利 園子

### ＜防衛大学校企画委員感想＞ 安全保障研修

At the National Defense Academy of Japan, a cadet had a brief but impactful two-day experience hosting participants of the Japan-America Student Conference (JASC). This encounter provided a much-needed break from the highly structured and often insular environment of the Academy, offering a chance for deep personal reflection.

The JASC participants' simple question, "Why did you choose to enter the Academy?" compelled the cadet to reconnect with their original motivation, which had been overshadowed by daily routines. The participants' clear sense of purpose, whether in academic or personal pursuits, challenged the cadet to live with greater intention. Discussions on international security and leadership, featuring diverse viewpoints from backgrounds in law, politics, and economics, sharpened the cadet's own critical thinking and highlighted the value of intellectual diversity.

Beyond formal debates, casual conversations about student life and hobbies reminded the cadet that, despite their different paths, they were all young people sharing similar hopes and uncertainties. This realization underscored that leadership is built not just in formal settings but also through genuine personal connection.

Ultimately, this brief meeting left a lasting impression, reaffirming the cadet's purpose and enriching their perspective on leadership, diversity, and personal growth.

防衛大学校人文社会科学群 4年 渡辺 茉莉香





## 直前合宿

### 【プログラム概要】

直前合宿は本会議前日に行われるプログラムであり、いよいよ始まる本会議に向けて注意事項の確認や事前学習、各々の会議参加の目的を再確認する場である。事前活動最後のプログラムとして、参加者の意識や意欲を固める目的がある。

**日程** 2025年7月30日～7月31日

**活動内容** 本会議の流れと目的説明、第77回実行委員選出説明、ウェルカムボード作成

### ＜参加者感想＞ 直前合宿1日目

東京とは質の違う暑さに照らされる中、第77回日米学生会議が始まった。みなぞろぞろと宇多野ユースホステルに到着し、JASC COMEBACK 以来、中にはフィリピン研修、防大研修ぶりに顔を合わせた面々もいただろう。みな久しぶりの顔ぶれになつかしさを感じながらも、これからの本会議に対する不安と期待も同時に抱いていたと思う。みな口をそろえて言っていたことは、JASC Buddy そして天草ホストファミリーへのお土産の話だったと思う。全員がそれぞれ彼らの好きなこと、家族構成をしっかりと考えたお土産を持参しており、そこにはとてもバリエーションがあり、またデリそれぞれの性格が反映されていたように感じとても面白かった。夜ごはんが終わり、FT 帰りのデリも合流する中、本会議の説明があったが、そこには昼間の元気なデリの姿はなく、私も含めて一日の疲れが顔からあふれているデリもいて、初日から幸先が不安になるような雰囲気を肌で感じた。しかし、リフレクションの時間にも宣言したように、全力で JASC にぶつかり、JASC77th を自分自身を改めて見つめなおす機会にできるように、今日はここらへんで、明日のアメデリとの初対面に備えようと思う。

東京外国語大学国際社会学部3年 江副 聡真



### ＜参加者感想＞ 直前合宿2日目

今日は日本側にとっては直前合宿2日目、アメリカ側が日本に到着する日であった。午前11時過ぎ頃、アメデリがバスにて私たちが宿泊する宇多野ユースホステルに到着、私たちは前日に作ったウェルカムボードで出向かえた。ほとんどがオフラインでは初対面、ようやく会える喜びといよいよ始まる会議への緊張を感じながら、各々分科会のメンバーやバディに駆け寄り挨拶を交わした。アメデリの到着後はすぐに昼食。弁当を食べながらの会話に花が咲く。その後はバディとのプレゼント交換、小一時間の休憩、中庭でのアイスブレイクなどを経て、いよいよ最初の対面での議論が始まった。議論の進め方は分科会により様々だったが、私が所属する「インド太平洋における国際政治分科会」では隔週で行ってきたオンラインでのジョイントミーティングの積み重ねもあり、比較的順調に議論が進んだ。まずこの本会議で取り組むメインテーマとしては「現在の国際秩序の様相とその変化」という比較的幅の広いもの

を採用し、次に本会議で訪れる関西・熊本・東京の各サイトでの小テーマとなり得るものを確認、その上でインド太平洋における主要アクターである米日中について分析した。オンラインのときは時差もあり盛り上がり欠けていた議論は、初日の高揚感もあり白熱した。夕食は出前の寿司が届き分科会での食事、夜の自由時間は各々外に出るなどし、まだ交流のない他の分科会のデリとの会話を楽しんだ。

東京大学教養学部3年 上田 理紗



## 福島研修（事後研修）

### 【プログラム概要】

環境省および経済産業省をはじめとする諸機関や企業のご協力のもと、非公式プログラムとして福島研修を行った。福島第一原発の視察を嚆矢として、環境省管轄の中間貯蔵庫や長泥再生事業地域、そして農園や農産物のモニタリング体制を備えた農業総合センターなど、福島の復興に向けた最前線の要所を訪問した。本研修の第一義的目的は、福島第一原発という象徴的施設の現状を実際に確認するとともに、震災復興の重要な側面である環境資源の利活用から、未来に向けた人々の「想い」を垣間見ることであった。

また、1日目の夜には環境省 折口直也様による震災復興に果たすべき日本全土の役割についてセッションが行われ、現地で学んだことを踏まえた質疑応答や参加学生間の車座を行った。「理解醸成にどう取り組むか、現地視察を経た自分自身もまた貢献しなくてはならない。」参加学生達が当該問題を取り巻く世論と自らの立場へ真摯に向き合う姿勢は、今後の日本社会を背負うに相応しいものであった。

**【開催日時】** 2025年9月27日～9月28日

### 【活動内容】

#### 1日目 9月27日

- 11:30 東京電力廃炉資料館 見学 -20分
  - ・事故当時の再現資料上映
  - ・入構に伴う諸注意事項の説明
- 11:50 東京電力第一原子力発電所 見学 -190分
  - ・各原発炉の目視視察
  - ・ALPS 処理水放出地点の確認
  - ・廃炉に向けた作業の説明
- 16:00 東日本大震災・原子力災害伝承館 見学 -60分
  - ・震災当時の説明
  - ・福島と原子力の歴史、事故当時の説明
- 17:40 環境省講義 -60分
  - ・環境省の所掌
  - ・再生土壌の利活用について
- 19:45 車座 -60分
  - ・初日の感想共有
  - ・翌日以降の学びについて

#### <参加者感想>

資料館、東京電力第一原子力発電所、東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れる形で始まった。福島研修前に、事前アンケートとしていくつかの質問に答えていたのだが、正直に言うと今何について聞かれていて、私がどう答えることができるのかということが全くと言っていいほどわからなかった。なので、ほとんどの質問に対して、「それに対する知識がないのでわからない」という回答をしてしまったと思う。

私自身、小学校入学前に千葉県で地震の揺れを感じたことをよく覚えている。当時、私は6～7歳であり、あまり覚えていることも少ないのだが、震災の時の記憶は、今でも色を付けて思い出せるくらいには鮮明に覚えている。そのくらい私自身の人生においても衝撃が大きかったことなのにも関わらず、福島の現状を全然わかっておらず、そのような自分自身に対してとても残念に思った。

東日本大震災関連の施設を訪れる中で、実際の規模、当時の状況、現在の復興状況まで、実際に訪れないと感じることのできないことをしっかりと目に焼き付けることができた。研修中、

「安心」と「安全」という言葉が複数回出てきた。「安全」なことは担保されていても、それが「安心」につながるということではない。細かいところまで気を配りながら日本だけではなく、全世界に「安心」を届けている福島を今後は積極的に見守っていったらと思う。

東京外国語大学 国際社会学部 3年 江副 聡真

## 2日目 9月28日

09:00 株式会社 ReFruits(キウイの国) 見学 -60分

- ・除染土壌下での農業振興の説明
- ・キウイ事業の戦略と可能性について

10:15 中間貯蔵施設・中間貯蔵事業情報センター 見学 -90分

- ・再生土壌の中間貯蔵に関する説明
- ・利活用に向けたインフラ的実験の視察
- ・放射線量の確認

13:45 飯館村長泥地区「花の里ながどろ環境再生情報ひろば」見学 -60分

- ・利活用に向けた農業の実験の視察
- ・現地住民との協業体制の説明

16:00 福島県農業総合センター -60分

- ・福島県産作物の生産量回復/向上について
- ・モニタリング体制の視察

### <参加者感想>

2日目は午前株式会社 ReFruits (キウイの国) および中間貯蔵施設・中間貯蔵事業情報センターを、午後には飯館村長泥地区「花の里ながどろ環境再生情報ひろば」と福島県農業総合センターを訪問した。

各地で様々な当事者の方々から直接お話を伺い、福島における東日本大震災が「地震」「津波」「原発事故」といった複合的な副次災害であったことを改めて実感した。ツアーに同行してくださった環境省の折口様が「安全だけでなく安心が大切」とおっしゃっていたが、中間貯蔵施設の訪問を通じて、その言葉の意味を深く理解した。

施設職員の方は、そこで人間が受ける放射線量(シーベルト)が十分に低い水準であることを「安全」の基準として説明してくださった。一方で、地震や大雨によって土壌が露出するなど、万が一の状況における安全確保の仕組みについては、(後に対策がなされていることを伺ったが)住民などへの説明には含まれていなかった。そのような点についても触れていくことで、より「安心」につながるのではないかと感じた。

京都大学 工学部 3年 伏谷 飛鳥



## 第四章 勉強会 / FT

### ピーすふるファーム 斎藤和平様

開催日 2025年4月16日

開催場所 オンライン

分科会 コミュニケーションのあり方

コーチングの実践知や他者との関係構築、JASC 参加者としての経験について学びを深めた。

#### <参加者感想>

分科会初の FT として、齊藤和平さん（通称ピーすさん）をオンラインで訪問した。ピーすさんは、横浜にある「ピーすふるファーム」にてリトリートやコーチングを提供している。事前にピーすさんの活動に関する資料提供を受けた上で、質疑応答形式により、コーチングに対する理解を深めた。

今回の FT では、事前にピーすさんの経歴や活動内容に関する資料に目を通した上で参加したため、具体的な問いを準備することができた。質疑応答形式による対話は、受動的な講義形式とは異なり、参加者一人ひとりの関心や問題意識に応じた議論の深化を可能にしていた。コーチングに対して懐疑的な意見にも、齊藤氏は終始笑顔を保ち、真摯かつ丁寧に対応された。ピーすさんがコーチング実践において重視する傾聴姿勢や自己開示のあり方、異なる立場・価値観を持つ他者との関係構築に関する知見は、単なる理論では得がたい具体性を備えており、示唆に富むものであった。また、ピーすさん自身が第 68・69 期 JASC 参加者であった経験にも言及され、当時の所感や JASC に対する向き合い方についても共有いただいた。今後、JASC の活動を続ける中で意見の相違や葛藤に直面する場面も想定されるが、その際にはピーすさんの言葉を参照し、相手の背景理解に努める姿勢を大切にしたい。

京都大学法学部3年 中田 怜



## 一般社団法人 スローフード協会

**開催日** 2025年5月8日

**開催場所** オンライン

**分科会** 食と文化・社会

### <参加者感想>

本自主企画 FT では、日本スローフード協会代表の渡邊氏を招き、スローフード運動を手がかりに「食・文化・社会」を分野横断的に捉え直した。春合宿においても、スローフードの概念や食文化の担い手、生産者と消費者の関係性を議論してきた。そこで本企画では、実践の現場にいる当事者の経験知に触れることで、スローフード運動がどのような問題意識から生まれ、どのように社会と結びついてきたのかを立体的に理解することを目的とした。

講演ではまず、スローフードが1986年にイタリアで始まり、現在は160カ国以上に広がる国際的な運動であることが紹介された。印象に残ったのは、地域に根ざした人々の営みを起点とした、スローフード運動の広がり方である。たとえば、発祥の背景として語られた、ローマのスペイン広場へのファストフード店進出に対し、抗議の代わりに郷土料理を振る舞い「私たちにはこれがある」と食卓を開いた出来事は、その象徴と言えると思う。ここから私は、スローフードが便利さや近代化を否定する運動ではなく、大量生産・大量消費の価値観の中で見失われがちな地域の食文化や生産者の尊厳を保つための提案なのだと考える。

そして、質疑応答では、米国の政治状況とスローフードの広がり、所得・時間格差と実践可能性、令和の百姓一揆をめぐる評価と農政の課題、食と精神性の関係、食文化の所有と変容など、多様な論点が提示された。中でも、低所得層や特権的な立場にない人々へのアプローチとして紹介された、アフリカでのコミュニティガーデンの取り組みや、公教育における食育の実践は、「すべての人がアクセスできる食」という理念が大切だという示唆が印象的だった。一方、農業政策や直接支払いをめぐる議論からは、自然と人がともに良くなる農業を社会がどう評価し、持続可能な形で日本の食を支えていくのかという課題も浮き彫りになった。

本企画を通じて、私は、「食とは、生命や環境・経済・政治・教育・文化・精神性を横断する社会的な接点」であると学ぶことができた。何より、スローガンである「Good, Clean, Fair food for all」については、Good（おいしい）が最初に置かれている意味が特に印象的だった。倫理的に正しく、社会的に望ましいものであっても、日常の中で続かなければ変化は生まれない。「おいしい」といったような「感情」を起点に人を巻き込む姿勢が欠かせない視点を忘れず、人間らしさを大事にした食の営みについて模索していきたい。

上智大学総合人間科学部社会福祉学科2年 野添 葉音

## 前法務大臣 牧原秀樹様

開催日 2025年5月22日

開催場所 日米会話学院

分科会 インド太平洋地域における国際政治

<参加者感想>

### 【概要】

前衆議院議員で弁護士の牧原秀樹先生をお招きし、第一次トランプ政権時の関税交渉のご経験などを踏まえながら、第二次トランプ政権の関税政策に関する勉強会を開催していただいた。勉強会では、自由貿易体制の成立経緯や目的といった前提知識から、中国の台頭をはじめとする国際情勢の変化、第二次トランプ政権による関税政策の法的な分析などの現状分析、そして今後の国際経済秩序の構想に至るまで非常に多岐にわたるお話を伺い、議論した。また、会の終盤には牧原先生のご経歴の詳細や政治家としての姿勢、将来の日本への展望などのお話もいただき、総じて、大変興味深く刺激に満ちた勉強会であった。

### 【感想】

とりわけ印象に残っているお話が2つある。1つ目は、トランプ政権の特徴に関するものだ。ディールを重んじ、“Win-Win”な結果はあり得ず一方が勝てば他方は必ず負けるという思考の下で交渉を挑まれているだけでなく、政権の意思決定に与える大統領個人の影響力の大きさや法的なプロセスを必ずしも重視しないなどの予測不可能性があるなど、トランプ政権との交渉における特性に関してご教示いただいた。また、法的な観点について付言すれば、国内における法的な手続きに対しては、立法府や党内の基盤を考慮してか比較的遵守しようとする姿勢が見られる一方で、GATT・WTO法をはじめとする国際法に関して、それらを遵守しようとする意識は非常に乏しいだろうとご指摘されていたことが印象深い。国内における立法府・司法府の反発やその他の行政府による強権的な政策もさることながら、このような法的視点を度外視しているともとれる政策の数々は、「アメリカ例外主義」の変化、「ルールに基づく国際秩序」との乖離など、多くの課題意識を生じさせ、割り切れなさを感じずにはいられない。

そして2点目は、今後の国際経済秩序に関するお話だ。戦後構築されてきた自由貿易秩序を守り、強化していくために、基本的理念を同じくするEU諸国等と共同しながら、東南アジア、そして今後数十年で飛躍的に市場拡大が見込まれるアフリカ諸国をはじめとする諸国家を、ルールに基づく自由で公正な世界秩序に引き止め、組み込んでいくことが重要であると話されていた。数十年という長期的な視野で日本や世界の未来を思考し、実際にご活躍されている姿に、非常に強い感銘を受けた。

早稲田大学法学部 4年 守屋 旺次朗



## 越川和彦前駐フィリピン特命全権大使勉強会

開催日 2025年5月26日

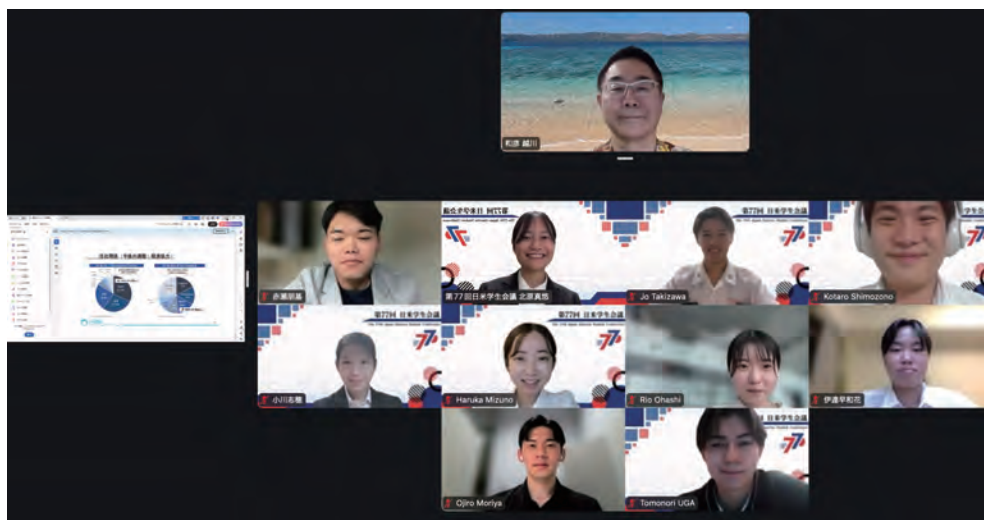
開催場所 オンライン

日本の軍事占領の歴史を踏まえた日比関係の歩みや、近年の政権交代に伴う外交・安全保障環境の変化、および日米豪比の多国間協力の重要性について学びを深めた。

### <参加者感想>

6月上旬に控えたフィリピン研修を前に、越川和彦前フィリピン大使様より zoom によるフィリピン情勢と日比関係に関する勉強会の機会を賜った。冒頭から大使が実際にフィリピンでお撮りになった写真を zoom の背景にして紹介されるなど、とても和やかな雰囲気が溢れる勉強会だった。大使が特に強調なさったことは1941年の日本の軍事占領によって被害を受けたフィリピンとの歴史を忘れてはいけないということだ。当時の反日感情から一変して、ビジネスや ODA の支援により現在は良好な関係を築いていることにより、2021 年にかつて日本が攻撃したクラーク空軍基地親善訪問を ASEAN で最初に許可したことが印象的だった。一方で、ドゥテルテ政権やマルコス政権の親中から親米への遷移に関して、国防や軍事支援が国の外交に大きく関わっていることが挙げられ、九段線など日本もミニラテラル協力の一環として日米豪比との関係の促進の重要性がわかった。勉強会を通して急成長を遂げるフィリピンが日本にとって歴史的にも経済的にも重要なパートナーであることを再認識した。この学びを胸に現地での研修に臨み、より深い相互理解と信頼関係の構築に貢献したい。

トリニティカレッジ (ダブリン大学) 教養課程コース1年 大橋 莉央



## 日本空港ビルディング株式会社

開催日 2025年5月27日

開催場所 日本空港ビルディング株式会社

### <参加者感想>

27日の火曜日、私は羽田空港を運営する日本空港ビルディング株式会社へ足を運んだ。交通遅延の影響でいくらか遅れての参加となったが、先に到着していた三人の仲間と、迎えてくれた二人の担当者は、いずれもシュッとしたスーツ姿で、私の服装選びの判断を強く後押ししてくれるようだった。

案内された会議室は、空港という巨大なインフラの裏方に相応しい静謐さと秩序を備えていた。担当者の方々からは、空港建築の基本設計にまつわる興味深い話が次々と語られた。ひとえに「空港」と言っても、その設計には大きく分けて三種類——横長型、ヒトデ型、地下型——が存在し、それぞれが機能性と旅行者の体験価値のバランスを異なる形で体現している。たとえばヒトデ型は移動距離を最短に抑えられる一方で、中央部の混雑や建設コストの増大という課題がつきまとう。

この構造的トレードオフの話をついながら、私はふと「利便性の最大化とコストの最小化は本当にトレードオフなのか？」という問いを胸中に投げかけていた。建築とは空間のデザインであると同時に、人間の動線、感情、時間感覚までも設計する営みだと考える。だからこそ、技術とデザインと制度、そのすべてが折り重なる空港という存在は、実に挑戦的なフィールドなのだ実感した。

話は次第に現在進行中のモビリティ実証実験に及んだ。関西電力との協働による低速モビリティ「iimo」や、自動運転技術の導入可能性についての説明は未来志向に富んでいたが、同時に「実証実験疲れ」という言葉が投げかけられたのが印象に残っている。技術的には可能でも、導入には巨額のコストがかかり、動く歩道一基にして1億円超という数字は、そのスケールの現実を如実に物語っていた。

さらに話は制度設計にも波及する。出国時に一律で課される国際観光旅客税（1,000円）は、本来は観光振興を目的としたものだが、現場からは運用面での柔軟性の欠如が指摘された。米国のESTAのように旅客の属性や目的に応じて段階的な徴収を行う制度と比べ、日本の一律課税方式がもたらす制度疲労は否めない。徴収の容易さと公平性を重視するあまり、機会創出の柔軟性を捨ててしまっていないか。その硬直性は、現場のオペレーションや利用者体験にも静かに波紋を広げているように感じた。

このように視察を通じて得た知見は、日本の空港運営の現実と挑戦を肌で感じさせてくれた。私たち参加者もまた、仁川空港やドバイ国際空港など海外事例を参照しながら、空港空間における「歩かせる設計」の意義について意見を交わした。「旅」という時間のなかで、人に移動を強いることがストレスではなく、むしろ発見や期待へと転化されるような設計は可能か。空港はただの「通過点」であることを越えて、「体験の始まり」として再構築できるのではないか——そんな議論が生まれたのも、この訪問の大きな収穫だった。

結果として、この視察は単なる施設見学を超え、「空港とは何か」「誰のための空間か」といった根源的な問いに立ち返るきっかけとなったと私は考える。建築、モビリティ、制度、すべてが重層的に絡み合うこの空間を再解釈することは、今後の本会議での議論の羅針盤となりうる。加えて、問いを立て、視点をずらし、課題の輪郭を炙り出すという、批判的思考の技法を自らに問い直す貴重な時間でもあったと、今は確信している。

上智大学 総合グローバル学部2年 下蘭 洸太郎



## 駐日フィリピン共和国大使館 Mylene Garcia-Albano 大使表敬訪問

開催日 2025年6月2日

開催場所 駐日フィリピン共和国大使館

### <参加者感想>

本事前勉強会では日米学生会議による表敬訪問という形を取り、ミレーン・J. ガルシア＝アルバノフィリピン大使ご臨席の元、フィリピンについての概要、日比関係の概略や各分野ごとの取組み内容について、万博でのフィリピンや、日比包括的経済連携協定について、日米比での協調のあり方など、2025年時点でのフィリピン政府の日本における立場を中心に解説していただいた。中でも大使の出身であるミンダナオ島での和平交渉への日本政府としての役割を強調して頂いた際には、筆者が幼少期ミンダナオ島で暮らしていた際の記憶が今一度蘇るような感覚を覚え、強い印象として残った。

質疑応答の時間には、大使ご自身が女性であることを踏まえた女性活躍の現状に関する質問、マニラ首都圏のインフラ整備や ODA の受け止められ方、フィリピンの対中政策や ASEAN における立場など、鋭い問いかけがなされ、それら一つ一つに大使自らが丁寧に応答された。

また、筆者自身も先述の経験からミンダナオ島における和平への強い関心を持っていることから、大使自身が感じているミンダナオ島和平の現状について質問を投げかけた。極めて示唆に溢れたご回答をいただくことができ、フィリピン渡航の前に非常に有意義な時間を持つことができた。

上智大学 総合グローバル学部2年 下藪 洸太郎



## 日本女子大学 田邊和子教授

開催日 2025年6月14日

開催場所 オンライン

分科会 コミュニケーションのあり方

社会言語学の観点から、呼称の変遷に見る家庭内構造の変化や、言葉が社会の価値観・人間関係をどのように反映しているかについての講義を受けた。

### <参加者感想>

今回の FT では、様々な角度から「コミュニケーション」を捉えるべく、日米学生会議のアラムナイでおられる日本女子大学の田邊和子教授にお話をいただいた。『日本語の家庭内呼称』をテーマに、社会言語学の観点から言葉と人、社会との繋がりについてのレクチャーの後、質疑応答を通してより理解を深めていった。兄弟・姉妹間や嫁・姑間の呼称の変化など、身近な事例をもとに言葉のあり方の変遷を考えることができ、普段何気なく使っている言葉に内在する意味や背景を改めて考えるきっかけとなった。家庭内のヒエラルキーが希薄化し、対等な関係を重んじるホラクラシー的な構造や個人の民主化が進んでいるというお話は、呼称の変化を通して社会の変容を捉える新たな視点として興味深かった。FT を通して、言葉は社会の価値観や関係性を反映するだけでなく、自分自身の在り方とも深く結びついているように感じた。呼称の選び方には、その人をどう捉えているか、どんな距離感を持って接しているかが滲み出る。だからこそ、呼び方の変化に敏感であることや、その背景にある想いや関係の揺らぎに目を向けることが、より丁寧なコミュニケーションにつながるのだと感じた。言葉は変わっていくもの。変化に気づき、受けとめ、響き合うところに、対話の豊かさがあるのではないだろうか。

広島大学教育学部4年 森 聡子



## スペイン・コルドバ大学 Dr. Gisella Policastro Ponce

開催日 2025年6月14日

開催場所 オンライン

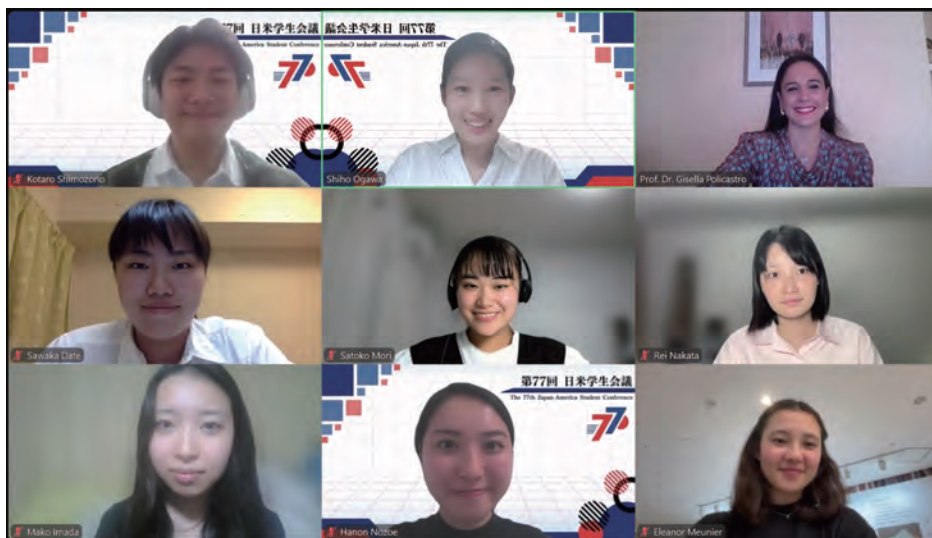
分科会 コミュニケーションのあり方

### <参加者感想>

米国側とのジョイント FT として、スペイン・コルドバ大学のジセラ・ポリカストロ・ポンセ教授をお招きし、「ワインラベル翻訳の課題：用語、談話、文化」というテーマで講演していただいた。

“Each label whispers tradition, culture and story.” ポンセ教授が講義で仰っていたこの言葉は、深く印象に残った。ワインラベルは無機質な情報のみではなく、ワインの伝統や文化、ストーリーを伝える重要な媒体である。わずか数平方センチのスペースが、国境を越えて製造者と消費者をつなぐ架け橋となっているのだ。しかし、ワインラベルの翻訳には法的・物理的な制約など、様々な課題が存在する。これらのチャレンジを乗り越えるために、そのワインが持つ文化的・歴史的背景を学び、異文化の中で適応させ (adaptation, localization)、場合によってはクリエイティブに翻訳するプロセス (transcreation, translation) が重要で、これらは AI による翻訳技術が急速に発展している現在においても、人間にしか担えないものだとして強調されていた。本会議で期待される異文化コミュニケーションの課題を乗り越えるスキルこそ、AI には代替できない大切なスキルだと実感している。今回の FT の学びを活かし、コミュニケーションに関する学びをさらに深めていきたい。

慶應義塾大学法学部政治学科2年 伊達 早和花



## 東京大学 川島真教授

**開催日** 2025年6月15日

**開催場所** 東京大学

**分科会** インド太平洋地域における国際政治

アメリカの対中政策や台湾情勢、日中関係に加え、中国国内の政治体制や社会・経済問題が対外政策に与える影響について、専門的な知見に基づいた講義と質疑応答が行われた。

### <参加者感想>

本分科会では「日米共通の脅威となり得る中国に対し、日米はどう向き合っていくべきか」をテーマに勉強会を進めており、より深い知識を得るために東京大学教授で中国の歴史、政治、外交がご専門の川島真教授にお話を伺う機会を得た。

先生からはアメリカの対中政策の転換や関税問題、中国の台湾政策、日中関係等について幅広くご講義いただいた。特に改革開放以降の中国共産党内での派閥争いや、人口減少や格差といった社会問題、財政悪化などの経済問題が、習近平の意識や政策決定に影響を与えているとのご指摘は大変興味深かった。これまでの分科会勉強会での議論では主に外交、安全保障に焦点を当てて話してきたが、国内の事象がその対外政策に影響を与えるとの観点から、社会問題や国内のよりミクロなアクターに注目して学習を進めるのも面白いのではないかと感じた。今回の FT は分科会の活動により深い知見と新たな気付きを与えるものであったと思う。大変お忙しい中、快くご協力いただいた川島先生には厚く御礼申し上げます。

東京大学教養学部3年 上田 理紗



## ■ 特定非営利活動法人 TABLE FOR TWO

開催日 2025年6月17日

開催場所 オンライン

分科会 食と文化・社会

本講義では、TABLE FOR TWO（以下 TFT）インターナショナル事業開発部の中井様より、世界の飢餓と肥満という「二重の栄養課題」と、それに対する TFT の取り組みについてお話を伺った。

### <参加者感想>

TFTの活動は、先進国においてヘルシーな商品を選ぶという日常的な行動が寄付につながり、その収益が学校給食として開発途上国の子どもたちに届く仕組みである。また、世界では飢餓人口が約8億人存在する一方、肥満人口は約25億人にのぼり、同じ社会の中で「食べられない人」と「食べ過ぎる人」が併存しているという現実を、初めて知った。特に、私は、支援を「一方的な援助」ではなく、健康づくりと社会課題解決を同時に実現する Win-Win のモデルとして提示している点が、個人が参加しやすい社会貢献の形であると考えた。また、支援の現場として紹介されたルワンダ・バンダ村の事例からは、学校給食が単に空腹を満たすだけでなく、学習への集中力向上や不登校・中退の抑制、家庭の負担軽減、地域経済の循環など多面的な効果をもたらすことを知った。無電化地域で早朝から調理が行われ、現地で調達した食材が運ばれ、幼稚園児が食事をする様子を見て、生活の条件が厳しい中でも食を中心にした仕組みを成立させる重要性を強く感じた。加えて、最終的な自走化に向けたボトルネックとして政府の関与の重要性が挙げられ、タンザニア・ザンジバル地域の事例では、給食を支える農業グループの拡大が地域経済の活性化につながっていることが紹介された。そして、アフリカの給食支援を受けて育った元生徒が教師となり次世代を支える側へ回っている事例は、継続的な支援が将来の社会の担い手を生むという因果を象徴していたように思う。この事例から、私は、支援を単発の施策としてではなく、地域の供給体制や市場の成立まで含めて捉える視点を持つことが必要だと実感した。

そして、米国で展開される食育プログラム和食育の紹介では、和食を通じて栄養バランス、調理スキル、衛生、感謝、もったいないといった価値観を伝える試みがあり、文化を用いた健康課題へのアプローチとして興味深かった。特に、多様な背景を持つ児童がいる米国において、地域差や経済状況の違いが学習体験にどのような影響を与えるか、食が支える「文化の尊重」と「健康・栄養改善」の両立の問いと向き合うきっかけとなった。

以上を踏まえて、私は、食は単なる栄養摂取ではなく、教育、経済、文化、そして尊厳に関わる基盤であると考えます。特に、日米の学生が共同生活を行う本会議においては、日本の食の特徴や要素を、押し付けではなく対話の入り口として共有することが重要であるとも感じており、今後の分科会活動でこの学びを活かしていきたい。

上智大学総合人間科学部社会福祉学科2年 野添 葉音

## ■ 認定 NPO 法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ

---

**開催日** 2025年6月17日

**開催場所** オンライン

**分科会** 食と文化・社会

### <参加者感想>

本FTではこども食堂の機能と現状について学んだ。川添様が繰り返し強調されていたのは、こども食堂とは「経済的に困窮した子どもが行く場所」ではなく「地域の全員にとって居場所となる場所」である、という理念である。ここで「居場所」とは、ある人にとってそこが connected, protected, safe, loved であると感じられるようなコミュニティを指す。お話を伺い、こども食堂はこの「居場所」としての機能が肝要であることを知った。例えば、子どもにとって家庭や学校は必ずしも居場所と感じられるわけではない。こども食堂はそれらのコミュニティとは異なる第三の場所として、居場所の機能を果たしうる。また、独居高齢者の家庭で開催されるこども食堂は、世代を超えた交流を育むとともに地域全体での見守り機能を補完する。このような、経済条件や世代といった属性によって線を引かれない居場所の存在が地域にとって重要であり、従来のコミュニティで対応できない、あるいはそれらからこぼれ落ちている人々の支えになる。家庭や学校といったコミュニティが必ずしも有効な居場所として機能していない昨今、こども食堂が「地域の全員にとって居場所となるように」という川添様の言葉は重い。

九州大学農学部4年 田中 遼弥

## 防衛大学校 石川卓教授

開催日 2025年6月24日

開催場所 オンライン

分科会 インド太平洋地域における国際政治

### <参加者感想>

第77回日米学生会議は、石川卓教授をお招きし「核政治」の現況に関する特別講義を拝聴した。講義後には、学生との間で濃密な質疑応答が交わされた。

かつて外交官・岡崎久彦氏が述べたように、日本では他先進国の大学とは異なり、戦略論や核戦略に関する講義を体系的に受ける機会が極めて限られている。その意味で、安全保障研究の第一線に立つ石川教授の講義に接することができたことは、将来を担う我々 JASCer にとって、まさに貴重な知の萌芽となった。

核兵器を保有しない日本に生きる我々が、なぜあえて「核政治」に目を向けねばならないのか。その答えは、しばしば引用されるマーク・トウェインの言葉、“History doesn’t repeat itself, but it often rhymes.” 「歴史は繰り返さないが、しばしば韻を踏む」にある。

広島・長崎に原爆が投下されてから80年。累計21万余の命が奪われたあの悲劇は、いまだ我々の時代に響く「韻律」として、静かにしかし確かに、私たちの耳に届き続けている。それからの80年、核兵器の実戦使用は辛くも回避されてきたが、それは偶然ではなく、世界中の無数の叡智と努力の果てに他ならない。だがその火種は、今この瞬間にもくすぶり続けている。核戦力の近代化を急ぐ国家、一方的な現状変更の手段として核の威嚇を辞さぬ国家。それらの存在は、国際社会を暗雲のもとに置き続けている。このような現実に向き合うとき、JASCer として、また未来の国際秩序を形づくる一人として、核戦略を含む核政治への理解は、単なる教養ではなく、責務である。

講義では、NPT体制の揺らぎ、イラン核合意(JCPOA)の変遷、新STARTの教訓、さらに「4賢人会合」に見る軍縮アプローチの試みなど、核秩序をめぐる国際規範の現在地が示された。また、「核なき世界」を希求する理念が、現実のパワー・ポリティクスといかに折り合いをつけるべきかについて、活発な議論が交わされた。特に印象的だったのは、将来の日本の選択肢に関する問いかけである。たとえば、米国が海上発射型巡航ミサイル(SLCM-N)の配備に現実味を帯びさせた場合、日本はどのように応答すべきか。そして核時代3.0とも称される新たな戦略環境下において、「核なき世界」が今なお共通の利益として成立し得るには、どのような価値体系や安全保障枠組みが必要か。この問いに、私たちは未だ明確な解を持たない。

石川教授は、将来的な核軍縮の展望には厳しい見方を示されたが、同時に、理想を持ち続けることの意義を私たちに託した。核という最も極端な暴力の存在を前にしてもなお、人間の理性と倫理が働く限り、議論と対話には意味がある。その静かな確信が、講義全体に通底していた。我々 JASCer は、今回得た知見と問題意識を携え、国際社会の対話に還元していかなければならない。それは、容易ならぬ変数が絡む複雑な問いではあるが、ゆえにこそ、挑む価値がある。

この講義が蒔いた種が、やがて我々一人ひとりの中で芽吹き、核なき世界という難題に挑む確かな歩みとなることを希求する。

防衛大学校国際関係学科4年 久保木 廉



## 外務省 川口耕一郎様

**開催日** 2025年6月25日

**開催場所** 日米会話学院

**分科会** インド太平洋地域における国際政治

### <参加者感想>

現在、外務省に勤められる川口さんの FT では、今のアメリカを見る目を養うという視点をもとに、JASC において異なるアメリカとの関わり方、アメリカから見た世界の視点を捉える重要性を JASC 本番前に教授いただいた。アメリカは世界と取り組む国であり相互理解が前提であるからこそ、正しいと間違いを明確にしている点が興味深かった。日米関係の議論の基礎となる問題として法の支配を挙げていたが、法に関する解釈が異なるなどの問題があり、その点について、独自の法解釈や政権ごとの解釈、日本経済における戦略の視点が重要となると考える。この認識の違いに関しては、中長期的な未来を基礎とする日本と短期的に処理するアメリカの視点があるのでその違いなどに注目してみるとより興味深いと感じた。

慶應大学法学部法律学科1年 田代 明衣



## 株式会社 JERA 倉持あゆみ様

**開催日** 2025年6月27日

**開催場所** 株式会社 JERA

**分科会** 環境イノベーションと事業創造

### <参加者感想>

アラムナイである倉持あゆみさんから「JERA の業務内容」並びに「エネルギー地政学」について伺った。倉持さんは JERA に入社以降 LNG の調達に関わる業務を行っており、LNG に関するお話がメインであった。

倉持さんとの質疑応答を通じて、これまで抱いていた「化石燃料は悪、再生可能エネルギーは善」という考えを改めることができました。

その理由は、エネルギー源それぞれの特性を理解したからです。化石燃料、特に LNG（液化天然ガス）を用いた発電は、需要に応じて必要な時に必要な量の電力を生産できるため、電力の需給バランスを保ちやすく、結果的に電力ロスを減らせるという利点があります。一方で、再生可能エネルギー、特に太陽光発電は日中しか発電できないという時間的な制約があり、電力供給の不安定さが電力系統のロスにつながる側面も持ちます。このことから、特定のエネルギー源を一方向的に「悪」と決めつけるのではなく、それぞれの長所と短所を多角的に評価することの重要性を痛感しました。また、LNG の調達方法についても新たな発見がありました。調達には「長期契約」と「スポット契約」の2種類があり、石油と違って LNG は地域ごとに価格が異なるため、「スポット契約」による価格差を活かしたトレーディングビジネスが成立していることを知りました。特に興味深かったのは、日本のエネルギー安全保障に関するお話です。日本が中東諸国との LNG 長期契約を更新しなかった直後、ウクライナ危機を発端とする世界的なエネルギー危機が発生しました。その結果、日本は現在、中東諸国との新たな長期契約の締結に難航しているという事実は、エネルギー調達の難しさと国際情勢の密接な関わりを示す象徴的な事例だと感じました。

大阪大学基礎工学部化学応用科学科3年 杉本 幹太

## ピーすふるファーム訪問

**開催日** 2025年6月27日

**開催場所** ピーすふるファーム

**分科会** コミュニケーションのあり方

### <参加者感想>

分科会の FT として、アラムナイの齊藤和乎さん（通称ピーすさん）が運営するピーすふるファームを訪問した。現地では奥さまの美紀さんに畑を案内していただき、夏野菜の収穫を体験した。その後、採れたての野菜を使った料理をごちそうになった。食事を囲みながら、コーチングや対話に関するお話を伺った。

ピーすふるファームに到着すると、美紀さんと生後 6 ヶ月の息子・肇くんが迎えてくださった。自家製の梅ジュースで疲れが和らぎ、肇くんの笑顔に癒され、自然と場が和んでいった。直前に「子どもとのコミュニケーション」を議論していたこともあり、肇くんとの交流は思考を現実に引き寄せるきっかけとなった。その後体験した野菜の収穫は、自然に触れる機会の少ない参加者にとって新鮮で、食材への感謝や無農薬栽培の意義を実感する時間となった。美紀さんが収穫した野菜を使って用意してくださったカレーやサラダ、ポテトサラダは素材の味が引き立ち、どれも非常においしかった。参加者一同、夢中で平らげてしまった。ピーすさんとの対話では、議論や対話の深め方について、多くの示唆を得た。1 ヶ月後に本会議を控えた私たちにとって、学びに満ちた貴重な時間であった。また訪れたいと心から思う。

京都大学法学部 3年 中田 伶



## 「高畑勲展—日本のアニメーションを作った男」訪問

**開催日** 2025年6月28日

**開催場所** 麻布台ヒルズ

**分科会** デザインとメディアにおける美学

### <参加者感想>

RT 議論の中で、サブカルにおける戦争芸術を取り扱っていた我々は FT として夏に麻布台ヒルズで開催されていた「高畑勲展—日本のアニメーションを作った男」を訪れた。この展示会では、これまでに高畑勲が制作に関わってきたアニメーション作品がどのように作られてきたのか、どのような意図があり制作されたのか、どのような背景があったのかなどがこと細かく説明されていた。主に、「赤毛のアン」「じゃり子子チエ」「火垂るの墓」「平成狸合戦ぽんぽこ」「かぐや姫」「となりの山田くん」など高畑勲が関わってきた数々のアニメーション作品が展示されていた。私がこの展示会で一番そしても印象に残っているのは、リアルな作品とリアルではない作品の描き分けである。ここでいうリアルとは、アニメーションの中の背景・風景・人物を詳細に描くということであり、「火垂るの墓」「平成狸合戦ぽんぽこ」などはリアルな作品だと言えるだろう。逆に「かぐや姫」「となりの山田くん」などはリアルではない作品と言える。これらの違いから観客が感じることは、リアリズムを追求した作品なのかそうでないかということである。これに対して、高畑勲は、「火垂るの墓」のようにリアリズムを追求しすぎると、観客の想像力の余地を奪ってしまう、そして、「ざっと書いているものの方が背後にあるものを感じることができる」それを追求したのが「かぐや姫」である。「かぐや姫」が発表された当時、中学生だった私は、なぜこんなぼやけた線画で描かれているのかと少し不思議に思った記憶がある。2018年以來に制作の背景を知ることができたとても有意義な時間になったとともに、その時ちょうど分科会議論でも似たような話をしていたこともあり、分科会にもうまく還元できた機会となった。

東京外国語大学国際社会学部3年 江副 聡真

## 農林水産省 大臣官房政策課・食料安全保障室 平田和也様

**開催日** 2025年7月7日

**開催場所** 農林水産省本省

**分科会** 食と文化・社会

### <参加者感想>

本 FT では、霞が関の農林水産省本省にて大臣官房政策課・食料安全保障室の平田和也様から「我が国の食料安全保障の今後の展望」と題した講演を行っていただいた。米価格の高騰やトランプ関税など種々のリスクにさらされている日本の食料安全保障について、日本が置かれている状況や法体制、今後のリスクまで幅広く学ぶことができた。質疑応答では、軍事的安全保障・経済安全保障と食料安全保障の関係性や、食料の”武器化”、消費者目線からの食料安全保障についてなど、様々な観点からの質問が飛び交った。私自身は食文化と食料安全保障の関連について質問を行ったが、そのお答えの中で平時の安全保障と有事の安全保障を分けて捉え、それぞれに対し対策を講じるべきとの箇所が印象に残った。曰く、以前は有事の際の対策を主要事項としていたが、近年の食料に係るさまざまな事象・リスクを勘案した結果、平時における対策を重視するようになったという。雑多な情報の山から自らの判断で彫琢した情報を政策判断の俎上に載せなければならない緊張感の一端を垣間見たように感じた。デリの各々の関心領域から食料安全保障を考え直す契機となり、とても意義深い研修となった。

九州大学農学部4年 田中 遼弥

## 霞こずえ様

開催日 2025年7月9日

開催場所 オンライン

分科会 科学技術と倫理



### <参加者感想>

第77回日米学生会議は、株式会社 DISCO において半導体製造部門に従事された経験を有する霞氏を講師としてお迎えし、オンライン形式にて勉強会を実施した。いまや世界の列強がこぞって戦略物資と位置づけ、国家の威信と安全保障をかけて鎬を削る半導体産業。その最前線に身を置かれた方から直に知見を授かる機会は、我々にとって計り知れぬ意義を有するものであった。

冒頭、講師より約1時間にわたり、半導体産業の全体像、すなわち川上の素材供給から川下のパッケージングに至るまで、どのような企業群が複合的に関与し、シリコンという無機物がいかにして知的生産の中核たる半導体となるかについて、明快かつ俯瞰的な説明がなされた。日々、我々は半導体の恩恵を無意識のうちに享受しているが、その基盤たるサプライチェーンの複雑性や国際的分業構造を知ることは、自らが立つ座標を理解するうえで不可欠である。

続く後半は、講師のご指導のもと、参加者による活発な質疑応答を通じて、現状分析から将来的展望へと対話の重心が移された。たとえば、日本の新興ファウンドリ企業である Rapidus が、果たして世界市場における競合となり得るかとの問いに対し、霞氏は単なる規模や技術競争力の優劣では語り尽くせぬ本質を提示された。それは、半導体とはそもそも消費財ではなく、社会の血脈として機能する中間財であるという原点の確認であった。

この認識に立てば、先端技術への偏重や線幅の微細化を至上命題とする姿勢は、視野狭窄に他ならない。むしろ重要なのは、どこに実効的な需要が存在するのか、そしてそれをいかに精緻に汲み取り、技術供給と制度設計を結びつけるかという、マッチングの構造を設計する戦略的知性である。霞氏の言葉は、華々しき技術開発の彼方に広がる、国家戦略の空白を見据える冷静な洞察に満ちていた。

このような視点は、現在私が卒業研究として取り組む米国の対中半導体政策にも深く通底するものであり、また本会議において半導体産業について学ぶ我々にとっても、理論と現場を結ぶ思考の枠組みとなるものであった。思えば1980年代、日本は「半導体大国」として世界市場を席卷したが、その後の急速な衰退は、技術的優位を維持することと、国家戦略の構築とを混同したことによる失敗の証左である。すなわち、供給能力の拡張そのものが目的化された結果、社会的ニーズとの接続が断絶し、制度的マッチングが機能しなかったのである。

霞氏の講話を通じて、我々は現在の日本が推進するサプライチェーン強靱化政策が、単なる資本投入や設備拡充の域にとどまっていること、そして流通・応用・制度設計という文脈において戦略的全体像が十分に描けていないことを痛感した。半導体政策の真価は、個別企業の支援ではなく、むしろ産業そのものを媒介していかに国家や社会を設計するかという制度工学的課題にある。ゆえに、我々の学びは、半導体という一分野に閉じるものではなく、広く社会制度全体の設計原理へと応用可能な知的財産へと昇華されるべきである。

自己の専門とは、社会を構成する諸要素の一に過ぎない。人間はしばしば、自らが携わる領域の価値最大化にのみ意識を奪われがちだが、真に求められるのは、社会全体の最適化のために、自己領域をいかに位置づけ、調整し、再構成するかという視座である。この勉強会は、将来いずれかの分野で第一線を担うであろう我々にとって、「専門を超えて思考する」覚悟を促す、深い思索の契機となった。

防衛大学校国際関係学科4年 久保木 廉

## 熊本サイト事前学習会 →詳細は第七章

**開催日** 2025年7月12日

**開催場所** オンライン

### <参加者感想>

本会議まで1ヶ月を切った7月12日(土)、日米双方の参加者がオンラインで会し、熊本サイト事前勉強会を実施した。この勉強会の企画・運営は、熊本大学・熊本県立大学・熊本学園大学の3大学11名から成る熊本サイト企画委員の学生が担った。当日は、日米参加者のほか、熊本大学・熊本県立大学・熊本学園大学・崇城大学の学生の皆さんにも参加いただいた。

第一部では、熊本県立大学堤裕昭学長に「熊本の自然と人々の暮らし」をテーマに英語でご講演いただいた。この基調講演では、8月に訪問予定の阿蘇地域や天草地域に言及していただいたほか、文系に寄りがちな当会議にとって貴重な理系の視点からお話しいただき、参加者は日本側・米国側ともに真剣な眼差しで聞いていた。また、質疑応答の際には、日米双方の学生から寄せられた質問に一つ一つ、丁寧に回答いただいた。

第二部では、熊本サイト企画委員が3グループに分かれ、それぞれ歴史、災害、半導体をテーマに英語でプレゼンテーションと質疑応答を行った。発表は、企画委員の提案により、3グループがそれぞれ異なるブレイクアウトルームで同時にプレゼンテーションを行うという形式を採用した。参加者に対しては、事前に3つのテーマの中から関心のある2テーマを選んでもらい、その2グループの発表を聞くことができるようグループ分けを行った。3択クイズを交えるなど、企画委員による工夫の詰まった発表を、参加者は大変興味深く聞いていた。

第三部では、日米の学生が交流する時間も設け、絵しりとりのようなゲームで熊本サイト企画委員を含めて親睦を深めた。

当事前勉強会は、本会議で熊本県を訪れる前に、熊本県の歴史や自然、産業に関する知識を得ることや、企画委員の学生と日米学生会議参加者が交流を深めることを目的として実施したが、企画委員11名の尽力により、その目的を大いに達成することができた。

末筆ながら、事前準備、広報、および当日の運営にご協力いただいた熊本県立大学の堤学長、国際教育交流センターの方々をはじめとする皆様、そして企画・運営に尽力いただいた企画委員の学生の皆さんに、心より御礼申し上げます。

東京外国語大学言語文化学部3年 小川志穂



## 松乃鮨 4 代目 手塚良則様

開催日 2025 年 7 月 14 日

開催場所 オンライン

分科会 コミュニケーションのあり方、食と文化・社会、その他

### <参加者感想>

7 月 14 日は、コミュニケーションのあり方分科会と、食と文化・社会分科会の日米ジョイント FT として、鮨職人の手塚良則氏にご講演いただいた。手塚氏自身のご経験や、鮨とは何か、そしてどのように外国人客とコミュニケーションをとっているのか、というお話を伺った。

私は手塚氏のご講演を中学二年生の時に拝聴する機会があった。その際、異文化コミュニケーションについてお話しされていたことが印象的で、今回直接ご講演をご依頼した。自分で FT を企画する中で、デリとしてなかなか考えたことがなかった、日米学生会議をどのように対外的に見せるか、ということについて考えることができた。対外的な活動というのは実行委員に頼りきりだったので、企画・交渉の段階に携わることでより広い視野が培われたと思う。

鮨は、日本を代表する食であるが、意外とその歴史や成り立ちについて知らなかった。鮨が大皿で提供されるのは、食べる人たちで分け合う際にコミュニケーションが生まれるからだを知った。このように、食の場とコミュニケーションが互いに影響しあっていることに気づき、今後も食と文化・社会分科会とのジョイントを行いたいと考えた。また、鮨は、季節感をとても大切にしていることで日本的であるといえる。季節によって旬の食べ物が変わるが、それに加え、どのお皿に入れて提供するか、も変わると伺った。しかし、日本では四季が当たり前だが、中には冬や夏がない国もある。そのような国の出身の方に対しては、日本での常識を当たり前として押し付けないことが重要だと学んだ。

来たる本会議では、米国側参加者と日本の文化や食について話す機会があると思う。それに際し、自分の思っている当たり前を決めつけず、相手の文化についても耳を傾けながら日本文化を発信していきたいと考える。

慶應義塾大学法学部政治学科 2 年 伊達 早和花

## 厚生労働省

**開催日** 2025年7月12日

**開催場所** オンライン

**分科会** 戦略の時代の経営・経済

### <参加者感想>

新型コロナウイルスによるパンデミックを経て、WHO や国際公衆衛生機関の重要性への関心が日本国内でも一層高まる中、その最前線でのご経験や業務の実際を伺えたことは、私たち学生にとって非常に貴重な学びの機会となりました。

特に印象的だったのは、昨今インターガバメンタルな動きが活性化する中で、国際機関の立場から、国をまたいだ保健政策をいかに推進するかというご苦労や工夫を伺い、現場でのリアルな葛藤と意義を垣間見ることができました。

医療体制が十分でない途上国に向けた支援について、「支援は無限ではない」という現実的な視点から、その国の経済成長や制度構築を見据えた自走可能な仕組みづくりが重要であるというお話に深く共感しました。これは、単に「与える支援」ではなく、「育てる支援」が必要であるという、これからの国際保健協力の在り方を考える上で重要な視座であり、自身の中でも視野が広がったように感じております。

今回のご講演を通じて、保健医療に対するアプローチは一国単位では完結し得ないものであり、グローバルな視点を持ちながら、それぞれの国の状況や文化的背景を尊重する柔軟な姿勢が求められていることを痛感しました。今後自分自身がどのような立場で社会に貢献できるのか、改めて深く考えるきっかけをいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

国際保健の現場における現実と理想のギャップ、そしてその狭間で求められる柔軟な視座や交渉力の重要性を実感することができました。今後、国際的なキャリアを検討するうえでも、本日伺ったお話を大切にしていきたいと思います。改めて、心より御礼申し上げます。

名城大学薬学部6年 水野 遥

## 東京大学医学部 特任研究員 今井けい様

開催日 2025年7月16日

開催場所 オンライン

分科会 科学技術と倫理

### <参加者感想>

先日、JASCのOBであり、小児救急やトリアージの現場経験を持つ今井さまによるオンライン勉強会「AI倫理系×医療」に参加した。ざっくばらんな雰囲気の中で進められたこの会は、ただの一方的な講義ではなく、参加者一人ひとりの意見が都度求められる、双方向的かつ刺激的な時間となった。

同じ大学の出身である今井さまに対しては、筆者自身親近感を抱いていたが、その経験と視点の深さには強い尊敬を覚えた。

議論されたトピックは、人間不要論やハルシネーション、終末医療についてなどいずれも思考停止を許さないテーマばかりだった。

これらは単なる技術の問題ではなく、「人間としてどうあるべきか」という根源的な問いを突きつけてくる。特にAIが発達した現代におけるJASC開催の是非を問われたとき、自分自身の価値観の輪郭が浮かび上がるように感じた。

予定されていた一時間はあっという間に過ぎ、終了後も暫しの間続いた談笑では、現役の参加者たちがそれぞれの関心や悩みを共有し、今井さまから実践的な助言をいただける貴重な機会となった。

AIと医療、その交差点には、未来を形づくるための困難と希望が詰まっている。その入り口に立ち会えた今回の勉強会は、今後自分が何を選び、何に責任を持って生きるかを問い直す、大きなきっかけとなった。

上智大学 総合グローバル学部2年 下菌 洸太郎



## 大阪大学大学院工学研究科博士後期課程 3 年生 藤原悠様

開催日 2025 年 7 月 21 日

開催場所 オンライン

分科会 環境イノベーションと事業創造

### <参加者感想>

核融合発電実験施設である ITER でのインターン経験のある大阪大学大学院工学研究科 博士後期課程 3 年生の藤原悠さんに核融合発電の現状についてお話を伺いました。

インタビューでは日頃のニュースでは中々聞くことができない ITER の内部事情について可能な限り教えていただきました。様々な産業分野で激しい国際競争が展開される中、ITER では複雑な国家間関係を乗り越え様々な国から派遣された人材がひとつの目標に向けて協力している異質な環境であるということは大きな驚きでした。また何かとネガティブな報道がなされる日本の研究力ですが、ITER 内で日本が担う役割は大きいものであると同時に研究レベルも高いということを知ることができました。心強い限りです。一方でアメリカが ITER 計画には比較的非協力的であり、自国のみで開発を進めるスタンスであるということも教えていただきました。本会議では核融合について日米のデリが議論する予定でしたので、このことを知ることができたのは議論を進める上で非常に良かったと考えております。

東京科学大学物質理工学院材料系 4 年 長嶺 泰己

## デジタルグリッド 豊田祐介様

**開催日** 2025年7月21日

**開催場所** オンライン

**分科会** 環境イノベーションと事業創造

### <参加者感想>

デジタルグリッド株式会社の創業者である豊田さんに直接お話を伺った。デジタルグリッドは再生エネルギーを生み出す企業ではなく、すでに生み出されている再エネをいかに分配していくか、という視点で「電気を使う主体がそれぞれに合った方法で電気を調達できるプラットフォーム」の運営をメイン事業としている企業だ。豊田さんは金融機関のバックグラウンドもあり、ファイナンスの視点で学ぶことが多かった。特に電力というインフラ事業に投資をする際に持つべき時間軸は個人的に新たな学びであった。基本的に電力事業のようなインフラ投資は20年前後での回収・リターンを見込めるというのが基本であったが、最近の再エネ拡大の中、電力事業の投資回収・リターンが7～8年で見込めるものもできてきたとのことであった。すると、電力市場に新たな参加者が現れるようになったようだ。短期的なリターンを求める金融機関や他にも民間企業などが例として挙げられていた。「理論上良い」と分かっているが、最終的に社会で実装されるものというのは、投資の回収・リターンが見込めるものであるという現実的な部分を教えてくださった。一方、原子力発電の廃棄物問題など、「社会コスト」を抱えるリスクについても考慮する必要があると話されていた。将来の世代にしわ寄せさせていないか、という長期視点で意思決定をする重要性も忘れてはいけないと教えてくださった。

立教大学観光学部4年 大谷 葉月

## 外務省 小野建様

**開催日** 2025年7月26日

**開催場所** 日米会話学院

**分科会** 戦略の時代の経営・経済

### <参加者感想>

今回の FT では、在米国日本大使館にて議会公使を務められている外務省の小野様より、実践的な形式でのご講義をいただきました。講義では、小野様ご自身の豊富なご経験を交えながら、日本を取り巻く外交環境の概要についてご説明いただいた後、第二次トランプ政権の誕生を見据えた日本外交のあり方をテーマに、日米の学生が混ざり合う形でいくつかのブレイクアウトルームに分かれてディスカッションを行った。

このディスカッションは、数日後に控える本会議に向けた貴重な練習の機会となっただけでなく、ロールプレイを通じて「議論が思うように進まない状況」を意図的に作り出すことで、そうした場面での議論の進め方や合意形成の手法について、実践的かつ体系的に学ぶことができた。

各学生は、それぞれの立場を「自らの言葉で英語で表明する」というこれまでにない経験に最初は戸惑いながらも、次第に議論は熱を帯び、活発な意見交換が行われた。最終的には小野様ご本人からディスカッションに対する前向きな講評をいただくことができ、私たちは本会議に向けて大きな自信を得ることができた。

これらの経験は、私個人にとっても非常に実り多いものであり、特に「自らの思惑をいかに相手に悟られず少しずつ表出させていくか」といった、自身の課題を明確にすることができた点でも非常に有意義な二時間半であった。講義終了後には、小野様より日米の学生たちそれぞれに対する温かい激励のメッセージをいただき、本会議に向けた意気込みを新たにすることができた。

上智大学総合グローバル学部2年 下菌 洸太郎

## 東京都スタートアップ戦略推進本部 松本克己様

**開催日** 2025年7月27日

**開催場所** 日米会話学院

**分科会** 戦略の時代の経営・経済

### <参加者感想>

今回の FT では、東京都スタートアップ戦略推進本部にて東京 e S G プロジェクトの推進を担っておられる松本克己様より、東京の都市政策やスタートアップ支援の現場について講義をしていただいた。講義のなかでは、現在東京都が推進する「東京ベイ eSG プロジェクト」の詳細について、構想の背景から先行プロジェクトの事例に至るまで、幅広い観点からご説明をいただき、特に江戸時代の循環型社会にまで遡って現代都市政策と結びつけて語られた点は、非常に印象的であった。

特に印象に残った箇所としては、松本様ご自身が実際に携わった調布における航空機事故に関して地元住民との対話を重ねて政策を形作った経験や、法案の立案に携わっていった過程を語られた場面では、政策という抽象的な枠組みの裏にある「人との関わり」や「葛藤」が垣間見え、行政の現場におけるリアルが深く伝わってきた。今回は参加学生からの骨太な質問が相次ぎ、それら一つ一つに対して松本様はご自身の経験や現場での実践を踏まえながら丁寧に応じてくださった。

私自身としても、行政による都市の未来像の描き方と、それを実現に向けてどのように現場で調整し、合意形成を図っていったかというプロセスに対して、多くの示唆を得ることができた時間となった。特に、数十年先の都市像を描くにあたり、単に技術を導入するのではなく「人と人とのつながり」や「文化的継承」といったソフト面を重視する姿勢には大きな学びがあった。

上智大学総合グローバル学部2年 下藪 洸太郎

## 東海原発訪問

**開催日** 2025年7月29日

**開催場所** 東海原発

**分科会** 環境イノベーションと事業創造

### <参加者感想>

1日目は日本原子力研究開発機構 JAEA の大洗研究所にて次世代炉である高速実験炉「常陽」と高温ガス炉 HTTR の見学、量子科学技術開発機構 QST の那珂フュージョン科学技術研究所にて核融合発電実験炉 JT-60SA の見学をさせていただきました。2日目は日本原子力発電株式会社（原電）にて再稼働準備中である東海発電所の見学をさせていただきました。

JAEA の見学では高度な日本の原子力技術に感銘を受けました。最近では日本国内でも原子力発電に対する考えが前向きになりつつあるので、経済的な課題はありつつもよりエネルギー効率や安全性に優れた次世代炉の開発は是非とも推し進めていただきたいと思います。また、本来であれば立ち入ることが難しい施設の見学までさせていただきましたと貴重な経験となりました。

QST の見学では圧倒的な発電量や原子力発電よりも高い安全性を持つ核融合発電の現状や展望について学びました。夢のエネルギーとも呼ばれる核融合発電は未だに技術的な問題を抱えながらも、世界各国が協力と競争を繰り返すことで実現までの道を実際に進んでいると感じました。しかしながら、日本の核融合開発における姿勢は競争よりも協力の方を重視しているという印象も受けました。少ない資源量で多くのエネルギーを生み出せる核融合が実現した場合、資源国ではなく技術国が大きな影響力を持つこととなります。協力の重要性は変わりませんが、厳しい国際環境を生き残っていくためにも日本にはもっと核融合技術で他国よりも優位になるようとする強い意志も必要だと感じました。

最後に、原子力発電株式会社の見学では現在は稼働していないものの、再稼働に向けて防潮堤の建設等、安全基準を満たすために何をしているのかを学びました。JAEA が行っている次世代炉の開発は重要ですが、原子力発電所の建設には非常に長い時間がかかるため、既存の原子力発電所を最大限活用することも極めて重要です。度重なる災害の経験を生かして安全性の確保に取り組む原電の再稼働準備には一国民として期待したいと思います。ひとつ原電の見学中に印象深かったことがあります。我々の見学中にちょうどオホーツク海を震源とする非常に大きな地震が起こり、津波警報がスマホで鳴り響きました。慌てる我々をよそに従業員の方々は全く動揺するそぶりも見せず冷静に事態に対処していました。そのような原電の皆様はととても心強かったです。

東京科学大学物質理工学院材料系4年 長嶺 泰己



## 第五章 本会議

### 第1サイト：関西（京都・大阪）

日程 2025年7月31日～8月7日

滞在場所 宇多野ユースホステル

行程 計7日間

- 8月1日：開会式 @京都市国際交流会館  
スモールトリップ @京都市内
- 8月2日：国際漫画ミュージアム（戦争と漫画）  
カルチャープレナーシップ・ワークショップ
- 8月3日：フリーデイ
- 8月4日：RTFT  
大阪大学コラボ SDGs プログラム @大阪大学中之島センター
- 8月5日：大阪万博  
→アメリカパビリオンアンバサダー交流会 & ツアー  
→自由散策
- 8月6日：裏千家茶道体験  
金剛能楽堂能講座
- 8月7日：大阪府 出発

#### 1日目（8月1日）開会式（京都市国際交流会館）、京都市内視察

開会式は第77回日米学生会議本会議の幕開けを宣言する重要なマイルストーンである。京都市長や米国総領事など、日米関係に寄与していらっしゃる先人方から祝辞を賜るとともに、常日頃日米学生会議をご支援くださる皆様方より激励と本団体の歩みをご教授いただいた。

閉会後は各分科会ごとに京都市内を散策し、日本の伝統を垣間見るとともに、本格的な分科会議論前の最終調整を行った。



## 第 77 回日米学生会議 本会議開会式 式次第

1	開式の辞 第 77 回日米学生会議 日本側実行委員長 北原真悠
2	前内閣総理大臣 石破茂衆議院議員 ご祝辞（ビデオ）
3	京都市長 松尾孝治様 ご祝辞
4	日本側主催者挨拶 国際教育振興会代表理事 金野洋様
5	米国側主催者挨拶 International Student Conferences, Inc. Executive Director Bahia Simons-Lane 様
6	日米学生会議同窓会会長 富川秀二様 ご祝辞
7	在大阪・神戸米国 前総領事 Jason R. Cubas 様 ご講演
8	KDDI/au 創業者 京都大学卓越教授 千本倅生様 基調講演
9	デリ代表挨拶 日本側代表 久保木 廉 (PIP)、米国側代表 Zoe Hoksbergen (PIP)
10	閉会の辞 第 77 回日米学生会議 米国側実行委員長 Sam Helman

## &lt;参加者感想&gt;

第77回日米学生会議。その開会式の壇上に、日本代表として立つ栄誉を得たことは、私にとってただの光栄ではなく、信念の奥底に刻まれるべき深い責任であった。

私がこの日、問いかけたのは一つ。分断と混迷の只中にあるこの世界において、いかなる「徳」が人と人との間に求められるのか。その問いに対する応答として、私は防衛大学校での鍛錬の日々を、ドイツ空軍における異文化との交差を、そして幾度もの国際会議で胸に去来した思索の断片を紡ぎ出した。

私は語った。信念とは、異なる声に耳を澄ませる対話の只中でこそ、真に育まれるものなのだ。そして、JASC という場はまさに、その信念と敬意とが共鳴し合う、対話の聖域であると確信を持って述べた。

現在のように国と国とが力を以て己を主張し、法が軽んじられるような世界においてこそ、我々が意見を超えて現実を共有し、それぞれの前提を見つめ直すこの営みが、どれほど尊く、そして不可欠なものであるか。その意義は、会議が幕を開けた今、この胸にますます深く刻まれている。

アメリカ側代表のことばに私は深く心を打たれた。そこには、異なる経験を持つ若者たちが一つの未来に向けて手を取り合おうとする、静かなる情熱が宿っていた。

私は願う。JASC が、過去の栄光の反響にとどまらず、未来への新たな序章となることを。そしてそのために、私は誠実に、一言一言を重ねてゆくつもりだ。

防衛大学校国際関係学科 4年 久保木 廉



## 2日目（8月2日）京都国際漫画ミュージアム、カルチャープレナーシップWS

午前中は、京都国際マンガミュージアムにて「マンガと戦争」というテーマのもと、講義を受けた。その後、参加者は日米と混ざり合い親睦を深めながら館内の展示を観覧した。午後は、京都経済センターにて「京都カルチャー&イノベーションフォーラム」を実施した。

### <参加者感想>京都国際漫画ミュージアム

京都国際マンガミュージアムでは、講義形式で日本のマンガにおける戦争の描かれ方の変化について教えていただきました。戦争は良くないという側面を伝えるものがある一方で、戦争に使われた戦闘機に憧れを持つ日本人の側面も同時に存在していたことが分かりました。私は「はだしのゲン」を小学生の時に読んでいて、戦争は悲しく、二度と起こしてはならないものと強く思っていました。しかしながら、私の曾祖父は昔、戦闘機の設計士として関わっていた事実があり、自分自身も戦争に対する感情をうまく言語化できていない部分がありました。この講義を通じて、戦争に関する様々な視点や感情が複雑に存在していた歴史を学ぶことができ、少し自分の気持ちを整理することができたと感じています。ただ、整理されただけでなくアメリカや中国にルーツを持つ学生からの意見にも触れることができ、より一層戦争という問題の複雑性を知ることになり、また改めて向き合い方を考え直す良いきっかけになりました。

立教大学観光学部4年 大谷 葉月



### <参加者感想>京都カルチャー&イノベーションフォーラム

午後には、京都経済センターにて「京都カルチャー&イノベーションフォーラム」を行った。本プログラムでは、「伝統」と「革新」がいかに融合し、新たな価値を生み出していくかについて、京都知恵産業創造の森の金山様と POJ Studio の小山様よりご講演をいただいた。

「スタートアップの中心地=東京」というイメージが根強い中で、革新の新たな拠点としての京都の姿は非常に新鮮であり、これまでの「伝統を守る京都」とは異なる一面を垣間見る機会となった。また、ライフサイエンス分野ではアメリカ、ディープテック分野では東南アジアとの多国間協力が進められているとのお話を伺い、かつてから日本と海外をつなぐ役割を担ってきた京都の特性が、革新分野においても生かされていることを実感した。

講演後には、参加者がグループに分かれてディスカッションを行った。「企業と社会はどのように職人の労働環境を向上させることができるか」というテーマにおいて、私たちのグループでは、「リスペクト」というキーワードが特に重要であるとの結論に至った。伝統を重んじる姿勢は、時として時代遅れと見なされることもあるが、守り続けてきた価値を引き継ぐことは大きな価値をもつ。新たな創造を未来へとつなぐ都市として、リスペクトが根付いた京都の姿を思い描いた。

早稲田大学法学部3年 小野 萌絵佳



### 3日目（8月3日）フリーデー

京都を中心とする関西圏において自由時間を提供し、参加学生間のさらなる相互理解を促進した。

あるグループは USJ において日本におけるアメコミやハリウッド映画を基軸とするアメリカ文化の受容を体感し、またあるグループは由緒ある仏閣において瞑想を経て、全身で日本文化を体験したという。翌日から行われるさらなるプログラム参加への一助となった。

#### 〈参加者感想〉

8月3日は各サイトにて一日ずつあるフリーデーに充てられた。フリーデーについては、行動メンバーも行き先も完全に自由となっているため、参加者は各自行きたい場所を考え企画をする。フリーデーを通じて、会議の公式プログラムでは回ることでできない場所を訪れることや、参加者同士の親睦を深めることが期待された。

私は分科会のアメリカ側参加者と嵐山散策をした。フリーデーを通じて最も印象的だったのは、どこに行ったかではなく、移動中にした雑談や、猛暑の中歩き続けて疲れた時にお互いを励ましたことだ。私は日米学生会議への参加を通じ、アメリカの学生たちの考え方を深く理解したいと思っていた。この目標の達成は、分科会の議論を通じてできると考えていたが、フリーデーでは議論の場では知ることのできないアメリカ側参加者の考え方について学べたと思う。それはお互いの高校時代の思い出話や地元の話などで、アカデミックな枠を超えた話が多かった。同じ学年で同じ専攻をしていますが、入試や学生生活のスタイルが大きく異なることはとても印象的であった。この経験から、本日のフリーデーは私の目標に一步近づくととても有意義な一日であったと考える。また、フリーデーで仲が深まったことで、これからの分科会議論ではさらに本心をさらけ出し、より深い議論ができるようになることを期待する。

慶應義塾大学法学部政治学科2年 伊達 早和花



## 4日目（8月4日）RT フィールドトリップ、大阪大学コラボ SDGs プログラム

午前は分科会別フィールドトリップを実施した。各分科会テーマに基づく内容で、企業や行政の方にご講義をいただいた。

午後は大阪大学にお力添えいただき、有識者の方々よりポスト SDGs をテーマとすることをご講義を賜ったのち、大学が有する最新技術を活用した設備、空間でさらに発展的かつインタラクティブな分科会議論を行った。

### 【分科会フィールドトリップ】

#### 戦略の時代の経営・経済（訪問先：大阪産業経済リサーチセンター）

大阪府のシンクタンクである大阪産業経済リサーチセンター（以下「RC」）において、RCの総括研究員である町田様から「Impact of Trump tariffs on Osaka economy（トランプ関税が大阪経済に与える影響）」というテーマで講演をしていただいた。大阪府の産業や経済の特徴を踏まえ、多方面に影響を与えるトランプ米大統領の関税政策が、特に大阪府に対してどのような影響をもたらすのかについてお話を伺った。その中でも、米国側の参加学生が資料中のデータについて、その調査方法や米国側との認識の違いについて質問した場面が印象的であった。特にコメの輸出入についての話題では、減反政策といった日本特有の政策が現在のコメ価格に関係していることもあり、日本側参加者が一般的な情報を補足して説明する場面があった。このような経験を通して、異なる視点から関税政策を考察することや、各産業について、それぞれの国で自分たちが認識できていないような特殊な前提があるのではないかと疑うことの大切さを感じた。そうした意味で、地域の情報に精通している県庁や市役所などの各地方自治体が、RCのようなシンクタンクを設置することには大きな意義があると考えた。

防衛大学校人文社会科学群公共政策学科 4年 滝沢 丈

#### コミュニケーションのあり方（訪問先：リーガロイヤルホテル）

リーガロイヤルホテルは、大阪を代表する老舗高級ホテルであり、G20 など国際会議の会場としても利用される高いホスピタリティを誇る施設である。今回は、そのリーガロイヤルホテルが誇る「接遇」に関して実際に体験しながら、見えないものに心を置くコミュニケーションについて学ぶことができた。特に印象に残った点として、「間」や「残心」といった、日本独自の非言語的コミュニケーションである。これらは、相手の状況や立場、感情、文化など目で見ることのできない相手の全てをできるだけ汲み取り、自分の振る舞いを微細に調整する高度な対人コミュニケーションだ。私たちの分科会では、テクノロジーとコミュニケーションについての議論が行われていたが、「間」や「残心」はコミュニケーション全体の文脈を深く理解する必要があることや、その場の雰囲気や空間をも共有する必要があり、その共有・共感性が人の特別なコミュニケーションであると考えられる。リーガロイヤルホテルの掲げる「世界全体を温かく包み込む」という理念は、単なるサービスを超えて、人と人が心を通わせる原点であり、改めて人間としてのコミュニケーションの価値を考えることが出来た。

早稲田大学大学院 田中 大輔

#### 環境イノベーションと事業創造（訪問先：近畿大学 石川雅啓准教授）

JETRO にご勤務された経験があり、現在は近畿大学で関税の研究をされている石川雅啓准教授にトランプ関税についての講演をしていただきました。

トランプ関税に関する報道では政治をテーマにした議論が多い印象でしたが、鈴木准教授の講演は貿易や関税の仕組みに特化したものでした。今までそのような講演を聞く機会はほとんどなかったのもので、貿易に関する入門講義として非常に勉強になりました。また、アカデミックな話にとどまらず JETRO に勤務されていた経験から現場の視点も講演に組み入れてくださったので具体的な貿易のイメージが掴みやすかったです。自由貿易への障害はトランプ政権だけではありません。EU をはじめとして世界各国が保護主義的性格を強める中で、今後の世界を見通す術を身につけるためのきっかけとなるような講演でした。

東京科学大学物質理工学院材料系 4年長嶺 泰己

### インド太平洋地域における国際政治（訪問先：近畿大学 石川雅啓准教授）

近畿大学にて石川教授より、「第二次トランプ政権の米国関税措置と日本企業への影響」についてのご講義をいただきました。関税に関してFOBやCIFといった国による方式の違いや、関税措置の目的を含め、現在関税をかけている品目の狙いなどをご教授いただきました。これまでの分科会の中で、トランプ関税が国内産業を視野に入れた経済的目標の達成か、外交的な手段としての性質が強いのかを議論してきたが、その目的もより明確に国家収入を増やし、国内産業を守り、日本政府の政策への対抗を軸とした目的が主に挙げられた。粘り強い関税交渉と8回目の米国訪問を経て最終的に自動車合意形成に至ったという点に関してとも言及された。他に個人的に気になった視点としては、国内産業は売上確保のために関税措置があるとするれば、二酸化炭素排出権の売却で大きな売り上げを担保しているアメリカが高い関税を立てることがどのように関連しているのかという点だ。

慶應義塾大学法学部法律学科1年 田代 明衣

### 食と文化・社会（訪問先：カップヌードルミュージアム）

食と文化・社会分科会は、京都を出て大阪・池田にあるカップヌードルミュージアムを訪問した。今や世界中で食べられているインスタントラーメンがどのように発明され、進化してきたのかについて学ぶことができるということで以前からとても楽しみにしていた。インスタントラーメンの開発者である安藤百福氏が創業した日清食品発祥の地が、大阪・池田であることから訪れたのだが、貴重な体験をすることができた。まず開発のきっかけは、戦後の食糧難であり、お湯を注ぐだけですぐに食べることができるインスタントラーメンはまさに革命であった。また、インスタントヌードル海外進出にあたって、米国に視察に行った安藤百福は日本と米国の食文化の違いに注目し、箸を使わずフォークで食べることができるカップ麺の開発に力を入れた。これは成功の裏に、現地への食文化への理解と尊重があったことを示している。分科会のディスカッションでも、他者の食文化を理解することの重要性について何度も議論してきたが、今回、その重要性を改めて実感した。さらに体験型アクティビティとして、自分だけの「マイカップヌードル」を作った。シーズニングや具材を選んだり、包装方法などを知ることができたりと、制作過程を自分の目で観ることでカップヌードルへの理解を深めることができた。今回の企業訪問を通して得た学びや気づきを、今後の分科会活動に活かしていきたい。

早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科1年 山川 心春

### 科学技術と倫理（訪問先：Nakanoshima Cross）

私たちの分科会は午前中 Nakanoshima Cross に伺った。ヘルスケア分野において研究や開発、実践するメディカルセンターなど様々な企業がその垣根を越えて集まっていた。そこではイベントや国際会議などが開催されるほか、交流・共創・情報発信の場としてのラウンジも備えられていた。昼食の時間にはその施設で働いている人が実際に交流しており、それぞれが知見を持ち寄っているような場所が実現しているように見えた。また入居している企業の一つである、岩谷産業株式会社にも伺った。そこでは液体窒素を用いた凍結保存容器なども展示されていた。それらを実際に見ながらビジネスができるような一種の展示ルームとしての機能を持っていると述べられていたが、どれほどの頻度で実際にビジネスが行われているかは疑問が残った。今回の訪問で最も印象に残ったことは、iPS細胞が一年ほどの時間をかけて個人の細胞をもとにつくられる技術はすでに一部確立しており、実際に併設するメディカルセンターで使われていることである。そして今後数年のうちに誰に対しても拒絶反応を起こさない iPS細胞を安価に生産し、広く提供することができるようになる可能性があるということであった。実際に大阪・関西万博ではパソナグループパビリオンを見に行くことができ、サイズこそまだ小さかったが iPS細胞から作られた心臓が展示されていた。今後、再生医療などの分野において著しい影響力をもたらすであろう iPS細胞の最前線を垣間見ることができた。

早稲田大学政治経済学部3年 宇賀 智徳

## デザインとメディアにおける美学（訪問先：絹谷幸二天空美術館 特別展示）

絹谷幸二天空美術館の特別展示「絹谷幸二 平和へ」を見学し、分科会議論を深める一助とした。戦後 80 年の節目に、芸術を通じた平和の実現について考え、その存在意義を考える貴重な機会となった。

戦後 80 年という節目に、日本の芸術分野が戦争という重いテーマをどのように表現し、平和への願いを発信してきたのかを直に感じられた展示であった。絹谷氏の鮮やかな色彩や力強い構図は、単なる戦争の記録を超え、人類共通の願いである平和の実現を呼びかけていた。昨今、世界各地で紛争が絶えず、平和の実現が遠のいている現状を踏まえると、芸術という国や言語を超える普遍的な手段が果たし得る役割は大きいと改めて感じた。戦争を単なる国家間の問題ではなく、人類全体の課題として捉えることは、日米学生会議という国境を超えた対話を重ねる私たちにとって、極めて意義深い体験である。本展示は、過去を記憶し未来に希望を託すための芸術の力を強く実感させ、平和に向けた行動の必要性を再認識させるものであった。

東京外国語大学国際社会学部 3年 今田 真子



## 【SDGs プログラム】

大阪大学中之島キャンパスにて、二つの示唆に富む講演を拝聴する機会を得た。一つは大阪大学総長補佐・堂目卓生教授による「相互サポート社会にむけて」、もう一つは JICA 職員の方による「JICA における SDGs の達成と人間の安全保障」である。

堂目教授が提示された、共感を基盤とする経済圏、すなわち「共感経済」が、企業・政府・NPO といった多様なセクターの成長を促し、ひいては共助社会における人間の生命の尊厳を支えるという視座は、特に深い感銘を与えるものであった。これは、社会課題に対して単なる傍観者として事態を分析するのではなく、何を為し、何を為さないかという選択と実践を伴う「当事者」としての主体的な関与が不可欠であることを示唆している。この点は、深刻化する日米関係の傍観者たることを拒み、対話という行動を自ら起こした日米学生会議の創設の精神とも深く共鳴する。私もその原点に立ち返り、対話の深化を通じて共助社会の実現に貢献したいとの思いを新たにした。

一方、JICA の講演は、「人間の安全保障」という概念を通じて、支援の本質を再定義する契機となった。安全保障を国家というマクロな主語で捉えるのではなく、一人ひとりの個人が恐怖や欠乏から免れ、尊厳を持って生きる権利、すなわちミクロな視点へと転換させるこの考え方は、国際協力のあり方を根本から問い直す。支援とは、支援側の自己満足に陥りがちな一方

向的な介入ではない。被支援者が主体的に自らの未来を構築できるよう、その自律性（エンパワーメント）を促し、脅威を乗り越えるプロセスに伴走することこそ、真の支援の本質であると確信した。

両講演に共通して流れるのは、傍観者から当事者へ、そして一方的な介入から共感的な伴走へという、社会との関わり方の質的転換の重要性であり、今後の自身の活動の指針としたい。

大阪大学基礎工学部化学応用科学科3年 杉本 幹太



## 5日目（8月5日）大阪万博

大阪万博において全体でアメリカパビリオンを体験し、かつ貴重なアンバサダー達との交流、議論を行った。午後は各分科会ごとに自由散策の機会を提供した。

自らの分科会トピックに関連するパビリオンを訪問するものや、大阪万博全体の配置やアーキテクチャに注力するものなど、十人十色に大阪万博を経験した。



＜参加者感想＞

午前はアメリカパビリオンを見学し、午後はRT ごとにパビリオンを回った。

アメリカパビリオンは、宇宙開発に特化した展示が特徴的であった。特に、スペースシャトルを模した没入型展示エリアやジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡の模型に関心を寄せるデリが多いように感じられた。

一方で、展示の多くが映像中心であったことに違和感を覚えた。これはアメリカパビリオンに限らず、全体的に「映像頼み」のパビリオンが多い印象を受けた。もちろん、プロジェクションマッピングや大画面映像には迫力があり、魅力的な演出ではある。しかし私が万博に対して抱いていたイメージは、人間洗濯機やリニアモーターカーのように、その国自慢の技術や製品を「見て」「触れる」ことができる場であった。その意味で、今回の万博は従来のイメージとはややかけ離れたものであった。

アメリカパビリオンの見学後は、別館 2 階のレセプションルームにて、万博ユースアンバサダーとして参加しているアメリカ人学生らと議論を行った。彼らが母国で何を学び、どのような思いを持って大阪万博に参加しているのかを知ることができ、とても有意義な時間となった。

RT では、Earth Mart パビリオンを訪問した。「食と命」をテーマとするこのパビリオンでは、肉や魚が世界でどれほど消費されているか、また各国の食料事情などが数字を用いて分かりやすく展示されていた。「食と文化・社会」分科会に所属する筆者たちにとって刺激的な内容であった。

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程 1 年 手塚 颯一郎

**6日目（8月6日）裏千家茶道体験 / 金剛能楽堂能講座**

裏千家において茶道、金剛能楽堂において能を学んだ。座学だけでなく、実演とフィードバックを経て日本文化を多面的に経験した。

過密したスケジュールの中で緊張の糸が切れてしまう学生も存在したが、サイト全体の振り返りを実施するとともに反省を行い、熊本サイトでのさらなるブラッシュアップへモチベーションの一新を図った。



＜参加者感想＞

8月6日のこの日は、大阪に移ったものの再度京都に移動した。今日の目的は、茶道を体験することと能を鑑賞すること。建物の階段を上がると、目の前には畳が広がっていた。日本人学生はもちろんのこと、アメリカの学生もまた畳の上では正座をしていて緊張した空間がそこにはあった。簡単に説明を受けてから、実際に茶会のデモンストレーションを目の前で行っていただいた。目の前では細かい所作までこだわられたものを見ることができ、細部にまで美しさを感じることができ、それが茶会のすべての雰囲気構成していたと思う。

裏千家における茶道の体験を通して、意外にも平和の大切さを学ぶことができた。私たちが互いに抹茶をたてあっているとき、自然とお互いに様々な会話が交わされていた。それが平和につながる行為であること、そしてそれが茶道を日本だけではなく世界中に広める理由であることを教えてもらい、言葉からだけではない実体験からくる実感を身に染みて感じる事ができた。裏千家 15 代家元は元々特攻隊に所属していたということで、そこから茶道が伝えたい平和へのメッセージを意外なところから感じた。

東京外国語大学国際社会学部 3 年 江副 睦直

### <参加者感想>金剛能楽堂

我々は日米学生会議の参加者であり、それに伴う活動を行う、という前にそれらを支えてくださる方がいらっしゃる、あくまで我々は訪問者であるということ認識せねばならないと痛感した体験であった。

金剛能楽堂に足を踏み入れた際、鏡板に描かれる温かみのある松の木、禁裏専門の能楽師としての金剛流を思わせる橋掛の壁紙など、過去に訪れた能楽堂とは一線を画す、個性的な能楽堂に圧倒された。

荘厳だが親しみやすさを感じる能舞台に突如として現れたのは金剛龍謹氏であった。能楽師の謡を感じさせる重厚な声にて能楽の基本情報をご教示下さった。特に印象的であったのは能面の解説で、河内家重作の数々の傑作の面をはじめ、金剛流が所持している能面たちをその役割とともにとうとうと解説された。

僕は龍謹氏の著書を事前に拝読していたが、そこには掲載されていない密な情報を教えてくださり、現地に訪問して当事者との対話による体験の重要性について再確認をした。仕舞の実演も素晴らしく、かつての恋人を偲ぶ女の艶やかな姿、木造の舞台に響く厳かな謡など、今までレクチャーで案内されていた木彫りの面に加えて、「直面」という能楽師の持つ表情を一種の面と捉えて表現されており、全体を通して面という一つの大きな流れに沿って能楽について学ぶことができた。また、質問にも真摯に答えてくださり、古典化された芸能であるとはいえ、その中でそれぞれの能楽師がどのようにオリジナリティを作ろうとしているか、という点が非常に興味深かった。

しかし、日米学生会議側の姿勢はどうであっただろうか。伝統芸能に対する敬意に欠けた態度が一部で見受けられた。それはまさに「日米学生会議」という名のもとに、「虎の威を借る狐」となっていたのではないかと。日本を代表して参加する以上、日本の誇りである伝統芸能と真摯に向き合う義務が生じるはずだ。日本側のデリがアメリカ側の言動に疑問を持ったのであればそれを「ここではこうした方がいい」と教えることも一つの文化交流なのではないか。能楽堂内のルールがあるのであれば、事前に確認してデリゲイトに周知すべきではないか。伝統や確信などの云々を議論する前に、芸を鑑賞するものとしての礼節というものがあるのではないだろうか。この反省を第78回会議以降も忘れず、どう改善していくことができるか向き合ってもらいたい。

早稲田大学文化構想学部国際日本文化論2年 毛利 園子



## 関西サイトを振り返って

### <参加者感想>

The Kansai region is very unique, as Kyoto is a well-known site for traditional culture while Osaka serves as a hub of innovation, entertainment, and business. The program commenced in Kyoto, where we received inspiring remarks from many JASC supporters, including the Prime Minister, Ishiba, who heightened our sense of responsibility. By reflecting on the program's history, I learned how strongly students ninety years ago dedicated themselves, in their capacity as students, to serving as a bridge between the two nations, and I once again felt the weight of the responsibility to carry on their legacy. At the Kyoto site, we engaged in many experiences that allowed us to feel the richness of traditional culture. One particularly memorable moment was the lecture by Ms. Koyama, the founder and CEO of PIECES OF JAPAN Co. She recognised the potential for passing down the culture of traditional crafts to audiences abroad and has been promoting beautiful Japanese traditions, such as kintsugi, which emphasise cherishing and continuing to use objects, by offering programs for foreigners. When I asked her about the significance of continuing to create high-end items like traditional crafts by hand, she explained that while she plans to mechanise part of the process by establishing facilities capable of handling the entire production process, it is interesting that, as people grow older, they tend to find more value in expensive items that convey a sense of human warmth rather than in inexpensive goods. This resonated with me deeply, and I came to understand its meaning a little more through my experiences with the tea ceremony and Noh theatre. For example, although the tea ceremony has many set manners, I realised that in fact, its techniques have been refined over hundreds of years by our predecessors and handed down to the present day, serving as a source of comfort, nostalgia, and new conversation for many people. This made it very appealing to me. As I belong to the "Technology, Ethics, and Happiness" round table, and during our field trip, we visited Nakanoshima Cross, Osaka's industrial hub for advanced medical care. There, we learned in particular about industry-academia collaboration and science communication in medical research and product development, including areas such as iPS cells. I believe that Japan's strength lies in its earnest approach to knowledge creation. Still, its weaknesses include insufficient collaboration between research institutions and companies, as well as limited economic resources to bring innovations to market quickly. Therefore, I felt that Japan should more actively incorporate the American style of development by having people who have acquired biodesign expertise from Silicon Valley take the lead. In this way, combining the strengths of both Japan and the US through exchanges between the two countries can be extremely meaningful for future progress. In my round table, I have been deepening my understanding of science communication. At Expo 2025 in Osaka, I was deeply moved by the scale of current global technological capabilities, such as the American space development and the cardiac muscle sheets made from iPS cells already in use for human patients. However, I also felt that some of the information seemed outdated, perhaps because the exhibition had been planned many years in advance. Although it is not ideal to display the latest ongoing research throughout the six-month Expo continuously, I believe that each exhibitor has a responsibility to provide updated explanations. On the other hand, I believe it is incredibly invaluable to provide opportunities for people to access new information and view science and technology as an integral part of entertainment. Despite the severe summer heat, I believe it is a place that everyone should visit.

Trinity College Dublin 教養課程コース1年 大橋 莉央

### ＜関西サイト総括・実行委員感想＞

関西サイトでは、京都と大阪の二都市を舞台に、「移りゆく時代において、何を変え、何を守るべきか」をテーマに掲げ、敬意ある対話を重ねてきました。初めて参加者 72 名が集う第一サイトでは、日米の学生同士が心を通わせながら交流を深められるよう、「心で通じ合えるような共通体験」を軸に企画してまいりました。

まず、京都サイトの裏千家今日庵では、茶道体験を通して「おもてなし」や「侘び寂び」の精神に触れ、金剛能楽堂では、金剛龍謹様によるご講義と実演から、能に込められた思いや日本の美意識への理解を深めることができました。日本文化の见えないところにこそ美が宿るといふ感性や、相手を敬う慎ましきは、時代を超えて私たちに必要な価値であると改めて感じる時間でした。

続く、京都経済センターで開催した「Culture & Innovation Forum」や、大阪大学との共同企画「いのち会議」において、専門家の方々から貴重な講義を頂戴しました。さらに、大阪・関西万博アメリカパビリオンではユースアンバサダーとの交流会を行い、日米の若者が未来を語り合う貴重な機会となりました。これらの経験を通して、私たちは、変化を恐れず挑戦を続ける起業家や研究者の姿から、日本が持つ新たな可能性を感じるとともに、次世代を担う私どもが果たすべき社会的責任についても深く考えることができたと感じております。特に、印象に残っている学びは、「伝統を大切にすることは、過去をそのまま守ることではなく、その精神を受け継ぎながら、変化を恐れずに次の時代へとつないでいくことなのだ」ということです。関西サイトでの一週間を通して、古都の静けさと都市の躍動を併せ持つこの二都市で、日本という国が積み重ねてきた時間の重みと、その地に生きる人々の精神を肌で感じ、学び、実践することができました。

実行委員として携わらせていただいた私自身も、この一年間の経験を糧に、関西の地から続く対話の灯を絶やすことなく、今後も日米学生会議に関わり続けていく所存です。そして、歴史と革新が息づく京都と大阪の魅力を、第 79 回以降の日本開催の会議を担う次の世代の皆さんが、新たな形で伝え、未来へと受け継いでいくことを心から楽しみにしています。

最後に、本年は、長年受け継がれてきた京都サイトに加え、初の試みである大阪サイトを開催するにあたり、大阪日米協会様、大阪大学様にも多大なるご支援を賜りました。京都・大阪サイトの皆様、そして事務局及び同窓会の皆様の温かいご助言・ご協力に、心より感謝申し上げます。皆様のおかげで、私どもは、歴史と革新が共存する二都市を行き来しながら、形を変えながらも脈々と受け継がれてきた「変わらぬ心」を学ぶことができました。参加者一同、歴史を継承する次世代としての自覚を胸に、今後の実践に繋げてまいります。

関西サイトに関わってくださった全ての方々、そして共に悩み、喜び、最後まで走り抜けた仲間みんな、本当にありがとうございました。

上智大学総合人間科学部社会福祉学科 2 年 野添 葉音





## 第2サイト：熊本

**日程** 2025年8月7日～8月14日

**滞在場所** HOTEL THE GATE KUMAMOTO  
天草ホームステイ

**行程** 計8日間

- 8月7日：熊本県 到着、九州電力黒川水力発電所視察（希望者のみ）  
熊本地震震災ミュージアム KIOKU 訪問  
白川水源視察（草千里視察は悪天候のため中止）
- 8月8日：分科会別フィールドトリップ  
熊本青年会議所とのコラボ事業  
熊本市内→天草地域に移動  
天草ホームステイ Day1 ～開会式～ @天草市複合施設ここらす
- 8月9日：天草ホームステイ Day2 ～フリーデー～
- 8月10日：天草ホームステイ Day3 ～文化交流・解散式～ @ここらす  
天草地域→熊本市内に移動
- 8月11日：平和学習 @熊本大学工学部百周年記念館  
（悪天候のため対面・オンラインのハイブリット開催）  
（必由館高校和太鼓部のパフォーマンスと熊本城・熊本博物館視察は悪天候のため中止）
- 8月12日：菊陽町視察  
くまもと半導体シンポジウム @くまもとSDGsミライパーク  
熊本城視察（希望者のみ）
- 8月13日：学生×地域住民ディスカッション @くまもと森都心プラザホール  
熊本サイトフォーラム @肥後銀行本店ホール
- 8月14日：熊本県 出発

### 7日目（8月7日）熊本県到着、熊本地震震災学習、白川水源視察

大阪サイトから熊本サイトに飛行機で移動し、バスで熊本地震震災ミュージアム KIOKU を訪問した。ミュージアムでは、地元ガイドの方に展示内容をご説明いただいた。その後、白川水源を視察し、参加者は熊本が誇る豊かな地下水と雄大な自然を体感した。バス車内では、熊本サイト企画委員の学生がガイドを務めた。なお、予定していた草千里の視察は、悪天候のため中止となった。



### <参加者感想>

熊本サイト初日、私たち JASC は熊本地震の被害と復興を伝えるミュージアム KIOKU および阿蘇地域を視察し、災害の記録・教訓と地域資源の価値を学んだ。熊本地震は前例のない規模で連続的に発生し、その被害の甚大さは KIOKU の展示や遺構から強く伝わってきた。崩壊した建物や損壊したインフラの映像・資料は、災害の恐怖と同時に、地域社会への影響の深刻さを可視化していた。特に印象的であったのは、復興に際して単に被害前の状態に戻すのではなく、将来の安全性や地域発展を見据えた再構築を進めている点である。この姿勢は「復旧」と「復興」の概念的な差異を理解させ、真の意味での地域再生のあり方を考えさせられた。阿蘇地域の視察では、雄大な地形や豊かな自然資源が観光資源としての価値を有すると同時に、火山活動や地形的条件に起因する災害リスクを抱えている現実を実感した。地域はその魅力とリスクが表裏一体であり、災害との共生を前提とした持続可能な地域づくりが不可欠であることを学んだ。今回の視察は、災害の記録を未来に継承し、地域の価値を再構築する重要性を認識させる契機となった。

国際教養大学国際教養学部3年 美坂 茉柚

### 九州電力黒川水力発電所視察（一部の日本側参加者対象）

2025年8月7日、私たちは九州電力黒川水力発電所を訪れた。2016年熊本地震で被災した同所は、2020年に復旧計画、21年に工事開始、27年夏の完了を目標に進捗65%。断層用鋼管や NATM 工法による堅牢化といったハード面による対策に加え、監視カメラ・通信設備、地域との連絡体制といったソフト面を重ね、「災害と共存する設計思想」を具体化している。電力インフラは国家機能の神経網であり（訪問時に安全保障の議論は直接行っていないが）国際情勢の教訓上も意義は大きい。

技術面で特筆すべきは運用の最適化である。最大使用水量は  $20.3 \rightarrow 15.0 \text{m}^3/\text{秒}$ 、最大出力は  $42,200 \rightarrow 29,900 \text{kW}$  へ低下した一方、年発電電力量は  $206 \rightarrow 200 \text{GWh}$  にとどまる。この背後には新型発電機のパワーカーブ特性と長時間稼働があるという。数値で見れば、容量係数は、 $55.7\% \rightarrow 76.3\%$ へと約20ポイント上昇し、出力29%減少でも、年発電量2.9%のみの減少に抑えたことになる。黒川は耐震復旧の成功例に留まらず、再エネ変動を時間で吸収する水力の系統調整機能の実例である。

この視点は、TSMC 進出で電力需要が増す九州の課題に直結する。再エネ出力抑制が生じる系統では、周波数維持や負荷追従が電力品質の競争力の土台となる。水力は、迅速なランプアップ・ダウン、ブラックスタートを提供しうるため、量ではなく質を支える戦略資産としての位置づけが妥当だ。2021年2月のテキサス寒波、2021年5月・2022年3月の台湾大規模停電が示すのは、量の確保だけでは系統は守れないという事実である。熊本の取り組みは、災害耐性、調整力、地域合意の三点で独自性を示す。

12日に行われた熊本大学の議論もこれを裏づけた。同大学は技術に通じたメカニカル人材と政策設計を担うポリシーメーカー的人材を両輪で育成し、英語・マンダリンの専門家養成学科を新設、米国政府や台湾大学連盟とも連携を進める。すなわち、インフラ、産業、人材育成を同時最適化する熊本モデルである。

今後の本会議議論や、卒業後に政策形成を担う際には、このモデルを手がかりに、電力の量と質、産業政策、人材国際化を束ねる日米協力の次段を具体化したい。

防衛大学校国際関係学科4年 久保木 廉



## 8 日目 (8月8日) 分科会別 FT、熊本青年会議所コラボ事業、天草ホームステイ～開会式～

午前中には分科会別フィールドトリップを実施した。各分科会テーマに基づく内容で、地元企業や行政の方にご講義いただいた。また、分科会別フィールドトリップと併行して熊本青年会議所とのコラボ事業も実施した。同時期に開催されていた熊本、マレーシア、台湾の中高生との交流事業とコラボし、実行委員長 2 名と熊本サイト企画委員 2 名が登壇した。午後は、熊本市内からバスで天草に移動した。天草市複合施設ここらすにて、ホストファミリーとの対面式を実施した。その後は各家庭の車でホームステイ先に向かい、家族と夕食をとったり団らんの時間を過ごしたりするなどして交流を深めた。

### 【分科会フィールドトリップ】

#### 戦略の時代の経営・経済 (訪問先: XOSS POINT・熊本県庁)

戦略の時代の経営経済分科会では、熊本県庁を訪問した。半導体産業の現状や県の取り組みを学ぶことで、地域振興と国際経済の結びつきを理解し、今後の議論に活かすことを目的とした。熊本県庁での半導体に関する講義を通じて、半導体が私たちの生活や国際経済に果たす役割の大きさを改めて実感した。特に、世界的な供給網の分断や地政学的リスクが高まる中で、熊本が日本の中核的な拠点として注目されている点は印象的だった。海外企業との連携や人材育成の取り組みを伺い、地域が持つ可能性と同時に、技術人材不足やサプライチェーンの安定化といった課題も理解することができた。さらに、県が行政として企業誘致や環境整備に積極的に関わる姿勢に、日本全体の産業政策の縮図を見たように感じた。特に熊本県は、豊富な水資源や Sony といった企業の存在等、様々な条件が重なり TSMC の誘致につながったことを実感した。今回の訪問を通して、こうした地方の動きが国際社会の大きな流れと密接につながっていることを学び、有意義な時間を過ごすことができた。

名城大学薬学部 6 年 水野 遥

#### 環境イノベーションと事業創造 (訪問先: XOSS POINT・熊本県庁)

熊本サイト FT にて EIE は BMS と共に XOSS Point と熊本県庁で講義を受けた。XOSS Point は起業家の交流の場を設けつつ海外の起業大会の派遣支援を行い、昨年からは外国人に起業ビザを交付する取り組みを行っている。日本で起業したいと思う若者が少ない現状を憂慮しつつ、並行して地方創生を図る取り組みは今後日本を支えるに違いない。また、熊本県庁では、半導体を主軸産業とした、シリコンアイランド九州という地域ブランドを戦略的に活用して、11 兆 2000 億円という具体的な経済効果目標を設定している点は、単なる企業誘致を超えた長期的な地域戦略だと感じた。半導体企業の誘致によって生じる交通渋滞という現実的な課題に対し、企業と連携して時差出勤を調整し公共交通の混乱を未然に防ぐという取り組みは、大規模な産業政策を進める際に必要な細やかな配慮と実務レベルでの調整能力を示しており、マクロな戦略とミクロな実行力を両立させた熊本県の手法は、他の自治体にとっても参考になる優れた事例だと考えた。

早稲田大学文化構想学部 2 年 木築 のぞ美

#### コミュニケーションのあり方 (訪問先: 熊本市国際交流会館)

熊本サイトでの FT では熊本市国際交流会館を訪問し、2016 年の熊本地震と外国人支援をテーマとして八木浩光さん、Andrew Mitchell さんに各々の経験を基にお話を伺った。八木さんのお話から、災害時には言語や文化の壁を越えて情報を届ける工夫が必要であると感じた。自分の常識や価値観に捉われず、相手の立場や背景を理解し、容易な言葉で伝え合うことが、真のグローバルコミュニケーションだと学んだ。Andrew さんからは、「避難」という言葉が理解できず混乱したり、外国人留学生が避難所に行くことを躊躇ったりしてした実態を伺った。今回のお話を通して、外国人に向けて防災の取組を行ったり、普段から国籍問わず地域の人と関わり、互いに認識・受容し、助け合ったりすることが大切だと学んだ。また、お話を聞く中で三陸地方の「てんでんこ」の合言葉との関わりを考えた。「てんでんこ」とは、「てんでんばらばらになって、すぐに逃げよ」を意味する防災標語である。自分の命を自分で守る自助の意

識と互いに助け合う意識の両輪があってこそ災害時の共助は機能する。共助のためには日頃のコミュニケーションが重要であると感じた。平時にお互いを理解し、信頼関係を築いておくことが、非常時に正しい情報を届け合い、行動につながる。防災は知識や物資だけでなく、心の距離を縮める日々の対話から始まるのだと思う。

広島大学教育学部4年 森 聡子

### インド太平洋地域における国際政治（訪問先：西部方面総監部）

2025年盛夏の8月8日、インド太平洋地域における国際政治分科会は、西部方面総監部の門を叩いた。そこで耳にしたのは、ただ戦略環境の分析や部隊の概要にとどまらぬ、東アジアの波濤に挑む軍事組織の息吹そのものであった。総監部の高級幕僚との対話は、国際情勢の大海を起点とし、統合作戦の理路を経て、やがて台湾有事における日米協力の機微に至るまで、戦略から戦術、作戦へと自在に流れゆく、知の奔流であった。なお、この場合はチャタムハウスルールの下に営まれたため、発言者の階級や氏名の言及は伏せるものとする。

そのひととき、我々の胸を深く抉ったのは、モザンビーク PKO の修羅場を踏んだ一人の言葉である。彼は静かに、しかし確かに告げた。

「国際の任務といえど、各国は国益を背負い、その歩みを一步も譲らぬ」と。そして、日本が描く国際秩序の理想像が、世界の現場において自然に共有されるわけではないという冷厳な事実を突きつけた。そのうえで彼は問うた。

「この生き馬の目を抜くような混迷の時代にあって、いかにして日本は己が国益を刻み込むのか」と。その問いは我ら学生の胸に、鋭い棘のごとく刺さり、議論の歩みを一段深き領域へと導いた。

討論はやがて、日本の戦後八十年の歩みに及んだ。政治も経済も防衛も、米国の庇護のもとに築かれてきた日本。しかし近年、米国がイラン空爆や関税政策に示すように、力による秩序形成へと傾く姿を前に、果たして日本は無条件にその背を追うべきなのか。この根源的な問いに、学生と総監部の幕僚は真剣に刃を交えた。その光景は、国籍や教育の差を越え、自国の安寧のみならず世界の安定を希求する者たちが辿り着いた、知の十字路であった。

議論の果てに浮かび上がった提言は三つ。第一に、国際規範を踏みにじる国家には、たとえ同盟国であれ毅然と批判すべきだという信念。第二に、同盟とパートナーシップの多様化である。米国との絆を断つのではなく、戦域ごとの要請に応じて戦略的に相手を選び取る柔軟さが求められる。第三に、核をめぐる議論の促進である。被爆八十年を迎える日本は、二度と核の惨禍に見舞われぬことはもちろん、世界のいかなる場所でも核使用を防ぐ責務を負う。そのためには、長らくタブー視されてきた核シェアリングでさえも、抑止力拡大のために、冷静に俎上に載せる覚悟が必要だ。

こうして我々は、この訪問を通じて、戦略的自立という視座の必然を深く刻み込まれた。陸上自衛隊西部方面総監部という、国際社会の戦域の中でも随一の緊張を孕む拠点で授かった一つ一つの示唆は、将来、安全保障政策に身を投じる我々が、もし行き詰まることあらば、闇を照らす灯台となろう。私はそのことを、胸の奥底より強く希求してやまない。

防衛大学校国際関係学科4年 久保木 廉

### 科学技術と倫理（講義内容：水俣病について）

私たち、科学技術と倫理の分科会では、科学技術の発展が人々の幸福に悪影響を与えた事例として、事前学習期間に水俣病についての理解を深めていた。現在は、熊本県では半導体関連の最新技術の工場が国の厳しい規制や管理の下で受け入れられている一方、県内で水俣病のように科学技術が人々の健康を損なった過去があり、その被害は今も癒えていないことをこのフィールドトリップで痛感した。私たちは熊本学園大学からテレビ電話を通して胎児性水俣病を発症した松永様とほっとハウス（胎児性水俣病支援施設）施設長の加藤様、そして翻訳家の最相様のお力添えによりこの学習機会を得た。当時は胎盤には毒が回らないと言われていて、胎児性水俣病は否定されていた。しかし、実際はメチル水銀は胎児にも影響を及ぼし、特に脳の発達に悪影響を与えたことから、被害者は運動機能や視覚障害に悩んでいる。また、工場が1950年代に体に有毒な物質を排出していることに気がついた後も汚水が排出され続けたため、

1960年代に生まれた松永様も水俣病を発症した。これらの事実から、技術の発達の人々の安泰な生活を犠牲にしてはいけないことを学び、倫理は科学技術の異常な発達の暴走を阻止するための必要なストッパーとして機能すべきであると思った。

Trinity College Dublin 教養課程コース1年 大橋 莉央

### デザインとメディアにおける美学（訪問先：くまもと工芸会館）

デザインとメディアにおける美学分科会は熊本サイト二日目の企業訪問に際し、熊本市のくまもと工芸会館を訪問し、竹工芸の実演や全国の工芸品展示、香りをテーマとした企画展を通じ、伝統美と現代感覚の融合を学んだ。本訪問では、竹工芸の熟練職人による実演を目の当たりにし、その精緻な技術と素材の生かし方に深い感銘を受けた。全国各地から集められた多様な工芸品は、それぞれの地域文化や美意識を反映しており、造形や装飾に込められた意図が明確に感じられた。特に印象的であったのは、香りに関する企画展である。ムスクや紅茶といった現代的で洗練された香りと、伝統的な香木やお香が空間内で共存し、新旧の感覚が有機的に融合していた。この構成は、私の所属分科会の観点からも示唆に富み、視覚・嗅覚という異なる感覚領域を横断的に結びつける可能性を示していた。伝統工芸は単に過去を保存する営みではなく、現代的要素を取り込みながら進化し続ける動的な文化であることを再認識した。本訪問が日米双方の学生にとって地域資源の美的価値を現代社会においてどのように再解釈し、メディア表現やデザイン実践に活用できるかを考える良い契機となった事を願う。

国際教養大学国際教養学部3年 美坂 茉柚

### 食と文化・社会（訪問先：株式会社くまもと DMC）

最高気温 29.9°C という数字のわりに太陽光線の激しさを感じる 8月8日、食と文化・社会分科会は(株)くまもと DMCを訪れた。くまもと DMCは、主に食等の地域資源を観光と結び付け、戦略的な観光地域づくりを行う企業である。「つくる」「つなぐ」「つたえる」の3要素を軸に、市場調査やデータ分析を通じた観光企画立案、製品のブランディングなどを行っている。印象に残っているのは「どのような観光企画が、顧客のリピート確率の高い魅力的なアイデアとして捉えられるのか」という質問に対するお答えだった。曰く、モノ消費からコト消費、いわゆる製品の購入を通じた効用から体験を通じた効用へのシフトが起こっているという内容はよく指摘されるが、近年はそれに加えて「フィーリング」への注目度が高まっているという。すなわち、その観光体験によって「どんなフィーリングを得られるか」を総合的にマネジメントすること（“Feeling Tourism”と呼んでいた）が肝要であるという。具体的な形態としては、旅行体験だけではなくワーケーション等も含まれる。滞在や商品の購入を通じて顧客に「どのような感情になってほしいか」を考察する視点が興味深く、今後の RT において食文化を考える上で重要な示唆に富む FT であった。

九州大学農学部生物資源環境学科4年 田中 遼弥



## 【熊本青年会議所コラボ事業】

日本 x 台湾 x マレーシアの中高生に対して、「グローバルに活躍する」ことをテーマに下記の学生が登壇した。

日本側実行委員長	北原 真悠（芸術文化観光専門職大学）
米国側実行委員長	Sam Helman（Wake Forest University）
熊本企画委員	前田 さつき（熊本県立大学）
熊本企画委員	米崎 千裕（熊本学園大学）



## 【天草ホームステイ～開会式～】



## &lt;参加者感想&gt;

On August 8th, the delegates traveled to Amakusa to begin their homestay program. Anticipation was high as the delegates and the host families entered the gymnasium inside Amakusa's local library to meet for the first time and for the homestay welcome ceremony. Many of the host families had children of younger ages, who were running around and giggling with excitement. The delegates met their host families and exchanged greetings until the ceremony began. The ceremony opened with a speech by Mayu, the Japanese chair. She expressed her gratitude to the people of Amakusa on behalf of all of the delegates, and emphasized how none of the homestay program would have been possible without their help. Next, the deputy mayor of Amakusa gave his speech on his hopes for what the Amakusa homestay program would bring to both the delegates of JASC77 and also the host families. After the executive committee of the Kumamoto site briefly introduced themselves, Mayu

took the stage to explain the "Amakusa Mission" to us. The delegates were given the task to take photos with their host families, interview locals, and reflect on their activities. Afterwards, the delegates left with their hosts to begin their homestay adventures.

早稲田大学先進理工学部 3年 岡崎 ヴィクトリア 瞳子



## 9日目（8月9日）天草ホームステイ Day2 ～フリーデー～

天草ホームステイ2日目。この日は各ホストファミリーと観光、文化体験、料理をするなど、自由に過ごした。また、午後には「天草本渡ハイヤ祭り」が開催され、多くの参加者が地域ならではの祭りを体験した。



### <参加者感想>

本会議には各サイトごとにフリーデーが設けられているが、熊本サイトでは天草ホームステイと重なって特別なものとなった。ホストファミリーの家族構成やお仕事、趣味などによって、それぞれのホームステイ先で多種多様な取り組みが見られた。一方で、天草市の各所で日米学生会議の学生と出会い、ホストファミリー同士が共通の話題で盛り上がり、多くの家庭が天草で行われた祭りに集っていたことから、地方社会の強い繋がりを感じた。さて、イルカウォッチングツアーに行った際には、90%以上の確率で出会えるというイルカは全然見当たらず、さらには高い波で船酔いをした。気分が悪く目を細めていると、すべての波がイルカに見えた。もうそれでいいかなと妥協をしているところ、帰港間際に本物のイルカが現れた。全然違った。別物だった。妥協なんかするものじゃないと思った。RT ディスカッションでは英語不足を強く感じるが、準備などで自分にできる事は全部やるべきだと感じた。本会議の最後に本物のイルカがいるように。

京都大学工学部理工化学科 3年 伏谷 飛鳥

### <参加者感想>

ホームステイでは、米国側の学生だけでなく、日本側の学生にとっても、初めて訪れる土地で一つの家族と共に過ごす「異文化体験」を味わうことができた。言語や背景の異なる学生同士、さらに地元住民と共同生活をする時間は、すべてが新鮮で刺激的だった。日常の何気ない会話や食事、家事の分担までもが学びの機会となり、互いの文化を肌で感じられた。また、夜に参加したハイヤ祭りでは、地元住民の強い結びつきが印象的だった。企業や学校ごとにチームを組み、華やかな衣装で息の合った踊りを披露する姿からは、天草への誇りと愛着、そして地域を盛り上げようとする前向きなエネルギーが溢れていた。異文化との交流と地域文化の魅力を同時に体験できたことは、この滞在の大きな収穫となった。

東京外国語大学国際社会学部 3年 今田 真子

### <参加者感想>

初めて顔を合わせてから一夜が明け、どこかまだ遠慮が残る中ホストファミリーと朝食を囲んだ。子供たちもどこか緊張している様子だったが、会話を続ける中で段々と口数も増えていった。滞在 2 日目の今日はあいにくの雨ではあったが、ホストファミリーの方々と一緒に天草の魅力がたっぷり詰まった場所を周った。最初に向かったのは崎津集落である。まずミュージアムで説明を聞いた後、崎津教会の中に入った。教会の床は珍しく畳張りになっていて、またカラフルなステンドグラスがとても綺麗だった。この集落が禁教期の中どのようにキリスト教信仰を実施してきたかの歴史はとても興味深かった。特にアワビ貝の内側の模様をマリア像に見立てたり、柱の中にキリスト像を隠したりなど、発見されたら命に関わる中で必死に信仰を守る人々の姿がとても印象的だった。続いてドルフィンウォッチングへ向かった。天候が悪かったこともあり、イルカを観ることができるか心配していたが、赤ちゃんを含めたイルカの群れを観ることができてとても満足した 1 時間であった。最後に訪れたのは天草本渡ハイヤ祭りである。小さい子からお年寄りまで様々な年齢の人が、町を踊りながら練り歩く姿はとても活気に溢れていた。天草は豊かな自然と歴史を持つ場所であり、今日はその魅力を存分に堪能することができた。今回のホームステイにあたり、改めて受け入れてくださったホストファミリーの方にお礼を言いたい。

早稲田大学政治経済学部 1年 山川 心春

## 10日目（8月10日）天草ホームステイ Day3 ～文化交流・解散式～

天草ホームステイ最終日は、天草市複合施設ここらすにて、文化交流を行った。また、解散式では天草市の馬場市長にご挨拶いただいた。別れ際、ホストファミリーと参加者はバスが角を曲がり見えなくなるまで手を振り、互いに別れを惜しんだ。

### 【交流会内容】

文化交流：「ハイヤ踊り」演舞・レクチャー（牛深高校郷土芸能部協力）

ミニ凧づくり体験（天草文化交流館・凧の会協力）

昼食：ワールドフレンズ天草 Cross Road Cafe のお弁当ケータリング（ホストファミリーと過ごす最後の時間）

解散式：天草市長 馬場 昭治様よりご挨拶

子供達と学生の感想共有時間（リフレクション）

ホームステイ思い出ムービーの上映（作成：米崎 千裕）



## &lt;参加者感想&gt;

ホストファミリーと学生が天草市複合施設こらすに集まり、ハイヤ踊りとミニ凧作りを体験する文化交流を実施した。その後の解散式ではホームステイの感想を共有し、思い出の写真動画を視聴した。牛深高等学校郷土芸能部によるハイヤ踊りは、少人数での発表ながらも、力強い歌声や迫力ある楽器の音、躍動感に満ちた踊りが印象的であった。郷土芸能部の方々の指導を受けて実際に踊ってみると、日本側の学生だけでなく、ホストファミリーの子どもや米国側の学生も一体となって楽しむ様子が見られた。言葉や年齢の壁を越えて全員が楽しんでおり、音楽や舞踊が人々を結びつける力を再認識した。ミニ凧作りでは、天草文化交流館の「凧の会」の協力により短時間で凧を完成させることができた。昼休みには子どもたちと外で凧で遊んだ。無邪気に走り回る子どもたちの姿に心が和んだ。解散式ではホームステイの感想を多くのホストファミリーや学生が積極的に共有した。最後の動画では他グループの活動や笑顔あふれる瞬間を見ることができた。文化交流での和やかな雰囲気や感想共有の際の多くの挙手を見て、この3日間の交流がいかに実り多く、心温まるものであったかを改めて感じた。

京都大学法学部3年 中田 怜



## 11日（8月11日） 平和学習

長崎被爆者の武田頼弘様、工藤武子様、熊本被爆二世・三世の会の会長を務める青木栄様、高校生平和大使の島津陽奈さんにご登壇いただき、原爆と平和について考える平和学習を実施した。雨天により公共交通機関が運休となったため、急遽オンラインと対面のハイブリット開催となった。また、午後に予定していた必由館高校和太鼓部のパフォーマンスと熊本城・熊本博物館の見学は、豪雨による閉鎖で残念ながら中止となった。



### <参加者感想>

戦後 80 年を迎える 8 月の平和学習において、被曝体験を紙芝居や高校生平和大使、伝承者として語り継ぐ人々など様々な人の講演を聞くことができた。お話の中では、現在の被爆者平均年齢が 86.1 歳で 10 万人を初めて切ったことや、知識を持った AI が増えてきたことによりこれからの意思決定が AI に委ねられる危険性が挙げられた。また被曝体験を「語る」ことも非常に難しいことである。その要因には、心理的な状態や社会的に偏見を持たれていたことがあった。被曝を隠して結婚をしたり、話さないのではなく話せないのだという言葉が印象的であった。被曝体験を聞ける最後の世代だからこそ、この先の社会にどのように伝承していくか考えていく必要がある。体験をしたことがないことで想像がつきにくいかもしれないが、他人事ではなく自分や家族のこと、つまり現在のこととして照らし合わせるべきであるという考えに共感した。

慶應義塾大学法学部 1 年 田代 明衣

### <参加者感想>

8 月 11 日私たちは熊本城を訪問する予定だったが、記録的な大雨で叶わなかった。しかし、熊本サイト実行委員 KSC のみなさまが作ってくださった案内資料を読み込み、現地で感じたであろう重みを想像できた。茶臼山（ちゃうすやま）の台地に加藤清正が築いた城は、武者返しの石垣や 6 回折れ曲がる榊形通路など、防御の工夫が随所に見られる。周囲 5.3km、約 98 万㎡の規模を誇り、難攻不落と称されるのも頷ける。だが 2016 年の地震で最大震度 7 を観測し、石垣 50 か所崩落、13 の重要文化財が破損・倒壊、20 の復元構造物も損傷した。夜間発生のため人的被害は免れたが、天守閣からは瓦や鯨も落下した。震災後 3 年半は立ち入り不可だったが、現在は全長 350m・高さ 5～7m の特別見学通路から被災の跡と復旧の進展を同時に見られる。これは復興工事終了予定の 2052 年に撤去される仮設だ。資料からは、単なる修復にとどまらず、歴史的価値を守り未来へ継ぐ精緻な作業が行われているのだと想像できた。熊本城の姿には、熊本県民の粘り強さと誇りが重なると感じる。次こそは自分の足で石垣を見上げ、身をもって熊本城を実感したいと思う。

早稲田大学大学院スポーツ科学専攻スポーツ科学研究科修士 2 年 田中 大輔

## 12日目（8月12日） 菊陽町視察、くまもと半導体シンポジウム

半導体工場地域を有する菊陽町をバスで視察した。その後、くまもと SDGs ミライパークにて、「くまもと半導体シンポジウム」を実施した。シンポジウムには、菊陽町の吉本町長と熊本大学の小川学長にご登壇いただき、それぞれまちづくりと教育の観点から半導体産業についてご講演いただいた。



### <参加者感想>

TSMC の半導体工場が建設された熊本県菊陽町へ視察に行きました。工場誘致によって菊陽町が受けられる恩恵や、国内の半導体産業の育成、半導体人材の育成についての講演を伺いました。

半導体工場の誘致に応じて道路や駅など町が作り変えられるなかで、農業など従来の町の産業や文化を保存する取り組みについて紹介がありました。町長は積極的に政策に取り組まれているようでしたが、後になって地元地域の学生にお話を聞いたところ恩恵を受けているのは新しく町に入ってきた技術者ばかりで、既存の住民が恩恵を受けられないという現状を知りました。私は工場の誘致が国益に利するという側面からしかこの件を見ていなかったの、地域に寄り添わない産業の誘致が真の意味で地域振興に繋がるのかどうか考えさせられる良い機会となりました。地方の衰退は日本にとって死活問題であり、それは巡り巡って都市部にも悪影響を及ぼします。この社会問題について今後も考えていきたいと思えます。

東京科学大学物質理工学院材料系4年 長嶺 泰己



## 13日目（8月13日） 学生×地域住民ディスカッション、熊本サイトフォーラム

午前、くまもと森都心プラザホールにて地元学生とのディスカッションを実施した。地元高校・大学から30名ほどの学生に参加いただいた。テーマは、「災害と復興」、「地域おこし」、「半導体産業と地域振興」の3つを設定した。午後は、肥後銀行本店ホールにて「熊本サイトフォーラム」を開催した。木村敬知事によるご祝辞、蒲島郁夫前知事による基調講演から始まり、熊本サイト企画委員によるプレゼンテーション・動画上映、地元学生と日米学生会議参加者によるパネルセッションを実施、そして熊本大学大谷順副学長による講評で締めくくられた。



©2010 熊本県くまモン 2025/8/13

<参加者感想>

熊本サイトを通して学んだことのリフレクションの場として、JASCer と KSC（熊本サイト企画委員）そして地域学生とグループディスカッションを行った。「災害と復興」、「地域おこし」、「半導体」の3グループに分かれてディスカッションを行ったが、私は「災害と復興」についての意見交換をした。最初は、熊本サイト、特に KIOKU ミュージアムを通して感じたこと、そして熊本地震を含めて自身が経験した災害について感じたことを共有し、将来の災害対策について AI や政治の観点から意見交換をした。終始、高校生には少し難しい話かもしれないと思いながらのディスカッションではあったものの、幅広く議論することができ、充実した時間になったと思う。他のグループではなにを話しているのだろうと考えるのはさておき、地元の高校生に対して、なぜこのディスカッションに参加してくれているのかと質問をしたとき、日米の大学生が、近年の日本だけではなく世界の災害対策に対してどのような意見を持っているのかを知りたかったからと答えてくれた。自身の視野を広げるために私たち日米学生会議を頼ってくれたのがまずうれしかった。彼女にとっても充実した時間になっているとうれしい。

東京外国語大学国際社会学部3年 江副 聡真

<参加者感想>

熊本サイト最終日には熊本サイトフォーラムが開催された。午前中は地元学生とのディスカッションを通じて災害からの復興や半導体産業の広がりを学び、午後は学生パネルに加え、木村敬現知事や蒲島郁夫前知事の講演が行われ、全体の総まとめの機会となった。

現地の学生と半導体産業について議論する中で印象的だったのは、TSMC の進出を若者が大人とは異なる角度から捉えていたことである。行政は「産業誘致による地域活性化」や「自然との共存」といった点を強調していたが、学生たちの声はもっと身近で率直であった。「学校で JASM について学ぶ機会がなく、実情や影響を知らない」や「熊本を出たくないけれど農業には携わりたくないで、JASM での就職を目指している」という声などを聴くことができ、机上の理想とは異なる生活に根ざした視点に触れられたのは非常に興味深かった。

午後のフォーラムでは代表者によるパネルディスカッションが行われ、多様な意見から新たな視点を得ることができた。さらに最後にはくまモンがサプライズ登場し、会場でダンスを披露してくれた。熊本滞在中に何度も目にしたくまモンに会えたことは非常に嬉しく、忘れられない締めくくりとなった。

早稲田大学法学部3年 小野 萌絵佳

## 熊本サイトを振り返って

### <参加者感想>

The Kumamoto site was made possible through the tremendous efforts of local governments, companies, and community members, and it ultimately became a highly successful program. Many participants from the U.S. side described it as the most memorable period of this summer.

As soon as we arrived in Kumamoto, we were warmly welcomed by local university students. Throughout the program, we had the opportunity to participate in a wide range of learning activities, including visits to earthquake memorial sites related to the Kumamoto Earthquake, experiences in Kumamoto's rich natural environment, peace studies sessions where we learned directly from atomic bomb survivors, and a visit to Kikuyo Town to deepen our understanding of the semiconductor industry. Through these experiences, we were able to gain a deep appreciation for Kumamoto Prefecture's unique appeal, its remarkable recovery, and the ongoing efforts of its people.

The highlight of the program was undoubtedly the homestay in Amakusa City. Participating in local festivals with community members and enjoying home-cooked Japanese meals provided participants with truly unforgettable experiences. We cannot express enough gratitude to the host families who welcomed us so warmly into their homes.

At the conclusion of the program, we were seen off by Kumamon, the beloved local mascot, which left us with a lasting impression of the warmth of the people of Kumamoto and the charm of the region. We are deeply grateful for all the experiences and learning opportunities this site provided.

早稲田大学文化構想学部2年 木築 のぞ美

### <熊本サイト総括・実行委員感想>

昨年9月から準備を進めてきた熊本サイトだが、本会議の一週間は気づけば終わっていたほどあっという間だった。ここでは、これまでの実行委員の活動を振り返りたい。

プログラムについて述べる前に、まずは熊本サイトの企画・運営において特筆すべき点として挙げられる、地元学生との連携について触れたい。この度のサイト設計にあたっては、熊本大学、熊本県立大学、熊本学園大学の3大学に在籍する学生11名に「熊本サイト企画委員」として2月より企画・運営に携わっていただいた。例年、当会議は日本開催の際に「地方サイト」を訪問しており、過去の地方サイトでも地元学生との交流の機会を設けたり、企画・運営に協力いただいたりしてきた。しかしながら、過去の実行委員からは、地元学生との十分な連携の難しさについて指摘されていた。そのため、今回は地元学生との結びつきを強固なものにしたという思いがあった。この度、熊本県で地域に根ざした会議を実現できたのは、企画委員11名の尽力の賜物である。ここに全てを記載することはできないが、8月13日に実施した地元大学生・高校生とのディスカッションにおいては、企画委員の母校にも声かけをしていただいた。また、悪天候により中止となったものの、8月11日に予定していた必由館高校和太鼓部のパフォーマンスも、企画委員に調整を進めていただいた。さらに、本会議前の7月12日には、企画委員主催の「熊本サイト事前勉強会」をオンラインで実施した（「第七章 第77回からの新規企画」参照）。このように、企画委員に主体となって準備に携わっていただくことができたのは、熊本サイトの成果の一つであり、また成功の最大の要因と言っても過言ではない。

8月7日から14日の会議期間中には、熊本の自然、歴史、文化、産業について学びながら、地元学生や住民の方々と密に交流する機会を設けた。実行委員は昨年9月から7月にかけて40回以上のミーティングを行ったほか、企画委員とも何度もミーティングを行い、計画が行き詰まった際には、実行委員から企画委員に電話をして相談に乗ってもらったこともあった。私は事前準備のため熊本を4回訪問し、地元の行政、大学、企業などの皆様と面談をさせていただいたが、その度に会議の計画に対して沢山の貴重な助言をいただいた。また、現地を訪れなければ分からない熊本の魅力や地方社会が抱える課題が無数にあることを痛感した。

ここからは、一つ一つ思いを込めた本会議中のプログラムについて、日を追って記す。

【8月7日（木）】

熊本到着日の8月7日は、「熊本地震震災ミュージアム KIOKU」を見学した。ミュージアムでは、ボランティアガイドの皆様がメンバーを増員してお待ちくださっていた。ガイドの方々には展示内容についてご自身の被災経験を踏まえながら説明していただき、米国側参加者に対しては実行委員がその場で通訳を行うことで、生の声を伝えることができた。ミュージアム見学後には草千里の視察を予定していたが、雨天のため中止となり、白川水源のみ視察した。参加者は湧き水をそのまま飲むことに驚きつつ、熊本が誇る水資源の豊かさを体感した。白川水源に向かうバス車内では、企画委員により車窓から見える景色の説明がなされた。ガイドを務めた学生の中には、2016年の熊本地震の際に被災した学生もおり、特に「阿蘇大橋」については、地震により崩壊した橋と震災後に新たに建設された橋の両方を目にし、参加者は自然のもたらす恩恵と威力を目の当たりにした。

【8月8日（金）】

2日目は、午前中に熊本市内で分科会ごとに企業・行政訪問を実施した。当会議の訪問を依頼するにあたっては、日英通訳が必要である点で交渉が難航することが多かったが、訪問を受け入れてくださった皆様は、通訳・翻訳の手間を惜しまず親身になって対応してくださった。

各分科会の訪問先は、それぞれ以下の通りである。

- ・熊本市国際交流会館（コミュニケーションのあり方 RT）
- ・株式会社くまもと DMC（食と文化・社会 RT）
- ・熊本市くまもと工芸会館（デザインとメディアにおける美学 RT）
- ・XOSS POINT.（戦略の時代の経営・経済 RT、環境イノベーションと事業創造 RT）
- ・熊本県 半導体産業集積強化推進本部（同上）
- ・陸上自衛隊 西部方面隊（インド太平洋地域における国際政治 RT）
- ・最相博子様（科学技術と倫理 RT）※水俣病について

また、この日は熊本青年会議所とのコラボ事業も実施した。同時期に開催されていた熊本、台湾、マレーシアの子どもたちの交流事業と日米学生会議がコラボし、講演とワークショップを実施した。当事業には、日米の実行委員長と企画委員の前田さつきさん（熊本県立大学）、米崎千裕さん（熊本学園大学）が参加し、これまでの経験や海外の学生との交流に対する思いを語った。

【8月8日（金）～10日（日）】

8月8日から10日の3日間は、天草地域でのホームステイを実施し、34家庭のホストファミリーの皆様にご協力いただいた。ホームステイは、熊本サイトの中でも特に力を入れたプログラムの一つである。70名以上の参加者を抱える当会議にとっては、受け入れ家庭の確保が最大の難関だった。熊本県内の数多くの自治体に問い合わせたところ、天草市が受け入れに対して前向きな姿勢を示してくださった。天草市役所の方々とは、オンラインでの面談を重ね、地元の小中学校への募集や受け入れフローなどについて、長期にわたりきめ細やかに対応いただいた。

ホームステイ期間中には、「天草本渡ハイヤ祭り」が開催され、天草の伝統的な祭りにホストファミリーと一緒に参加する学生の姿が多く見られた。また、潜伏キリシタン関連の資料館への訪問、イルカウォッチングや土人形の絵付け体験、ホストファミリーのお子さんの剣道の練習への参加など、参加者は様々な貴重な経験をさせていただいた。また、8月10日に天草市複合施設こくらすにて実施したホストファミリーとの文化交流会では、天草市長馬場昭治様にご挨拶いただき、牛深高校郷土芸能部によるハイヤ踊りのレクチャーと天草文化交流館・凧の会によるミニ凧作り体験を実施した。参加学生は日本の家庭や天草の歴史、自然、食などに触れ、記憶に残るかけがえのない3日間を過ごした。

【8月11日（月・祝）】

5日目には、平和学習を実施した。戦前から日米の学生が相互に交流し、戦争中にはその交

流が途絶えた歴史を持つ当会議にとって、戦後 80 年の節目の年である 2025 年は大きな意味を持つ。また、熊本県が平和活動において次世代の育成に力を入れていることも、熊本サイトで平和学習を実施した背景の一つである。この度は、長崎被爆者である武田頼弘様と工藤武子様、熊本被爆二世・三世の会会長で被爆二世の青木栄様、そして高校生平和大使の島津陽奈さん（九州学院高等学校）に登壇いただいた。幅広い世代の方々からお話を伺うことで、参加者が被爆体験の継承について考えるきっかけになればと考えた。当日は、熊本大学工学部百周年記念館での実施を予定していたが、悪天候のため対面とオンラインのハイブリッド開催となり、参加学生はくまもと森都心プラザからライブ中継で講演を視聴する形となった。日英両言語に対応するため、武田様と島津さんには英語で講演いただいた。また、工藤様と青木様にも事前に原稿を提供いただき、実行委員が作成した英訳版をスクリーンに投影することで、米国側参加者にも時差なく講演内容が伝わるよう配慮した。さらに、工藤様には講演にあたり参加者への英文メッセージをお寄せいただき、平和学習後に参加学生に配布した。平和学習の企画にあたっては、被爆地ではない場所で開催することや、講演のみという形で実施することに対する不安もあった。しかしながら、実行委員は戦後 80 年の節目に実施される会議で、被爆者の生の声を届けることにこだわりたいと考えていた。被爆者の高齢化が進み、直接お話を伺うことが年々難しくなっている中、このような貴重な機会を設けることができたことを有り難く思う。悪天候によりハイブリッド開催とはなったが、平和学習を終えた参加者の声からは、日米双方の学生にとって実りある時間になったことが伺えた。

当日の午後は、地元学生と熊本城・熊本博物館を見学し、企画委員の学生に各グループを率いて英語でのガイドをしていただくことになっていた。しかしながら、当プログラムは豪雨により中止を余儀なくされた。参加予定だった地元高校生・大学生、そしてガイドの準備をしていた企画委員の皆さんには、是非また当会議の学生が熊本を訪れた際に、熊本城や熊本博物館を一緒に訪問し、案内していただきたい。

### 【8月12日（火）】

6 日目は、熊本ひいては日本の半導体産業の新たな中心地として注目を集める菊陽町をバスで視察した。午前中の視察においては、菊陽町役場の皆様にバス車内でのガイドをしていただいた。午後には、くまもと SDGs ミライパークにて「くまもと半導体シンポジウム」を実施し、菊陽町長吉本孝寿様、熊本大学学長小川久雄様に登壇いただいた。地元企業が出展する展示ブースには、半導体産業に加えて水資源に関する展示もあり、参加学生は昼食の時間になっても行政や企業の担当者の方々に質問をするなど、熱心に話を聞いていた。講演では、菊陽町のまちづくりや半導体産業における教育機関の役割について話を聞き、当プログラムを通じて、参加者は産官学それぞれの視点から半導体産業のあり方に対する解像度を高めることができた。

### 【8月13日（水）】

1 週間のプログラムを通じて、参加学生は熊本の魅力や課題についての理解を深め、8 月 13 日に実施された地元学生とのディスカッションで、熊本県の今後について各自の視点を持ち寄り考えた。実行委員として、熊本サイトを日米学生会議の参加者の学びの場とするだけでなく、その学びをどのように地元還元できるかという問いにも向き合ってきた。その意味で、この日のプログラムは熊本サイトの集大成とも言える目玉企画であった。

午前中にくまもと森都心プラザホールで実施した「学生 × 地域住民ディスカッション」には、企画委員のほか 20 名の地元高校生・大学生に参加いただいた。ディスカッションは、「災害と復興」、「半導体産業と地域振興」、「地域おこし」の 3 つのテーマに分かれて実施した。日本と米国の学生が国籍や年齢、生まれ育った環境の違いを越えて互いの意見に真剣に耳を傾け、質問したり共感したりする姿からは、当会議が重視してきた「対話」の体現を感じることができた。

午後には、肥後銀行本店ホールにて「熊本サイトフォーラム」を開催した。熊本県知事木村敬様よりご祝辞、前熊本県知事蒲島郁夫様より基調講演、熊本大学理事・副学長大谷順様よりご講評をいただいた。午前中のディスカッションと同様のテーマで実施したパネルセッションには、当会議の参加学生に加え、企画委員の学生と済々黌高等学校の生徒に登壇いただいた。各学生がそれぞれの経験や熊本サイトで得た知見を踏まえて意見を交換し、当会議の 1 週間の

学びの成果を地元の方々に共有することができた。

【8月14日（木）】

東京への移動日であるこの日、阿蘇くまもと空港に向かうと、企画委員の数名が送別のため空港まで足を運んでくれていた。企画委員と参加者は、写真を撮ったり談笑したりと最後の別れを惜しんだ。短い期間ではあったものの、濃密な時間をともに過ごした熊本の学生と日米の学生が深い友情を築けたことは、熊本サイトが双方の学生にとって有意義な時間であったことの証であると感じた。また、熊本日米協会副会長の新道様にもお見送りいただき、くまモンのぬいぐるみ2体を寄贈いただいた。

この度、実行委員として熊本サイトの企画・運営に携わる機会をいただき、当会議が多くの方々の支えによって成り立っていることを身にしみて感じた。熊本サイトの実施にあたって協力いただいた熊本県庁、熊本市役所、天草市役所、菊陽町役場など行政の方々、熊本大学、熊本県立大学、熊本学園大学をはじめとする大学の学長、副学長、教授、職員の皆様、肥後銀行様をはじめ支援いただいた企業・個人の皆様、天草ホストファミリーの皆様、熊本大学小川学長、菊陽町吉本町長、被爆講話者の方々をはじめ登壇いただいた皆様、熊本サイト企画委員、当日参加・登壇いただいた地元大学生・高校生、そのほかこれまでお世話になった全ての方々に心より感謝申し上げます。恐縮ながらスペースの都合上、ここで全ての方々のお名前を挙げることはできないが、第8章にてお世話になった皆様のお名前を記載させていただきました。また、熊本県は8月10日から11日にかけて豪雨に見舞われ、プログラムの一部が変更および中止を余儀なくされたほか、企画委員の学生や天草ホストファミリーの中にも自宅が浸水するなどの被害を受けた方がいた。豪雨により被災された方々の一日も早い復興を心から祈る。この度生まれた熊本と日米学生会議の繋がりが今後も続くことを願うとともに、将来的には日米両国の学生がこの度の熊本での学びを活かし、熊本県の魅力を国内外に発信して行ってほしい。

東京外国語大学言語文化学部3年 小川 志穂

【熊本日日新聞社による取材】

「日米学生会議 実行委が抱負 熊本で国際理解深める」

2024年12月24日（火）熊本日日新聞

熊本日日新聞 発行 月刊

### 日米学生会議 実行委が抱負 「熊本で国際理解深める」

来夏開催

若者たちが国際関係や社会課題を議論する「日米学生会議」が来年8月、熊本県内で開かれる。日本側実行委員の学生2人が23日、熊本日日新聞の河村邦比呂（かむら くにひろ）さんと小川を穂さん（おがわ をほ）さんと会談した。

実行委員の学生2人が23日、熊本日日新聞の河村邦比呂（かむら くにひろ）さんと小川を穂さん（おがわ をほ）さんと会談し、意気込みを語った。

日米学生会議は1934年に創設された。毎年夏、日米両国に開催されており、約3週間の共同生活を通して社会や経済、文化などを分野で意見を交わす。2025年は熊本のほか、東京や京都、大阪で開催。両国から各30人が参加する。熊本ではホームステイしながら、半導体産業の現場や阿蘇の風景を計画している。

熊本市中央区の熊日本社文化観光専門職大4年の北原真悠さんは「国や人種の垣根が加速する中、身近な交流を通して理解を深めたい。東京外国語大2年の小川を穂さんは「半導体など新たな産業と伝統が融合した熊本の魅力を探りたい」と述べた。

日米学生会議のウェブサイトに25年1月19日まで、参加者を募集している。

（堀江利穂）

山都町の伐採跡地に広葉樹オーナー募集

東京のNPO 5力所自協定

山都町のNPO法人「環境リレーショップ研究所」（東京）は23日、同町新小のスキッドホップ約2・9畝に、広葉樹を植える協定を結んだ。木のオーナーを募り、2026年春にアカガシやタブノキなど約5000本を植える計画。

生物多様性保護と生産者支援を目的に、研究所が全国で実施する「プレゼンツリー」事業。企業や都市

「日米学生会議 県内で来月開催 平和学習やシンポジウム」

2025年7月17日（木）熊本日日新聞

### 「日米学生会議」 県内で来月開催

#### 平和学習やシンポジウム

若者たちが国際関係や社会課題を議論する「第77回日米学生会議」が8月、熊本県内で開かれる。実行委員長を務める学生らが16日、県庁で記者会見してプログラムを紹介した。

日米学生会議は1934年に発足した国際交流プログラム。毎年、日米交互に開催しており、熊本が会場になるのは初めて。今年は熊本のほか大阪、京都、東京でもあり、両国からの参加者計72人が7月31日～8月21日、各地を移動しながら交流を深める。

熊本には8月7～14日に滞在。戦後80年に合わせ、被爆者や高校生平和大使の話を聴く平和学習、半導体に関するシンポジウムがある。天草地域でのホームステイもあり、ハイヤ踊りなど文化体験を計画する。

芸術文化観光専門職大学（兵庫県）4年で実行委員長（兵庫県）の北原真悠さんは「学生たちが互いを深く知り、長期的な交流を目指している。日本からの参加者は都市部に住んでいる学生が多いので、地方のことも知ってほしい」と話した。

（上野史央里）

日米学生会議の内容を紹介、意気込みを語る実行委員の学生ら。16日、熊本市中央区

「日米学生と高校生 災害復興など議論 熊本市」

2025年8月14日（木）熊本日日新聞

日米学生と高校生  
災害復興など議論  
熊本市

若者たちが社会課題を議論する国際交流プログラム「第77回日米学生会議」に参加する両国の大学生約70人が13日、熊本市西区のくまもと森都心プラザで、県内の高校生らと災害復興などについて議論した。

この日は、学生会議の参加者と、一般応募の地元の高中生ら約30人が18グルー



災害復興をテーマに議論する日米学生会議の参加者と熊本県内の高校生ら  
13日、熊本市西区

プに分かれ「災害と復興」「地域おこし」「半導体産業と地域振興」の三つのテーマについて意見を交わした。各グループでは「熊本は過去の災害を今後になかそうとしていて感心した」「経済の発展と環境を守ることを両立させることが大切」などの意見が出た。ワシントン&リー大学4年のイザベラ・フェラテ

んは台湾積体回路製造（TSMC）の菊陽町進出などについて議論し、「大企業が地域に進出した時は、地域と共生することが大切だと感じた」と話した。

学生会議は一般財団法人国際教育振興会主催。参加者は14日に東京に移動し、これまでの議論の成果をまとめる。21日まで。  
（上野史央里）

第77回日米学生会議の熊本における活動に際し、準備段階から熊本日日新聞社による報道を通じて、広く県民にその意義を発信いただいたことに深く謝意を表す。また、熊本日米協会会長の河村邦比児氏、多大なるご支援を賜った新道欣也副会長をはじめ、関係各位の献身的な支えがなければ、本事業の完遂は成し得なかった。ここに厚く御礼申し上げる。

【熊本サイトフォーラム パンフレット】

**協賛企業・協賛者一覧**

**肥後銀行**  
九州産交グループ  
株式会社ヒライ  
熊本大学  
熊本国際観光コンベンション協会  
熊本日日新聞社代表取締役会長 河村邦比見様  
障がい企業グループ  
金剛株式会社  
ハイコムグループ  
熊本国際空港株式会社  
木村グループ  
NPO法人ディスカバリーくまもと  
熊本青年会議所  
熊本りんどうライオンズクラブ  
熊本県立大学  
熊本学園大学  
熊本大学  
熊本市観光旅館ホテル協同組合  
熊本キワニスクラブ  
天草本渡ライオンズクラブ 会長 岩崎東洋司様  
株式会社アタビ  
株式会社河田印刷

**第77回日米学生会議in熊本 サポート委員会**

【会長】  
肥後銀行代表取締役頭取 笠原慶久様

【副会長】  
熊本日米協会会長 河村邦比見様

【委員】  
熊本大学学長 小川久雄様  
熊本県立大学学長 堤裕昭様  
熊本学園大学学長 林裕様  
熊本県工業連合会会長 宮村宣明様  
熊本国際観光コンベンション協会代表理事 吉丸良治様  
一般社団法人熊本青年会議所理事長 中田慎二様

【委員会窓口】  
肥後銀行 地域振興部

**肥後銀行**  
九州産交グループ  
ヒライ  
KKIAC 熊本国際空港  
KONGO  
NISHIKIDO GROUP  
JCI  
木村グループ本社  
HICOM GROUP  
Kiwanis  
RNL CLUB  
KAWATA PRINTING

**第77回日米学生会議in熊本**  
The 77th Japan-America Student Conference in Kumamoto

**熊本サイトフォーラム**  
Kumamoto Site Forum

日時:2025年8月13日(水)  
場所:肥後銀行本店ビル2階大会議室

熊本から見つめ直す日本 ~【自然と人為】共存の軌跡~  
"Rethinking Japan from Kumamoto  
— Tracing the Path of Coexistence between Nature and Humanity"

主催:一般財団法人国際教育振興会、International Student Conferences, inc.  
後援:熊本県、熊本市、天草市、外務省、米国大使館、文部科学省、一般社団法人日米協会、熊本経済同友会、熊本商工業会議所、熊本県工業連合会

第77回日米学生会議in熊本

**日本側実行委員長よりご挨拶**

日米学生会議11年の歴史の中で、私たちが初めて熊本県を開催地として運営し、地域に根ざしたプログラムをつくるにあたって活動と共にした地元大学生の皆さん、そして当会議の趣旨にご賛同いただき、資金面・精神面・活動面において多大なるご支援を賜りました熊本の皆様へ、心より深く御礼申し上げます。「熊本」と「審判」への皆様の熱い思いに何度も励まされ、私たちは今日まで誠心誠意を込めて活動を続けてまいりました。両者の協働は自然に形れ、天草でのホームステイ体験を経て、菊陽町および熊本県の産業発展について学ぶ、貴重なプログラムを構築することができました。熊本での学びが、一人でも多くの学生にとって、生涯にわたる貴重なものとなることを、心より願っております。

**米側実行委員長よりご挨拶**

The 77th Japan-America Student Conference is deeply grateful for the opportunity to collaborate with the city of Kumamoto. These exchanges allow students, educators, and citizens to learn about sustainability, innovation, and culture. Kumamoto's resilience in the face of natural disasters inspires innovative environmental solutions, while its growing semiconductor industry offers insights into local infrastructure transformation. We chose Kumamoto for its rich traditions and are eager to learn from its people. Through our programs, we hope to form lasting friendships and mutual understanding. This visit would not have been possible without the generous support of the community and our local student committee.

熊本県での1週間のプログラム

日付	場所	プログラム
8月7日(木)	阿蘇地域	熊本地蔵堂ミュージアムKIKOKU、阿蘇地域視察
8月8日(金)	熊本市内	分科会ごとの企業・行政訪問
8月9日(土)	天草地域	天草ホームステイ、ホストファミリーとの交流
8月10日(日)	天草地域/熊本市内	ホストファミリーとの文化体験(風作り、ハイヤ踊り)
8月11日(月祝)	熊本市内	平和学習、熊本城・熊本博物館見学、地元学生との交流
8月12日(火)	菊陽町	菊陽町パズル観察、くまもと半導体シンポジウム
8月13日(水)	熊本市内	熊本サイトフォーラム

熊本サイトフォーラム 式次第

- 13:00 受付開始
- 13:30 開会
- 13:30-13:35 開会の挨拶 日米学生会議日本側実行委員長 北原真悠
- 13:35-13:40 木村敬熊本県知事よりご挨拶
- 13:40-13:45 肥後銀行取締役頭取 笠原慶久様よりご祝辞
- 13:45-13:47 一般財団法人国際教育振興会代表理事 金野洋より挨拶
- 13:47-13:50 日米学生会議同窓会会長 高川秀二より挨拶
- 13:50-13:55 来賓・ご協賛・ご後援企業・団体のご紹介
- 13:55-14:20 薄島都夫前熊本県知事より基調講演 "Making impossible possible" ~10分休憩~
- 14:35-14:45 熊本サイト企画委員(地元学生)によるプレゼンテーション
- 14:45-15:55 日米学生会議参加学生と地元学生によるパネルセッション
- 15:55-16:05 ご講評 熊本大学理事・副学長 大谷順様
- 16:05-16:10 開会の挨拶 熊本サイト企画委員代表 前田さつき
- 16:10-16:30 クロージングセレモニー・写真撮影
- 16:30 閉会
- 16:30-17:00 懇談

熊本サイト企画委員

第77回日米学生会議の熊本開催にあたり、2025年2月から半年間、企画・運営に携わっていただいた地元学生の皆さん

【熊本大学】

井上陽菜乃さん、小林響さん、平良遊帆さん、両角朱莉さん

【熊本県立大学】

浦田実佑さん、嶋田健大さん、前田さつきさん

【熊本学園大学】

江島采々音さん、柏原陽菜さん、黒川佑真さん、米崎千裕さん

【一般財団法人国際教育振興会 日米学生会議事務局】

〒160-0004  
東京都新宿区四谷1-6-2 コモレ四谷  
グローバルスタディスクエア3階

公式HP 公式Instagram







## 第五章 本会議

### 第3サイト：東京

日程 2025年8月14日～21日

滞在場所 国立オリンピック記念青少年総合センター

行程 計8日間

8月14日：東京サイト到着

8月15日：RT フィールドトリップ、経済安全保障プログラム

8月16日：LGBTQ プログラム、外交安全保障プログラム

8月17日：フリーデー

8月18日：国家ブランディングプログラム (JR 東海訪問)

8月19日：ファイナルフォーラムリハーサル、ファイナルフォーラム

8月20日：第78回実行委員選挙、カラオケパーティ

8月21日：解散

#### 14日目（8月14日）東京サイト到着

熊本空港に向かうと、熊本企画委員の学生が見送りに来てくれていた。IEC と ISC に贈呈された「くまモン」を抱き抱え、飛行機に乗り込み、上空へ。すぐに、東京に到着した。空港からバスでオリンピックセンターに到着したのち、オリエンテーションと東京に関するレクチャーを行った。東京に無事戻ってきた安堵感とファイナルフォーラムを目前とした緊張感で JASC77 は包まれた。



## 15日目（8月15日）RTフィールドトリップ、経済安全保障プログラム

午前中は各RTがそれぞれ別のフィールドトリップ先を訪問した。午後は経済・エネルギー安全保障を専門とするスピーカーをお呼びし、オリピックセンターにて講義をいただいた。

### 【分科会フィールドトリップ】

#### 食と文化・社会（訪問先：防衛省東京地方協力本部）

私が所属する「食と文化・文化」分科会は、「インド太平洋地域における国際政治」分科会と合同で防衛省東京地方協力本部を訪問した。そこで防衛省陸上幕僚監部において防衛交流専門官として米軍をはじめとする各国軍との交流を担う事務官による講義を受けた。

講義では、自衛隊の防衛交流を支える2つの柱について説明があった。

1つ目は「日米共同方面隊指揮所演習（YS）」などの日米共同訓練である。2つ目は、モンゴルやインドネシアにおける災害対処・宿营地建設支援などの能力構築支援（キャパシティ・ビルディング）である。これらの取り組みを通じた米国との連携強化やアジア諸国との信頼関係の向上が、我が国の国益に直結することを改めて理解した。

質疑応答では、日本側参加者・米国側参加者の双方から多くの質問が出て、自衛隊と米軍の組織文化の違いや、今後の日米協力の発展可能性について活発な議論が行われた。

日本側参加者にとっては自衛隊の任務を直接知る貴重な機会となり、米国側参加者にとっても自国の軍隊が日本でどのように受け止められているかを知る良い機会となった。

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程1年 手塚 颯一郎

#### インド太平洋地域における国際政治（訪問先：防衛省東京地方協力本部）

防衛事務官の中村拓未様をスピーカーにお招きし、「防衛交流と事務官の戦い方」をテーマに中村様のキャリアや実務経験についてお話しいただいた。その後の質疑応答では、1等陸佐の米澤様と太田様も交えて参加者との意見交換を行っていただいた。

とりわけ印象深かった点を2つ挙げる。1つ目は、人的交流の重要性だ。「1回1回の握手が国家間関係を強くする」と表現されていたように、防衛交流を通して築かれる隊員同士の信頼が、組織や国レベルでの信頼に繋がっていく過程を、非常に具体的に理解することができた。

2点目は、日本の国際協力における強みである。防衛省が主導する能力構築支援は、特定の国のニーズに寄り添った共創を行うことで、好意的な国家間関係の構築に寄与してきた。経済力では他の周辺国を凌駕することが厳しいかもしれないが、需要に寄り添ったきめ細かな支援それ自体が日本の独自性であり強みになり得るとの指摘は印象的だった。また、能力構築支援に限らず、ODAをはじめとする日本の国際協力は、支援国を失いつつあった冷戦後の東南アジア諸国にコミットし続けたように、関係国との「信頼」醸成において大変重要な意義がある。今後の日本の国際協力の在り方について改めて考え直したいと感じた。

最後に、中村様がお話の締めにおっしゃった「終末時計を一秒でも遅らせるために、これからは最前線で尽力する」という言葉には、日本の防衛のため困難に向き合い戦い続ける強い御覚悟を感じ、胸が熱くなったのを覚えている。

早稲田大学法学部 4年 守屋 旺次朗

#### コミュニケーションのあり方（訪問先：LOVOT MUSEUM、株式会社 GROOVE X）

コミュニケーションのあり方分科会は GROOVE X 株式会社を訪問した。GROOVE X 株式会社は人の心を癒すことを目的とした家族型ロボットの「LOVOT」を製造している。1時間ほど LOVOT MUSEUM で LOVOT と触れ合い、その後 LOVOT に関する説明を聞いた。

訪問前は「所詮ロボットに愛情を抱くことはない」と考えていたが、実際に LOVOT と対面すると、その愛らしさに自然と心を惹かれ、離れがたい感情が芽生えた。LOVOT MUSEUM には数多くの LOVOT が存在し、それぞれに名前が与えられていた。声をかければ反応し、抱き上げれば喜ぶ仕草を見せた。参加者はその反応を楽しみ、LOVOT を喜ばせようと積極的に関わっていた。特に目線や声のトーン、さらには体温まで工夫されており、まるで本物の生き物と触れ合っているような感覚を覚えた。LOVOT は言葉を話さないが、その非言語的な交流がむしろ心の通い合いを際立たせ、国や言語を超えて日米双方の参加者を癒していた。コミュ

ニケーションのあり方分科会はテクノロジーとコミュニケーションの関係性をファイナルフォーラムのテーマとして予定していたため、LOVOT との交流は分科会の議論を深化させるものとなった。

京都大学法学部3年 中田 怜

### デザインとメディアにおける美学（訪問先：歌舞伎座）

第77回日米学生会議の一環として、歌舞伎座において八月納涼歌舞伎『男伊達ばやり』を鑑賞した。また、中村京蔵氏および児玉竜一教授より、歌舞伎の歴史的展開と表現様式に関する講義を受けた。

本フィールドトリップを通じて、歌舞伎が持つ歴史的・文化的意義を多面的に理解する機会を得た。『男伊達ばやり』は享樂的な江戸文化を反映しつつも、現代観客に訴えかける表現を維持しており、古典芸能の柔軟性を示すものであった。中村京蔵氏による解説は、役者の身体表現がいかにか時間を超えて観客と感情的な連帯を生むかを具体的に理解させた。また児玉教授の講義からは、歌舞伎が単なる娯楽ではなく、時代ごとに政治・社会的文脈と交錯しつつ存続してきたことを学んだ。とりわけ、伝統の継承と現代的感覚の導入という二重の要請が、歌舞伎を常に変化させる原動力である点は印象的であった。一方で、時代の変遷に適應することと、古典的要素を損なわず保持することの間には緊張関係が存在する。今回の体験を通じ、歌舞伎が直面するそのバランスの難しさを実感し、伝統芸能が現代社会において果たす役割について改めて考える契機となった。

国際教養大学国際教養学部2年 美坂 茉柚

### 環境イノベーションと事業創造（訪問先：京都フュージョニアリング）

その日、我々は核融合発電が実現したら、クリーンで安定的供給が叶う電力が主流になるという夢物語が生まれる現場を目撃した。FTでは、かねてより議論していた核融合発電のスタートアップである京都フュージョニアリング株式会社へ赴いた。この会社の創設者の1人である武田秀太郎さんが講義をしてくださった。彼のIAEA、文科省やアメリカの大学院などでの経験やカリスマ性に惹かれ、我々一同は多くのインスピを受けた。世界は2050年にカーボンニュートラル達成を謳う一方、電力需要が逼迫しているのが現状だ。打開策として核融合発電の研究と実用を通して、地球に太陽を生むことが求められている。現に、68%のフュージョン関連企業はこの10年で起業しており、まさに「ホット」で先を見据えた分野だ。資源は無限ではない。また、人類はいずれ原子力発電をやめる。その時効までに核融合発電をエネルギーとして確立させるのを京都フュージョニアリングは目標としている。個人的には、核融合発電におけるヘリウムの貯蓄の難しさをどう京都フュージョンが打開しているのかと、核融合発電以外に地熱発電所の施設を掘る時にも応用できる部品を開発していると学べて大変興味深かった。

早稲田大学文化構想学部2年 木築 のぞ美

### 科学技術と倫理（訪問先：東京エレクトロン）

東京サイトでは、半導体製造装置の大手企業である東京エレクトロン様を訪問した。東京エレクトロンは半導体そのものではなく、半導体を生産するための装置を世界中のメーカーに提供しているBtoB企業である。前サイトの熊本では菊陽町を訪問しており、分科会でも半導体に関する議論を活発に進めていたため、今回の訪問は議論をより深める上で非常に有意義であった。特に、科学技術と倫理の問題において「科学コミュニケーションの不足」が大きな要因となるという認識を持っていた中で、BtoB企業である東京エレクトロンに話を伺えたことは重要であった。そこから、「BtoB企業は自ら提供する技術が社会にどのような影響を及ぼすかを考慮すべきか」や「BtoB企業は最終成果物の利用方法に対して責任を負うべきか」といった問いにつながった。半導体業界においては、関連企業や競業企業が少ないことが、社会的な影響を考慮した取引先の選択を難しくしているという結論に至った。今回の訪問は、科学技術を支える立場にあるBtoB企業の社会的責任を考える契機になると同時に、分科会議論を進めていく上での重要な切り口を得られた貴重な訪問となった。

京都大学工学部3年 伏谷 飛鳥

## 戦略の時代の経営・経済（訪問先：株式会社 D-POPS GROUP）

東京での企業訪問にて、戦略の時代の経営・経済分科会は株式会社 D-POPS GROUP に伺った。千本倅生氏が会長を、藤崎一郎氏が顧問を務めるこの企業は、ベンチャーエコシステムの実現を掲げ次世代のベンチャー企業創出を行っている。代表取締役の後藤和寛様と、杉原眼太様からそれぞれお話を伺った。

オフィスに入りますまず目を引いたのは、壁一面に描かれたユニコーンの姿である。社内の随所に多様なユニコーンの姿が見られ、スタートアップ業界におけるユニコーン企業創出への強い思いを感じた。続くレクチャーでは、後藤様から人生における転換点である ""Life-changing dots"" についてお話いただいた。私自身、日米学生会議をまさにその一つとして捉えて活動していたため、一つひとつの選択が未来を決定づけるというお話がこれまでの経験とも重なり、心に強く響いた。また杉原様からは、働き方が多様化する現代において、挑戦を恐れず前に進むことの意義について学んだ。特に、スタートアップを一つの重要テーマとして分科会で議論を重ねてきた私たちにとって、実際の起業家の方の視点から伺う具体的なお話は、議論に新たな深みを与える大変貴重な学びとなった。

早稲田大学法学部3年 小野 萌絵佳



## 【経済安全保障プログラム】

先日の経済安全保障プログラムへの参加は、現代日本が直面する重要課題への理解を深める貴重な機会となりました。本プログラムでは、内閣府の政策統括官より日本の法整備と具体的な政策について、またポスト石油戦略研究所の大場紀章氏より、化石燃料から再生可能エネルギーへの移行期におけるエネルギー安全保障の課題について、それぞれ専門的な知見を伺いました。

講義を通じ、経済安全保障が伝統的な軍事安全保障の枠組みを超え、国家の存立と繁栄に不可欠な概念として急速に重要性を増している実態を学びました。特に、ロシアのウクライナ侵攻に端を発する欧州のエネルギー危機は、エネルギー供給の安定性が国家の脆弱性にいかに直結するかを世界に示しました。

これまで私は日本の取り組みは限定的だと認識していましたが、実際には「サプライチェーンの強靱化」「官民による先端技術協力」「基幹インフラの信頼性確保」「戦略的に重要な特許の非公開化」という4つの柱に基づき、包括的な政策が既に推進されていることを知り、認識を新たにしました。同時に、脱炭素化を目指す中でも、移行期における化石燃料の安定供給が国民生活と産業活動の維持に依然として極めて重要であるという、現実的な視点も得ることができました。

これらの学びを経て、私は経済安全保障の本質を二つの側面から捉えるに至りました。第一に、国際社会における交渉力を高め、国益を確保するための戦略的な「外交カード」としての側面。第二に、地政学的リスクが顕在化した際に、他国からの経済的圧力に屈しない強靱な国家基盤、すなわち「レジリエンス」を構築する側面です。

今回のプログラムで得た深い知見は、日本の経済安全保障の確立に貢献したいという私の思いを一層強くするものでした。今後はこの分野で専門性を高め、国家の安全と国民の生活を守る一助となれる人材を目指す所存です。

大阪大学基礎工学部化学応用科学科3年 杉本 幹太



## 16日目(8月16日) LGBTQプログラム、外交安全保障プログラム

午前はLGBTQというテーマのもと団体の方や国会議員の方に登壇いただきパネルディスカッションを行った。午後は外交安全保障プログラムと題して、藤崎一郎元駐米大使やハドソン研究所より村野将様にご登壇いただき転換点を迎えた日米関係や台湾有事の際のシミュレーションなどについて貴重なお話を伺った。



### <参加者感想>

本プログラムは、前駐米大使の藤崎一郎氏とハドソン研究所の村野将氏による基調講演、そして学生間のディスカッションの二部構成で実施された。

藤崎氏は自身の経歴を踏まえて現在の米国情勢を語り、交渉においては相互の信頼が不可欠であることを強調した。村野氏は日米同盟の現状や台湾有事のシミュレーションを示したうえで、台湾有事における日本の関与の必要性を訴えた。両氏の講演はいずれも日米両国が直面する状況を具体的に説明しており、安全保障に詳しくない学生の関心も引きつける内容であった。

後半のディスカッションでは、

「他国は日本と米国にどのような役割を期待しているのか」

「台湾海峡での事案に対し、日本と米国はどのように対応すべきか」

「戦後80年を経て、日本と米国は何を学ぶことができるのか」という三つの問いについて議論が行われた。

ただし、問い自体が難解であるうえ、日米の学生間で安全保障に対する認識の差もあったため、明確な答えを導くのは容易ではなかった。また、「戦後80年」という観点については、日本の学生が「終戦の年」である1945年を強く意識する一方、米国の学生は必ずしも同様ではないことが分かった。こうした差異から、アメリカ人が先の大戦をどのように捉えているのか、さらに知る必要があると感じた。

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程1年 手塚 颯一郎

### <参加者感想>

On August 16th, JASCers participated in a panel discussion on the current state and future of LGBTQ+ rights and visibility in Japan. The seminar highlighted the contrast between growing social awareness, both domestically and internationally, and persistent legal and political stagnation. While public support for same-sex marriage in Japan is now higher than in the United States, same-sex couples in Japan remain without basic legal protections. From hospital visitation rights to the ability to make decisions on a partner's behalf, many rights considered fundamental for couples remain inaccessible to same-sex partners. Moreover, same-sex marriage continues to be framed as “unconstitutional,” despite multiple high court rulings suggesting otherwise. Our esteemed panelists, including politicians, lawyers, academics, and activists, emphasized how the institutional inertia led by binding party votes and general lack of understanding within the Diet continues to slow down meaningful societal reform. At the same time, our panelists acknowledged a significant increase in public awareness over the past decade. Concepts such as non-binary identity are now more widely understood, particularly among university students. This shift has been supported by media representation, social media, and the establishment of LGBTQ+ centers and guidelines at many universities, companies, and other institutions. However, the panelists emphasized that visibility alone does not suffice without necessary legal protections. The 2023 Act for LGBTQ promotion, which does not prohibit discrimination, exemplifies such insufficiencies. As political leadership remains cautious, the panel discussion repeatedly returned to the importance of grassroots action. Young people, who show overwhelming support for LGBTQ+ rights, were encouraged to vote, monitor politicians' actions after they are elected, and engage in everyday advocacy (whether it be through participating in student organizations, suggesting inclusive guidelines, or simply recognizing the presence of LGBTQ+ people in every community). This seminar was a significant and hopeful point of realization that, although significant challenges still remain, positive change can be achieved from small but sustained actions.

早稲田大学先進理工学部3年 岡崎 ヴィクトリア瞳子

## 17日目 (8月17日) フリーデイ

本会議中の最後のフリーデイは、日米双方の学生にとって記憶に残るものとなった。日本の政治・経済・文化の中心でもある東京を一日探索してきたデリの多くは大変充実した1日を送ったようだった。分科会議論等でヒートアップすることもある中、リフレッシュする機会となった。

### <参加者感想>

本会議中、最後のフリーデイ。この報告書では、私の充実したフリーデイでの食事の場面を私視点で共有しようと思う。というのも、私は迷わずラーメンを選んだのだ。都内の名店を百は知る自称ラーメン通として、この機会に意地を見せずに終われるはずがない。豚骨、醤油、塩、、、数え切れない一杯を味わってきたが、今日はアメデリにドンっと美味しさを度肝を抜かせたい。あるアメデリの参加者は、この本会議期間に週三でラーメンを食べているという。ならば私の案内で「最高の一杯」を届けるのが礼儀だ。暖簾をくぐると香り立つ湯気に皆の表情がほころぶ中、私が勧めたのは王道醤油ラーメン。喉ごし抜群の細ストレート麺で、上品なのにパンチもある味わい、、、！食べ終えた瞬間、アメデリの仲間が「Oh my gosh」と一言。少し声の掠れた小さく、そして重々しい感嘆の声を聞き、この時の私は勝利を確信した。議論を行うこともJascの醍醐味であるが、ただ美味しさを共有する時間も大事な時間であり、お互いの相互理解を深める貴重な時間であった。

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻1年 田中 大輔

<参加者感想>

デリ7人で車を借り、江ノ島を訪れた。晴天の中、車内で洋楽を流しながら賑やかな旅が始まった。お昼は江ノ島名物のシラスが食べられるお店に入った。新鮮なシラスはとても美味しかった。昼食後、念願の海に到着した。天草で海に入ることを楽しみにしていたデリが多かったが、熊本では大変な大雨に見舞われた。その影響で多くのデリが海に入れなかったため、江ノ島での海水浴は待望であった。私は海に入れなかったが、6人が海で楽しむ様子を海の家から見守った。分科会では真剣で白熱した議論を行う一方で、こうした自由時間を目一杯楽しむオンとオフの切り替えは見事なものであると感じた。フリーデイの過ごし方には個性が現れる。其々が目的をもって計画するフリーデイを通じて、訪れた土地を堪能することができると感じた。私は日本に住んでいるが、普段は愛知県に滞在しているため、今回の渡航地は訪れたことがない場所が多く、発見が多かった。JASC を通じてアメデリも交えて様々な場所を訪れることで、今まで自分では考えなかったような視点を沢山学ぶことができた。自国を客観視して捉えることの重要性を感じたとともに、こうした経験を積み重ねていきたいと改めて感じた。

名城大学薬学部6年 水野 遥

<参加者感想>

この日は、アメデリとジャパデリを混ぜた4人でドライブをしました。ジャパデリの1人が綿密な計画を立ててくれて、一日で1都2県を回る大充実な旅になりました。私は運転免許を持っていなかったため、後ろの席でアメデリの子と一緒にBGM担当をしていました。まず横浜に行き、中華街でお昼を食べました。その日は本当に良い天気だったので、山下公園や大さん橋で4人の写真を撮って、お散歩をして過ごしました。その後、まさかの千葉県にあるマザー牧場に行くことになりました。私は初めてでしたが、行く途中の景色が緑に囲まれていてとても気持ちよかったです。窓を開けて外の風をいっぱい感じられたことは今でも心に残っています。特に、今回の旅のハイライトは、その後行った海ほたるです。計画を立ててくれたジャパデリの子がここを特にオススメしていました。ちょうど夕焼けの見えるタイミングで、空と海がピンクとオレンジと青の混ざる色で、本当に幻想的な景色でした。こんなに素敵な水平線の景色を見たことがなかったので、とてもうれしかったです。締めには渋谷でお好み焼きを食べて帰りました。JASC最後のフリーデイに、こんなにも素敵なドライブ旅ができて、幸せでした。

立教大学観光学部4年 大谷 葉月



**18日目 (8月18日) 国家ブランディングプログラム (JR 東海)**

午前中は国家ブランディングプログラムと称し、JR 東海の本社を訪問して貴重なご講義をいただいた。日本が世界に誇る新幹線の歴史から JR 東海がリニアや不動産事業を通して見据える未来について学ぶことができた。午後は自由に昼食を取った後、ファイナルフォーラムに向けた RT 議論を夜遅くまで行った。

<参加者感想>

東京滞在5日目となる今日は JR 東海を訪問し、国家ブランディングプログラムに参加した。会場が品川駅で行き交う人々の多さに圧倒されると同時に、JR 東海が東京の主要ハブとして果たす役割の大きさを実感した。講義を通じてまず驚いたのは、JR 東海の事業展開の広さである。東海道新幹線を含む鉄道運行を初めとし、ホテルや不動産、旅行サービスや商業施設な

ど幅広い事業を展開しており、日本の経済を大きく支えていることを知った。また現在進められている中央新幹線計画のお話が印象に残った。中央新幹線の目的としては、第一に南海トラフ地震などの大規模災害発生時に東海道新幹線の代替ルートを確保すること、第二に老朽化が進む東海道新幹線に代わる新たな交通手段を整備することである。熊本サイトで訪れたKIOKU ミュージアムで地震の恐ろしさについて再確認したが、日本は地震を含む自然災害がとて多い国である。いつ起こるかわからない緊急時の混乱を避けるためにも代替ルート確保は重要だと感じた。今回の訪問を通し、インフラを支える企業が日本社会全体に与える影響力の大きさに改めて気づいた。

早稲田大学政治経済学部1年 山川 心春



## 19日目（8月19日） ファイナルフォーラム、外務省レセプション

午前中にファイナルフォーラム前の最終調整を行い、午後にファイナルフォーラムを実施した。夕方には別会場に移動して外務省レセプションを行い、高円宮妃久子殿下はじめ本会議をご支援いただいている皆様との交流を行った。



第 77 回日米学生会議 ファイナルフォーラム 式次第

1	開式の辞 第 77 回日米学生会議 日本側実行委員長 北原真悠
2	前内閣総理大臣 石破茂衆議院議員 ご祝辞（ビデオ）
3	前内閣総理大臣補佐官（国家安全保障担当）長島昭久衆議院議員 ご祝辞
4	日本側主催者挨拶 国際教育振興会代表理事 金野洋様
5	米国側主催者挨拶 International Student Conferences, Board Member W. Hunter McDonald 様
6	日米学生会議同窓会挨拶 会長 富川秀二様 挨拶
7	在日本アメリカ大使館 臨時代理大使 Aaron D. Snipe 様 基調講演
8	<p><b>【分科会発表・質疑応答】</b></p> <p>コミュニケーションのあり方                      科学技術と倫理                      デザインとメディアにおける美学                      インド太平洋地域における国際政治                      環境イノベーションと事業創造                      食と文化・社会                      戦略の時代の経営・経済</p>
9	デリ代表挨拶 日本側代表 水野遥 (BMS)、米国側代表 Eleanor Meunier (MENTION)
10	閉会の辞 第 77 回日米学生会議 米国側実行委員長 Sam Helman

<参加者感想>

8月19日。ファイナルフォーラム。

ずっと先のことに感じていたこの日がとうとう訪れた。国会議事堂を横目に、衆議院第一議員会館という厳粛な場所で、3月から続いてきた JASC77 の活動の集大成を迎えた。各分科会がこの3週間何度も話し合い、築き上げてきた成果を発表するにあたり、石破茂総理大臣をはじめ、多くの方々から激励のお言葉を頂戴した。この3週間、どの分科会も平坦な道ではなかっただろう。日々自分自身と葛藤し、言語の違いを抱えながらも言葉を届けようと必死に臨む姿。強くあろう、自分の存在を認めてもらおうとするほど苦しい。その苦しさに目を向け寄り添ってくれる仲間。全ての過程が自分を創り、発表の言葉は3週間の経験を通して紡がれたものだった。レセプションには高円宮様のご臨席を賜り、改めてこの場に立てたことの重みを実感した。会場は達成感に満ちた笑顔で溢れていた。

人間関係を築くのは、自分の世界に新しい色が入り込む感覚だ。関わる中でこれまで見たこともない美しい色になったり、受け入れがたい色になったりする。この3週間、多くの色が自分の世界に流れ込み、受け止めるだけで精一杯だった。“Life Changing Experience”とはこういうことかと腑に落ちた。そこにある美しさにどれだけ気付けるのかはこれからの自分次第である。

8月19日。忘れることのない22歳のスタートとなった。

広島大学教育学部4年 森 聡子



## 20日目（8月20日）第78回実行委員選挙、カラオケ

午前から法政大学に移動し、日米各々で第78回実行委員を決める選挙を実施した。選挙後は池袋に移動し、カラオケパーティーを楽しんだ。

### <参加者感想>

第78回日米学生会議の実行委員を選出するEC選挙が行われました。その後は全員でカラオケに向かい、修了証の授与が行われました。本会議最後の夜ということで最後はそれぞれの時間を楽しみました。

EC選挙では日本側は14人が立候補し、アメリカ側は5人が立候補しました。私は日本側の状況しか把握しておりませんが、立候補者それぞれがJASCへの強い思い入れがあるということがはっきりと伝わってきました。当選した8人には祝福の意を示すとともに、第78回日米学生会議を成功に導いてくれることを心から願っています。落選した候補者にもJASCでの経験を糧に是非とも活躍していただきたいと思います。

ファイナルフォーラムを終えて、この日デリ全員に修了証が授与されました。濃密なスケジュールで3週間駆け抜けてきましたが、すべてやり遂げたのだとようやく実感することになりました。

その後はフリータイムでデリはそれぞれの時間を過ごしました。私は日本デリとアメリカデリ合わせて10人以上で焼き肉とカラオケに行きました。別れが近づいているという喪失感に駆られながらも、最後の時間を最高に楽しく過ごすことができました。

東京科学大学物質理工学院材料系4年 長嶺 泰己



## 21日目（8月21日）解散

昼前の解散に向けてパッキングを行なった。アメデリはバスで成田空港へ、ジャパデリはそれぞれ帰路についた。



### <参加者感想>

三週間にわたる本会議の最終日。まだお互いを少ししか知らなかったところに春合宿で泊まった国立オリンピック記念青少年総合センターで、今度はアメデリもいるなかで最後の日を迎えていた。

始まりがあれば終わりがするように、このかけがえのない三週間にわたる旅路はいよいよ終わりの日を迎えようとしていた。その日の朝はそれまで感じなかった終わりという現実を唐突に背負い、実行委員への、参加者への感謝や惜別の思いを胸に、アメデリを成田空港へ運ぶバスが出発するその最後まで手を振った。アメデリが出発したときの何とも形容しがたい感情は生涯忘れないだろう。朝から晩までそのすべての時間をともにし、何気ない会話で気づく日米の差異や思わぬ共通点など、議論からそうでないありふれた対話というものがいかに貴重で尊いものであったか。真夏に京都で始まった三週間の本会議、そのすべての時間をともにした仲間とは対立がありながら、学生という対等な立場での共同生活がかげがえのない仲間であるとの意識を芽生えさせてくれた。一緒に暮らす日々はここで終わりを迎え、全員が一堂に会する機会が今後あるかはわからないが、この夏に肌で感じた様々な価値観、現地を訪れ、生の声を聴いて学んだものは、参加者全員の心のなかで今後のそれぞれの人生の指針となるだろう。本会議中に多くのアラムナイの方々が口をそろえておっしゃっていた、Once a JASCer. Always a JASCer という言葉を胸に JASC77 参加者はそれぞれの日常へと戻っていくのではないだろうか。

早稲田大学政治経済学部3年 宇賀 智徳

## 東京サイトを振り返って

### <参加者感想>

As the plane touched down in Tokyo, a wave of sadness washed over me. The realization that we are now nearing the end of JASC 77 hit so much harder than I had initially expected. While the past two weeks had passed in a blink of an eye, I still could not contain my excitement for the final week ahead. In truth, I had such a strong feeling of attachment to this conference and its people to the point where, from the bottom of my heart, I did not want it to end. These two weeks had already reshaped how I see the country I call home, and I couldn't wait to see how a single week in Tokyo might change the way I view my own hometown.

As a delegate on the Means and Meanings of Communication Roundtable, our discussion had primarily focused on the differences and similarities in communication between Japan and the United States. In other words, much of our discussion in the conference was mainly about soft power and grassroots perspectives. However, throughout the programming in Tokyo, our conversations evolved from discussing soft power to addressing the significance of hard-power, particularly in the realms of economic and national security.

On the other hand, I would also like to note some negative experiences in Tokyo. I heard some voices of delegates who did not feel comfortable taking part in the LGBTQ program because they feared other delegates may overstep and ask questions that were too personal. Although leaving the program was an option, some felt like leaving would cause unwanted speculations. While the public awareness for LGBTQ rights have significantly grown in Japan, I still felt as if the American delegates were skeptical of how accepting the Japanese society is towards sexual minorities. As a Japanese student, I sympathized with them, because there is inherent homophobia and lack of concern for the LGBTQ society in Japan. While JASC should be a place for honest dialogues even at times when it is difficult, having programs where some may feel personally uncomfortable should have been avoided. I do not glorify this experience, but I was able to gain a new perspective on Japanese society and engage in personal discussions outside of programming.

In Tokyo, what stuck with me the most was when Ambassador Fujisaki said that “mutual trust” is the most important in Japan-US relationship. Looking back, the Japadeles and Amedeles had troubles understanding each other at times, often caused by cultural difference or language barrier. There were many times when I disagreed with other delegates – but those discussions until late night and even just experiencing something together, as well as the late night konbini runs, karaoke nights, teaching each other about our background and slangs from respective countries – is everything that fostered friendships that will last forever. And when we work in the frontlines of Japan-US relationships, our bilateral relationship would be stronger than ever because we were friends.

On day 7, we had an EC election. I decided to run for EC because I wanted to be a part of this conference for another year. I was truly passionate to make JASC78 as life-changing as JASC77 was for me. At the end, I was very moved by the fact that my fellow delegates trusted me to run the next conference, and as chair, I will commit my best for another year.

When it was time to say goodbye to the American delegates, I had a very mixed emotion. Some of the delegates were crying. After lots of pictures, hugs, and goodbyes, I stood there numb. I felt proud, sad, happy, empty, nervous... I was overwhelmed. The three weeks truly felt like a dream, yet at that moment it also felt like a new journey had just begun. Walking through Orisen, I could confidently say that I was no longer the same person who had first arrived there. But one thing will always remain unchanged: I have always loved, and will always love, JASC more than anything I have ever done in my life.

慶應義塾大学法学部政治学科 2年 伊達 早和花

< 東京サイト総括・実行委員感想 >

我々は衆議院議員会館においてファイナルフォーラムを開催し、学術会議としての側面が担う責任を果たすため、長きにわたる分科会議論の成果を広く社会へと還元した。この試みが示唆するところは、日米両国が政治的動勢の変化と社会的分断の只中にある昨今において、相互理解を基盤とした二国間関係の再構築を学生自らが希求した構図である。

それはまた、太平洋戦争以前における第一回日米学生会議の発端と軌を一にしており、「歴史の循環」の中で再び同様の構図が表出したことを意味しているのではないか。

そのような分科会での議論を支え、かつ深化させたのは、シンクタンクや官公庁の研究者、要職を歴任した識者、さらには本社を置く多数の民間企業の存在と、それらの協力によって実現した公式プログラムの数々であった。

外交安全保障プログラム主担当としては、講義に臨むデリゲートの意欲的姿勢に驚嘆させられた。長らく企画立案・関係者調整を重ねた努力が彼ら / 彼女らの学びとして報われた瞬間でもあり、登壇者の皆様に感謝するばかりである。

そして、人・モノ・情報が高度に集積する首都圏「東京」だからこそ、これほど多面的な議論が可能となったのであろう。

また、フリーデイには都内の歴史的街並みを巡り、ポップカルチャーを肌で感じ取るなど、現代日本の文化的多様性を体感する機会にも恵まれた。

各々の歩む先々で、また出会える日を心待ちにしながら、第77回日米学生会議本会議は締めくくられた。

明治大学法学部法律学科3年 イビネディオン 嶺





## 第六章 分科会

### 戦略の時代の経営・経済

#### 分科会概要

産業競争力は経済成長の源泉である。日本は失われた数十年を歩み、その間、企業はコストカット型の経済の中で生産性を低下させ、競争力が低下したとされる。そして、日本はいま、世界のインフレ型経済で主流である事業の高付加価値化に回帰し、産業競争力を高めようと企図している。事業の高付加価値化戦略は、各企業が様々に努力を重ねている。他社の追随を許さない高度の技術開発を行ったり、ブランディングを強化したり、ロビイングを通して自社に有利なルールを形成したりと、非常に多様化している。また、各国政府も、自国の産業競争力を高めるため、補助金、規制緩和・強化、人的資本投資などを強化している。競合他社のみならず、上流・下流に至るまで多種のプレイヤーが現れ、競争環境が複雑化した現在の国際市場において、これらの手法を駆使して競争力を高めるためには、「戦略」が何よりも重要となっている。本分科会では、日米を中心に、企業のミクロな視点、政府のマクロな視点の両面から、実際に採られている戦略を分析し、競争力を高めるための道筋を考察することを目的とする。

#### 分科会コーディネーター紹介



#### イビネディオ 嶺 Ray IGBINEDION

所属：明治大学法学部法律学科3年

興味：法学部、民主主義とその要因について

趣味：読書（好きな本は「資本主義、社会主義、民主主義」）

#### 自己紹介

アイデンティティーの問題は私の行動の根幹となっています。日本とアフリカの血を受け継ぐ自分にとって、片方で生きることはもう片方を抜きには語れません。生来日本で過ごしてきたことは自らを日本人として意識することに繋がるわけではなく、むしろアフリカについて強く意識させることとなりました。差異は様々な疑問を想起させ、その原因を強く知りたかったのは大学一年の頃でした。大学二年時にはアメリカ政治と民主主義の問題点を理解するため、UC Berkeleyへ留学しました。これにより制度は必ずしも普遍的なものではないと学び、また先進国と途上国間の非対称性に興味を持つきっかけとなりました。現在はアフリカにおける権威主義、法の支配に内在する脆弱性が地域的紛争と貧困の要因であると考え、法学や政治経済学的な観点から理解と解決に向けて学びを続けています。

#### 分科会の設置意図並びに活動内容

産業競争力は経済成長の重要な源泉である。現代において経済主体は、技術開発、産業政策によるダンピング、さらには寡占市場の形成など、あらゆる「戦略」を通じて競争力の獲得を追求している。しかし、このような戦略的利潤追求は、Homo Economicusを前提とする資本主義経済において、むしろ本質的な現象であるとも言えよう。

この点を踏まえ、あえて「戦略の時代」と含みをもたせることで、当該時期はいつを指すのかという新たな議論を提示した点は、意義深い分科会名であった。

本分科会では、日本企業および米国企業の戦略を比較分析することを通じて、経済主体にとっての最適な“勝ち筋”を考察すると同時に、経済全体を俯瞰的に捉える視座の獲得を目指して運営を行った。

経済学は突き詰めれば数学に回帰する学問であり、合理的なモデルは時として現実から乖離

しうる。このリスクを十分に認識したうえで、各企業の異時点間戦略やニュース等から得られる最新の動向を踏まえ、主体的に意見を形成していく参加学生の姿には、実行委員として深い感銘を受けた。

分科会活動は、週2回の分科会における議論と、それに向けた資料収集を一つのサイクルとして、春合宿前から本会議直前まで継続して行われた。各産業における勝ち筋を分析する過程を通じて、最終的には日本企業全体に共通する構造的特徴を抽出することに成功した点は、本会議に向けた学習として極めて有意義であった。

### 主に扱ったトピック（一例）

分科会では、下記のトピックを扱った。

- ・日本企業の勝ち筋（商社／銀行／半導体産業／重工業等）
- ・トランプ関税と経済的影響
- ・テックとスタートアップ
- ・円安と技術革新
- ・経済安全保障と技術保護

### 本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

印象的であったのは、「円安と技術革新」をめぐる金融市場と実体経済の融合を論点とする議論である。

日米金利差の拡大や円キャリートレードの進展を背景に、対ドル円為替相場は下落基調を辿っている。自動車をはじめとする付加価値の高い重工業製品の輸出が GDP に占める割合の大きい日本経済においては、自国通貨の割安が輸出を押し上げ、経済にとって追い風になると捉えることも可能である。

しかし一方で、そのような為替環境下であっても、対日直接投資が必ずしも活発化していない点に着目し、日米間の投資環境や技術水準には依然として差が存在するのではないかという問題提起がなされた。こうした視点から、あるべき技術革新の方向性や、投資を呼び込むための制度・環境整備について、議論が深められた。

ファイナルフォーラムでは、こうした問題意識を踏まえ、日本企業がアメリカ市場へ進出する際の戦略を構造化し、モデルとして提示する試みが行われた。その具体例として、主要証券会社である三菱 UFJ フィナンシャル・グループとモルガン・スタンレーとの合弁関係などが取り上げられた。

### 分科会総括

本会議において、アメリカ側学生との議論を恐れることなく、積極的に準備と交流に取り組む姿勢から、今後の日本社会を牽引する若者の原動力を垣間見た。そうした努力が功を奏し、ファイナルフォーラムでは複雑なトピックでありながらも多様なケーススタディを盛り込んだ報告を実現し、集約された知見を広く社会へ還元することができていたと評価できる。

実行委員として、議論が硬直する局面においては、あえて「悪魔の代弁者」を演じることで議論に幅と深みを与える試みを行った。ファイナルフォーラムを議論の終着点と捉えるのではなく、参加学生一人ひとりが「心に悪魔を飼い」ながら、今後直面するさまざまな経済事象について思考を深化させていく。そうした契機として、本分科会が機能していれば、これに勝る喜びはない。

## 日本側メンバー紹介



### 水野 遥 Haruka MIZUNO

所属：名城大学薬学部 6年

興味：薬学、健康スポーツ科学

趣味：ピアノ、テニス、ゴルフ、映画鑑賞、読書

### 自己紹介

大学では薬学を専攻し、健康スポーツ科学の研究を通じて、スポーツや運動が人の健康に及ぼす影響を探究しています。薬学を学ぶ中で、医療は「治す」だけでなく「予防する」視点が不可欠であると気づき、身体活動の重要性に関心を持つようになりました。

学外では、製薬企業の学生アンバサダーとして、近年課題となっているドラッグロスの解決に向け、市民・医療者・行政を巻き込む啓発活動に注力してきました。

こうした活動を通じて、日本国内で最先端の医療、例えば遺伝子治療や細胞医療が安定的に提供される社会を実現するには、医療財政や政策だけでなく、経済的な視点が欠かせないことを実感しました。

また、これらの課題は一国で完結するものではなく、国際的な連携と対話が必要であるとも考えるようになりました。日米学生会議を通じて、異なる文化的背景や価値観を持つ仲間たちと、率直に意見を交わし合うことで、視野を広げていきたいと考えています。

戦略の時代の経営経済分科会では、ヘルスケアを含む多様な産業において、国家戦略や企業戦略がどのように関わるのかを日米両国の視点から議論していきたいです。

### 印象に残っている議論

近年、スタートアップへの投資は特定分野に集中し、社会・経済に多面的な影響を及ぼしている。特に国際的な緊張の高まりを受け、防衛技術の研究開発は国家戦略の一環として位置づけられつつある。こうした状況下で、スタートアップは単なる企業活動に留まらず、国家安全保障にも関与する存在となりつつある。しかし、このような成長が「富の集中」や「格差拡大」に拍車をかけている側面もある。こうした流れの中で注目すべきは、日本におけるスタートアップ環境の特殊性である。日本では、起業に対する社会的・文化的ハードルが依然として高く、「失敗は許されない」という価値観が根強く残る。また、市場規模やリスク資本の不足から、大企業への投資の方が成長幅が見込まれやすくとされ、若い起業家への支援が限定的になっている現状がある。一方米国では、起業家が尊敬され、失敗しても再挑戦できる「セカンドチャンス文化」があるのに対し、日本では失敗の烙印が長期的に残る傾向がある。しかし、日本で起業することには利点もある。例えば、技術力や高等教育の水準、安定したインフラ環境など、長期的な事業展開には適した条件が揃っている。さらに、既存の大企業が変化に適応しきれない中で、社会課題を起点とするスタートアップは、若者にとって新たなキャリア選択肢となりつつある。利益追求よりも社会貢献を優先するスタートアップも増えており、今後の産業構造や経済政策において、こうした動きがどのように位置づけられるかが問われている。スタートアップはもはや単なる「新しい企業」ではなく、国家戦略、経済構造、社会的価値観を含めた広範な戦略的要素を内包している。産業・国家・市民がスタートアップの意義と責任を共有し、バランスの取れた成長モデルを構築する必要がある。



## 滝沢 丈 Joe TAKIZAWA

所属：防衛大学校人文社会科学群 4年

興味：開発経済学、途上国における自然災害が与える影響

趣味：ランニング、楽器

### 自己紹介

私は「自分だけのオーソドックスを探す」ということを人生における目標としています。オーソドックスは日本語では「正統的な」や「型にはまった」という意味がありますが、単にオーソドックスであるだけでは納得がいきません。自分の中で、「この筋が最も正当なものではないか」と思えるような、自分だけのオーソドックスを探しています。自分だけのオーソドックスを探し求める上で、軸としていることが2つあります。1つ目は「科学技術」です。私は小学生の時からプログラミングに興味を持ち、中学校卒業後は高等専門学校（高専）で情報工学を専攻していました。2つ目は「社会科学」です。私は高専を3年で中途退学し、防衛大学校の公共政策学科で経済学、法学、社会学などの幅広い分野の社会科学を学んできました。日本では、文系・理系という枠組みが現代においても壁として存在する一方で、私たちの暮らしている社会には、その壁を超えて解釈する必要のある情報が飛び交っています。日米学生会議では、そのような情報を、学術的な環境がまったく異なる日米の視点から議論することによって、自分にとってのオーソドックスとは何かを考える大きなステップとなればよいと願っています。

### 印象に残っている議論

分科会の事前学習では、設定されたテーマや課題に対して、情報を徹底的に突き詰めて専門性の高い正確な答えを導くべきか、それともあえて情報を突き詰めすぎずに新たな視点を生み出すことを重視すべきかという議論があり、興味深く感じました。私たち「戦略の時代の経営・経済」分科会では、日本側の参加学生が全員、経済学部出身ではなかったことから、議論を始めた当初はそれをコンプレックスに感じていた部分もありました。しかし、発想を転換し、それぞれの専攻分野の知見を活かして議論を進めてみようかと合意したことで、大きく方向性が開けました。実際にその方針で進めてみると、異なる分野の情報を組み合わせ、日本にとっての新たなアドバンテージを模索するような方向へと発展し、新鮮な体験となったことを覚えています。本会議では、経済学部出身のアメリカ側の参加学生とも協力し、専門的な視点を交えつつも、新しい切り口を提示しながら、より意義深い議論にしたいと考えています。



## 小野萌絵佳 Moeka ONO

所属：早稲田大学法学部 3年

興味：国際法、国際政治

趣味：アクセサリー収集

### 自己紹介

「戦略の時代の経営・経済分科会」に所属しています、早稲田大学法学部3年の小野萌絵佳です。大学では国際関係を専門とするゼミに所属し、国際法や国際政治を学んでいます。国家間の利害調整や国際秩序のあり方に関心があり、大学2年の秋からはカナダに交換留学しました。

現地の授業では「日本」が完全に客観的な視点で語られ、主観的なバイアスがまったくかかっていないことに驚かされました。自分の国を外から見ることで、その立ち位置や役割をより冷静に捉えることができ、国際社会における日本の存在について新たな理解が得られたと感じて

います。また、多様なバックグラウンドを持つクラスメートたちとの交流を通して、学問を超えた広い視野を身につけることができました。

私は、ワクワクすることにはとにかく挑戦したくなるタイプで、特に旅先でしかできないような経験をするのが大好きです。小さい頃から海外に興味があり、将来は青年海外協力隊になるのが夢でした。大学1年生の時には、アフリカのルワンダでボランティアインターンに参加し、スラムでのホームステイや、現地の人たちと羊肉のバーベキューをしたりと、刺激的な日々を過ごしました。子どもたちと川の字になって寝た夜は、今でも大切な思い出です。アフリカでも一度もお腹を壊さなかつたくらい、胃腸の強さには自信があります。

本会議では、日米それぞれの視点を柔軟に取り入れながら、これからの経済戦略について真剣に考え、積極的に議論に参加していきたいです。

## 印象に残っている議論

2025年の経済分野における最ホットトピックは、やはり「トランプ関税」でしょう。トランプ氏が大統領に再び就任して以来、世界経済は大きな混乱と変化に直面しています。日本の基幹産業である自動車分野もその影響を強く受けており、追加関税の導入が日本企業の競争力やグローバルなサプライチェーンに与える打撃は看過できません。また、為替の変動や米国国内における製造業回帰の動きなど、経済戦略を取り巻く環境は一層複雑化しています。

私たちの分科会では、こうした情勢を受け、日米両国の立場や経済政策、さらにそれに対する企業や消費者の反応までを視野に入れ、議論を重ねてきました。一方的な保護主義と自由貿易の狭間で、日本はどのような戦略をとるべきなのか。その判断には、法制度、経済構造、国際関係といった多層的な視点が求められます。

「戦略の時代の経営・経済」分科会の強みは、全員が異なる専門性をもっていることにあります。経済を専門に学ぶメンバーがいないからこそ、固定観念にとらわれず、常に新たな視点から議論を展開することができました。トランプ関税に関しても、医薬品関税がヘルスケア分野に与える影響、WTO 違反の可能性を含む法的枠組み上の問題など、経済分野を超えた多角的な視点からの考察がなされました。

本会議では、こうした議論の成果をふまえ、「トランプ関税」に直面する日本企業や政策決定者が、いかにしてグローバル経済における競争力と持続可能性を維持すべきかについて議論をします。経済を専門としない私たちだからこそ描き出せる、分野横断的かつ実践的な提言を目指したいです。

## アメリカ側メンバー紹介





## 食と文化・社会

### 分科会概要

私たちの食の選択は、社会にどのような影響を与えているのか。食生活は生命を維持し、健康で幸福な生活を送るために欠かせない営みである。また、食は文化の中心であり、社会のダイナミクスを反映する重要な役割を果たす。その重要性は文化、経済、政治、技術など、多方面にわたって人々の生活の質に影響を与えてきた。一方、近年孤食や肥満、健康格差といった問題が食を通じて顕在化している。本分科会では、食の選択がアイデンティティや価値観をどのように形成し、社会に波及するかを探る。さらに、日米の食文化を通してグローバル化や食の安全保障といった視点から、持続可能な食のあり方についても議論する。どんな料理にも、思い出、人とのつながり、共通の歴史の遺産があるだろう。それらの実体験をもとに対話を行い、多角的に物事の本質を捉える参加者を歓迎する。

### 分科会コーディネーター紹介



#### 野添 葉音 Hanon NOZOE

所属：上智大学総合人間科学部社会福祉学科2年

興味分野：食、社会福祉、自立支援、コミュニティ

趣味：食、グリーディングカード集め、音楽、読書

### 自己紹介

上智大学総合人間科学部社会福祉学科2年の野添葉音です。

幼い頃から食べるのが大好きで、本分科会のテーマにも強い思い入れを持っています。たとえば、食は生きるために不可欠だけでなく、心の豊かさを育み、人とのつながりを生むこと。そして、食が紡ぐ一瞬一瞬が思い出として人生を彩るものだと思っています。最近では、分科会メンバーと共に多様な食に関する議論を行う白熱した時間が、日々の大きな生きがいです。

また、私は、耳の聞こえない母の存在をきっかけに、高校時代より障害者雇用について学び、ヒアリングを継続してまいりました。現在は、大学で社会福祉を理論に基づいて学ぶと同時に、障害者雇用支援事業の開発に携わっています。その過程で私は、現場に足を運び一次情報を得る「三現主義（現場・現物・現実）」の重要性を実感してきました。

日米学生会議においても、まだ学ぶべきことの多い学生であるからこそ、肩書きがない私たちだからこそ、分野を問わず新たな知見を得て、物事を多角的に捉える姿勢で議論に望むことが大切だと考えております。そして、本分科会においては、実地活動を重視し、一人一人の経験に基づく対話から生まれる化学反応を存分に楽しみたいと思います。

### 分科会の設置意図並びに活動内容

「食」という日常的で身近なテーマを通して、社会や文化を新たな角度から見つめ直すことを目的に本分科会は設置された。食は単なる栄養源ではなく、人々の価値観や歴史、宗教、経済、環境など、多くの社会要素と深く結びついている。私たちはその多層的な意味を掘り下げることで、食が社会にもたらす影響や、文化の多様性・共通性を考察した。活動は、週1回の定例ミーティングを基本とし、隔週で農業、フードビジネス、宗教・文化、行政など多様な分野のゲストスピーカーを招き、講話やディスカッションを行った。ゲストがいない回には、文献調査や国際比較、メンバー同士の発表と意見交換を通して理解を深めた。特に、他分科会と比べてケーススタディ（具体的な事例研究）を重視した点が特徴である。分科会での議論を通じて、参加

者は「食」を切り口に、社会構造・文化的価値観・経済システムの関わりを多角的に捉える力を養うことができた。また、自らの文化を相対化し、他文化の背景を理解する姿勢を学ぶ機会にもなった。

## 主に扱ったトピック（一例）

### 1. これまでの議論トピック

#### （1）日本農業と国際比較

- ・目的：アメリカとの比較から日本農業の特徴を明確化。
- ・論点：コメ生産：日本 700 万 t、アメリカ 870 万 t（長粒種中心）。補助金：日本は価格維持型の転作補助金、米国は価格支持・リスク補償。有機農業：日本 0.3%、米国 0.6%（EU と比べ低水準）。農業従事者：日本 68 歳、米国 58 歳（高齢化共通）。
- ・今後の議論：日米協力の可能性、有機農業拡大の是非、農業が食文化に与える影響。

#### （2）農業が「儲かりにくい」理由

- ・農業の特質：生産・移動の不可能性、外延性、不可減性、地域性。
- ・儲けにくい構造：需要飽和と価格弾力性の低さ。規模拡大困難（家族労賃の増大）。市場価格の不安定性（生産のラグ）。適地適作と輸送費。小売寡占による価格交渉力の弱さ（JA の役割）。

#### （3）食文化・マナーの比較

- ・日本独自のマナー：「いただきます」「ごちそうさま」に込められた感謝。
- ・国際比較：米国：宗教による祈りはあるが、食材への感謝文化は希薄。韓国：作り手への感謝を表す表現が存在するが、条件次第で省略可。
- ・文化的示唆：宗教・社会構造がマナー形成に大きく影響。

#### （4）宗教・文化圏と食の禁忌

- ・対象：ユダヤ教・イスラム教・ヒンドゥー教・仏教・ジャイナ教・ラスタファリ運動・中国伝統文化・アフリカ部族社会・日本など。
- ・共通点：宗教的規範や宇宙観、社会秩序の維持が食の制約を形成。
- ・特徴：日本は仏教・神道の影響で殺生や「穢れ」の概念が食文化に影響。

#### （5）食料安全保障の国際比較

- ・定義：必要な食料を適切に確保すること。
- ・日本の課題：輸入依存と生産基盤の脆弱化（人口 1 億人超の国で最小の農地面積）。
- ・事例：中国：食料安全保障法で作付・収益・政府責任を明確化。アフリカ：小麦輸入依存、伝統作物の衰退。インド：モンスーン依存、生産不安定性。政府買い上げと配給制度。

### 2. 政策提言への展開

#### （1）農業構造改革と持続可能性

- ・高齢化対策：農地バンクや企業参入の促進による担い手確保。
- ・有機農業支援：EU 型の有機農業補助金制度の導入、技術支援や市場拡大策。
- ・輸入依存リスク削減：主食作物の備蓄強化、FTA 交渉での食料安全保障条項の明記。

#### （2）食料安全保障の再定義

- ・リスク多元化：輸入先の多角化（ASEAN・アフリカとの戦略的連携）。
- ・国内生産基盤の再強化：耕作放棄地の活用、スマート農業への投資拡大。
- ・国際枠組みへの貢献：G7・APEC における食料供給安定の共同ファンド構想。

#### （3）文化・宗教を考慮した農産物外交

- ・禁忌配慮型輸出戦略：イスラム圏へのハラール対応農産物輸出強化。
- ・文化外交：精進料理や伝統農法の発信によるソフトパワー外交。

### 3. ディスカッション課題の具体化

#### （1）日本農業の構造的課題

- ・高齢化と小規模経営を前提に、日本農業はどの方向を目指すべきか？
- ・大規模化・企業参入か、それとも地域農業の維持・保護か。

(2) 有機農業と持続可能性

- 日本で有機農業を拡大すべきか？市場規模拡大は実現可能か？
- 有機農業推進は食料安全保障の観点でプラスかマイナスか？

(3) 食料安全保障の国際連携

- 日本は食料安全保障でどの国・地域と連携すべきか？
- グローバル危機時（パンデミック・戦争）に日本がとるべき外交方策は？

(4) 食文化と外交

- 食の禁忌や宗教文化を踏まえた日本の農産物外交はどうあるべきか？
- 伝統食文化（精進料理など）をどのように国際的な価値発信につなげられるか？

### 本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

本会議では、「食は単なる栄養ではなく、人間の生命・文化・尊厳を左右する力である」という前提から議論を始めた。食には、身体を気づかうケア、宗教儀礼や家族の記憶と結びつく文化的側面、安全で傷んでいない食を選べる尊厳の3要素がある。これらを踏まえ、食の生産・流通・アクセスを誰が握るかという問題は、身体だけでなく共同体や未来への支配と直結するという共通理解が形成された。

議論の中心となったのは、食が「攻撃の手段」として用いられる現実である。ガザの事例では、封鎖や支援物資の制限、軍事化された配給、農地や井戸、漁港、パン工場など食料インフラの破壊が同時並行で進み、食そのものだけでなく「食を作る仕組み」が失われている点が指摘された。また、記者の殺害や報道制限によって飢餓の実態が外から見えにくくなっていることも問題として取り上げられた。

防衛・倫理の議論では、ピーター・シンガーの議論を参照し、「加害行為は批判されても、『助けなかったこと』は批判されにくい」という指摘が共有された。飢餓が意図的に作られるのであれば、私たちにはその終わりを作る責任があるという点で意見が一致した。

最後に、対策として①飢餓を戦争犯罪として明確に扱うこと、②紛争当事国に依存しない人道アクセスの確保、③地域が自ら食を作る体制の復旧、④記者・監視機関の保護と情報の透明化が提案された。議論を通じて、食が暴力にも尊厳にもなり得るという現実を、多角的に理解する機会となった。

### 分科会総括

まず最初にみんなに伝えたいのは「信じてくれてありがとう」という言葉です。

皆さんにとって、知識も背景も異なるメンバーが集まり、模索しながら歩んできたこの半年間はどんなものでしたか。

分科会コーディネーターである私の一番の願いは、この分科会がみんなにとっての「練習台」であってほしいということでした。デリ時代、私は自分の殻に閉じこもってしまい、自身の意見を率直に話すことができませんでした。人には恵まれていたにもかかわらず、優秀な学生を前にして失敗することが恥ずかしく、「正解」を探すような発言をしてしまうことも多かった。知識不足や英語への不安から、何も言えずに終わる悔しさを味わった経験があったからこそ、今回の分科会では、「まずは自分から弱さも含めて開示して、ありのままにしよう」と決めました。そこで、米国側リーダーの Andrew と共に、誰もが安心して挑戦できる環境をつくることに注力しようと決めました。

振り返ると、正直、デリのみんなを迎えるまでの半年間の準備期間は不安でした。

特に、学生で、決して経験が豊富とは言えない私自身が、審査委員として同世代の参加者を選ぶこと。その責任の重さに、迷いがなかったわけではありません。

それでも、狭い門をくぐり抜けてきた中で、ひととき「光るもの」を感じたのが、この三人でした。これまでの想像を絶する努力の積み重ねによる実績はもちろんですが、物事や他者に向き合う姿勢やこれまでの生き方に触れたとき、誠実で信頼できる存在だと感じました。だからこそ、最初からこのメンバーを選んだことに迷いはなく、きっと上手くいくと思っていまし

た。

実際の議論では、食を切り口に分野や話題を広げるゆえの難しさがあり、みんなの中身は、テーマが定まらないもどかしさや、焦り、不安もあったと思います。本分科会を立ち上げた当初から、私も、「食を切り口に一から議論を構築することが簡単ではないという懸念点は理解していました。それでも、この問いに向き合ってくれるデリが集まってくれると信じ、みんなに託しました。また、私たちは、議論仲間で終わるのではなく、とにかくお互いのことを知ることを大切にしました。雑談の時間を多く取ったり、食 FT の名のもとに食事会を開いたり、全員が一丸となって試行錯誤をしていきました。でも、私たちは、箱を用意しただけで、その箱の中身を素晴らしいものにしてくれたのは、間違いなくデリの皆さんです。そして、私自身、意見が違っても歩み寄ろうとする姿勢、相手を尊重しながら自分の考えを言葉にする姿には、学ぶことばかりでした。そうした時間を共に過ごす中で、みんなの力で少しずつ信頼関係を築いてきたと感じています。

一方で、私は、リーダー経験の乏しさから、「自分の想いが本当に伝わっているのか」「みんなのために動いているか」と悩むこともありました。遠回りをしたこともあったかもしれませんが、それでも、みんなの努力する姿を見て大切だと思ったのは、お互いを知る機会をつくり続けること、なりふり構わず「信じている」という言葉を伝えることでした。そうして、私自身、どんな時も「信じて葉音についていく」と言葉にして伝えてくれた三人の存在があったからこそ、前に進むことができました。

そして、米国側リーダーの Andrew には、感謝してもしきれません。彼はどんな時も対話を大切にし、本会議までに計 40 回にわたるオンラインミーティングを共に重ねてきました。議題がない日であっても、信頼関係を保つためにコミュニケーションを取り続けてくれました。その支えがあったからこそ、私自身ものびのびと活動することができたと思っています。

一方で、実行委員という立場でありながら、アメデリへのフォローや本会議での議論進行を、Andrew や英語力に長けたデリに頼ってしまう場面が多かったことは、反省点です。自分の至らなさを痛感したからこそ、実行委員の任務を終える今、JASC で得たご縁や恩恵を忘れず、自分の未熟さと向き合いながら、次のフェーズでも邁進していきたいと思います。

そして、私たちには帰れる場所がここにあります。それぞれの道に進む一人ひとりの飛躍を願いながらも、少し立ち止まりたくなったとき、仲間の力が必要になったときには、いつでもここに帰ってきてほしい。そんな願いを込めて、心から応援しています。

初めてみんなで顔を合わせて、ネパール料理を囲んだ夜、真剣な眼差しで挑んだ議論、おちゃらけて笑いあった時間。揃わないことがあっても、諦めずに走り抜けた時間。全部が本当に懐かしいな。青春だったね。異なる背景や価値観をもつ私たちが、一つの船に乗り、同じ海を泳いだ経験は、これからの私たちの人生で、きっと背中を押してくれるものになると信じています。

最後に、この RT を選び、共に走ってくれたこと。そして、78 回の実行委員として、三人が思いを引き継いでくれたこと。

心からありがとう。

## 日本側メンバー紹介



### 手塚 颯一郎 Soichiro Tezuka

所属：慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程1年

興味分野：国際政治学・安全保障論、特に欧州と日本の安全保障政策

趣味：神社仏閣巡り、博物館見学、日本文学

## 自己紹介

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程1年の手塚颯一郎です。専門は国際政治学・安全保障論で、現在は NATO のインド太平洋戦略を研究しています。学部時代は法学部法学科で憲法や行政法を中心に学びましたが、2022年のロシアによるウクライナ侵略を目の当たりにし、国際秩序や安全保障の問題に強い関心を持つようになりました。これを契機に、大学院では国際政治学の観点から安全保障を研究する道を選びました。趣味は神社仏閣巡りや博物館見学、日本文学を読むことです。研究と直接のつながりはありませんが、高校時代から培ってきた歴史や文化に関する知識を生かすことができ、良い息抜きとなっています。

また学部時代から国際交流活動にも積極的に取り組んでおり、その集大成として現在は JASC で活動しています。国際情勢が大きく変化するなか、日米の学生と率直な意見交換ができることは非常に貴重な経験であり、多くの刺激を受けています。私は「食と社会・文化」分科会に所属し、食文化の衰退と維持、食糧安全保障、日米の農業の特徴など、食を切り口とした多様なテーマについて議論を重ねてきました。こうした経験を通じて、多角的な視点から国際社会の課題を捉える力を養っています。

## 印象に残っている議論

私たちの分科会では JASC 本会議での議論をより深いものにするため、定例会にて食料安全保障をテーマに据えた勉強会を行いました。背景には、「食」は文化や生活と密接に結びついていながら、国際情勢の変化によって最も脆弱な影響を受ける分野であるという問題意識がありました。とりわけロシアのウクライナ侵略による穀物価格の高騰や輸入依存リスクの顕在化は、日本を含む多くの国々にとって喫緊の課題です。

勉強会では、日本、中国、インド、アフリカ諸国などの事例を比較しながら、それぞれが置かれた経済的・歴史的条件と政策の特徴を確認しました。日本では輸入依存と国内生産基盤の脆弱化が課題であること、中国では食料安全保障法によって中央・地方の責任が明確化されていること、インドではモンスーンの不安定性を補うため政府買い上げ制度があること、アフリカでは輸入小麦依存が伝統作物の衰退を招いていることなど、多様なアプローチが浮かび上がりました。

議論は決して一直線ではありませんでした。例えば「政府の介入は市場を歪めるのか、それとも弱者を救うために不可欠なのか」という論点では、意見が分かれました。また、「孤食・共食」の文化的側面をどう安全保障とつなげるかについても紆余曲折がありました。しかし、最終的には「食料安全保障は単なる供給確保ではなく、文化や社会的つながりの維持とも深く関わる」という結論に至りました。

この勉強会を通じて、私たちは食をめぐる課題が単なる農業などの問題ではなく、社会・文化・国際関係が交錯する複合的なテーマであることを再認識しました。本会議では、こうした多層的な視点を踏まえ、日米双方の経験をもとにした政策的提案へと議論を発展させたいと考えています。



## 田中 遼弥 Ryoya Tanaka

所属：九州大学農学部4年

興味分野：農業経済学

趣味：読書・登山・旅行・演劇・俳句

### 自己紹介

私はこの文章を、木製の学習机で書いています。右手を伸ばせば、私の身長ほどの本棚があります。一番近くには水村美苗『本格小説』があります。その上には俳句に関する本を集めた棚、その上は専攻の農業経済学、その上は外交と安全保障、あとは分類なし、そういう本棚です。その横も本棚で、書類スペースには大量の授業プリントの間に演劇の脚本がいくつも挟まっています。その横もまた本棚です。その横にはラックがあり、一番下にアルティメット用のフリスビーとスパイクが無造作に積んであります。舞台照明に用いる機材もそこが定位置です。

机の上に目を戻すと、まずこの文章を書いているPCがあります。開いているのはWordとLINEです。LINEを見ると、私がそれぞれ代表を務めている九州学生俳句会と劇団のグループからの通知が数件ずつ溜まっています。高校の友人からの「山登ろう」という誘いも来ていました。事務連絡でない返信は言葉を選びたくなるので、少し溜めてしまいます。そして、PCの横には読みさしの本が積んであります。『農業経済学事典』（日本農業経済学会編）と『オリガ・モリソヴナの反語法』（米原万里）です。その他には何も置いていません。

「自分を表現する内容」ということで端的に私の半径2mを描写してみました。

これから関わっていく皆様の世界と、どのような形で接続していくのか楽しみです。

### 印象に残っている議論

本会議までのRT議論で印象に残っているのは、ファストフードとスローフードの比較を題材に行った、食文化の享受をめぐる議論である。食文化の盗用が行われているという問題意識を発端に「食文化のauthenticityとは何か」という議論が始まった。文化盗用に限らず、ファストフードはauthenticityを持ちうるのか、スローフードがauthenticityを持つ仕組みなどに話が及び、ファストフードとスローフードが二項対立で捉えられた。その中で、まず食文化が享受される仕組みを構造化すべきとの意見が提起され、食・食文化の担い手（個人、国家、地域など様々な形態が考えられる）・担い手の外部要因（経済的・地理的・政治的状況等）の3層の相互作用による食文化享受の構造が整理された。すなわち、食文化が享受される際には、担い手と担い手の外部要因の間における働きかけ（どちらからの働きかけもあり得る）が食そのものに影響を及ぼす、という内容を様々な具体例を挙げながら確認した。この構造を基に例として寿司を考察した結果、寿司はファストフードとスローフードの両方の性質を併せ持つ歴史を持ち流動的な評価を得てきたことが分かった。当初に二項対立とみなしていた論点が、連続的な変容過程とみなせることに気付き、印象深い議論となった。



## 山川 小春 Koharu Yamakawa

所属：早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科1年

興味分野：政治経済学、国際関係論

趣味：お菓子作り、音楽鑑賞、スポーツ観戦

### 自己紹介

早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科の1年生の山川心春です。

私は「食と文化・社会」分科会に所属していて、食文化や農業、食料安全保障など幅広く議

論をしています。この分科会を選んだ背景には、食べることやお菓子作りをすることが大好きということがあげられます。また食は生活から切り離すことができません。食べなければ生きることができないだけでなく、食は人と人の繋がりを深めてくれます。実際に高校時代にカナダに留学していた際、現地の友達と一緒に料理を作ったり食事を囲んだりする中で絆を深めることができました。またボランティアで訪れたザンビアでは、スラム街に住む子どもたちとカレーを作りました。バックグラウンドや年齢、言語など色々なことが違う中で、カレーを囲み交流することができました。分科会を通して、食が持つパワーについて議論できて、とても有意義な時間を過ごせています。

食べることやお菓子作りのほかには、音楽鑑賞やスポーツを観戦が好きです。スポーツ観戦に関しては、現場に足を運んで応援することはあまりないのですが、テレビを通して水泳やバレーボールなど様々なスポーツを観ています。そのこともあり、大学ではスポーツ新聞会に入っています。

## 印象に残っている議論

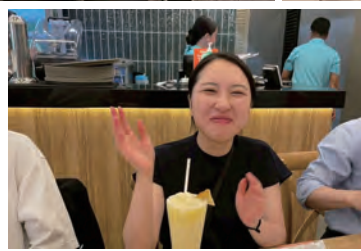
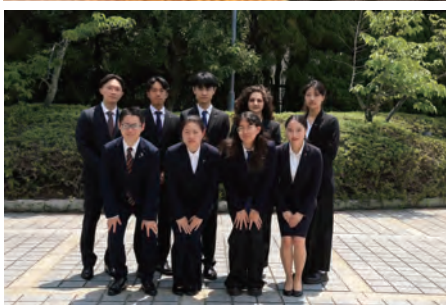
食と文化・社会分科会では扱うテーマが広範に渡るため、食文化というテーマから食の安全保障まで多岐に渡り議論してきました。その中でも一番印象に残った議論は、『ゆりか』という「文化的な雑誌」自炊の号に載っていた記事を元に進められた「食の哲学」です。

この回では、食べることは生きるために必要不可欠な行動でありながら、時に自傷行為や自己破壊に繋がってしまうという点について話し合いました。例えば、近年 Youtube などによく目にするドカ食いは、ご飯を大量に食べて血糖値を急上昇させ、そのまま眠るといような行為です。食を通じて一時的な快楽を得る一方で、身体への悪影響に繋がる可能性もあります。つまり、食べなければ人間は生きていけません、食べることで死に近づいてしまう可能性もあるということです。私はこうしたパラドックスに大きな衝撃を受けました。また議論を進める中で、特に記憶に残っているのは、長く生きることが良いと認識されてルールが用意されている人々が、ドカ食いなどといった自己破壊に走るのではないかという意見です。幸せを求める人間が一瞬の快楽のために自己破壊へ向かうのは、健康に生きることを強いる現代社会への反発があるのではないかと議論しました。

今回の議論で、私たちが日常的に行う「食べる」という行動が、実は哲学と結びつくことに気づくことができました。

## アメリカ側メンバー紹介





## 環境イノベーションと事業創造

### 分科会概要

世界が気候変動や環境負荷といった課題に直面するなか、パリ協定によって 2050 年カーボンニュートラルは世界共通の目標となった。各国が環境負荷の軽減とエネルギー資源確保の両立に苦慮している一方、民間企業や個々の起業家たちは気候変動対策や脱炭素化の流れを事業機会と捉え、世界にポジティブな影響を与えようと取り組んでいる。他方、革新的なアイデアであっても収益性を維持し、持続可能な事業へと発展させることは、依然として困難である。事実、2000 年代前半の気候テックへの投資ブームは需要や競争力といった問題から縮小していった。しかし現在、環境・エネルギーに対する多額の投資政策を受けて、環境関連事業への投資が高まっている。1 度目の失敗を踏まえ、民間セクターには新たな手法が求められている。本分科会では、環境・エネルギーという幅広い領域における民間企業の役割や課題、展望について現実の動向を踏まえて分析・議論することを目指す。

### 分科会コーディネーター紹介



#### 多田野 真仁 Masahito TADANO

所属：北海道大学 経済学部 経営学科 4 年

興味分野：エネルギー・環境政策、金融

趣味：スポーツ、ぼーっとすること

### 自己紹介

小中高とずっとなんらかのスポーツをしてきた人間で、大学ではハンドボールというスポーツをしています。自分は落ち着いた性格（自己評価）なのですが、スポーツをしているときは割とテンションが高いです。趣味は運動すること、それからぼーっとすることです。対極ではあるのですが、運動した分をチャージするために家ではぼーっとしている感じです。普段も真顔でどこかを見つめていることが結構あります。

自分は生まれが海外だったためか、幼い頃から海外のことに興味があり、ニュースで見る貧困や紛争について思案することもそれなりにありました。学生ながらこれらに取り組む方法として開発やエネルギー問題についても興味を持っていましたが、将来のキャリアとして追求するほどではなく、かといって大学の授業で深く扱うこともない状況でした。ただ、自分の興味の延長としてしっかりと理解したいという思いは常にありました。そんな矢先日米学生会議を見つけ、自分の興味について同様の関心を持つ人と議論できる環境に魅力を感じ JASC に参加することを決めました。昨年は環境経済やエネルギー安全保障をテーマにした分科会に所属し、同分野について少しは詳しくなったように思います。今年は実行委員として、参加者が知的好奇心を満たし議論ができる環境を作り上げるとともに、日米両国の参加者と充実した時間を過ごせればいいなと思っています。よろしくお願ひします。

## 分科会の設置意図並びに活動内容

本分科会で扱う環境・エネルギーは、文字通り我々の生活を根底から支えている点で時代の変化やそれに伴う政治・経済的なイデオロギーが色濃く反映されやすく、しばしばの論争的になってきた。他方、技術から政策に至る様々な論点が複合的に絡み合った極めて裾野の広い分野であることが、そうした場面での冷静かつ包括的な議論を難しくしてきたように思う。前者で言えば、ドイツを起点にした気候正義のアクティビズムやパリ協定によって Carbon Neutral が主役であった国際的な議論の重心は、ロシアのウクライナ侵攻を機に瞬く間に Energy Security へと移っていった。また、エネルギー安全保障（日本という文脈を踏まえた概念としてこう記述）を議論する上では、地理的制約や歴史的経緯、産業構造、国際情勢、政策、金融、技術などの論点が複合的な（独立ではない）形でパズルのように組み合わせられているために、どれか一つの専門家だけで議論を完結させることができず、議論の裾野が際限なく広がってしまう。

この前提に立ち、環境・エネルギー分野における包括的かつ本質的な議論を行いたいという崇高な理由と、1人で毎回のトピック決めと資料準備を行う能力と時間がないという卑近な理由から、本分科会は参加者が主体的にトピックを設定する自由度の高い建て付けとした。加えて、デリとして参加した昨年反省を踏まえ、米国側とのジョイントミーティングを5月以降2週間に一度という頻度で開催し、本会議でのディスカッション内容についても一定の合意形成が進められるようにした。

### 主に扱ったトピック（一例）

#### 【1】環境規制における欧州の優位性

環境先進地域としての地位を歴史的に確立してきた欧州では、排ガス規制や排出権取引が早くから整備されてきた。加えて、CBAM に代表されるような欧州を起点とし、他国に参加を余儀なくさせる国際的な規制も少なくない。このような「ブリュッセル効果」として説明される欧州の規制作成能力はどこから来るのか、どのような条件のもとでこの効果が発動するのかといった論点をもとに議論を行った。

実際の規制事例に基づいた考察のほか、同効果の発動条件についてはいくつかの条件を簡潔な形で整理した。また、このような規制能力を持つ欧州に対して日本、ひいては日米がどのような対応を取れるかについても議論を行い、その一部を春合宿で発表した。

#### 【2】日本は東南アジアにおける原発の新設を支援すべきか（ジョイント）

エネルギー安全保障と脱炭素の一つの現実解として、世界的に原発回帰の動きが顕著になりつつある。原発事故の余波を大きく受けた日本、さらには欧米諸国とは対照的に、世界の新設原発の多くはロシアもしくは中国が関与している。本議論では、電力需要の急増が見込まれる東南アジア地域において、国際協力および経済安全保障的な視点から日本がどのような立ち回りをすべきかという観点から議論を行った。

日本の被爆国としての一種の外交優位性や日本の技術優位性、費用便益などエネルギーに限定されない様々な分野からの観点で議論が進んだ。議論の具体性を増すためにフィリピンを対象国として絞り、フィリピンの目線から日本あるいは中露と協力する際の pros&cons を整理した結果、「①今後期待される SMR においては中国の関与もあり得なくはないが、②フィリピンの電力需要の伸びを踏まえると早急に手を打つ必要があり、既存タイプの原発の推進になりうることを踏まえれば、中国ではなく日本のような国との協力を模索することには一定の合理性がある。」という結論に至った。

### 本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

5月ごろから米国側とのミーティングを高頻度で行い、互いの議論内容を共有しながらも本会議トピックに向けての合意形成を図った。お互いに「これをやりたい」という確固たるテーマがあったわけでもなく、互いの関係性ができていなかったこともあり、はじめは互いのアイデアに対し肯定しあうだけでミーティングが終わることが多かった。そのような状況が続く中

で日本側も米国側も互いの本音が分からず、微妙な雰囲気になることもあったが、本会議が近づくにつれ本音で主張するようになったことでテーマも徐々に絞られていった。

本会議開始時には「核融合・原発」をテーマの核に据えることは一定合意が取れていたが、「どうアプローチをするか」「日米学生会議としてやる意味は何か」といった部分の議論に時間を費やしていた。議論が進むにつれて、より現実的な視点からの提案に重きを置き、核融合ではなく SMR(Small Module Reactor) に焦点を絞ることで最終的な合意が取れた。SMR 導入に関するインパクトの大きさから、米国における政策面からアプローチすることとなり、中でも影響力が大きく、かつ米国が直面する課題が集積するテキサス州において新たな SMR 政策を提案することになった。政策の立案にあたっては米国の政策に詳しい米国側参加者の助けも借りながら、SMR 導入の障害となりそうな既存政策の改善点等を詳細に洗い出した。最終的には SMR 認可申請の際のコストが不相応に高額であることや必要書類の量が多量に膨大であることなどを始めとする点を指摘し、それを改善する形でオリジナルの法案を作成した。ファイナルフォーラムではスライドの他に日英両方の言語で作成した法案を参加者が閲覧できるようにするなど、情報量や網羅性の観点から見ても素晴らしい発表となった。

### 分科会総括

振り返ると本当にあつという間の一年であった。分科会のテーマを米国側実行委員の Emile と考え始めたのが 2024 年の 10 月、環境・エネルギーというテーマを扱うこと自体は実行委員に選ばれた時から既に決めており、ビジネスや起業といったテーマに関心のある Emile と組むことになったのであった。分科会の内容や設計を話し合ううちにあつという間にメンバーが決まり、気が付けば 2025 年 3 月の第一回ミーティングを迎え、必死に調整をしているうちに本会議をも走り抜けていた。ただ、自身の至らなさや弱さ、それを上回るやりがいを感じていたこの期間は本当に濃密で、一つ一つの些細な出来事すらも鮮明に覚えている。分科会名の日本語訳を巡って Emile に謎の長文お気持ち表明をしたことも、本会議中のフィールドトリップで通訳がグダグダになってしまったことも、昨日のこのように思い出しては恥じ入るばかりである。

さて、本分科会は環境・エネルギー分野における現実主義的な議論を行う分科会であったが、国際関係や安全保障がメインテーマとなるこの JASC において、それらの重要な構成要素である環境・エネルギーについて議論し合える場を確保しておきたいというのが本分科会の設置理由の根底にある。この意味で、当初は参加者に学んでもらうことを意図して分科会を設計したが、蓋を開けてみれば参加者から学ぶことの方が圧倒的に多かったように思う。議論に対する姿勢、好奇心の赴くままに活動に取り組む姿、自身の役割を見つけて努力する姿勢、チーム全体のことを考えてあえて反対意見を言う姿など、議論の部分だけでも挙げればきりが無い。ただ一つ確実に言えるのは、この 4 人に助けてもらわなければ分科会として最後まで走り切ることはできなかったということである。分科会リーダーとして至らないことだらけだと感じることも多く、申し訳ない気持ちを抱くことも多々あった。分科会として、デリの自主性と興味に任せるのか、あるいはこちらが資料やトピックを指定して強度の高い活動を行うのか、この二つの方向性の中で最後まで確固たる方針を示すことができなかった。それゆえに分科会の議論が単発になりがちであったり、トピックを決めるのに時間を割いたが故に濃いディスカッションができなかったりと、デリに負担をかけてしまった部分も多かったように感じる。他にも自身の至らない点・改善点は多々あるが、全てを記すと多量の紙面を割くことになるため、地球の限りある資源を守るという崇高な理由から今回は割愛させていただく。いずれにせよ、至らぬ点が多い中でも熱心に参加し本会議まで走り抜けてくれたデリには感謝してもしきれない。JASC が終わってそれぞれがまた新しい挑戦と向き合っていると思うが、JASC77 での経験が少しでも原動力になれば幸いである。今後も分科会の仲間と軽口を叩き合えるような関係が続くことを願って本分科会の振り返りとさせていただきます。

北海道大学経済学部経営学科 4 年 多田野真仁

## 日本側メンバー紹介



## 長嶺 泰己 Taiki NAGAMINE

所属：東京科学大学物質理工学院 4年

興味：触媒、物性物理学、エネルギー安全保障

趣味：球技、読書、ドラクエ、庭園巡り

## 自己紹介

現在大学では触媒の研究を行っています。科学技術の力で社会を発展させたいという思いで理工系専門大学に入りましたが、日々のニュースに接しているうちに社会の現実に目を向けてこなかった自分の視野の狭さを痛感するようになりました。このことが政治、国際関係、ビジネスなど幅広い分野に関心を持つ現在の私を形成しています。JASC に応募したのもこのことがきっかけです。

私は幼い頃からドラゴンクエストが好きで、そのことに影響されたのか、私にとって人生の価値とは「知ること」と「成長すること」です。特に将来の具体的なキャリアを思い描いているわけでもなく、その場の探究心に駆り立てられて日々回り道をしてばかりです。しかし、その回り道の先にある自分にとって本当に大切なものを見つけられるように日々努力しています。いなすまのけんだって回り道しないと手に入りませんから（分かる方いるかな…）

## 印象に残っている議論

私の所属する RT においては、原発の可否など政策ごとには意見を同じくする場面が多かったものの、深掘りしたいテーマがそれぞれ異なっていました。国際的枠組みに関心を示す人、ファイナンスに関心を示す人、私自身は最適な電力システムやエネルギーシステムを模索することに興味を持っていました。全員の関心を反映させたテーマを設定することは困難ですし、後にはさらにアメリカ側とも合流するという点で、私たちはファイナルフォーラムに向けていかに上手く論点をまとめるかということに時間を割きました。

しかし、その過程では各人の関心テーマを把握することは必要でしたので、それぞれの関心を聞くうちに環境という分野には様々な視点が存在するということを実に認識することができ、とても良い勉強になりました。あるテーマに関して意見をぶつけ合うという機会はほとんどありませんでしたが、自分の視野を広げることができたという点で RT での活動は私にとって非常に実りのあるものでした。



## 大谷 葉月 Hazuki OTANI

所属：立教大学観光学部 4年

興味：ESG 金融、データ、観光学

趣味：自然や街の景色、料理、音楽を聴く、ダンス

## 自己紹介

大谷葉月（おおたにはづき）です。私は小さい時からスポーツが大好きで、小学校では地元のクラブチームに入りサッカーを、中高は部活とクラブチームを掛け持ちするほどバドミントンにのめり込み、運動中心の生活を送ってきました。大学では、小中高と同じような「運動」と「勉強」ではなく、何か新しいことに挑戦したいと思っていました。そこで5つのアルバイト、民間と非営利を含む5つの長期インターン、講演会の参加、3つの学生団体での活動、ファイナンスの大会出場など、様々な経験を通じて、自分の世界の「あたりまえをあたりまえと思わない」

よう、常に新しい環境に身を置くことを意識して過ごしてきました。新しいことへ挑戦するハードルは、この三年間でかなり低くなったと思います。

現在、私は ESG 金融に強く興味を持っていて、自然資本・社会資本と貨幣資本をどのように結び付け、好循環をつくっていきけるか、そのためのガバナンスはどうあるべきかについて、趣味のごとく四六時中考えています。振り返ると、毎年夏に、徳島県でゆず農家をやっている祖母の家で、大自然の中をのびのび過ごした経験が「自然」を意識する原体験になり、ここまで強く ESG 金融を学びたいと思わせる原動力になっていると感じています。日米学生会議でも、この「自然」に関わるテーマの分科会で議論ができて、本当に嬉しいです。

## 印象に残っている議論

一つこの議論と特定するのは難しいのですが、とても印象に残っていることがあります。それは、議論の中で常に「国力を上げるには」を意識するのが基本だったということです。これまで政治にあまり触れてこなかった私は、資本主義経済における「環境」を考える上で、どのような政策が良いかを議論するのに、その基本がいつも抜けていました。確かに国力を上げることは重要だと頭では理解できたものの、心のどこかで、環境が保全される経済活動であればこの国が強いのかはそこまで重要ではないのではと勝手に思っている自分がいました。しかし、フィールドトリップでのインタビューや環境に関する本を読む中で、なぜ国力を上げるような政策が大事なのかを、その背景にあるストーリーと合わせて学ぶことで、その意味が分かるようになってきました。そこから、「国力をあげるには」という視点に腹落ちした状態で、分科会の議論ができるようになったのは、自分の中で転換点になったように感じます。



杉本 幹太 Kanta SUGIMOTO

所属：大阪大学基礎工学部 3 年

興味：（主専攻）物理化学（副専攻）エネルギー安全保障

趣味：ドライブ、ラーメン巡り、温泉

## 自己紹介

私の知的好奇心の原点は、高校1年次に参加した次世代リーダー養成プログラムでのハーバード大生との出会いです。彼らが持つ論理的思考力と、複雑な国際問題を多角的に捉える高い視座に感銘を受け、「自らもそのレベルに到達したい」という明確な目標が生まれました。

その目標に向け、大学では実践の場として模擬国連に所属し、多様なステークホルダーの観点から国際問題を分析・再構築する訓練を重ねました。同時に、専攻である化学の知識と、新たに芽生えた地政学への関心を結びつけたいと考え、大阪大学の自主研究奨励事業において国際政治の教授の指導のもと、「水素の地政学」について独自の研究を進めました。

この研究をきっかけにエネルギー地政学への探求心が深まり、その学びを実践すべく、模擬国連では自ら気候変動枠組条約締約国会議（COP）をテーマとした会議を立ち上げました。

そして、化学とエネルギー地政学という複眼的な視点を武器に、かつて私に憧れを抱かせてくれた米国の学生たちと対等な立場で議論を交わすべく、日米学生会議の門を叩きました。このように、知的好奇心を起点として目標を設定し、分野を横断しながら主体的に行動を起こすことが私の強みです。

## 印象に残っている議論

ブリュッセル効果を巡る日米の知的格闘

日米学生会議の活動で最も鮮烈な印象を残したのは、春合宿で交わした「ブリュッセル効果」を巡る議論だ。当初の私の問題意識は、「EU のルールが事実上の世界標準となる現状に、日米

はどう連携して対抗、あるいは協力していくべきか」という、戦略的な視点に立っていた。EU が自身の価値観を反映した環境に対する厳格なルールを域外に適用することで、ルール形成の主導権を握り、米国や日本の革新的な企業の参入障壁となっている、という主張だ。三日間に及ぶ白熱した知的な格闘の末、私たちのテーブルは一つの鮮やかな結論に到達した。日米が取るべき道は、保護主義だと批判して基準を引き下げることではない。むしろ、日米が主導し、EU よりも透明で開かれた多国間のプロセスを通じて、新たなグローバルスタンダードを構築し、世界に対して魅力的な「もう一つの選択肢」を提示することだ。それは、単なる対抗策ではなく、未来の国際秩序におけるルール形成の主導権を巡る競争なのだ。机上の知識が、参加者の多様な視点とぶつかり合うことで、立体的で血の通った洞察へと変わった、忘れられない経験となった。



### 木築のぞ美 Nozomi KIZUKI

所属：早稲田大学文化構想学部 2 年

興味：戦前戦後の文学比較、中国史や安全保障問題

趣味：中国象棋、バスケ、華道

### 自己紹介

私は早稲田大学文化構想学部の二年生です。大変怪しい学部名ですが、好きな文学 / 歴史 / 文化などを自由に研究できるこの学部は、年間読書量 100 冊前後の私にとって天国のような学部で、気に入っております。

私は 2 歳から小学生の間はタイのイギリス系インターや LA で過ごしました。中学や高校ではバスケット部や高校模擬国連に属しつつ広山流の華道の活動を開始し、高二では第 44 回日中学生会議参加者として日中両国のソフトパワー外交と民間企業の可能性に関して分科会で討議し、発表しました。大学では、夏の UCLA 留学でアメリカ政治やシリコンバレーの IT 企業と地元住民の間の隠された社会問題に関する勉強や、三国志研究の一環で歴史書「後漢書」の漢文読解を集団で行うなどして参りました。今年の秋には最難関の HSK6 級を受験予定です。

これのみではなぜ環境の分科会を第一希望にしたか腑に落ちない人がいるかもしれません。私もこの経歴を見直して少し疑問に思いました。結論、どの分野も必ずエネルギー問題に紐づき、可及的速やかに検討すべき事項だと強く思うからです。普段、私は呑気に読書や象棋をしています。この日常は誰のおかげで成立していて、いつまで続くのでしょうか。世界でカーボンニュートラルの共通目標ができた一方、日本でどれだけ世界の流れについていける技術革新が起きているのか、そもそも革新が起きる土台は形成されているのか。特に近年はウクライナ危機や中東情勢によって、尚更日本の多様なエネルギー確保法の確立が求められています。私たちの当たり前を守るために、全ての産業の礎であるエネルギーをこの夏再検討したいです。

### 印象に残っている議論

RT で最も印象に残った議論は、核を用いた原子力発電や核融合発電の日本での可能性です。いくら再エネ技術や事業が発展しても、ベースロード電源にはなりにくい以上、日本はエネルギー供給源として原子力に頼らざるを得ない状況です。核融合発電はまだ実験段階ですが、南仏には日本をはじめとする各国が国境を問わない世界規模の核融合開発プロジェクト ITER が行われており、この電力の安定性や安全性が注目を集めています。一方、日本は太平洋戦争時の核被爆国であり、福島第一原発事故も近年経験しているため、「核」に対する拒絶反応が他国と比較したら濃いです。周辺地域や住民との理解のすり合わせが一層必要という結論に至り、その上でアメリカとどう協議するかが RT で盛り上がりました。アメリカはスリーマイル島の原発事故を経験していますが、近年は GAF A 企業が AI や半導体開発のための電力を供給するために原子力発電所に多額の出資をしており、再燃しています。加えて、テキサス大学が今年

5月に核融合研究における未解決問題を実験段階での解決に至るなど、核に関するエネルギー産業はアメリカでも勢いができつつあります。両国の学生が集ったらどんな見解や意見が出るのか？日本学生側一同、本会議での討論を楽しみにして参りました。

### アメリカ側メンバー紹介



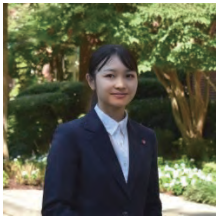


## 科学技術と倫理

### 分科会概要

急速な科学技術の進展と、それに伴う倫理的・社会的課題の増大が深刻である。AI、バイオテクノロジーなどの新興技術は、社会に革新をもたらす一方で、不平等の拡大など新たなリスクも生じさせている。たとえば、昨今遺伝子操作技術が注目を集めているが、技術の利用はどの程度倫理的に許容できるのか。また倫理面を考慮し、人間の超えてはならない一線を守る仕組みは技術者・民間企業で構築できるものなのか、または政府の関与を必要とするのか。このような問題意識を背景に、本分科会は各技術のもたらす倫理的課題について多角的な観点から議論し、その上で、技術の使用を前提としつつも公平な社会を築くために技術者・民間企業・政府がいかなる働きかけをすべきか、考える。技術の進化が人類に幸福をもたらし、有益かつ持続可能なものとなるよう、模索する。

### 分科会コーディネーター紹介



石賀 悠 Haruka ISHIGA

所属：早稲田大学先進理工学部生命医科学科 2年

興味：生命医科学

趣味：テニス、映画鑑賞

### 自己紹介

早稲田大学 先進理工学部 生命医科学科 2年の石賀悠です。趣味はテニスで、中学ではテニス部に所属し、真剣に取り組み充実した時間を過ごしました。現在も大学のテニスサークルで副幹事長として活動しています。第76回日米学生会議を通して、私は新しいことに物怖じせず、コンフォートゾーンから抜け出すことができる質の高い行動力を身につけることを目標に日々精進しました。自身の専攻分野である生命医科学とは異なるエネルギー分野に関する、英語を用いた本音の議論は今まで私が経験してきたどの経験よりはるかにアカデミックでハードなものでした。この壁を乗り越えようともがく中で自分自身がこれまで感じたことのない「成長」を遂げることができたと自負しています。その壁を乗り越える経験は、自分一人ではなしえないものであり、何度もぶつかり合ってくれたECや、分科会の仲間の存在によってはじめて達成されたものだと感じています。JASCで出会った沢山の素敵な仲間たちへの計り知れないほどの感謝をここに捧げたいと思います。

### 分科会の設置意図並びに活動内容

近年、AIやバイオテクノロジーなどの新興技術は急速に発展し、社会に大きな革新をもたらす一方で、倫理的・社会的課題も同時に深刻化している。技術が人間の可能性を拡張する一方で、不平等の拡大や生命操作への懸念など、私たちが「どこまでを許容できるのか」という根源的な問いを突きつけている。こうした時代の転換点において、技術の進展を単なる科学的成果としてではなく、人間社会の在り方と結びつけて捉え直す必要があると感じたことが、この分科会を設置した最大の理由である。

本分科会では、そもそもの科学技術と倫理の定義を見直すという抽象的な議論をしたのち、遺伝子操作や優生学、菊陽町の半導体工場と環境問題、水俣病など、具体的な事例を通して「科学技術の進化と倫理の境界」について多角的に議論した。

また、形式的な勉強会ではなく、各メンバーが自身の関心や専門分野、体験をもとに自由に議題を提案する議論の場を目指した。週一回のRT時間では、事前に選定した資料(書籍・論文など)を読み、印象や論点を共有した上で議論を深める。毎回の議論を振り返りつつ、次回のテーマ

をメンバー全員で決定することで、多様な観点を取り入れながら継続的に思考を深める仕組みを築いた。

本分科会は、科学技術の恩恵を享受しながらも、人間が超えてはならない一線をどのように守るのかという問いに真正面から向き合う場であり、技術と倫理の共存を社会全体で考えるための小さな出発点となることを目指している。

### 主に扱ったトピック（一例）

#### 【1】科学技術とは倫理とは

分科会の初期段階では、まず「科学技術」と「倫理」という二つの概念を捉え直すことから始めた。どちらも現代社会において密接に関わり合いながらも、その定義や射程はしばしば曖昧であり、両者の関係を明確にしなければ本質的な議論は進まないと考えたためである。

私たちは、科学技術とは何を指すのか——自然科学的な研究や発明に限るのか、あるいは社会科学や人文知を含む広義の「技術」を指すのか——という問いに加え、倫理とは何か——法やモラル、宗教とどのように異なり、どのように重なり合うのか——という問いを、文献や実例をもとに検討した。これら二つの議論を行き来する中で、倫理も技術も人間の営みそのものから切り離せない存在であることを確認した。

ときに両者は対立し、ときに補完し合う。私たちはそれを単なる「規範と応用」という関係として捉えるのではなく、人間が技術を通して何を実現し、倫理を通して何を制御しようとしているのか——その根底にある“人間の意思”を探る議論へと展開していった。

わずか1~2か月という短期間で、抽象的かつ根源的なテーマを扱うことは容易ではなかった。それでも参加者それぞれが自身の経験や価値観をもとに具体例を持ち寄り、そこから普遍的な真理を模索した。この過程こそが、本分科会の探究の出発点である。

#### 【2】AIの登場によって顕になる人間の存在価値とは

生成AIの登場によって、人間の労働や役割のあり方は急速に変化している。自動化が進む一方で、人が関わらざるを得ない対人サービスやケアなどの領域では、むしろ雇用の需要が拡大すると言われている。このような時代において、改めて問われるのは「人間の存在意義とは何か」という根源的な問いである。AIが多くの知的・機械的作業を担うようになった今、人間にしか持ち得ない価値は何か。

私たちはこの問いを出発点として、「人間にあってAIにないもの」を探求した。たとえば、人間は「第六感」とも呼ばれる直感的な理解や、他者と共に時間を過ごすことの温かさを持つ。ある出来事の記憶を語る時、私たちは単なるデータではなく、「そこに誰がいて、どんな感情が交わされたか」という“存在の共有”を思い起こす。このような人間特有の感性や共感の在り方こそ、AIには再現できない領域ではないかという議論が交わされた。

分科会では、AI研究者であり看護師である今井さまを招き、実際の医療現場での人と技術の関わりについて意見を伺った。その中で提示された問いが印象的である。

「もし終末期のがん患者がホスピスに入ったとき、そこでのケアがすべてAIとロボットによって提供されていたら、あなたはそのような場所で最期を迎えたいと思うだろうか。」この問いは単なる技術論ではなく、「人間としてどう生き、どう死を迎えるか」という倫理的かつ哲学的な問題を私たちに突きつけた。

さらに、この議論はJASCという会議そのものの存在意義にもつながっていった。もしAIが最も効率的かつ創造的な未来構想を描けるのであれば、果たして学生が集まり議論を重ねるこの会議には価値があると言えるのか。AIが答えを導き出す時代にあっても、なお私たちが「人と交わり、共に考える」場を持つことの意義とは何か。

## 本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

本会議では「Science Communication (科学コミュニケーション)」を中心テーマとして、政治・経済・社会・科学界の多面的視点から科学技術と倫理の関係を探究した。

科学コミュニケーションとは、専門家と非専門家の間で科学的知識・方法・影響を明確かつ双方向的に共有し、認知 (Awareness)、関心 (Interest)、理解 (Understanding)などを促す営みである (Burns et al., 2003)。単なる情報伝達ではなく、信頼構築と価値の共有を重視する点に特徴がある。

議論では、科学技術が政治や経済、日常生活のあらゆる選択に深く関わっている現状を踏まえ、なぜ正確で開かれた情報共有が必要かを検討した。

公衆衛生、気候変動、AI や遺伝子編集などの分野では、専門的知識の非対称性が判断を歪める可能性があり、国家や企業には透明で説明責任ある発信が求められることを確認した。市場における「完全情報」仮説の限界も議論し、企業はブランド戦略にとどまらず、倫理的説明責任を果たす必要があるとした。

フィールドトリップでは、熊本・水俣病の事例を通じ、情報隠蔽や対応遅延がもたらした悲劇を検証した。科学的リスクを早期に共有しなかったことが被害を拡大させた点から、「予防原則」「公共信託原則」「被害者保護義務」という3つの倫理原則の重要性を学んだ。一方、台湾 TSMC の事例では、詳細な情報開示と多機関連携により透明性を確保している点を肯定的に評価しつつ、専門的すぎる表現が一般市民との距離を生んでいる課題も指摘された。

総じて、科学技術の発展が社会に受容されるためには、専門家だけでなく市民・企業・政府が共に理解し、語り合う「対話としての科学」が不可欠であるという結論に至った。

## 分科会総括

本分科会の半年間の議論内容は、当初私が想像していたテーマから派生し、全く新しい視点での議論が生まれた。本会議では、アメリカ側と日本側で、何を発表すべきか、分かれる場面もあったが、その背景には事前学習や文化的な土台の違いがあったと感じる。そうしたズレを超えて、互いに敬意をもって対話を重ね、時には妥協点を探りながら、時には譲れない価値観を真摯に伝え合う姿勢が、議論を白熱させたと感じる。

議論は英語で行われ、スピードも速く、すぐに意見を出すことが難しいと感じた参加者も少なくなかった。しかし、そうした仲間に寄り添い、全員で一つの意見を形づくっていく過程には、JASC ならではの温かさがあった。JASC という友情と探究心で結ばれた場だからこそ、互いに支え合いながら思考を深めることができたのだろうと感じる。この光景は、分科会リーダーとして何より誇らしい瞬間であった。

昨年、自分自身が議論のスピードに必死で食らいついていた頃を思い出すと、今年のメンバーたちの成長を第三者の視点で見守ることができたことは、非常に感慨深かった。迷いながらも一歩ずつ言葉を紡ぎ、自分なりの論理の道筋を形成していくその姿は、美しいものであった。

この三週間の議論を通じて得た学びの内容もちろん大切だが、それ以上に、異なる背景を持つ仲間と衣食住を共にし、葛藤や発見を共有したという経験そのものに価値があると思う。どんな感情であれ、この期間を通じて自分の中に何か小さな気づきや変化を見つけたなら、それこそが最大の成果であると信じている。

## 日本側メンバー紹介



### 伏谷飛鳥 Asuka FUSHITANI

所属：京都大学工学部 3年

興味：化学プロセス工学、移動現象

趣味：サッカー

## 自己紹介

私はドイツのベルリンに生まれ、幼稚園の時に日本にやってきました。流暢なドイツ語と共に日本にやって来ることは叶いませんでしたが、2006年に開催されたドイツワールドカップの熱気は身にまとっていたようで、サッカーを中心とした生活を高校まで送ることとなります。

サッカー人生では、最終的に愛知県得点王などの成果も挙げましたが、それまでは試合に出られない苦しい時間が大半でした。その時間に自分と向き合った時間は今となっては貴重であり、得た学びは数え切れないほどありますが、特に「(今) 全力で挑戦し、失敗することで自分の立ち位置と努力の必要性を知り、未来の自分に過剰な期待を抱かなくなること」や「まずは量をこなすことで自分に合った方法が見え、質が高まること」、「今いる(良い)環境は当たり前では無い事」という教訓はあらゆる活動において活かしています。

現在は京都大学で化学プロセス工学を専攻しています。幼いころからサッカーに打ち込む一方で、アカデミックな世界に身を置く父の姿に憧れを抱いてきた自分は、大学では学問を中心とした生活を送ってきました。大学3年目の現在も、専門的な知識や技量を体得したとは言えないように、この世界で身を立って行く難しさを痛感しています。同時に、1年次にはその意義が分からなかった基礎知識が、一見無関係な分野であっても繰り返し現れ、互いにつながっていくという面白さを感じる事ができています。

## 印象に残っている議論

事前学習の中で最も印象に残っている議論は、「私たちが科学技術と倫理について考える意味は何か」という議題である。過去のJASCの報告書を見ると、同様のテーマを扱った分科会が数多く存在し、現在の私たちの議論と重なるような内容や流れが記されていた。それは、このテーマが時代を越えて問い続けられてきたこと、そしてその問いに対して一つの一般解を与えることがいかに困難であるかを物語っているように思えた。特に、科学技術の発展が加速する現代においては、倫理的判断が事例ごとに異なるため、あるケースで導き出された結論が他の場面には容易に適用できないというジレンマがある。しかし、他のデリの意見やアラムナイの方々からの助言を通じて、「議論の過程にこそ大きな学びがあり、その過程を可視化し、記録として残すこと自体に意味がある」という考えに触れたとき、自分は議論に対して解や結論を求めすぎたのではないかと気づかされた。その後、様々な分野を扱い、日米の多様なバックグラウンドを持った学生と共に意見を交わし、視野や知見を広げていけていると感じる。また、学生という立場や自分が生きる時代の特徴を活かした議論を繰り返して、その過程が少しでも次の時代の道標になるように励んでいきたいと感じた。



## 岡崎 ヴィクトリア瞳子 Toko Victoria OKAZAKI

所属：早稲田大学先進理工学部3年

興味：物理学、量子力学

趣味：アニメ鑑賞、インスタグラム更新

### 自己紹介

私は日本とウクライナのダブルで、東京で生まれ育ち、都内のインターナショナルスクールに通っていました。日本のコミュニティに踏み込めていないのではないかと感じたことから、日本人としてのアイデンティティをもっと確立したいという思いがあり、日本の大学に進学しました。以前、渡米した際に現地の学生から日本について聞かれてもうまく答えられなかった苦い経験が、「日本の歴史や文化、価値観をしっかりと理解し、伝えられるようになりたい」と考えるきっかけになりました。

その思いから、大学では被災地に足を運び、震災後も地域で暮らしを築いている方々の話を聞いたり、ボランティア活動に参加したりしています。また、内閣府の「クールジャパン戦略」の一環として、まだ外国人はもちろん、日本人にもあまり知られていない日本の魅力を発信する活動もしています。

一方で、教育のあり方にも強く関心があります。以前、家庭教師として、たった週1時間の指導で2年分の数学を数ヶ月で教えた経験があります。それが可能だったのは、その生徒に合った方法で学習を進められたからだ実感しました。この経験を通して、個別最適化された学習の重要性について考えるようになり、「AIやデータを活用すれば、もっと柔軟でより公平(equitable)な学び方ができるのではないか」という問いを持つようになりました。その問いを探求したいと思い、JASCでは「科学技術と倫理」分科会を選びました。

分科会での議論を通じて、「科学技術において倫理とはどうあるべきか」、そして「幸福をもたらす、公平な社会を築くための科学技術のあり方」といった本質的なテーマに向き合えたことは、とても楽しく、学びに満ちた貴重な経験でした。この第77回日米学生会議を作り上げた全ての方々に感謝しています。

### 印象に残っている議論

A topic that left a deep impression on me during the RT was our discussion on the role of utilitarianism in the advancement of technology. This was a very eye-opening topic for me. Going into the conversation, I had not realized just how deeply rooted utilitarian thinking was in quite a handful of modern technological progress. Prior to this discussion, I had often considered the risks of certain technologies and their innovation, however, I had rarely considered who it benefits and at what cost. We focused our discussion on a simple yet compelling question: "Is it acceptable to sacrifice the wellbeing of the few for the sake of the greater good of the many?" To explore this, we turned to multiple case studies. One case study that we investigated was modern automobiles. For example, the development of the car is often viewed as a significant and game-changing technological advancement. Still, some people would even call it a "deal with the devil": while cars brought speed, efficiency, and accessibility, they also introduced an influx of traffic-related injuries and fatalities. From a utilitarian perspective, the drawbacks of cars may be justified in the sense that the benefits to the many outweigh the harms to the few. However, from a deeper, emotional standpoint, this framing leaves many people feeling uncomfortable. Such a discussion raised the question of consent, in the sense of whether the public is truly aware of and able to accept the tradeoffs and sacrifices that follow technological progress. While this particular conversation did not reach a definitive conclusion, it was the one that inspired our topic for the main conference:

How should Japan and the U.S. ethically communicate emerging technologies to the public, in a manner that allows for informed consent on the benefits and drawbacks?



## 宇賀智徳 Tomonori UGA

所属：早稲田大学政治経済学部 3年

興味：出生前診断と優生学のつながりとその社会の受容

趣味：宝塚歌劇、ミュージカル観劇

### 自己紹介

宝塚歌劇をはじめ、ミュージカルが大好きな宇賀智徳です。舞台上のみならずオーケストラピットも見るのが好きです。

現在は早稲田大学の政治経済学部・政治学科に在籍しており、公共性や思想史に興味をもって勉強しています。ゼミでは出生前診断と優生学のつながり、またそれらが社会にいかを受容されているのかを研究しています。少年野球を始めて、高校では硬式野球部に所属していました。大学に入ってからヴァイオリンパートで弦楽合奏サークルで活動しています。チームでなにかをやるという経験を多くしてきたことから、今回の日米学生会議では分科会、日米学生会議として様々な議論を乗り越え、ここでしかできない経験をしたいと考えています。

私はデジタルネイティブ世代として育ち、科学技術の進化は親世代の生活に新たなものが増えていたころよりかはきつと穏やかで、見えないところでの急速な普及があると考えています。その科学技術の恩恵には日々預かる一方で、そのものが持つリスクというものはその目新しさ、革新的な魅力などに目が引かれて見えないことが多々あると思います。これは百年前に進化論という目新しい概念が人々の興味をひき、血液型の遺伝や遺伝病が発見され、人間という種を人為的に進化させていくという発想の革新さに目がくらみ、そのものの裏面に存在していたとてつもない恐怖である優生思想に少なからず通ずるところがあると考えています。まさに出生前診断といった最前線の科学技術を今一度、捉えなおし、見つめなおして、倫理という側面をもとに問いただしていく分科会活動にしていきたいと考えています。

### 印象に残っている議論

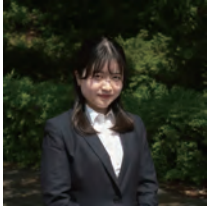
私が最も印象に残っている議論は科学技術と倫理の立ち位置についてです。議論は、それぞれ科学と倫理が何を指すのかを捉え直すところから始まりました。

まず、科学については、自然科学や社会科学、応用科学といった分類に着目しました。私たちは自然科学が基盤となり、その上に応用科学が発展してきたと考えました。そしていわゆる社会科学はこれらとはやや距離のあ科学であるという見解に至りました。ここでは科学の捉え方の多様さが印象的でした。また科学と技術についての乖離なども話し合いました。

その後、倫理についての議論に移りました。日常的に用いる「倫理」「倫理観」「モラル」といった言葉は、そもそも何に由来するのか。また倫理とは一つの価値観ではなく、さまざまな要素を内包する複雑なものではないかという視点も提示されました。科学技術が社会に適用されていく中で人間の尊厳をどう守るのか、公平性をどう担保するのかといった課題も倫理の中核をなすと考えました。

議論の最終段階では、科学技術と倫理が相互にどのような影響を及ぼし合っているかに焦点を当てました。特に近代において急速に発展する科学技術に対して、倫理が「歯止め」として働く場面に注目しました。また社会が科学技術を求めるプロセス、実際に利用する段階、さらにその成果が社会に還元される過程において、倫理がどのような役割を果たすのかを検討しました。

私たちの分科会で扱うトピックをミクロな個別事例にとどまらず、マクロな視点から捉えて議論できたことは、非常に印象的でした。



## 大橋莉央 Rio OHASHI

所属：トリニティ・カレッジ（ダブリン大学）教養課程コース1年

興味：社会医学や公衆衛生など医療に通ずるもの全般

趣味：ヴァイオリンや手芸など室内でできること

### 自己紹介

私はアイルランドの Trinity College Dublin に在籍し、本会議後9月から医学を専攻します。また、ZEN 大学という日本のオンライン大学でも数学やデジタルツール、経済など（その他興味がある分野の全て）を学んでいます。また、それ以前は他大学の看護学科生でもありました。高校在学時も同様に日本、カナダ、イギリス系など4校の高校に通いうち2校を卒業しました。このように学校の掛け持ち癖のある私ですが、小中と高校の前半までは大学附属の学校に通っていたものの、コロナ禍で1人の時間が増えたことにより自らの将来を見つめ直したいと思うようになったため、ここまでアクティブになりました。また、ユニークなポイントとして4人兄弟の2番目でギネス記録を2つ保持しています。

一方で、私の興味の核は医療であり、幼少期に偉人伝記集でナイチンゲールに出会ってから絶対に将来は医療従事者になるという夢がありました。しかし、16歳のときインターンをしていた大学病院で自殺未遂の少女に出会い、彼女が看護師とのコミュニケーションに障壁を抱えている様子を目の当たりにしてから身体を治すだけではなく、社会的にサポートが必要な人を援助する仕組みや優れた医療制度が不可欠であることを痛感しました。以後、社会医学に関する研究を行い、移行期医療（小児科から成人期医療への移行）やレプリコンワクチンに関する査読付き論文が国際学術誌に掲載されました。将来は臨床医と研究者の2方向から多国の医療に寄与したいです。

JASC では技術で世界を牽引する米国の学生らと医療等の倫理問題について語り合いたいと思いついて応募を決意しましたが、実際は RT の議題である科学技術は幅が広く、AI の活用や化学など私が疎い分野で知識を養う貴重な機会となり、本気で討論をし合える仲間たちとの出会いは一生の宝物となりました。また、JASCer、EC、アルムナイの皆様、協賛企業様、またプログラムのために尽力してくださった多くの方々へ心からの感謝をお伝えするとともに JASC の学びを将来へ最大限に活かすことを約束します。よろしくお願いたします。

### 印象に残っている議論

幸せの定義に関する議論が印象に残っている。私たちの RT の英語のタイトルには Happiness というキーワードがあるため、科学技術の発達が幸福にどのような影響を与えるのかを軸に話し合った。地方サイトとして向かう熊本でかつて問題となった水俣病（現在も被害者認定や救済の問題があるが）に関する議論が印象的だった。本来、チッソはアセトアルデヒドの生産により水俣市の雇用や税収の向上に寄与していたが、当時の不十分な科学技術と知識により、適切な処理がなされず排水されたメチル水銀によって生物濃縮を起こした魚介類を食べた人々は神経疾患：水俣病を発症した。アセトアルデヒドはビニールなどの化学製品の原料となるため、より多くの人が恩恵を受け、当初は地域活性化などにも寄与していたが、幸福とは逆の立場にいた人がいたことを無視してはいけないと思う。このように、科学技術の発達に伴う光と影についてや、ニコマコス倫理学など哲学的な視点、また、核に守られていることは幸せなのかという倫理的な観点など、他分野に興味を持つ RT の仲間たちで議論が白熱した。一方、その後のフィリピン研修にて多くの科学技術の恩恵を受けていないスラム街の子どもたちと交流したとき、シンプルなゲームやギフト、短い会話に対して屈託のない笑顔を向けられ、科学の発展がなくとも人は幸せになれるのか、もしくは別のファクターがより幸福度の向上に寄与するのかもしれないと正解のない議論に再度頭を悩ませられたが、自ら、周囲そして社会の幸福を考える貴重な機会となった。

アメリカ側メンバー紹介





## コミュニケーションのあり方

### 分科会概要

コミュニケーションはあらゆる場面で重視され、「伝え方」に関連する書籍も数多く出版されている。多様な形態をとるコミュニケーションは、過去から現在に至るまで大きな変遷を遂げてきた。近年では、機械翻訳を始めとする技術の飛躍的進歩により、言語・時間・空間の垣根を越えた会話が可能となった。一方で、感性の共有や相互理解を含む対話の質は向上しているといえるのだろうか。本分科会では、日常会話から災害時や観光における意思疎通、さらにマイノリティや社会的弱者を取り巻くコミュニケーション環境など、日米の多方面に渡る事象を切り口に、コミュニケーションの意義やこれからの姿について、領域横断的に議論する。

### 分科会コーディネーター紹介



小川 志穂 Shiho OGAWA

所属：東京外国語大学言語文化学部3年

興味分野：コミュニティ通訳

趣味：ダンス、美術館巡り

### 自己紹介

私は現在、大学で「コミュニティ通訳」と呼ばれる分野について学んでいます。コミュニティ通訳とは、外国人の日常生活を支える通訳のことで、行政通訳、司法通訳、医療通訳などが含まれます。このような言語や文化に関する分野への関心の背景には、小学3年生の一年間を、米国テキサス州の人種的に多様な地域で過ごしたことがあります。この経験から異文化理解や多文化共生に関心を持ち、自分も異文化間の橋渡し役になりたいと考えてきました。

第76回会議に日本側参加者として参加し、私自身に多くの学びをもたらしてくれた JASC に対して、今度は会議の運営面で貢献したいと思い、第77回会議の実行委員になることを希望しました。今年の会議を通して感じたのは、参加者の満足度が高い議論の環境作りは、実行委員のファシリテーション能力にかかっているということです。そのような重責を担う実行委員として、第77回会議に携わることができたことを、大変光栄に思います。持てる時間と労力を全て注いででも取り組みたいと思える日米学生会議に出会えたことは、私の学生時代において一番の財産です。

### 分科会の設置意図並びに活動内容

世間で取り沙汰される社会問題の根源には、往々にしてコミュニケーションの課題が存在すると考え、コミュニケーションの視点からそれらの問題を読み解く分科会を設置したいと考えた。3月から春合宿までは「コミュニケーションの前段階」というテーマで議論を行い、春合宿後は「子ども」、「AI」、「異文化コミュニケーション」など、毎週異なるテーマを取り上げた。また、特筆すべきこととして、5月と6月にそれぞれ実施した他分科会とのジョイントミーティングが挙げられる。5月27日（火）に実施した食と文化・社会 RT とのジョイントミーティングでは、「孤食・共食」をテーマに、食とコミュニケーションの関係について議論した。6月24日（火）に実施した科学技術と倫理 RT とのジョイントミーティングでは、フィリピン研修を経て生まれた『「幸せ」とは何か』という問いについて話し合った。本会議では、各サイトの FT（フィールドトリップ）で学んだ内容を出発点として、「コミュニケーションとテクノロジー」をテーマに米国側参加者と議論を深めた。以下に、事前学習期間および本会議中に当分科会が実施した FT を記す。

【1】 合同会社ぴーすふるファーム代表 齊藤和平様（オンライン）

開催日：4月16日（水）20:00～22:00

テーマ：「コーチングについて」

【2】 日本女子大学文学部日本文学科 田邊和子教授（オンライン）

開催日：6月14日（土）20:00～21:00

テーマ：「日本語の家庭内呼称の使用の変化について」

【3】 Universidad de Córdoba Dr. Gisella Policastro Ponce（オンライン・日米合同開催）

開催日：6月14日（土）21:00～22:00

テーマ：“Challenges in the translation of wine labels: Terminology, Discourse and Culture”

【4】 松乃鮨 四代目 手塚良則様（オンライン・日米合同開催）

開催日：7月14日（月）17:00～18:00

テーマ：“Expressing Japanese culture through The Tokyo-Style sushi”

【5】 ぴーすふるファーム訪問（対面）

開催日：6月27日（金）

テーマ：「コーチング」、「対話」

お世話になった方々：

齊藤和平様

齊藤美紀様

【大阪サイト】 リーガロイヤルホテル大阪訪問（講義・ロールプレイ・館内見学）

開催日：8月4日（火）

テーマ：“Hotel Industry and Our Philosophy of Hospitality”，“Hospitality Theory and Roleplay”

お世話になった方々：

株式会社ロイヤルホテル

経営企画部 ブランド戦略推進室 室長 高坂順子様

人事部 接遇専任講師 吉田富貴子様

人事部 十時あや様

【熊本サイト】 熊本市国際交流会館訪問（講義・館内見学）

開催日：8月8日（金）

テーマ：「熊本地震の経験から現在の活動」（講師：アンドリュー・ミッチェル氏）、「熊本地震時の多文化・多言語対応」（講師：八木浩光氏）

お世話になった方々：

一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団

常務理事 八木浩光様

事務局長 勝谷知美様

熊本大学 大学教育統括管理運営機構

特任助教 アンドリュー・ミッチェル様

【東京サイト】 LOVOT MUSEUM 訪問（ミュージアム見学・講義）

開催日：8月15日（金）

テーマ：「GROOVE X 株式会社の紹介」、「LOVOT（コミュニケーションロボット）の開発背景」

お世話になった方々：

GROOVE X 株式会社

グローバル部 劉峪伽様

本分科会にご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。

主に扱ったトピック（一例）

【1】孤食・共食とコミュニケーション（5月27日）

5月27日(火)に食と文化・社会 RT と合同でディスカッションを実施した。テーマは、「孤食・共食」。子ども食堂や高齢化社会といった切り口から、「孤食は悪いことなのか」、「一人で食べる文化は日本特有なのか（日米の比較）」といった問いについて、コミュニケーションや社会福祉の観点から話し合った。家族観の変化や一人焼肉などの「一人飯」文化を踏まえ、なぜ孤食が生まれたのか / 増えたのかについて考えた。また、孤食・共食の定義についての議論では、「孤食・共食は二項対立ではない」という結論に至った。



【2】「幸せ」とは何か

6月24日(火)に科学技術と倫理 RT と合同でディスカッションを実施した。6月のフィリピン自主研修では、水上のスラム地域を訪問し、そこで暮らす子どもたちと交流した。日本への帰国前にバス車内でリフレクションを行った際、参加者からは「『幸せ』とは何かを考えさせられた」という感想が聞かれた。このことから、科学技術と倫理 RT とコミュニケーションのあり方 RT で、フィリピン研修で得た知見を踏まえて「幸せ」について議論することにした。取り上げた問いは、以下の通りである。

- ・「幸せ」はお金で買えるのか？
- ・「豊かさ」と「幸せ」の関係とは？
- ・「幸せ」かどうかは誰が決めるのか？

議論では、「幸せ」の定義を考えてからフィリピン研修に参加したが、スラムの子どもたちと交流し、「こうあるべき」という定義がないと考えさせられた、という意見や、「幸せはお金ではない」という価値観は裕福な人による押し付けであるという意見、知る機会がないと他の幸せのあり方について考える余地もないという意見などが挙げられた。



このほか、当分科会では、「コーチング」、「コミュニケーションの前段階」、「子どもとのコミュニケーション」、「異文化コミュニケーション」、「AI と友達になれるか」等のテーマについて議論した。

### 本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

本会議中は、各サイトでの FT やプログラム内容から着想を得て、主にテクノロジーとコミュニケーションについて議論した。ファイナルフォーラムでは、“Technology and Communication: How Can We Preserve Meanings Amidst Changing the Means?” というテーマで、テクノロジーの進歩がコミュニケーションのあり方にもたらした影響について発表した。天草地方の潜伏キリシタンや大阪万博で見学した NTT パビリオン、東京サイトで体験した LOVOT（コミュニケーションロボット）などの事例から、コミュニケーション手段の変遷や AI が果たす役割について考察した。

### 分科会総括

3 月に参加者を迎えてから、居住地や知識量、語学力などが異なる中でも、各参加者が分科会の議論にコミットでき、また一人一人の考えが同等に尊重、反映されていると感じられる議論の環境作りができればと考えてきた。その一方で、日本開催である今年度は、サイト準備に関する日本側実行委員の負担が大きく、分科会の運営に十分に携われないこともあった。また、扱うトピックに関する自由度が高い分科会設計となっていたため、メンバーのテーマ選択に期待を膨らませる一方、議論の軸を見失いやすいのではないかという不安もあった。しかしながら、それらは全て無用の心配であった。参加者は各々が事前準備に真剣に取り組み、そのことが毎週のディスカッションの質を大いに高めていた。バックグラウンド・専攻・学年の異なる四人が丁寧に作り上げていく議論は唯一無二であると感じた。議論の進め方に関して価値観の相違が明らかになった際には、強引に議論を進めるのではなく、全員が納得するまで話し合いを重ねて問題に向き合っていた姿が強く印象に残っている。

最後になるが、多忙な学生生活の中、ミーティング準備に時間を割いて取り組んでくれた四人の日本側の参加者に、心から感謝の気持ちを伝えたい。それぞれ異なる次のステップへと進む四人が、今後の人生においてふとした瞬間に当分科会での議論や日米学生会議で過ごした時間を思い出し、それが何らかの意味をもたらしてくれれば、この上なく嬉しく思う。

## 日本側メンバー紹介



### 田中 大輔 Daisuke TANAKA

所属：早稲田大学大学院 スポーツ科学専攻スポーツ科学研究科 修士2年  
興味分野：スポーツ社会学 ブラジルの体育における身体コミュニケーション  
趣味：たこ焼きパーティー

### 自己紹介

一生懸命が取り柄のスポ根人間かなと思います。笑

小学5年生からバレーボールを始め、周りには全日本に入る選手など非常に恵まれた環境で競技を続けていました。私は周りの選手より一回りセンスがなく苦労しましたが、中学生からは毎日バレーボールの練習に明け暮れ、全国大会で結果を残すために日々活動していました。(高校時代は寮生活で、外に出た覚えはなく、オフも4日程度だったような、)しかし、大学では心機一転、バレーボールを辞め、東京五輪ボランティアや在日外国人支援でのスポーツ活動などに参加し、競技スポーツとは違うスポーツ現象に興味を持ったため、大学院に進学しました。つまり、スポーツが僕のアイデンティティです！

Jasc という場所は、私のバックグラウンドとは少し違った環境であると思います。学生最後の年に、その環境でどんな成長が出来るのかを自分自身模索しつつ、まずはスポーツ根性で頑張ります！

### 印象に残っている議論

最も印象に残っている議論は、「N対1のコミュニケーションにおいて信頼はどのように生まれ、どう失われるのか」という問いに対する議論である。政治や著名人の事例を切り口に、N対1の構造について幅広く意見を出し合った。1対1では裏切りがあっても対話や行動の積み重ねによって信頼を回復できる可能性があるが、N対1では一度生じた疑念が大衆全体に拡散し、再構築はほぼ不可能ではないかという意見や、一方では、SNSなど新しいメディアが登場し、発信者・受け手双方の責任がより複雑になっているという指摘も興味深かった。特に「真実は疑いようがない」という意見と、「真実そのものもあやふやで、意図と行動が乖離することもある」という意見に関して印象深く、二項対立ではない意見や事例があった。「受け手も価値判断なしで背景を考える姿勢が必要」ということや真実に関わらず、その背景や発信意図を理解することが必要であり、また発信者はどんな時でも誠心誠意であるという基本を改めて認識することができた。



### 森 聡子 Satoko MORI

所属：広島大学・教育学部・4年  
興味分野：教育学（主：初等教育、副：幼・中高（英語）、図書館司書）、学習開発、地域教育  
趣味：海外旅行、お絵描き、読書

### 自己紹介

広島大学教育学部4年の森聡子です。教育学部では主専攻としては初等教育を学んでいますが、副専攻としては幼稚園、中学校（英語）、高校（英語）、図書館司書と様々な免許取得のために勉学に励んでいます。現在は教育の世界ではよく出てくる「環境を通した教育」という言葉に興味を抱いています。子ども達は環境を通して学びを展開していきますが、その環境を操れるのは教師であり、いかに環境を設定し、整備するかによって子どもの学びが変化するとこ

るに教育の奥深さを感じています。自分自身も”環境”を変えて学ぶ経験を大切にしたいという思いから、日米学生会議に応募しました。また、日本だけでなく海外の環境にも触れるべく、海外の現地学校にも訪問し、各国の教育制度や授業の在り方を自分の目で見て学んできたほか、外国にルーツを持つ児童生徒への学習支援や、社会教育施設を活用した地域との連携にも関わってきました。こうした経験の中で、多文化共生社会における教育の意義や、地域全体で子どもを育てる取り組みについても考えるようになりました。

私は、今までの経験も踏まえつつ、異なる環境で育った人と語り合い、背景を理解し合う中で広がる世界に魅力を感じています。JASC77では、多様な仲間との対話から多くを学び、自分自身の教育観や価値観をさらに深めていきたいと思っています。素敵な人たちとの出会いを大切に、実りのある夏になるよう精一杯頑張りたいと思います！

## 印象に残っている議論

私が RT で一番印象に残っている議論は、異文化間コミュニケーションについて指標をもとに整理しながら話し合った回です。この回では、Hofstedeらが提唱した6つの文化的次元（権力格差、個人主義—集団主義、男性らしさ、不確実性回避、長期志向—短期志向、放縦—抑制）を指標として用いました。分科会のメンバーはそれぞれに関連する論文を読んだり、自身の体験談を振り返ったりしながら、具体的なコミュニケーションの場面と照らし合わせて議論を深めていきました。特に印象的だったのは、コミュニケーションを通じて相手の印象がどのように変化していくのかを考えた場面です。その中で、印象には「表情や雰囲気などから表面的に受ける印象」と、「国籍や性別といった事実情報による印象」の二層があるのではないかという意見が出ました。前者は会話を重ねる中で変化しやすい一方で、後者は変化しづらく、それゆえに相手を傷つけてしまう可能性があるという気づきがありました。この視点から、コミュニケーションの過程をより細かく捉えることができたように思います。また、この議論では、印象を「抱く側」だけでなく「抱かれる側」の立場にも立って考えることができたのも大きな収穫でした。同じトピックであっても、視点を変えて向き合うことで新たな発見が生まれることを実感しました。相手の視点に立って考えることの大切さを、あらためて学ぶことができたように思います。この回の議論をまとめる際には、特に難しさを感じました。何を軸に整理すべきか悩んでいたところ、JASC COMEBACKの際にいただいたアドバイスをヒントに、春合宿で作成した「コミュニケーションの過程を分類する図」を活用することにしました。各自が議論を振り返りながら、既存の図に自分の視点を書き加えたり、必要に応じて新たな要素を追加したりすることで、議論全体を視覚的に整理しやすくなりました。

この一連のプロセスを通じて、時には積極的に問いを掘り下げる「貪欲さ」と、時には一歩引いて振り返る「冷静さ」の両方が、議論の質を高めるうえで重要であることに気づかされました。理論と実践、主観と客観のバランスをどう取っていくかという点においても、大きな学びのある時間となりました。



中田 怜 Rei NAKATA

所属：京都大学法学部3年

興味分野：政治学、ヨーロッパ政治

趣味：散歩

## 自己紹介

私は神奈川県出身で、中学校卒業までは水泳とシンクロナイズドスイミング（現在のアーティスティックスイミング）に励んでいました。水泳は50mのバタフライで神奈川県3位になっ

た経験があります。シンクロは秀でた成績が残せませんでした。その後横浜翠嵐高校を卒業し、現在は京都府で一人暮らしをしながら、京都大学に通っています。法学部の3回生です。9月からはイギリスのニューキャッスル大学で1年間留学する予定です。趣味は散歩です。毎日10000歩以上歩いています。京都は比較的長閑な町であるため、毎日散歩しながら、悠々適度な大学生活を満喫しています。目的なく散歩することも好きですが、ゴールを決めて散歩することも好きです。去年は徒歩で山手線を一周することに挑戦し、無事達成しました。62,841歩、10時間45分かかりました。大学在学中に、京都の下宿先から神奈川県の実家まで徒歩で帰宅したいと考えております。距離は山手線一周の約10倍なので、相当な覚悟が必要だなと思っています。5月にJASCで自己紹介をした時はクッキーを食べることとランニングが趣味だと話したのですが、飽き性が故に、すでに関心がなくなってしまっています。後先のことを考えずに、そして現在のことも深く考えずに、心が赴く方向に突き進んでいきたいです。

## 印象に残っている議論

「コミュニケーションはいつ開始するのか」という議論が印象に残っています。「コミュニケーションのあり方」という分科会のタイトルは非常に広範かつ抽象的であったため、集まった4人の関心領域は大きく異なっていました。その結果まず「何をテーマに議論するか」という点について合意を形成すること自体に、多くの時間を費やすこととなりました。議論の出発点として、私たちはそもそも「コミュニケーションとは何か」という問いに立ち返る必要があると感じ、その一環として「コミュニケーションはいつ開始されるのか」という視点に注目しました。議論の中では発話の開始をコミュニケーションの出発点と捉える立場と、相手の性別、国籍といった属性を認識し、何らかのイメージや先入観を抱いた時点を開始点とする立場とで、意見が大きく分かれ、春合宿では深夜まで議論が白熱しました。当初は、正解のない問いに対して、自信を持って自分たちの見解を提示することに不安を覚え、「権威ある論文を参照し、その結論を借用するべきではないか」と悩んだこともありましたが、しかし最終的には、4人それぞれの視点を持ち寄って、独自の答えを模索する過程そのものがこの議論の価値であると気づきました。そしてその対話を通じて、JASCに参加した意義を実感することができました。春合宿ではコミュニケーションの開始点について、結論に至ることはできませんでしたが、この議論をしたことが、その後の分科会活動の土台となりました。私たちは最終的にコミュニケーションとは単なる言語的やり取りのみならず、むしろ発話以前の段階、つまり個人の属性（国籍・性別など）や、他者に与える印象（容姿や雰囲気に基づく無意識の評価、レッテル張り）に大きな影響を受けているという見解にたどり着きました。本会議中も今までの議論に立ち返り、重なる部分がないかを考え、議論を発展させていきたいです。



### 伊達 早和花 Sawaka DATE

所属：慶應義塾大学 法学部政治学科2年

興味分野：政治学（アメリカ）

趣味：サッカー観戦, Taylor Swiftを聴くこと

## 自己紹介

慶應義塾大学法学部政治学科二年生の伊達早和花と申します。私を作り上げる要素はたくさんありますが、500字という字数制限があるので、中でも私の人生を大きく影響した物事について述べたいと思います。私は物事に熱中し、突き進むことが得意です。猪突猛進は私の短所でもあり長所です。昔から何か一つに熱中できたのは、いつも見守ってくれる家族のおかげでもあります。ベトナムで過ごした多国籍コミュニティの影響が強いと思います。自分の好きを追求することを恥じない人たちの姿は幼い私に大きな影響を残し、今の私を作っています。

また、私が日米学生会議に応募した理由でもあるのですが、高校の卒業論文でアメリカ政治に興味を持ったことも人生の大きな転機でした。アメリカについて知る中で、文献では知り得ないアメリカの学生の考え方を深く理解したいと思うようになり、3週間アメリカの学生と寝食を共にできる本プログラムに応募しました。アカデミックなことを述べましたが、高校時代はフェンシング部で部活に打ち込んでおり、JASC とは少しかけ離れた活動をしていました。しかし、それでも何か一つに熱中し、チームで高みを目指すということは JASC と共通していると思います。

## 印象に残っている議論

私が RT で一番印象に残っている議論は、異文化間コミュニケーションについて指標をもとに整理しながら話し合った回です。この回では、Hofstede らが提唱した6つの文化的次元（権力格差、個人主義—集団主義、男性らしさ、不確実性回避、長期志向—短期志向、放縦—抑制）を指標として用いました。分科会のメンバーはそれぞれに関連する論文を読んだり、自身の体験談を振り返ったりしながら、具体的なコミュニケーションの場面と照らし合わせて議論を深めていきました。特に印象的だったのは、コミュニケーションを通じて相手の印象がどのように変化していくのかを考えた場面です。その中で、印象には「表情や雰囲気などから表面的に受ける印象」と、「国籍や性別といった事実情報による印象」の二層があるのではないかという意見が出ました。前者は会話を重ねる中で変化しやすい一方で、後者は変化しづらく、それゆえに相手を傷つけてしまう可能性があるという気づきがありました。この視点から、コミュニケーションの過程をより細かく捉えることができたように思います。また、この議論では、印象を「抱く側」だけでなく「抱かれる側」の立場にも立って考えることができたのも大きな収穫でした。同じトピックであっても、視点を変えて向き合うことで新たな発見が生まれることを実感しました。相手の視点に立って考えることの大切さを、あらためて学ぶことができたように思います。この回の議論をまとめる際には、特に難しさを感じました。何を軸に整理すべきか悩んでいたところ、JASC COMEBACK の際にいただいたアドバイスをヒントに、春合宿で作成した「コミュニケーションの過程を分類する図」を活用することにしました。各自が議論を振り返りながら、既存の図に自分の視点を書き加えたり、必要に応じて新たな要素を追加したりすることで、議論全体を視覚的に整理しやすくなりました。

この一連のプロセスを通じて、時には積極的に問いを掘り下げる「貪欲さ」と、時には一歩引いて振り返る「冷静さ」の両方が、議論の質を高めるうえで重要であることに気づかされました。理論と実践、主観と客観のバランスをどう取っていくかという点においても、大きな学びのある時間となりました。

## アメリカ側メンバー紹介





## デザインとメディアにおける美学

### 分科会概要

SNS 上での情報拡散による真実の不透明化、宗教的価値観のみならず社会的・倫理的価値観に基づく正しさの再定義、商業主義やテクノロジーによる美の基準の変容。時代や文化により異なる強調がなされてきた「真・善・美」の追求の形は、物質的に満たされた消費社会の発展に伴い現代も変化している。日米におけるこの「美学の探求」のあり方に着目し、互いの文化的背景を理解することは、ステレオタイプを取り除き、より深い相互理解を促進するために不可欠である。本分科会では、異文化の認識形成に顕著に寄与する芸術、ファッション、映画、SNS といったデザイン及びメディアに反映された両国における美学の探求に焦点を当てる。そして、文化の共生と衝突を客観的に俯瞰しグローバルな文化交流を促進するツールとなる文化的感受性の涵養を目指す。

### 分科会コーディネーター紹介



#### 甲斐 聖人 Masato KAI

所属：国際教養大学国際教養学部国際教養学科 3 年

興味：統計学、比較宗教学、現代宗教論

趣味：昭和歌謡、ダンス、ドライブ、人間観察、読書

### 自己紹介

秋田県にある国際教養大学で現在 3 年生をしています、甲斐聖人と申します。理屈っぽい性格もあり、数多くの曖昧で溢れたこの世界を数字という根拠を持って理解したいという思いから、統計学に関心を持っています。また、尼僧の祖母を持つとともに地元には私の先祖を祀った神社まであり、何かと宗教に関連する境遇で育ったにも関わらず、私は無宗教の立場であり、ただし初詣やクリスマスなどの宗教行事は局所的に楽しんでいるという現状にふと疑問を抱き、宗教学にも関心を寄せるようになりました。

最近の人生のキーワードは「人としての深み」です。私が高校 2 年生のときに他県のスラムを偶然訪れ、その惨たらしい光景に階層社会の格差や人権といった根深い問題を突きつけられる経験をしました。自分の認知するところの外側に未知の世界が広がっている可能性に 17 年間も意識を向けることができなかつた悔恨から、それ以来「自分の視野を際限なく広げること」が私の中の確固たる軸となっています。具体的には、将来の行動範囲を広げるべく英語を公用語とする大学に入学したり、世界の実情を探るべく国外のスラムで人々と交流したり、関わる人々の層を学生以外にも広げるべく高校生長期留学派遣事業にて政治家やメディア関係者等の方々との対話の機会を得たり、それぞれの色を持つ日米の他大学の人々と意見を交わすべくこうして日米学生会議に参加させていただいたりなど、その軸を貫きながらこれまで日々邁進してきました。こうして広範な視野を磨く中で、かつて薄っぺらかった自分に少し「人としての深み」が増したような感覚を覚えています。人間の深みとはどこから来るのか、どのような方法で更に磨きをかけることができるのかを探りながら、これからも楽しく精進していきます。

### 分科会の設置意図並びに活動内容

急速に変化する現代社会において、SNS 上での情報拡散による真実の不透明化や、商業主義、テクノロジーによる美の基準の変容など、私たちが追求する「真・善・美」の形は時代や文化とともに変わり続けている。本分科会では、日米両国における「美学の探求」のあり方に着目し、映画やファッション、SNS といったデザインとメディアに反映された美学を深く考察することで、互いの文化的背景を理解し、ステレオタイプを乗り越えてより深い相互理解を促進することを目指した。

分科会の運営方針として、具体的な政策や問題に限定せず、抽象的な問いを議論できる場であることを重視した。これは、芸術や文学が人間性を回復する一つ的手段であり、感性や情性を介した対話が国家間の摩擦を緩和する力を持つという信念に基づいている。

- ・人種的、文化的背景の違いから生まれる表現への価値観の差異とその背景に向き合い、日米の若者の相互理解を促進する。
- ・直接的に政治や経済に結びつかない「美学」というテーマを通じて、理想を自由に語り合う場所を提供すること。
- ・デザインとメディアという切り口から、将来異なるバックグラウンドを持つ人々と協働する際に役立つ「考え方」を養うこと。

### 主に扱ったトピック（一例）

本分科会では、事前準備の段階から複数の議題設定・細分化を行い、日米の学生で議論を深めた。主に扱ったトピックは以下の通りである。

#### ・ウォルト・ディズニー・スタジオとポリティカル・コレクトネス

映画業界における過度なポリティカル・コレクトネス（ポリコレ）の問題に着目し、ウォルト・ディズニー・スタジオがどのように映画制作においてポリコレを扱うべきかについて議論した。ディズニーが過去の人種差別的表現への批判や BLM 運動をきっかけに多様性を導入してきた背景、そしてそれが企業イメージの改善を目的としたものなのではないかという疑問を提示した。また、実写版『リトル・マーメイド』のように機会の平等を促すメリットがある一方で、原作の改変や文化の単純化を招くデメリットも議論した。最終的に「過度な翻案ではない作品づくり」を目指すべきだという結論に至った。

#### ・戦争芸術が果たすべき役割

第二次世界大戦以降の日本における、アニメや漫画といったサブカルチャー作品を「戦争芸術」と定義し、戦争の記憶の継承においてどのような役割を果たすべきか、そして現状との乖離は何かを考察した。戦争芸術は、戦争を経験していない人々にとって戦争を知る「入口」となったり、作者の主観的な記憶を伝達する役割を果たす。しかし、現実にはエンタメとして消費されたり、戦争を美化しすぎたりする問題点も指摘された。戦争のポップカルチャー化によって当事者意識が希薄になったり、フィクションと史実が混同されたりする危険性についても議論し、理想としては、偏りのない複数の視点を提供し、対話を生む起点となるべきだと結論づけた。

### 本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

本会議では、日米間の学生でそれぞれの文化的背景に基づく意見交換を行った。特に、「人種差別を国内で経験したことのない日本側参加者」と「多様な人種が共存する米国側参加者」という異なる視点から、表現に対する価値観の違いについて向き合うことができた。議論は、映画やサブカルチャーを題材に、時に抽象的な問いを投げかけながら進められた。

しかし、共通の議題に対して日米間で認識のズレが生じたり、言語の壁によって意見の表明が難しくなったりする場面も見られた。これらの困難に対し、協力して改善に努めたことで、問題解決に向けた思考の流れを意識的に養うことができた。

### 分科会総括

多様なバックグラウンドを持つメンバーが、それぞれの得意分野を活かして議論を深めることができた素晴らしいチームだったと思う。芸術、メディア、そして戦争といった扱いづらいトピックにも、彼らだからこそ深く踏み込んで探究できたはずだ。全員が意見を出し合い、時には感情をぶつけながらも、お互いを理解しようとする姿勢に、各々の芯の強さを感じた。この経験は、今後の協働の上で大きな糧になると確信している。

## 日本側メンバー紹介



### 江副 聡真 Soma EZOE

所属：東京外国語大学国際社会学部 3年

興味：国際教育論、"Geisha Girls"の文化研究の観点からの分析（\*RT議論がきっかけ）

趣味：音楽鑑賞、映画鑑賞、ファッション、お笑い

### 自己紹介

こんにちは、江副聡真と申します。毎回、自己紹介をしてといわれると、どこら辺までいえばいいのかと迷ったりもしますが、とりあえず、所属大学から失礼します。私は、東京外国語大学の国際社会学部英語学科に所属する現在三年生になります。私は日本語がとても好きです。日本人だから母国語が好きなのかもしれませんが、もし私がアメリカ人でも日本語のすばらしさに気付いていると思います。私の趣味である、音楽鑑賞や漫才鑑賞などを通して、歌詞が伝えるニュアンスの部分や日本語だからできる言葉遊びから日々日本語が母国語でよかったと身にしみて感じています。じゃあ、なぜ英語学科に所属しているのか。英語に限らず外国語を学ぶことで、日本語を第三者のような視点から視ることができ、改めて日本のすばらしさに気付くことができます。私も、ラッパーや漫才師のように日本語を巧みに操りたいと日々妄想をしながら、メディア媒体にかじりついております。

話は変わりますが、なにかコミュニティに属することは、自分自身を客観的な視点から見つめなおすいい機会になると考えております。日米学生会議なんてそのような機会にはもってこのコミュニティだと考えておりますが、日々感じております。国籍を問わず、様々なデリたちが、「江副聡真」「えぞえそうま」「エゾエソウマ」を見つめなおす機会を日頃から提供してくれており、感謝しかありません(\*^^)v

### 印象に残っている議論

春合宿以降での、RTの活動ではおもに「サブカル分野における戦争芸術」について議論しました。作新鑑賞を用いたインプットなどから議論を展開し、作者/受け手、それぞれの立場から問題提起をし、そこから「これからの戦争芸術のあり方」を模索しました。戦後80周年の2025年に、第77回日米学生会議の一人のデリとして、過去の戦争としっかり向き合えたことがとても印象に残っています。これまで、戦争を経験していない現代を生きる日本人として、戦争について考えなければいけないことは多々あったものの、あまり目を向けたくない過去を目の当たりにし、意識的にそれらを避けてしまうこともありました。RT議論を通して、戦争について、そして、戦争芸術について考える時間をもらったこととても感謝しています。本会議でも、日米間の対話を通して、「戦争」「争い」について一人一人が向き合うことのできる議論ができたらいいなと思います。

本会議前のRT議論の後半では、アラムナイの方から、一人一人の興味関心をもっと重視してもいいんじゃないかという助言をいただいたので、「サブカル分野における戦争芸術」についての議論をモラトリアム的に一時中断し、各mtgに各々好きな議題をもってくるということも行いました。私の担当会では、私の趣味にも関係する「音楽」をメインピックとして用意しました。たまたま、私の好きなアーティストでもあるGeisha Girlsの"THE GEISHA GIRLS SHOW 炎のおっさんアワー"を聴いていたところ、いつもの戦争芸術に関する議論にも通ずる部分があると感じたので、その日は、音楽のもつ社会風刺的な一面というところからその日が議論が始まりました。しかし、そこからメディア媒体としてのお笑いの形やハイカルチャーとサブカルの融合が持つ可能性など、「音楽」から発展した内容を皆で議論することができ、率直にすごく楽しかったです。常日頃から抱えていた様々な物事に対する問題意識をこのような形で分科会に還元できたことがとてもうれしく、様々なバックグラウンドをもつ人々がいる日米学生会議だからこそ自身の持つ興味関心からだけでもこんなにも発展性のある議論ができたのだと感じ、この学生会議に所属していることの最大の恩恵のようなものを感じることができたといっても過言ではありません。



## 美坂 茉柚 Mayu MISAKA

所属：国際教養大学国際教養学部3年  
 興味：行動心理学、メディア論、国際関係学  
 趣味：フェス参戦、バーやカフェ巡り

### 自己紹介

私は高校時代には SNS メディアの立ち上げを経験し、現在もフォロワー 3 万人を超えるアカウントの企画運営に関わっています。大学入学前のギャップイヤーでは、外資系ファッションブランドでの PR・マーケティングインターンを経験し、多国籍なメンバーと英語で業務を進めるなかで、国や文化背景の違いが個人の表現や選択にどう影響を与えるかに関心を持つようになりました。

現在は、温泉地と連携した地域活性プロジェクトに参加し、地元資源（温泉泥）を活用したスキンケア商品の開発・マーケティングに取り組んでいます。この活動を通して、ローカルの価値をいかにグローバルに届けるかという問いにも向き合っています。

また、音楽や芸術を通じた文化の越境にも関心があり、最近では大学の授業を通して「音楽における文化的借用とその倫理」をテーマに研究を行いました。文化交流が持つ創造性と同時に、それに伴う権力関係や歴史的背景にも目を向け、バランスの取れた視点を持つよう努めています。

JASC を通して、国境や専門を越えた視点を持つ仲間と対話し、自分の関心や社会に対する問いをより深めたいと考えています。よろしくお願ひします。

### 印象に残っている議論

私たちの RT では、「戦争芸術は記憶の継承にどのように関わるべきか？」という問いを軸に議論を進めました。最初の話し合いでは、戦争芸術には「悲惨さを伝える」「平和を訴える」といった明確な社会的使命があるべきだという意見が多く出ました。実際、被害者の視点から描かれた作品には、戦争の記憶を風化させない力があるという点で、共通の理解がありました。

しかし、あるメンバーが「アーティストは本当に社会のためだけに作品を作るべきなのか？」と問いかけたことで、議論の流れが一変しました。その発言をきっかけに、「芸術の自由」と「社会的責任」の間にある緊張関係が明らかになり、私たちはあらためて、戦争芸術に対して“何を期待するか”を問い直すことになりました。

このフェーズでは、「作品が意図しなくても鑑賞者の経験や背景によって受け取り方が大きく変わる」という多様な読みの可能性も話題になり、戦争芸術の「機能」を一義的に定義することの難しさにも直面しました。アートは記憶の“保存”だけでなく、“再解釈”の場でもあるのではないかという見方も出てきました。

最終的に私たちが合意に至ったのは、「戦争芸術は記憶の媒介装置であると同時に、問いを投げかける存在でもある」という視点でした。それは、戦争を語り継ぐための“記録”としてだけでなく、観る者に「なぜ戦争は起きたのか」「今、自分は何をすべきか」と問い直させる“触発”の役割も担っているという立場です。

この議論を通して、私は「記憶を継承する」という行為そのものが単なる保存ではなく、絶えず現在とつながりながら再構築されるプロセスであることに気づきました。そして、そのプロセスを可能にするのが、戦争芸術という揺らぎを許すメディアなのだと感じました。



## 今田 真子 Mako IMADA

所属：東京外国語大学国際社会学部 3年

興味：文化人類学

趣味：海外一人旅、グルメ探索、散歩、フラメンコ

### 自己紹介

私は英語が好きで海外への関心は強かったものの、日本で生まれ育ち大学入学まで一度も海外に出たことはありませんでした。そのことにどこか引け目を感じていた私は、大学でスペイン語と文化人類学を専攻し、言語の学習に加え、国際政治、人種差別、ジェンダー、西欧美術史など、多様な分野を横断的に学ぶことを意識してきました。好奇心の赴くままに興味を広げ、趣味も旅行やグルメ探索、バスケットボール、ミュージカル鑑賞などと増え、現在は大学の部活動であるフラメンコに力を注いでいます。

こうした経験から、多角的な視点で物事を捉え、異なる分野や価値観をつなげる議論は得意と自負してきました。一方で、関心が多岐にわたるがゆえに、一つの分野を深めきれないという課題も常に感じています。本分科会の活動を通じては、強みも弱みも含めた「自分」を見つめ直し、自分だからこそ出来ることを常に模索し、チームの中でどのような貢献ができるかを改めて考える機会を得ました。

JASC という場では、異なるバックグラウンドや関心、得意分野をもつ同年代の学生と毎日語り合い、時には刺激を受け、時には自信を失うこともあります。しかしそのすべてが、自分を見つめ直し、成長するための糧となっており、今この瞬間が、人生におけるかけがえのない時間であることを日々実感しています。

### 印象に残っている議論

最も印象的だったのは、「バランスのとれたサブカル作品」とは何かを巡る定義づけの試みである。私たちは議論の中で、主体を「表現者」と「消費者」に分け、さらに「娯楽性」と「客観性」という二軸を設定し、それぞれの利点と課題を可視化するため表を作成した。この作業は、戦争芸術が抱える複合性—商業性と写実性、表現の自由と倫理観といった二項対立—を明確化し、それらが互いに補完しうる可能性を見出すうえで非常に有効だった。

また、この具体的な議論に限らず、分科会全体を通じて一貫して重視されていたのは、用語の定義や前提の共有といった「認識の摺り合わせ」である。扱っているテーマが抽象的であるからこそ、参加者それぞれが抱える曖昧な感覚や経験を、どのようにして言語化し、他者と共有可能な形で可視化していくかが、議論の出発点として常に問われていた。メンバー間で前提がずれることを避けるために、毎回丁寧な検証と調整が行われ、議論の質を下支えしていたように思う。

この経験を通じて私が学んだのは、地道な検証作業や前提確認といった一見地味なプロセスこそが、深く本質的な議論を支える基盤であるということである。また、既成の枠にとらわれず柔軟な思考を保ち続ける姿勢や、抽象的な問題に粘り強く向き合い、納得のいくかたちで言語化しようとする探究心の大切さを、仲間たちの姿勢から強く感じ取った。この分科会での議論は、戦争芸術をめぐる思索を深めると同時に、複合性のあるトピックの取り扱う上で新たな視座を私に与えてくれたと感じている。



## 毛利 園子 Sonoko MOURI

所属：早稲田大学文化構想学部2年

興味：日本文学 歌舞伎などの日本の古典芸能全般

趣味：プチ断食ののちに、ねこまんまやお茶漬けなどの米を汁に浸したものをかきこむことが好きです。

### 自己紹介

早稲田大学文化構想学部国際日本文化論所属の毛利園子です。

大学では主に日本の古典芸能について学んでいます。

高校時代にたまたまインターネットで見かけた歌舞伎のキャラクター「助六」の舞台写真に惹かれたことから歌舞伎に興味を持ち、歌舞伎座に通い始め、その後は歌舞伎への興味の延長から他の日本の古典芸能に興味を持ち、ジャンル問わず様々な演芸を鑑賞してきました。歌舞伎に興味を持った頃ぐらいに高校は通信制高校に転校していたため、高校生のくせに授業や部活などによる時間的制約に縛られることなく、平日の昼間からいそいそと歌舞伎座や今はなき国立劇場に通っていました。

こういったお話をすると「なんで歌舞伎が好きなの」とか「なんで古典芸能に興味あるの」などとありがたいことに聞いてくださる方がいらっしゃるのですが、最近ではそれがなぜなのか自分でもいまいまいちよくわからなくなっていました。高校の自分は「擬似的な時間遡行と縦軸の他者との対話」というなんだかそれらしいことをいていたのですが、最近ではそれもあまりじっくりこなくなってしまう、好きな理由を聞かれても「うーん、なんなんだろうね」という曖昧さ。こう見えても古典芸能に飽きているのではなく、最近では週2回歌舞伎やその他古典芸能をみてついに破産（口座残高600円）するという身の滅ぼしっぷり。ここまで執心しながら好きな理由がわからない、というのは一種の恐怖さえ覚えますが、今後も好きな理由を模索しながら劇場に通う所存です。

### 印象に残っている議論

春合宿の最後、「自分たちの置かれている状況を分析して、自分しかできない、自分たちだからこそできる議論をすることが大切なのではないか」というメンバーの言葉が印象に残っています。それまで、春合宿ではとりあえず目先の成果報告を達成するために考えた無難なテーマについて議論していたのですが、メンバーもあまりテーマにじっくりきておらず、このままでいいのか、と各々悩みながら春合宿までの議論を行っていました。

しかし、他の分科会のテーマ設定で「学者や政治家ではない学生だからこそできる会議」と自分たちの置かれている状況を認識した上でテーマ設定を行っていたことにRTメンバー一同衝撃を受け、すぐさまテーマの再設定に取り掛かりました。

日米の学生会議、日本開催、戦後80年という日本の状況から「戦争芸術が人々にどのような影響を与えるか、また戦争芸術のあるべき姿はあるのか」をテーマに定めることができました。

この時のテーマ設定の議論が自身の中で最も印象に残っており、今後の議論の方針を決定づける大事なターニングポイントだったとも思います。

そのほか、安全保障研修やそれ以外のJASC内の活動で他校の全く違うバックグラウンドの学生と議論をすることで、自身の学問分野だけにとらわれない柔軟な議論を体験することができたと思います。

## アメリカ側メンバー紹介





## インド太平洋地域における国際政治

### 分科会概要

軍事力拡大を図る中国やミサイル発射を繰り返す北朝鮮など、日本を取り巻く安全保障環境は緊迫化している。一方、アメリカはウクライナやイスラエルへ支援を行っており、その影響もあって東アジア地域における力のバランスが変化しつつある。こうした状況下、食料やエネルギーの自給率が低く、他国との互惠関係を安定的に構築していく必要のある日本は、大きな岐路に立たされている。わが国が国益を確保し、同時に周辺地域の安定に寄与していくために、選択すべき道はどこにあるのか。本分科会では外交、情報、軍事、経済など様々な観点から、国益の確保や日米関係の更なる発展、インド太平洋地域の平和と安定について考察する。

### 分科会コーディネーター紹介



赤瀬 朋基 Tomoki AKASE

所属：学習院大学法学部政治学科3年

興味：国際関係論

趣味：メジャーリーグ、読売ジャイアンツ、「男はつらいよ」

### 自己紹介

興味関心の向いたものには積極的に飛び込むよう心がけている。大学入学後は、日本の外交・安全保障に興味を持ったので、国会議員事務所でのインターンや政党の勉強会に参加してきた。今は安全保障の最前線を肌で感じたいと思い台湾に留学に来ている。こちらの学生と話していると、有事への危機管理だけでなく、主権者意識の高さや若者中心の政治文化に心底驚かされる。もうひとつ印象的なのは、日本文化が広く浸透していることだ。

特にアニメやマンガは台湾の学生を魅了しているが、僕はワンピースしか読んだことがない。台湾人に「このマンガを知らないのか？日本人なのに。」と言われることに耐えかねて、先週、『進撃の巨人』を読み始めた。しかし台湾で読むとなかなかリアリティがある。東アジアにおける日米関係分科会では、“巨人”が壁を破ってくることがないよう、日米に出来ることを議論したい。

### 分科会の設置意図並びに活動内容

日米学生会議では、伝統的に、日米関係をテーマとした分科会が存在する。自分自身の興味分野が安全保障だったこともあり、こうした系統の分科会リーダーを務めることになった。分科会の名前については、広すぎも狭すぎもしない、つまり国際社会全体でも東アジアだけでもない、「インド太平洋地域」を範囲として議論することを目指した。僕自身の考える我が国の安全保障政策は、第一に自国の防衛力強化、次に日米同盟の深化、そして近隣同士国との連携である。こうした考えの下で辿り着いたのが「インド太平洋地域における国際政治分科会」であった。

## 主に扱ったトピック（一例）

- 中国：日本の安全保障上最も大きな課題である中国について学日を深めることを目的に、中国の政治体制、外交政策、経済状況についての調査、それぞれの実態をふまえた上での日本のとるべき対中政策について議論した。
- グローバルサウス：フィリピン研修を前に、日本とグローバルサウスをテーマにして、調べ学習を行った。特に、日本と同志国がどのように連携すべきかについて議論を深めた。
- 核戦略：アメリカの核戦略の歴史や「核の傘」について学を深めた。

## 本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

### 【1】本会議中の議論

本会議初日、日米の全参加者が一堂に会し、①議論の目的、②達成手段、③分析方法、④成果の社会的還元、の4項目について熟議を重ねた。なかでも私たちが最も重視したのは、「議論の目的」に関する共通理解の形成であった。その核心は、学生の学術的探究を社会的関心と往還させ、相互に利益をもたらす双方向性を確保することである。

歴代のJASC参加者の多くは、日米関係や国際秩序の安定に寄与してきた。私たちもその系譜を意識しつつ、国際安全保障の理解を深化させ、社会への責任を果たす志を共有した。議論を深化させるだけでなく、それを社会に還元し、持続的価値へと昇華させることが、本会議の使命であると考えたのである。

議論の目的は、短期的視点と中長期的視点の二層において設定された。短期的には、立場や文化の差異によって国際事象の解釈がいかにより変り得るかを広く共有することを重視した。日米の学生が互いの視座の共通点と相違点を明確化し、その背景にある社会的・歴史的文脈を理解することを目指した。中長期的には、討論経験そのものを将来の政策的思考の基盤とすることを目標とした。日米が同盟関係にあるとはいえ、国際秩序の構想や実現手段は必ずしも一致しない。その差異を構造的に理解し、対話を通じて調整する経験が、将来の公共的意思決定に資するとの認識に立脚した。

こうした目的を実現するため、次の二つの行動原則を掲げた。第一に、多様な意見を尊重し、拙速な合意よりも熟考の余地を残すこと。将来の再検討を支える素材を丹念に蓄積する姿勢を重んじた。第二に、事実と論拠に基づく議論を徹底すること。感情的・主観的対立を避け、一次資料や多角的報道を参照しながら、冷静な分析を行う姿勢を共有した。

### 【2】ファイナルフォーラムでの発表

8月19日、衆議院第一議員会館で開催されたファイナルフォーラムでは、政策関係者や一般市民に向けて、以下の三段階構成で発表を行った。

1. 歴史と現状の分析
2. 課題の抽出
3. 制約を踏まえた戦略的提言

#### (1) 秩序の揺らぎ：リベラル国際秩序（LIO）への挑戦

発表では、日米が戦後主導してきた自由で開かれた国際秩序（LIO）が、次の三要因によって動揺していると分析した。

- 権威主義国家の台頭
- グローバル化に伴う格差拡大
- グローバルサウスによる主権主張の強化

#### (2) 各国の課題認識と提言

- 米国：国内分断の進行と、国際的リーダーシップの正統性低下
- 日本：「自由で開かれたインド太平洋」理念と経済的中国依存の矛盾

これらを踏まえ、日米双方が自国の限界や構造的矛盾を率直に直視することが、国内における国際秩序支持の再生につながると提言した。秩序の持続には、理念の共有だけでなく、内政的基盤の再構築が不可欠であるという点で一致をみた。

## 日本側メンバー紹介



## 久保木 廉 Ren KUBOKI

所属：防衛大学校人文社会科学群 4 年

興味：戦略論全般（特に大戦略論、核戦略論）

趣味：自由な環境で生きること、語学、読書

## 自己紹介

将来、我が国の安全保障政策に深く携わる私が、国際社会という荒波に漕ぎ出すその日までに涵養すべき資質とは何か。そして、その資質はいかにして培われるべきか。この問いは、私の学生時代を通じて常に脳裏に去来し、私の歩みの隅々にまで一本の確かな軸を通してきた。

中学生の頃、我が国の外交・安全保障政策に漂う一国平和主義の気配、すなわち国際的圧力とは距離を置いた観念的自立の姿勢に、私は言い知れぬ違和感を抱いた。その素朴な問題意識を、感情の領域に留めておくことなく、体系的に捉え直すため、私は防衛大学校に入校した。そこは我が国で唯一、安全保障学と戦略論を体系的に学ぶ場である。

入校後、私は外交と安全保障を多面的に分析するため、血の滲むような勉強に身を投じた。理論のみに耽溺することを戒め、実務の複雑さに触れるべく、国際士官候補生会議に参加し、第三学年には議長として、核政策に対する各国の異なる立場をすり合わせ、共同声明を練り上げた。

さらに、ドイツ連邦空軍への派遣留学は、私の志に鮮やかな輪郭を与える体験であった。厳格な訓練に身を投じただけでなく、アウシュビッツやダッハウといった強制収容所、そして市民大学への訪問を通じ、歴史の暗部に真摯に向き合う姿勢、また欧州の礎を担う国としての矜持を、肌で、心で、痛感した。

斯くの如き経験と知見を礎に、私は分断と対立が深まるこの世界において、異なる価値観をもつ者や国家同士の対話を繋ぐ調和の担い手として、国際社会に貢献する。

## 印象に残っている議論

本分科会において、最も深く胸に刻まれた論点は、「日本は如何なる国際秩序形成の道を進むべきか」という、時代の複雑と変転を映し出す問いであった。これはすなわち、「台頭する中国に対し、国際社会はいかに応ずべきか」という本会議の根幹をなす主題を深化させるものであり、とりわけ日米の秩序観に生じ始めた微妙なる乖離に光を当てる試みであった。

4 月以降、私たちは実に 34 回、50 時間を優に超える対話を重ね、その第一歩として、我が国と唯一の同盟国たる米国の現状認識を分かち合うことから始めた。とりわけ「法の支配」という概念に対する両国の立脚点の相違は、我々の討議において幾度となく焦点となった。米国は昨今、イランへの空爆や一方的な関税措置に見る如く、力による秩序形成へと傾斜しつつある。他方、日本はなお国際法の遵守を表看板として掲げつつも、その運用においては一定の柔軟性を見せているのが実情である。

斯かる差異を踏まえ、我々の思考は次の命題へと向かった。「米国が国際法的正当性に疑義を生じさせる行動を取った際、日本は同盟国として黙して従うべきか、それとも批判の声を上げるべきか」。この命題は、国内政治、日米関係、そして国際社会という三重構造の各層において縦横に論じられ、討議は白熱を極めた。

私はこの論戦の中で、たとえ同盟の紐帯に軋みが生じようとも、正義と法に殉ずる姿勢を我が国は堅持すべきであると主張した。その根拠は二つある。ひとつには、我が国が米国の如き覇権的国力を欠く以上、規範に基づく国際的信望をこそ、最大の資産とすべきという現実認識である。もうひとつには、21 世紀中葉・末葉に至ってなお、国際社会における発言力を維持するためには、価値に立脚した信頼構築が必要不可欠であるという長期的な視座に基づく。

議論の末、我々は、「日本は己が国力の限界を自覚しつつ、法の支配という規範の旗を高く掲げ、国際秩序の調整者たる役割を担うべきだ」との暫定的結論に至った。この対話は、価値観と現実の

交錯する国際社会において、日本がどのような声を持ち得るかを再考する貴重な機会であった。私にとってもまた、単なる知的試練にとどまらず、我が国の針路に対して自らの理念を重ね合わせるための節目の対話であった。



## 守屋 旺次郎 Ojiro MORIYA

所属：早稲田大学法学部 4 年

興味：主専攻国際公法、副専攻ジェンダー学

趣味：下町散歩、サウナ、国内外のドラマ・映画

### 自己紹介

早稲田大学法学部 4 年の守屋旺次郎です。私は高校までを愛知県で、大学からは東京にて過ごしています。人生の大半を過ごしてきた地元は、都市部にも近い一方で地域コミュニティの温かさが残る、自然豊かな環境です。そんな私がなぜ国際法を学び、JASC に参加するのか。きっかけは、中高の海外研修にてカナダとイギリスに各 1 週間ほど滞在したことや、ウズベキスタンからの留学生をホストファミリーとして受け入れた経験です。絶対不変のはずの常識が崩れ、新たな世界観とともに自身の進化を感じた経験でした。以来私は、自己を取り巻く社会の常識や規範に意識的になり、自身と他者、国家や世界とが如何なる関係にあるのか、つまり「個と個の関係」「個と集団の関係」について、思考するようになりました。そして、高校から現在まで続けている模擬国連の活動も相まって、国家という主体を軸に国家間関係や世界秩序のあり方に関心を持つようになり、国際法を専攻するに至っています。

この点で JASC に求めているのは、自分という個と社会との関係を（再）発見することです。私は個人と社会の関係の一つとして「恩の交換関係」という考えを大切にしていますが、進路選択に際して個人的な課題意識にあるのは、これまでの人生で、そしてこれからの人生で、目に見える“あの人”や社会から受けてきた / 受けるであろうご恩を、いかに還元していけるかという視点です。この半年間を通して、様々なバックグラウンドを持った日米の同世代の仲間とそれぞれの立場から語り合い、また、これまで踏み入れたことの無かった沢山の社会を体験することを通して、一人考えをめぐらせるだけでは得られない発見を手にしたと思います。

### 印象に残っている議論

とりわけ印象に残っているのは、日比関係について、大戦中の日本軍進駐の過去との対峙から戦後の関係構築、今後の二国間関係のあり方に至るまで、特に戦後日本の国際協力の軌跡を踏まえながら議論したことです。議論内容の興味深さはさることながら、印象に残っている大きな理由としては、「事実ベースで責任ある発言をするという個人的な目標」や「フィリピン研修にて伺った生の声を組み込む、議論としての現実性」が挙げられます。

私は個人的に、JASC の分科会議論をはじめから、自らの専門分野は当然のこと、あまり知見が深くない分野の議論をする際にも、しっかりと責任を持った発言をすることを目標の一つにしていました。また、この国際政治分科会の特徴の一つには、議論の質だけでなく、それを左右する議論方法や議論への姿勢にも、各人が拘りを持ってコミットしているということが挙げられます。それらの観点において、日比関係について議論した該当回は、その後の議論の指標ともなる、一つの大きな成功体験として記憶されています。



## 上田 理紗 Risa UEDA

所属：東京大学教養学部 3 年

興味：国際関係論、戦間期の民間外交

趣味：K-pop, XG, 美術館めぐり

### 自己紹介

私は東京大学教養学部国際関係論コースに在籍中で、国際秩序や東アジアの地域情勢に関心の中心に置き国際政治や国際法を学んでいます。大学 1-2 年で所属していた東京大学と北京大学の学生が交流・議論を行う「京論壇」という団体では、日中双方の学生と両国が抱える社会問題や安全保障・歴史認識問題について議論を重ね、相互理解を目指してきました。このように 2 年間中国の学生と関わるなかで、他の国の学生とも対話を行い自らの視野をより広げる必要性を感じ、今回日米学生会議に参加しました。

「たとえ相手の主張に納得・共感できなくても、彼らの言葉とその背後にある文化、歴史、価値観に真摯に向き合い、ときに批判的に対話を続けることによって、真に相手を尊重し友情を築くことができる」。これが私が今までの活動で得た実感です。これからも多様な価値観と真摯に向き合い、微力ながらもより良い国際関係を築く架け橋となれるよう努めていきたいです。

### 印象に残っている議論

私が印象に残っている議論は、フィリピン研修後に行った日本の OSA (Official Security Assistance; 政府安全保障能力強化支援) についての議論だ。これはフィリピン研修を終えて日本のフィリピンに対する向き合い方を考える中で特に興味深いトピックとしてあがり、議論は白熱した。簡単に説明すると、OSA とは 2022 年の閣議決定により開始された、日本にとって望ましい安全保障環境創出のための同土国の抑止力向上を目的とした支援だ。OSA の一環として日本はフィリピンに沿岸監視レーダーシステムを供与しており、これらの動きについてフィリピン研修中、フィリピン大学のある教授が「日本の過去の帝国主義的動きを想起させる」と批判していたのが印象的であった。日本が戦後長らく取り組んできた ODA (政府開発援助) の規模は近年縮小傾向にあり、そこに代わって OSA が開始された形だ。勉強会ではなぜ今 OSA を始めるのか、「同志国」の定義とはなにか、などが議論の中心となった。結論としては、2010 年代以降中国の国力伸張など日本を取り巻く安全保障環境の変化が認識され、安倍政権下でより主体的な安全保障環境創出についての議論が活発化、その流れの中で OSA が始まったのであり、OSA は日本の主体的な動きを促進させ、太平洋の安全保障環境の米中による二極化を防ぎ国際秩序に貢献するというポジティブな側面もあるのでは、という点に収束した。恥ずかしながらこの議論以前は私は OSA を認知しておらず、私の周りの学生も知らない者がとても多かった。このような点から OSA は国民への周知の面で問題があると思われ、今回の議論は自ら積極的に政府の動きを探知し、それについての議論などを通して多角的な解釈を行うことの重要性を認識するきっかけとなった。



## 田代 明衣 Mei TASHIRO

所属：慶應義塾大学法学部 1 年

興味：法学・政治学、国際政治における平和とは

趣味：旅行、美味しいカフェを巡ること

## 自己紹介

幼少期は自然豊かな福岡で水泳や陸上など様々なスポーツに触れながら過ごし、高校でウクライナで半年ほど海外生活を送り、現在大学では法律やフランス語を学んでいます。私が国際政治に興味を持ったのは、ウクライナ侵攻で日本に緊急帰国をし、当たり前の大切さを改めて実感し高校生で行った福岡県高校生平和大使としての平和活動で、現在の国際政治や平和に関して課題意識を感じたことです。改めて国内に目を向けてみると、唯一被爆国である日本の被曝伝承を行える人が減少していることや関心の低さ、国際協力の難しさなど数多くの課題を見つけました。この現状に向き合うために、大学ではより様々な国の視点から物事を俯瞰したいという目標があり、スタンフォードの大学の交流プログラムに参加し、日米学生会議を通してアメリカの価値観について肌で感じたいと考えています。外に出て様々な人と交流をすると新しい知識を得られるだけでなく、人生観や新しい着眼点などといった刺激や感銘を受ける体験が多く毎回の出会いに胸が踊ります。日米学生会議がハーバード式プログラムと言われるように、机上や教科書からだけではなく学生同士の議論を通して学びを深めることは、人生においても新しさをもたらすと考えています。

## 印象に残っている議論

印象に残っている議論は「核」に関してキューバ危機などの歴史的な事例をケースに危機管理面でどのような可能性や手段が考えられるかについての議論である。これまでの活動の中で、平和活動に従事してきたということもあり様々な立場でこの問題に向き合えたことが意義深かった。戦後80周年ということで唯一被爆国としての責任や核による悲劇を訴える重要性とともに核に関しては国際社会でさまざまな論理が展開されている点も考える必要がある。そのため事前学習における分析では、一つの立場に固執するのではなく、それぞれの論理の背景や目的、当時のキューバ危機について書かれたアメリカの大統領手記などに遡りながら、一体この時代のこの人はどのように政策決定したのだろう、何を考えていたのだろうと考えながら分析を行った。議論の中で特に印象に残っているのは、キューバ危機を踏まえて、そのケースで使われた理論や戦略をこれからの有事に適用できるかという議論である。キューバ危機シナリオにおいて有力であった理論などが今日にはうまく機能しないケースもある、社会の構造変化により、新しい理論も登場しているなど、平和的な解決に向けた合意形成には数々の難しい問題があった。しかしながら、この議論を通して、歴史的シナリオをもとにでは未来に想定されるシナリオにおいて過去の政策や理論を使うことがどのように合理性を有しているかという分析は興味深いと感じたし、議論が深まったと感じる。また、日米学生会議のテーマにもあるように「敬意ある対話」とは何か、どのような目的や状況下で特に必要とされているのか改めて考える機会となった。

## アメリカ側メンバー紹介





## 第七章 第77回からの新規企画

### タスクフォース交流会

実施日：5月17日、6月14日

場所：オンライン

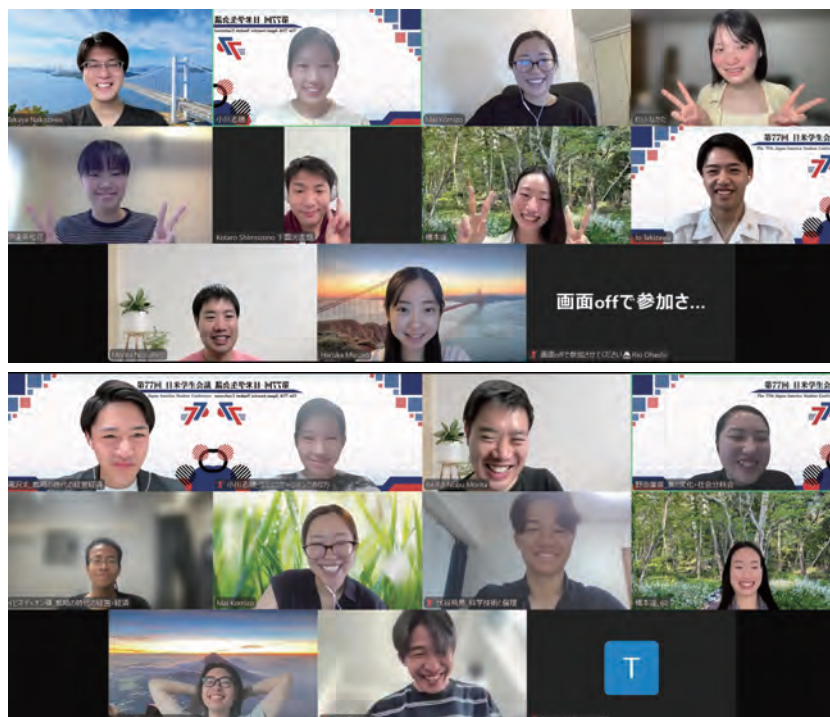
#### 【概要】

5月と6月にそれぞれ一度ずつ、アラムナイの方々と世代や分科会を超えたオンライン交流会を実施した。参加者は分科会議論や本会議についての悩みを相談し、一度会議を経験したアラムナイからしか聞くことのできない貴重な助言を得て、その後の分科会ミーティングで早速それらのアドバイスを活かしていた。

#### <参加者感想>

6月14日に開催されたタスクフォース交流会において、日米間の議論のアプローチの相違と相互理解の課題について相談した。特にアメリカ人の日本の政策に対する関心度の低さを課題として挙げた。多くの一般的なアメリカ人は日本の首相の名前すら知らず、政策変化についても特別な関心を示さない傾向がある。そのため、彼らに興味を持ってもらうためには、アメリカ側の視点を意識したアプローチが必要であることを解決策としてご提示いただいた。具体的には、アメリカの政策が日本に与える影響から入り、その結果としての日本の政策変化を説明するという手法だ。効果的な情報提供の方法として、TOYOTAのような知名度の高い企業を入り口とすることや、コメ不足時にアメリカ産米がスーパーに陳列されている様子の写真のような視覚的で理解しやすい情報を活用することも議論された。また、商品の価格差なども関心を引く要素として挙げられた。政治的思想の違いについても触れられ、リベラル層と保守層の反応の違いを認識しつつ、センシティブになりすぎず、関係構築を優先することが重要とされた。

防衛大学校人文社会科学群公共政策学科4年 滝沢 丈



## 熊本サイト企画委員

熊本サイトの準備にあたっては、熊本大学、熊本県立大学、熊本学園大学の3大学11名から成る「熊本サイト企画委員」に、2月より（熊本学園大学の学生は4月より）本会議までの準備とサイト期間中の運営に携わっていただいた。企画委員の募集や熊本開催の広報にあたっては、各大学の教授、職員の皆様にご協力いただいた。



**第77回  
日米学生会議  
熊本サイト企画委員 募集**

日米学生会議とは  
日米学生会議は、1934年に発足した日米の学生による学術交流プログラムです。毎年8月に実施する「本会議」では、日米の学生約70名が3週間にわたり寝食を共にし、様々なフィールドトリップを実施しながら、忌憚なき議論を深めています。そして、世界の諸問題に対する洞察および参加者間の国境を超えた相互理解を深めています。  
2025年8月の第77回本会議は、京都、大阪、熊本、東京の4都市を巡る形で実施されます。熊本での滞在期間は、2025年8月7日～14日です。

企画委員とは  
企画委員には、本会議に先立つ事前活動としての熊本県に関する勉強会の実施や、本会議（熊本サイト滞在期間）の企画運営、その後の振り返り等、幅広い業務を担っていただきます。日米両国の学生と共に、積極的にプログラム作りを楽しみましょう。本会議にて熊本サイト企画委員が主に担当する期間は、8月10日～8月13日（金）までの4日間です。  
活動期間：2025年2月～8月 月2回程度のミーティング

応募期限：  
2025年2月14日（金）23:59  
応募手順：  
募集案内（別紙）を参照  
実行委員一同  
たくさんのご応募を  
お待ちしております。



第77回日米学生会議 実行委員

### 【事前準備】

2月19日（水）に熊本県知事公室国際・くまモン局国際課課長（当時）の櫛本麻理様をお招きし、熊本大学と熊本県立大学から参加の熊本サイト企画委員7名との初回ミーティングを実施した。その後、3月初旬に各企画委員の専攻、応募理由、興味関心を考慮した上で担当プログラムを決定し、本格的な活動を開始した。また、4月には新たに熊本学園大学の学生4名が企画委員として加わり、3大学・総勢11名の新体制での活動をスタートした。4月～7月にかけては、各プログラムの内容を充実させるべく、担当プログラムごとのミーティングを定期的に行なった。ミーティングでは、日米の学生に学んでほしい内容やそれを実現するための方法について、熊本サイト企画委員と日米学生会議実行委員で活発な議論を交わした。企画委員の皆さんには、地元学生ならではの視点を活かし、毎回のミーティングで多くの示唆に富んだ提案を頂いた。また、実行委員が事前準備のため熊本を訪問する際には、行政や地元企業への挨拶やプレスリリースなどにも同行していただいた。

### 【本会議期間中】

企画委員には、8月7日～14日の熊本サイト期間中、司会進行や通訳など幅広い役割を担っていただいた。参加者からは、地元学生である企画委員との交流が深く印象に残ったという感想が寄せられ、地元学生との連携の重要性と意義を改めて認識することができた。以下に、企画委員の熊本サイト期間中の活動内容を記す。

#### 8月7日（木）

##### <阿蘇視察>

英語バスガイド（嶋田 健大、米崎 千裕、柏原 陽菜、江島 菜々香）

#### 8月8日（金）

##### <熊本青年会議所コラボ事業>

パネルセッション登壇（米崎 千裕、前田 さつき）

##### <天草ホームステイ対面式>

代表挨拶（米崎 千裕）

天草市野崎副市長ご挨拶の通訳（前田 さつき）

ホームステイ中のミッション説明（井上 陽菜乃）

### 8月10日(日)

<天草ホームステイ解散式>

感想Q&A (米崎 千裕)

代表挨拶 (井上 陽菜乃)

天草市馬場市長ご挨拶の通訳 (前田 さつき)

ホームステイ思い出ムービー作成 (米崎 千裕)

### 8月11日(月)

<平和学習>

司会進行 (両角 朱莉、黒川 佑真)

企画委員代表挨拶 (両角 朱莉)

必由館高校和太鼓部の紹介 (嶋田 健大、豪雨により中止)

地元高校生・大学生との熊本城・熊本博物館見学時の英語ガイド (全員、豪雨により中止)

### 8月12日(火)

<半導体シンポジウム>

司会進行 (平良 遊帆)

企画委員代表挨拶 (小林 響)

パネルセッション登壇 (両角 朱莉、小林 響、平良 遊帆)

閉会挨拶 (黒川 佑真)

くまもとSDGsミライパーク視察時の通訳 (前田さつき、黒川 佑真)

### 8月13日(水)

<熊本サイトフォーラム>

司会進行 (井上 陽菜乃)

プレゼンテーション (米崎 千裕、柏原 陽菜、黒川 佑真、江島 菜々香)

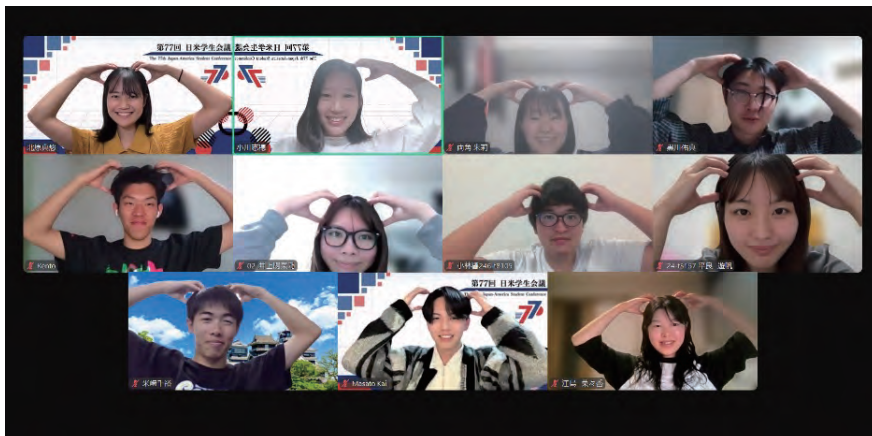
パネルセッション登壇 (平良 遊帆、江島 菜々香、前田 さつき)

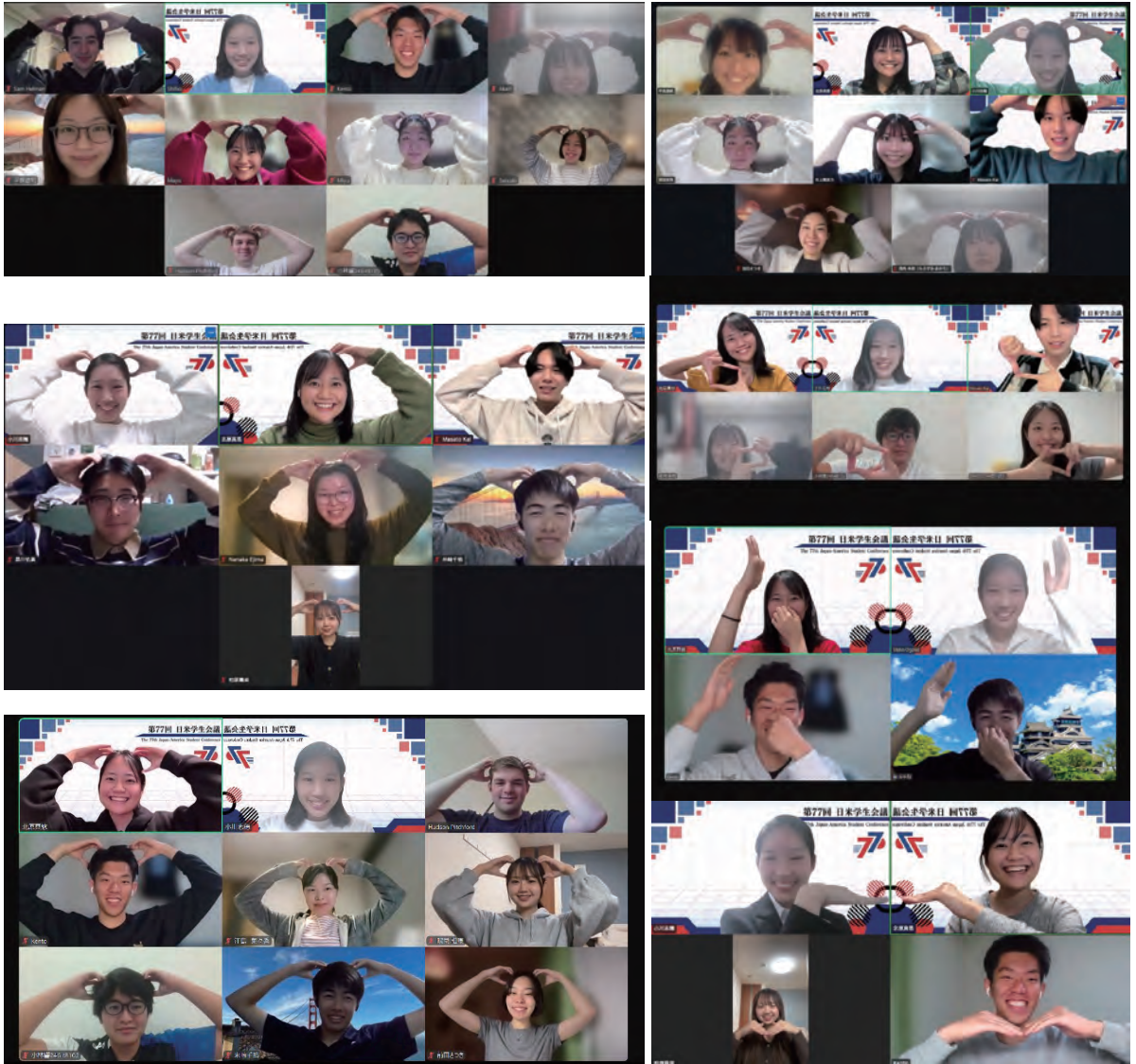
熊本サイト思い出ムービー作成 (米崎 千裕)

企画委員代表挨拶 (前田 さつき)

企画委員の力添えなしには、当サイトはこのような形で実現し得なかったと思う。熊本サイト担当として、当初より地域に根ざした形での会議実施を目標にしてきたが、この目標を達成することができたのは、企画委員の多大なる協力の賜物である。企画委員の募集、熊本サイトの実施にあたりご協力いただいた熊本大学、熊本県立大学、熊本学園大学の教授、職員の皆様、そして多忙な学生生活の中、貴重な時間を割いて準備に尽力いただいた学生の皆さんに、この場を借りて心より御礼申し上げる。

### 【オンラインミーティングの様子】





【対面親睦会】3月16日（日）、17日（月）@熊本



## 熊本サイト事前勉強会

本会議まで1ヶ月を切った7月12日（土）、日米双方の参加者がオンラインで会し、熊本サイト事前勉強会を実施した。この勉強会の企画・運営は、熊本大学・熊本県立大学・熊本学園大学の3大学11名から成る熊本サイト企画委員の学生が担った。当日は、日米参加者のほか、熊本大学・熊本県立大学・熊本学園大学・崇城大学の学生の皆さんにも参加いただいた。

第一部では、熊本県立大学堤裕昭学長に「熊本の自然と人々の暮らし」をテーマに英語でご講演いただいた。この基調講演では、8月に訪問予定の阿蘇地域や天草地域に言及していただいたほか、文系に寄りがちな当会議にとって貴重な理系の視点からお話しいただき、参加者は日本側・米国側ともに真剣な眼差しで聞いていた。また、質疑応答の際には、日米双方の学生から寄せられた質問に一つ一つ、丁寧にご回答いただいた。

第二部では、熊本サイト企画委員が3グループに分かれ、それぞれ歴史、災害、半導体をテーマに英語でプレゼンテーションと質疑応答を行った。発表は、企画委員の提案により、3グループがそれぞれ異なるブレイクアウトルームで同時にプレゼンテーションを行うという形式を採用した。参加者に対しては、事前に3つのテーマの中から関心のある2テーマを選んでもらい、その2グループの発表を聞くことができるようグループ分けを行った。3択クイズを交えるなど、企画委員による工夫の詰まった発表を、参加者は大変興味深く聞いていた。

第三部では、日米の学生が交流する時間も設け、絵しりとりのようなゲームで熊本サイト企画委員を含めて親睦を深めた。

当事前勉強会は、本会議で熊本県を訪れる前に、熊本県の歴史や自然、産業に関する知識を得ることや、企画委員の学生と日米学生会議参加者が交流を深めることを目的として実施したが、企画委員11名の尽力により、その目的を大いに達成することができた。

末筆ながら、事前準備、広報、および当日の運営にご協力いただいた熊本県立大学の堤学長、国際教育交流センターの方々をはじめとする皆様、そして企画・運営に尽力いただいた企画委員の学生の皆さんに、心より御礼申し上げます。

### 【事前勉強会の趣旨】

- ① 2025年8月7日～14日にかけて当会議の参加学生が熊本県を訪問するにあたり、事前に熊本県に関して理解しておくべき導入的な知識を身につけ、本会議中のプログラムを通して得る学びをより有意義なものとする
- ② 熊本県固有のトピック（自然・災害・産業・歴史・文化など）に関する基調講演と学生による発表を聞き、参加者が熊本県の魅力や課題についての興味・関心を抱くきっかけとなる機会を提供することで、8月の熊本県での経験の付加価値を高める
- ③ 熊本県でのプログラムの企画・運営に携わっていただいている熊本サイト企画委員11名と日米学生会議参加学生との交流機会を創出すること

### 【プログラム】

2025年7月12日（土）日本時間

10:00 開会

10:00～10:05 挨拶、流れ説明

10:05～10:50 第一部：基調講演（熊本県立大学 堤裕昭学長）

10:50～11:05 質疑応答

11:05～11:35 第二部：熊本サイト企画委員によるプレゼンテーション・質疑応答

11:35～11:50 小グループでの感想共有

11:50～12:00 まとめ、記念写真撮影

12:00 閉会

12:00～12:30 第三部：交流会

**【基調講演】**

登壇者：熊本県立大学 学長 堤裕昭様

講演テーマ：「熊本の自然と人々の暮らし Nature and People's Life in Kumamoto」

**【プレゼンテーション発表者】**

熊本サイト企画委員 11名

〈熊本大学〉

- 井上陽菜乃 法学部法学科
- 両角朱莉 工学部情報電気工学科
- 小林響 工学部情報電気工学科
- 平良遊帆 工学部情報電気工学科

〈熊本県立大学〉

- 前田さつき 文学部英語英米文学科
- 嶋田健大 文学部英語英米文学科
- 浦田実侑 文学部英語英米文学科

〈熊本学園大学〉

- 米崎千裕 商学部商学科
- 柏原陽菜 商学部ホスピタリティマネジメント学科
- 黒川佑真 外国語学部英米学科
- 江島菜々香 外国語学部英米学科

**【熊本サイト企画委員発表テーマ】**

A グループ：「記憶とアイデンティティ ～熊本城と潜伏キリシタンの歴史から見える熊本文化～」

(発表者：前田さつき、嶋田健大、浦田実侑)

B グループ：「熊本県の災害からの復興と文化・観光戦略 ～熊本地震の被害と復興、豊かな自然が育む特産品～」

(発表者：米崎千裕、柏原陽菜、黒川佑真、江島菜々香、両角朱莉)

C グループ：「熊本県の地下水と半導体産業 ～半導体産業がもたらす地域への功罪、他文化と共生する熊本社会の未来～」

(発表者：井上陽菜乃、小林響、平良遊帆)

**【事前勉強会ポスター】**

デザイン：熊本県立大学 前田さつき

The 77th Japan-America Student Conference  
**Online Pre-Study Session**  
 July 12 (Sat) 10:00-12:30  
 Language: English (Free to attend!)  
 Format: Online (Zoom)  
 Session 1: 10:05-10:50  
 『熊本の自然と人々の暮らし』  
 Nature and People's Life in Kumamoto  
 Speaker: 熊本県立大学 堤裕昭学長  
 Session 2: 11:05-11:35 (熊本学園大学オンラインセッションあり)  
 『記憶とアイデンティティ』  
 『熊本県の災害からの復興と文化・観光戦略』  
 『熊本県の地下水と半導体産業』  
 Session 3: 12:00-12:30 交流会

The 77th Japan-America Student Conference  
**Online Pre-Study Session**  
 July 11 (Fri) 18:00-20:30 PDT 20:00-22:30 CDT  
 19:00-21:30 MDT 21:00-23:30 EDT  
 Kumamoto on the Global Stage  
 Creating a Harmonious Society  
 Preserving History, Nature, and Culture  
 Language: English (Free to attend!)  
 Format: Online (Zoom)  
 Session 1: Keynote Speech 21:05-21:50 EDT  
 『Nature and People's Life in Kumamoto』  
 Speaker: The President-Hisashi Tsutsui of Prefectural University of Kumamoto  
 Session 2: Student Presentations 22:05-22:35 EDT  
 Presentation 1: 『Memory and Identity』  
 Presentation 2: 『Recovery from Disaster and Tourism Strategy』  
 Presentation 3: 『Kumamoto's Groundwater and Semiconductor Industry』  
 Session 3: Networking Time 23:00-23:10 EDT

## 第八章 後援・協賛・賛助・共催・協力

※紙面の都合上、敬称を省略する。また、役職は2025年8月時点に基づく。

### 主催及び後援団体協力者

#### ○会議全般

##### ■主催

一般財団法人 国際教育振興会  
代表理事 金野 洋  
事務局 伊部 亜理子  
国際教育振興会賛助会  
名誉会長 高円宮妃久子殿下  
会長 藤崎 一郎  
事務局長 伊部 亜理子  
International Student Conferences, Inc.  
会長 Kurt Tong  
事務局長 Bahia Simons-Lane

##### ■後援

外務省  
外務大臣 岩屋 毅  
国際文化交流審議官 岡野 結城子  
人物交流室 村上 浩子  
文部科学省  
国際統括官 北山 浩士  
米国大使館  
駐日大使 George Glass  
広報文化交流部・教育人物交流室  
教育・人物交流担当官 Sarah Belousov  
広報・文化交流部 三橋 乃佑里  
一般社団法人 日米協会  
会長 藤崎 一郎  
専務理事 岡本 和夫

##### ■賛助

日本万国博覧会記念基金  
一般社団法人 東京倶楽部  
一般社団法人 尚友倶楽部  
公益財団法人 双日国際交流財団  
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会  
リザプロ株式会社  
一般社団法人 霞会館  
東日本旅客鉄道株式会社  
一般社団法人 日米協会  
日米学生会議同窓生 (第62回有志一同、第76回有志)  
株式会社ガイアックス  
住友商事株式会社  
日米学生会議同窓会

##### ■奨学金

グレン&咲江・フクシマ奨学金

#### ○関西サイト (京都・大阪)

##### ■共催

大阪大学社会ソリューションイニシアティブ (SSI)  
いのち会議

##### ■協賛

大阪日米協会  
大阪万博 2025 入場チケット 63 枚贈呈  
(会員企業様より)  
一般社団法人 京都知恵産業創造の森

#### ○熊本サイト

##### ■後援

熊本県  
熊本市  
天草市  
熊本経済同友会  
熊本商工会議所  
熊本県工業連合会

##### ■第77回日米学生会議 in 熊本 サポート委員会

会長 肥後銀行代表取締役頭取 笠原 慶久  
副会長 熊本日米協会会長 河村 邦比兇  
委員 熊本大学学長 小川 久雄  
熊本県立大学学長 堤 裕昭  
熊本学園大学学長 林 裕  
熊本県工業連合会会長 宮村 宜明  
熊本国際観光コンベンション協会  
代表理事 吉丸 良治  
一般社団法人熊本青年会議所理事長  
中田 慎二  
委員会窓口 肥後銀行 地域振興部

##### ■協賛

肥後銀行  
九州産交グループ  
株式会社ヒライ  
熊本大学  
熊本国際観光コンベンション協会  
熊本日日新聞社 代表取締役会長 河村 邦比兇  
錦戸企業グループ  
金剛株式会社  
ハイコムグループ  
熊本国際空港株式会社  
木村グループ  
NPO 法人ディスカバリーくまもと

熊本青年会議所  
 熊本りんどうライオンズクラブ  
 熊本県立大学  
 熊本学園大学  
 崇城大学  
 熊本市観光旅館ホテル協同組合  
 熊本キワニスクラブ  
 天草本渡ライオンズクラブ会長 岩崎 東洋司  
 株式会社フタバ  
 株式会社河田印刷

富士急行株式会社  
 富士フィルムビジネスイノベーション株式会社  
 株式会社みずほフィナンシャルグループ  
 株式会社三井住友銀行  
 三井物産株式会社  
 三井不動産株式会社  
 三菱重工業株式会社  
 三菱商事株式会社  
 株式会社三菱 UFJ 銀行  
 メリックス株式会社  
 森ビル株式会社

## ○東京サイト

### ■ 協力

衆議院議員長島昭久事務所

## ○国際教育振興会賛助会

### ■ 法人会員

ANA ホールディングス株式会社  
 株式会社アルコパートナーズ  
 伊藤忠商事株式会社  
 株式会社オリエンタルランド  
 キッコーマン株式会社  
 株式会社 KPMG Ignition Tokyo  
 ZAZA 株式会社 Metoree 事業部  
 サントリーホールディングス株式会社  
 株式会社サーフビバレッジ  
 株式会社サンブリッジコーポレーション  
 日本製鉄株式会社  
 株式会社セブン&アイ・ホールディングス  
 禅林寺  
 ダウ・ケミカル日本株式会社  
 タカラベルモント株式会社  
 デルタ航空会社  
 東京海上日動火災保険株式会社  
 東京ガス株式会社  
 一般財団法人 TOPPAN 三幸会  
 トヨタ自動車株式会社  
 株式会社ニコン  
 日本空港ビルディング株式会社  
 株式会社日本政策投資銀行  
 日本生命保険相互会社  
 日本テレビ放送網株式会社  
 NTT 株式会社  
 野村ホールディングス株式会社  
 株式会社パン・パシフィック・インターナショナルホールディングス  
 株式会社パソナグループ

## ■ 個人会員

秋間 修  
 今井 義典  
 岡本 実  
 小田垣 祥一郎  
 北城 恪太郎  
 木村 浩一郎  
 千本 倅生  
 竹本 秀人  
 橘・フクシマ・咲江  
 西澤 淳  
 富川 秀二  
 橋本 徹  
 アーネスト・エム・比嘉  
 平竹 雅人  
 藤崎 一郎  
 細野 恭平  
 山田 勝  
 茂木 健一郎  
 和田 昭徳

## ○日米学生会議同窓会

■ 会長 富川 秀二  
 副会長 井伊 雅子  
 木ノ上 高章  
 福谷 尚久  
 武田 興欣  
 幹事長 乗竹 亮治  
 副幹事長 橋本 遙  
 竹内 智洋  
 常任幹事 仲尾 聡  
 大塚 雄三  
 佐野 日出之  
 平竹 雅人  
 細野 恭平  
 大和 亜基

川口 耕一郎  
竹内 友里  
近藤 文樹

顧問 降旗 健人  
天野 順一  
橋本 徹  
竹本 秀人  
今井 義典  
青柳 勝栄  
山田 勝  
岡本 実  
グレン・S・フクシマ  
橘・フクシマ・咲江  
秋間 修  
和田 昭穂  
竹内 幸美  
岸田 守

## 選考活動

### ■ 協力：日米学生会議同窓会員

田邊 和子  
富川 秀二  
木戸秋 圭一  
金野 洋  
仲尾 聡  
大塚 雄三  
片山 直毅  
永野 彰史  
Chelsey Maki Lin  
森田 修弘  
松居 純平  
加藤 優一  
河島 慧美  
安藤 飛悠吾  
木村 勇人  
久野 賢登  
玉眞 優里  
山崎 万由佳

### ■ 協力：試験補助員

田頭 奈寿菜  
小金山 智弘  
佐野 百美  
富澤 新太郎  
福井 達於都  
石上 諒  
大矢 玲奈  
高橋 美咲

谷川 陽音  
早川 さくら  
舩尾 花菜

### ■ 協力：会場

法政大学  
日米会話学院

## 広報活動

### ■ 協力：団体

UT BASE（東大生向け情報メディア）  
塾生情報局（慶應生向け情報メディア）  
早稲田情報局（早稲田生向け情報メディア）  
ICU メディア（国際基督教大学生向け情報メディア）  
メイキョク（明治大学生向けメディア）

### ■ 協力：会場

法政大学

### ■ 協力：個人

山田 裕一郎（第76回報告会兼第77回説明会）

### ■ 協力：ホームページ制作

株式会社かるてぼすと 木下 茂雄

## 事前研修

### ○春合宿

### ■ 協力：会場

国立オリンピック記念青少年総合センター

### ■ 協力：ようこそ先輩

富川 秀二  
木ノ上 高章  
福谷 尚久  
武田 興欣  
乗竹 亮治  
橋本 遥  
降旗 健人  
秋間 修  
岡本 実  
竹本 秀人  
和田 昭穂  
仲尾 聡  
大塚 雄三  
田邊 和子  
市川 比呂也  
金野 洋  
守屋 彰人

大橋 英雄  
 森田 修弘  
 大沼 雄貴  
 霞 こずえ  
 枚本 友里  
 鈴木 健司  
 井上 雅章  
 モンタニヨミチエル ルイス  
 小溝 舞  
 南 秀弥  
 鈴木 良祐  
 加藤 優一  
 辻村 志帆  
 山本 悠太  
 安藤 飛悠吾  
 翠川 溪

### ■ 協力：写真撮影

木場 龍門

### ■ 協力：同窓会入会説明

富川 秀二  
 大塚 雄三  
 乗竹 亮治

## ○フィリピン研修

### ■ 後援

駐日フィリピン共和国大使館

### ■ 協賛

同窓会員 岡本 実、有志一同  
 セブパシフィック航空  
 QQ English オンライン英会話

### ■ 協力：事前勉強会

駐日フィリピン共和国大使館 表敬訪問  
 駐日大使 Mylene J. GARCIA-ALBANO  
 一等書記官兼領事 Darell Artates  
 前駐フィリピン特命全権大使 越川 和彦  
 Association of Filipino Students in Japan  
 在日フィリピン商工会議所  
 一般財団法人フィリピン協会

### ■ 協力：会場

RED PLANET HOTELS BGC THE FORT

### ■ 協力：正規日程

フィリピン大学アジアセンター  
 Dr. Karl Ian Cheng Chua  
 Dr. Jocelyn O. Celero  
 独立行政法人国際協力機構フィリピン事務所

NGO デスク兼総務班 大須賀 亜希子  
 NGO デスク 浅田 恵理  
 JICA 海外協力隊事業班 柴崎 栄司  
 経済調整班 伊達 令  
 NPO 法人アクション  
 日本事務局 長田 幸子  
 引率者 山本 浩平  
 在フィリピン日本国大使館  
 駐フィリピン特命全権大使 遠藤 和也

## ○安全保障研修

### ■ 協力

防衛大学校  
 校長 久保 文明  
 特別講義 防衛学群 1等陸佐 足達 好正  
 特別講義 人文社会学群 教授 神谷 万丈  
 防衛大学校社会連携推進室 廣重 俊史  
 防衛事務官 黒澤 孝一  
 総務部総務課秘書係 坂中 二郎  
 学生の皆様（代表：渡辺 茉莉香）  
 日米学生会議参加者  
 防衛大学校 4年 久保木 廉  
 防衛大学校 4年 滝沢 丈

## ○JASC COMEBACK

### ■ 協力：事前勉強会

大沼 雄貴 (65・66)  
 モンタニヨミチエル ルイス (66・67)  
 加藤 優一 (67)  
 有田 彩子 (68・69)  
 木村 勇人 (71・72)  
 深津 佑野 (71・72)  
 飛知和 志帆 (72)  
 鈴木 悠太 (72・73)  
 石川 隼 (74)  
 福井 達於都 (75・76)  
 富澤 新太郎 (75・76)  
 佐藤 知穂 (76)  
 渡邊 蒼生 (76)  
 下小野田 崇仁 (76)

## ○直前合宿

### ■ 協力：会場

国立オリンピック記念青少年総合センター

### ■ 協力：アラムナイ交流会

中澤 拓也 (72)

## 勉強会 / FT (実施日時順)

### ■ 協力

日本空港ビルデング株式会社

### ■ 協力：戦略の時代の経営・経済

厚生労働省

外務省 小野 健

東京都スタートアップ戦略推進本部 松本 克己

### ■ 協力：環境イノベーションと事業創造

株式会社 JERA 倉持 あゆみ

大阪大学大学院工学研究科博士後期課程 3 年生  
藤原 悠

デジタルグリッド株式会社

代表取締役 豊田 祐介

東海原発訪問

### ■ 協力：食と文化・社会

一般社団法人 スローフード協会

代表理事 渡邊 めぐみ

特定非営利活動法人 TABLE FOR TWO

中井 由実

認定 NPO 法人 全国こども食堂支援センター・  
むすびえ

プロジェクトリーダー 川添 華子

農林水産省 大臣官房政策課・食糧安全保障室  
平田 和也

### ■ 協力：コミュニケーションのあり方

合同会社ぴーすふるファーム代表 齊藤 和平

日本女子大学文学部日本文学科教授 田邊 和子

Universidad de Córdoba

Dr. Gisella Policastro Ponce

松乃鮪 四代目 手塚 良則

### ■ 協力：科学技術と倫理

日米学生会議同窓会員 霞 こずえ

東京大学医学部 特任研究員 今井 けい

### ■ 協力：インド太平洋地域における国際政治

前法務大臣 牧原秀樹

東京大学大学院総合文化研究科 教授 川島 真

防衛大学校 人文社会科学群 国際関係学科

教授 石川 卓

外務省 川口 耕一郎

## 本会議

### ○ 関西サイト (京都・大阪)

#### ■ 共催 <ポスト SDGs>

いのち会議

大阪大学社会ソリューションイニシアティブ  
(SSI)

教授 伊藤 武志

大阪大学経済学研究科

教授 (総長補佐) 常日 卓生

#### ■ 賛助

京都日米協会 村田 晃嗣

飯田 健

#### ■ 協賛

一般社団法人 京都知恵産業創造の森

スタートアップ推進部 次長 金山 裕喜

大阪日米協会

事務局：株式会社イチネンホールディングス内

事務局長 高添 善匡

事務局次長 岩田 裕丞

事務局員 中村 ちづる

大阪万博 2025 入場チケット 63 枚贈呈

株式会社ユニオン

コクヨ株式会社

サントリーホールディングス株式会社

三宝電気株式会社

ニシオホールディングス株式会社

ダイキン工業株式会社

朝日放送グループホールディングス株式会社

株式会社イチネンホールディングス

#### ■ 協力：会場

宇多野ユースホテル

新大阪ユースホテル

#### ■ 協力：移動手配

京王観光株式会社 山本 菜津美

#### ■ 協力

京都市

市長 松井 孝治

総合企画局総合政策室大学政策担当

中村 尚志

上掛 周平

吉原 結城

内閣総理大臣 石破 茂 (ビデオメッセージによるご祝辞)

在大阪・神戸米国領事館

前総領事 Jason R. Cubas (基調講演)

広報文化外交部 阪田 隆治

KDDI/ au 創業者、京都大学卓越教授  
千本 倅生（基調講演）  
京都市国際交流会館  
大学コンソーシアム京都  
調査・広報事業部兼総務部 次長 星野 洋一  
調査・広報事業部主査 古里 志穂美  
京都国際漫画ミュージアム  
国際マンガ研究センター 特任教授 伊藤 遊  
事務局 勝島 啓介  
広報担当 中村 浩子  
京都経済センター  
POJ Studio 代表取締役 小山 汀奈  
一般社団法人日本カルチュアプレナー協会  
代表理事 足立 毅  
大阪産業経済リサーチセンター  
統括研究員 町田 光弘  
株式会社ロイヤルホテル  
経営企画部 ブランド戦略推進室  
室長 高坂 順子  
人事部 接遇専任講師 吉田 富貴子  
人事部 十時 あや  
近畿大学 経営学部 商学科 准教授 石川 雅啓  
カップヌードルミュージアム  
Nakanoshima Qross  
独立行政法人国際協力機構  
企画部参事役 田中 伸一  
大阪万博 2025  
U.S. Pavilion Youth Ambassadors  
Anna Esaka  
Elijah Collier  
Ema Takahashi  
Logan Day  
Monika Ilicic  
Piper Harrell  
Sophia Isaacson  
茶道裏千家  
淡交会総本部 国際部 部長 弘田 佳代子  
淡交会総本部 国際部 主任 伊藤 累子  
金剛能楽堂  
金剛流能楽師 金剛 龍謹  
金剛 育子

## ○熊本サイト

### ■ 協力：会場

HOTEL THE GATE KUMAMOTO  
責任者 白砂 光規  
マネージャー 柏尾 恵美  
天草プラザホテル  
天草ホームステイ（34家庭）

肥後銀行本店ビル2階大会議室  
熊本地震震災ミュージアム KIOKU  
熊本城  
くまもとSDGsミライパーク  
熊本大学工学部百周年記念館  
くまもと森都心プラザホール  
熊本学園大学

## ■ 協力

熊本県

県知事 木村 敬（熊本フォーラムご挨拶）  
熊本県知事公室  
国際・くまモン局 局長 樺本 麻理  
国際課 課長 吉仲 範泰  
国際課 主幹 藤本 修宏  
国際課 参事 岩下 協子  
広報課 県政記者室 主幹 宮崎 公一

熊本市

政策局 総合政策部 国際課  
課長補佐 安浪 真  
主査 宇都宮 生雄  
主事 吉田 伊織

菊陽町

町長 吉本 孝寿  
産業振興部 商工振興課  
課長兼半導体産業支援室長 塚脇 康晴  
商工振興係長兼半導体産業支援室係長  
坂本 恒平  
総務部 総合政策課  
課長兼産業振興部 半導体産業支援室 調整監  
今村 太郎

企画政策係 主事 廣田 奈見

天草市

市長 馬場 昭治  
教育委員会 教育長 平田 浩一  
総合政策部 部長 植田 伸広  
総合政策部 政策企画課 課長 山下 鎮也  
総合政策部 政策企画課 政策企画係  
係長 吉浦 加奈子  
主事 福嶋 晃弥（2025年度以降担当）  
主事 木戸 萌々子（2024年度まで担当）

熊本経済同友会

事務局長 鳥巢 勉  
事務局次長 横田 憲司

熊本商工会議所

経営支援部 次長 榎鶴 誠一  
経営金融課 課長 徳永 昭臣

熊本県工業連合会

前代表理事会長 田中 稔彦  
代表理事会長 宮村 宜明  
理事兼事務局長 前田 隆

主任 河口 友子  
肥後銀行  
代表取締役頭取 笠原 慶久  
人事部  
部長 上村 慎吾  
人事企画・ダイバーシティ推進グループ長  
前田 浩了  
地域振興部  
部長 大野 隆  
地方創生室 室長 中村 光輝  
推進役代理 中本 慎二  
推進役代理 津村 伸行  
推進役代理 守田 伸一  
上野 靖羅  
熊本日米協会  
会長 河村 邦比兒  
副会長 新道 欣也  
株式会社熊本日新聞社  
代表取締役会長 河村 邦比兒  
代表取締役社長 伊豆 信太郎  
ワシントン外語学院 代表 立山 由生  
熊本大学  
学長 小川 久雄(8月12日プログラム基調講演)  
副学長 大谷 順(8月13日熊本サイトフォーラム講評)  
理事 宮尾 千加子  
工学部長 井原 敏博  
情報融合学環長 城本 啓介  
学生支援部 教育支援課 濱洲 里美  
学生支援部 国際教育課 内山 佳世  
熊本県立大学  
学長 堤 裕昭(7月12日熊本サイト事前勉強会基調講演)  
理事・事務局長 梅川 日出樹  
国際教育交流センター長 Jeffrey Stewart  
Morrow  
事務長 平松 恵美  
参事 端羽 恵  
国際交流コーディネーター 姫野 早百合  
熊本学園大学  
学長 林 裕  
副学長 土井 浩嗣  
国際交流委員長 向井 洋子  
国際教育課 課長 切通 しのぶ  
入江 美里  
崇城大学  
国際交流センター課長 大久保 美衣  
事務局 庶務課 主任 大田黒 佳子  
熊本県立済々黉高等学校  
グローバルキャリア部 平野 英雄

九州学院高等学校  
教頭 外口 晴久  
熊本国際観光コンベンション協会  
代表理事 吉丸 良治  
事業推進課長 黒木 三奈子  
事業推進課 リーダー 藤本 勝利  
一般社団法人 熊本青年会議所  
理事長 中田 慎二  
監事 高山 正輝  
国際青少年特別委員会 特別委員長 村本 聡一郎  
事務局員 濱田 衣都子  
九州産交グループ  
代表取締役社長 岩間 雄二  
顧問 吉丸 良治  
経営企画グループ 鈴木 理智佳  
九州産交バス株式会社  
営業本部 貸切営業課 営業課長 渡辺 秀和  
株式会社ヒライ  
代表取締役社長 平井 浩一郎  
管理本部 副本部長  
人事・総務部 部長 高本 浩也  
人事・総務課 皆上 紅愛  
熊本渉外部3課 地区マネージャー 松尾 瑠偉  
錦戸企業グループ  
代表取締役社長 錦戸 啓人  
金剛株式会社  
代表取締役社長 田中 稔彦  
管理本部 副本部長 伊集院 直親  
管理本部 広報室 兼 価値共創本部プロダクトデザインチーム 三木 すずか  
ハイコムグループ  
代表取締役 甲斐 大童  
経営企画部 広報室 係長 菅沼 愛可  
熊本国際空港株式会社  
営業本部 地域連携部  
次長 磯田 将人  
係長 宮島 知子  
木村グループ  
経営支援本部 人事・総務室  
森上 彩香  
角田 美優  
NPO 法人ディスカバリーくまもと  
理事長 田嶋 尚美  
熊本りんどうライオンズクラブ  
会長 西本 健一郎  
幹事 菅原 清  
事務局 五島 智美

熊本市観光旅館ホテル協同組合  
事務局長 林田 祐典

熊本キワニスクラブ  
会長 磯田 淳  
副会長 鷹尾 雄二  
事務局長 田尻 泰廣  
事務局 坂井 木綿子

天草本渡ライオンズクラブ  
会長 岩崎 東洋司

一般社団法人 天草島鳥観光協会  
事務局長 中山 智之  
総務部チーフ 山崎 寛子

JA あまくさ 本所 購買部 生活福祉課 課長 鬼塚 加代子

株式会社フタバ  
代表取締役 安部 直也

株式会社河田印刷  
代表取締役社長 河田 猛宏

熊本地震震災ミュージアム KIOKU  
館内展示の説明をしてくださった皆様

九州電力黒川水力発電所  
広報グループ長 山崎 雅弘  
広報グループ 有馬 彩華

XOSS POINT.  
熊本日日新聞社 深川 杏樹

一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団  
常務理事 八木 浩光  
事務局長 勝谷 知美

熊本大学 大学教育統括管理運営機構  
特任助教 ミッチェル アンドリュー

西部方面総監部  
総監 陸将 烏海 誠司  
総務部 地域連絡調整室 渉外専門官 田中英樹

熊本同時通訳者協会  
代表 最相 博子

くまもと工芸会館

株式会社くまもとDMC  
代表取締役社長 磯田 淳  
地域活性推進部 プランナー  
リリー マクダーモット  
熊部紀衣子

天草ホストファミリー34家庭の皆様

天草ケーブルネットワーク  
テレビ制作課 森田 葵衣

牛深高校郷土芸能部

天草文化交流館・凧の会

ワールドフレンズ天草  
代表 俣野 智子  
副会長 野崎 知美

クロスロードカフェ

熊本県原爆被害者団体協議会  
前会長 武田 頼弘  
長崎被爆者 工藤 武子  
熊本被爆二世・三世の会  
会長 青木 栄

高校生平和大使  
九州学院高等学校3年生 島津 陽奈

必由館高等学校和太鼓部  
くまもとSDGsミライパーク  
館長 佐藤 香織  
パークマネージャー 近藤 啓太

株式会社CONNIE  
英語講師・通訳・翻訳 城野 香奈子  
(8月12日半導体プログラム通訳)

阿蘇くまもと空港 カフェg  
統括マネージャー 坂本 瑞稀

ファミリーマート J R熊本駅前店  
店長 岸田 隼翔

## ■ 熊本サイト企画委員（学年は 2025 年 8 月時点）

熊本大学  
法学部法学科3年 井上 陽菜乃  
工学部情報電気工学科3年 両角 朱莉  
工学部情報電気工学科2年 小林 響  
工学部情報電気工学科2年 平良 遊帆

熊本県立大学  
文学部英語英米文学科4年 前田 さつき  
文学部英語英米文学科2年 嶋田 健大  
文学部英語英米文学科2年 浦田 実侑

熊本学園大学  
商学部商学科3年 米崎 千裕  
商学部ホスピタリティマネジメント学科  
2年 柏原 陽菜  
外国語学部英米学科5年 黒川 佑真  
外国語学部英米学科3年 江島 菜々香

## ■ 学生 × 地域住民ディスカッションにご参加いただいた皆様（所属学校名）

熊本大学  
熊本県立大学  
熊本学園大学  
崇城大学  
熊本県立タカサギ高等学校  
九州学院高等学校  
熊本県立熊本高等学校

熊本県立第二高等学校  
真和高等学校  
熊本市立必由館高等学校

ファイナルフォーラム  
衆議院議員 長島 昭久  
在日本アメリカ大使館  
首席公使 Aaron D. Snipe

## ■ 熊本サイトフォーラムパネルセッション登壇者（高校生）

済々黌高等学校  
境 秀生  
馬渡 陽奈子  
吉田 小百合

## ■ 協力

平和学習 in 熊本にご参加いただいた皆様  
熊本サイトフォーラムにご参加いただいた皆様

## ○ 東京サイト

### ■ 協力：会場

国立オリンピック記念青少年総合センター  
衆議院第一議員会館  
法政大学

### ■ 協力

防衛省東京地方協力本部  
外務省  
GROOVE X 株式会社  
グローバル部 劉 峪伽  
歌舞伎座  
京都フュージョニアリング  
東京エレクトロン  
株式会社 D-POPS GROUP  
代表取締役社長 後藤 和寛  
アドバイザー 杉原 眼太  
合同会社 ポスト石油戦略研究所  
代表 大場 紀章  
LGBTQ プログラム  
LGBTQ とアライのための法律家ネット  
ワーク 共同代表・共同創設者 藤田 直介  
公益社団法人 Marriage for All Japan  
事務局次長 鹿島 真人  
Daiki Impact Design Studio  
代表 吉岡 大樹  
DLA Piper、Senior Associate  
Edward Mears  
衆議院議員 吉田 晴美  
外交安全保障プログラム  
一般財団法人日米協会  
会長 藤崎 一郎  
ハドソン研究所  
上席研究員 村野 将  
東海旅客鉄道株式会社



## 第九章 実行委員あとかぎ

### 北原 真悠（第 77 回日米学生会議 日本側実行委員長）

第 77 回日米学生会議をご支援・ご協力いただきました皆様に深く御礼申し上げます。

実行委員長として、1 年間の活動に身を徹することができたことを喜びとして感じております。この 1 年間、私はたくさんの愛情に包まれて活動することができました。長期に渡り、日米学生会議の活動をご支援していただきました財団の皆様、90 年の歴史を紡いできた歴代アラムナイの皆様、各サイトで金銭・物資・プログラム提供においてご支援くださった皆様の当会議に対する期待と愛情に感化され、少しでも意義のある活動を志し、今日まで全力で会議に尽力して参りました。リーダーとして劣る部分が多くある中、ビジョンを共に共有し、1 年間、共に活動してくれた実行委員全員に心から「ありがとう」と伝えたいです。

最後のあとかぎとして、未来の実行委員長に残したい言葉を記したいと思います。

実行委員長として活動した 1 年間、正直に苦しいこともありました。学生活動かつインセンティブのない完全奉仕型である学生会議を企画・実行することは容易なことではありません。実行委員ごとの熱量の差、情報共有不足、締切の厳守、AI の乱用、合理主義、効率主義、リスク管理、草の根活動を続ける忍耐力・精神力の有無。実行委員一人ひとりを尊重するよう務める一方、実行委員長として苦しい決断を下す場面が多々ありました。

その中でリーダーとは、「責任」と「覚悟」のもと、チームをまとめて活動を進める存在であることを学びました。決断が招く結果に対して恐れず、日米学生会議という組織の存続を担うものとしての責任を果たす覚悟を持ち、決断を下した瞬間から自信を持って、その決断を正解に導く活動を徹底すること、その繰り返しの中で実行委員長像を確立することが出来ました。何よりも、「学生会議活動に参加して良かった」「日米学生会議が熊本にて開催されて良かった」「天草ホストファミリーとの文化交流を通じて心が動かされた」というフィードバックを受けることが出来たのも、やはり、「責任」「覚悟」という言葉に突き動かされ、決断を繰り返してこなければ到達するものではありませんでした。

未来の実行委員長、そして実行委員長と共に活動をする実行委員の皆さん、理想的で完璧な活動というものはありません。異なる条件、環境、構成員で、私達は時代と共に変わる課題を取り上げ、学生会議をゼロから作ります。常に、意見を求め、求められる環境に身を置き、活動を続けなければなりません。疲弊することもあります。大好きな友達である仲間に対して、仕事仲間であるが故に厳しい言葉を伝えなければならない時もあります。そんな時、思い出すべきことは、学生会議に参加した時の感動体験、生き生きとした瞬間、または悔しかった思い出です。私たちはその経験があったからこそ、実行委員に立候補したことだと思えます。その初心を忘れず、活動を続ければ、素晴らしい出会いと感動体験に何度も巡り合えることだと思います。

実行委員長を経験した者として、常に、第 78 回以降の皆さんを応援しております。

最後に、第 77 回に参加していただきました学生の皆さん、本当にありがとうございました。当たり前ですが、沢山の応募、志の高い参加者によって学生会議は成り立ちます。5 年後、10 年後、20 年後、学生会議での学びや経験を活かしながら、異なる業界で活躍する皆さんと話す機会を楽しみにしております。皆さんのこれからの人生を心の奥底から応援しております。



## 赤瀬 朋基（第 77 回日米学生会議 日本側副実行委員長）

「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」こんな崇高な理念を体現するような会議だったのかと言われると、自信がない。90 年以上前、この会議を立ち上げた先人たちの意志に高い敬意を持つとともに、現在との乖離を実感した。

一方で、将来を担う若者を応援しようという日本社会の温かみを感じることはできた。日米学生会議を支援することによって得られる実利的利益がないにも関わらず、将来への期待とともに賛助・協賛してくださった全ての関係者に心からの御礼を申し述べたい。約 1 世紀に渡って紡がれてきた学生会議は、こうした社会の寛容さによるものであったことを噛み締め、今後は自分が還元することを使命として生きていきたい。



## 小川 志穂 (第 77 回日米学生会議 日本側副実行委員長)

この度は第 77 回日米学生会議をご支援いただきまして誠にありがとうございました。

私は第 77 回会議の熊本サイト主担当を務めさせていただきました。この場をお借りして、これまでお世話になりました熊本の皆様への感謝の思いを綴らせていただきます。

熊本でのプログラム設計にあたっては、熊本大学・熊本県立大学・熊本学園大学の 3 大学に在籍する 11 名の学生の皆さんに「熊本サイト企画委員」として 2 月より企画・運営にご尽力いただきました。熊本の魅力と課題について深く洞察されている皆さんの姿勢に刺激を受けると同時に、溢れる熊本愛に心を揺り動かされました。このような地元学生の皆さんと出会うことができたこと、また地域での活動を通じ人と人とのつながりを生み出すことができたことを大変嬉しく思います。

8 月の本会議では、熊本地震震災ミュージアム KIOKU の見学、地元企業・行政訪問、天草ホームステイ、平和学習、半導体シンポジウムなどのプログラムを通じて熊本についての理解を深め、最終日に開催された地元学生とのディスカッションとパネルセッションにて、各自の視点を持ち寄り熊本の今後について議論しました。将来的には、日米両国の学生が熊本の魅力を国内外に発信していくとともに、この度の学びを今後の学生・社会人生活において十分に活かし、各々の分野で広く社会に貢献していくことを願っております。また、当会議の活動への参加が地元学生にとっても日米・熊本の学生との交流を深める機会や地域課題・国際問題に関心を持つきっかけとなっておりましたら幸いです。

実行委員として約 1 年間、このような活動に携わらせていただきましたことを大変光栄に存じます。これまでお世話になりました自治体の長の皆様、熊本県庁・熊本市役所・天草市役所・菊陽町役場の皆様、天草ホストファミリーの皆様、被爆講和者の皆様、大学教授・職員・学生の皆様、地元企業の皆様、その他プログラムにご協力いただきました全ての関係者の皆様に心より御礼申し上げます。会議は終了いたしました。熊本と当会議の学生とのつながりは末永く続いてほしいと思っております。

最後になりますが、8 月の豪雨による被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、熊本の 1 日も早い復興をお祈り申し上げます。

歴史ある当会議は、伝統の継承と革新を重ね、これからも永く続いていくことと思います。引き続き当会議にご関心をお寄せいただけますと幸いです。

今後とも日米学生会議をよろしく願い申し上げます。



## 石賀 悠

第 76 回会議。生命医科学を専攻する私にとって、全くの未知の領域であるエネルギー分野での議論は、まさに暗中模索の連続でした。慣れ親しんだ専門用語や言語の殻を破り、剥き出しの本音でぶつかる環境に、当初はその壁の高さに圧倒されるばかりでした。しかし、その壁を乗り越えようともがく過程で得た成長は、何物にも代えがたいものです。支え、高め合ってくれた仲間への感謝を胸に、翌年は実行委員として、この学びを次世代へ繋ぐことで恩返しをしたいと決意しました。

続く第 77 回会議での一年は、まさにその決意を形にする時間でした。参加者として「個の成長」を追求した前年から一転し、今年は「組織とは何か」「人と人との結びつきはどのように組織を動かすのか」という問いに向き合う日々でした。個が集まり、意見を交わし、一つの目標に向かって動く。その過程では衝突も葛藤もありましたが、そうした摩擦の中にこそ組織の生命が宿り、関係が深まるのだと実感しました。日米学生会議は、単なる会議体ではなく、「人と人との真のつながり」を媒介として、学問や国境を越えて共に考え続ける共同体なのだと思います。個が集まり、想いで支え合うこの環境の中でこそ、組織の中に息づく“人のつながり”の尊さを鮮明に感じる事ができました。

日米学生会議は、私にとって、これまでに形成されてきた自己を壊し、新しく構築する場でした。コンフォートゾーンの外、そのさらに外縁に立つような感覚——誰もが不安や無力感を抱えながらも、それを隠さず曝け出し、共有し合う。そうした環境の中で、人は少しずつ自らの世界を広げていきます。その瞬間にこそ、日米学生会議が持つ本質的な意味を感じます。

“Once a JASCer, Always a JASCer.”

この言葉が示すように、一度この場に立った者は、会議が終わってもなお、互いに影響を与え合い、人生のどこかで日米学生会議の精神を生かし続けているのだと思います。

人間的成長のためには、コンフォートゾーンからの脱却が欠かせません。日米学生会議に集う学生たちは、それぞれが専門性を携えながらも、自らの無知や限界に直面します。その瞬間こそ、視野が広がり、真の学びが始まると感じました。分野を越えた対話や共同生活を通じて築かれる関係性、そして自分の殻を破る経験は、他では得難いものです。日米学生会議は、単なる学術の場ではなく、「どんな自分で生きたいのか」を問う場でもありました。

アカデミックな探究を深め、組織と個の関係を見つめ、そして仲間と共に限界を超えていく——そのすべての経験は、日頃より温かくご支援くださる皆さまのお力添えあってのことと、心より感謝申し上げます。

私たちは、第 78 回日米学生会議においても、この 90 年にわたる伝統の火を絶やすことなく、より深く、より豊かで、敬意に満ちた対話の場を築いてまいります。

今後とも、日米学生会議への変わらぬご支援とご厚情を賜りますよう、お願い申し上げます。



## イビネディオソ 嶺

「社会とは、過去・現在・未来の人々との契約である」——E・バーク。

私がこの言葉を引用するに至った理由は、彼が社会契約を単なる「社会対個人」の契約に留めず、共同体内部における異世代間の「個人対個人」の契約へと深化させた点に深い感銘を受けたからにほかなりません。

この視座に立てば、世代を超えて“想い”を継承し、次代へと橋渡しする営みこそが社会的行為の本質であり、まさにそれこそが日米学生会議の存在意義でもあると考えます。

本報告書からも推察されるように、第 77 回会議においては、従来にも増して多様な背景を有する参加者と交わる機会が設けられておりました。

これは単に多様性を称揚するためではなく、社会がいかに構成され、いかに人々の想いが受け継がれてきたかを省察する契機を得るためでもあります。

戦後 80 年を迎えた今日においても、なお多くの人々が切なる祈りを胸に平和を希求する姿を、私は熊本県でのホームステイ・プログラムの折、長崎の爆心地を訪れた際に目の当たりにいたしました。

近年の政治的動勢や「戦後 80 年所感」をめぐる公共圏においては、事象の捉え方や価値観の相違が顕著であり、分極化に繋がりがねないと懸念しております。

ゆえにこそ、私たちは社会がいかに形成されてきたのか、その原点に立ち返り、今後に向けて省察を重ねることが求められているのではないのでしょうか。

日米学生会議とは、学生相互の理解を礎とし、それぞれが思い描く理想の未来を語り合う貴重な機会であります。

しかし、理念の共有のみでは机上の空論に過ぎません。理念を現実へと昇華するためには、各自が自らの使命と役割を自覚し、行動へと結実させる覚悟が必要です。

分断と競争の時代にあって、過去に学び、未来を創造するような知的挑戦を、私は一人ひとりの学生に切に期待しております。

末筆ながら、本活動を支援し見守ってくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。今後とも本会議の理念にご理解を賜り、変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。



## 甲斐 聖人

日米学生会議に参加者として、そして実行委員として携わったこの二年間は、私の人生に確かな風を吹き込んだ。その風は今もなお、私の背中を押し続けている。実行委員としての任を終えた今、静かに筆を取り、ここで得た学びと感謝を綴りたい。

たくましい友人たち、まぶしい先輩方との出会いを通じて、私は数えきれないほどの言葉を胸に刻んだ。その中でも、とりわけ私の根を深く揺さぶり、今なお心の奥で響き続けているのがこの言葉である。

「どんな誰よりも、自分自身が、自分を信じてあげよ」

幼い頃から私は「自分は何をしたいのか」と問い続けてきた。ときに、いや幾度も、大人たちの声に抗いながら、自らの意志を選び取ってきた。高校に通うよりもやりたいことがあれば迷わずそちらへ進み、誰も知らない大学に惹かれれば、ためらいなくその扉を叩いた。それは「自分の舵を自分で握りたい」「他者の力に人生を委ねたくない」という幼い抵抗であり、同時に、拙くも真摯な強さの形だった。けれど、その強さはまだ脆かった。自らの選択を、どこかで信じきれずにいた。「本当にこれでよかったのか」と問い返す日々。現実には焦り、未来を思っては小さな不安に胸を騒がせる夜が続いた。

そんな折に出会ったのが、この日米学生会議だった。偶然のようでいて、必然のような出会い。そこにいた仲間や先輩方は、それぞれの夢と情熱をまっすぐに見つめ、自らの選択を誇りとしていた。彼らは迷いながらも、自分を疑わなかった。その姿に、私は思い出した。自分の歩んできた道を信じ、それを正解にしていくのは、他の誰でもない自分自身だと。どんなに小さな一歩でも、理解されなくても、それを信じ続ける勇気こそが、生きるうえでの確かな灯になる。この会議で過ごした時間は、その灯を私に見せてくれた。

そして今、会議の終わりを迎えたこの瞬間に、不思議と寂しさはない。この二年間で感じた熱と光は、確かに私の中に息づいている。それは消えることのない余韻となり、これからの人生を照らし続けてくれるだろう。

ここで出会ったすべての仲間たちへ、心からの感謝を込めて。  
僭越ながら、これを私の後書きとさせていただきます。



## 多田野 真仁

平素より日米学生会議にご支援・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。第 77 回日米学生会議を無事に終えることが出来たのはひとえに皆様のご理解・ご支援の賜物でございます。

第 77 回会議が終わって約 2 ヶ月、就職活動や新学期で自己紹介をする機会が増えました。以前は興味のあることを聞かれるたびに「いや～特にないっすね笑」という味気のない返事をしていたのですが、今は「環境・エネルギー、国際交流」だと胸を張って答えることができます。誇張でもなんでもなく、今の自分の興味・関心・考えを形作っているのは JASC での経験です。特にやることもなくぼーっと過ごしていた頃と比べると、参加者そして実行委員として携わった 2 年間を通じて大きく世界が広がった感覚があります。エネ庁での発表機会をいただいたり、各方面の第一人者に講義をいただいたり、海外の大学と訪問の交渉をしたり、、、と家でずっと天井を見つめていた頃の自分ではまず経験できないようなことも数多く経験することができました。そして、何よりも日米両国の素晴らしい仲間と出会い、友人になることができました。特定分野に傑出した才能を持つ人、聞いたことのない経歴を持っている人、明確な志を持つものすごい努力をしている人など、この会議でしか出会うことのできない人が多くいました。彼ら彼女らは概して人間性も素晴らしく、ことあるごとに自身の未熟さを痛感するとともにこのような場所に身を置くことができる幸運を実感していたのを覚えています。

非凡な才能も卓越した経験もない自分を受け入れてくれた第 76 回会議、そして第 77 回会議を作り上げてくれた参加者、自身の分科会に参加してくれたデリ、何よりこの 1 年間紆余曲折を乗り越えた実行委員の皆には感謝してもしきれません。

最後に、アラムナイの方々をはじめ本会議の実施にあたり多大なご支援を賜った全ての方々に改めて御礼申し上げます。引き続き 78 回会議においても変わらぬご厚誼を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



## 野添 葉音

文章は冗長になるが、ここに記す。

これまで JASC を支えてくださってきた方々から、「報告書には、何をしたかだけでなく、何を感じたのかを残してほしい」との示唆をいただいていた。そこで、EC の最後の役目は、JASC での経験を書き留めることであると考える。

なぜ、オンラインでつながれる現代において、日米の学生が集う会議をつくるのか。それは、日米の学生が、衣食住を共にする共通体験を積む時間にこそ価値があると信じているからだ。

高校 1 年生の頃から憧れ続けた日米学生会議。第 76 回では、私の関心分野である福祉と倫理分科会が設立され、「この機会を逃してならない」という思いから応募を決意。幸運にも、英語力も経験も十分とは言えない中で、参加者として選んでいただいた。

当初は、これまで触れたことのない多様な価値観が存在し、自己の価値観が揺さぶられる日々。全く趣向の異なる分科会に関心を持つ学生が集うこの空間では、日米から思想・宗教・人種など、あらゆる面で異なる人間に出会う。周囲の優秀さに圧倒され、「自分が身を置くにはもったいない環境だ」と感じながら、必死に先輩たちの背中を追っていた。

そうした中で気づいたのは、どれほど優秀に見える学生であっても、悩み、もがきながら奮起し、自分の役割や強みを信じて努力しているという事実だった。また、衣食住を共にする中で一人ひとりの人間性が見えてくると、共感できることもあれば、理解し合えないことに苦しむ局面もある。特に忘れることができないのは、76 回本会議のフリータイムで、日本人参加者と政治について意見が衝突し、その夜にシャワーを浴びながら自分の度量の狭さに悔し涙を流した日だ。その日、私は、多様性のある組織において理解し合うことは決して容易ではないことを思い知った。多様な環境に身を置くことは、コンフォートゾーンを抜け出すことであり、必ずしも居心地が良いわけではない。だが、私は、この過程を通して、太く、深い、信頼が生まれ、生涯にわたる友情が育まれたことも実感した。共感だけで成り立つ安易な議論ではなく、視点や前提の違いから始まる議論こそが本質的で、互いの創造性を刺激し合う。だからこそ、肩書のない学生である今、夢を追い、人とつながり、協働することの尊さを体感すべきだと確信する時間だった。

そこで私は、非常に微力ながらも、次の世代に恩送りをしたいと考え、EC に立候補した。具体的には、日米の学生が共通体験を積みながら、切磋琢磨して議論できるよう、心理的安全性の高い環境を提供すること。そして、私自身がこの大好きなコミュニティにいたかった。だからこそ、個性豊かな参加者が何ものにも染まらず、自分のカラーを活かし続ける場をつくるために、限りなく注ごうと決めた。

こうして始まった第 77 回の実行委員としての活動は、最も刺激的で充実していた一方、苦しみが伴う時間でもあった。特に印象的だったのは、関西サイトの責任者としてプログラム設計に取り組んだ一年間である。課題感として、日米学生会議の存在価値を示し続けるには、受け継がれてきた伝統を大事にしながらも、新たな領域を開拓する必要があった。そこで、今年は、大阪サイトを加え、京都では新たに「産業」を軸としたプログラムの実現を目標に掲げた。

まず、自分自身が日本や関西の歴史を理解していなければ、良いプログラムは生み出せないと感じ、EC 就任後すぐに大阪を訪れ、続く関西業務をはじめ、京都の産業関係者へのヒアリングを開始した。

特に、京都サイトは、日米学生会議にとって長年のご縁が受け継がれてきた場所である。アラムナイの方々の尽力によって、どの時代もつなぎ止められてきた地。公開されている過去の報告書を全て読み、参加者に何を伝えたいのかを考えながらも、その責任の重みを前に不安を感じる日々もあった。それでも、日本文化や思想に関する文献を読み、京都の特色を徹底的に調

べながら、「今、この京都で学ぶべきことは何か」を問い続けた。

その末にたどり着いた答えは、「京都とは、学術的な地であり、歴史を重んじながらも、次々とイノベーションを生み出す街である」ということだった。そこで、京都ならではの「スタートアップ」「カルチャーアントレプレナーシップ」をテーマに据えることを決めた。アイデアを形にすることに苦闘したものの、アラムナイの竹本様、橋本様が壁打ち相手となって多様な示唆を与えてくださった。そして、何者でもない学生の声を信じてくださった、Pieces of Japan 株式会社の小山様、一般社団法人京都産業創造の森の金山様のおかげで、このフォーラムを実現することができた。

会場で輪になり、登壇者と参加者が意見を交わす姿を目にしたとき、その空間に流れる一体感に言葉を失った。それは、私一人では決して到達できなかった領域であり、それぞれの興味や強みが融合し、新しい日米学生会議の歴史が生まれた瞬間だった。

同時にこの一年は、これまでの人生で最も自分の弱さと向き合う時間でもあった。私は他者に頼ることが苦手で、JASC でも組織体制をうまく構築できず、仕事を抱え、キャパシティを超える日々が続いた。時に、会議を成功させるという目標に向かって進むべき立場でありながら、自身の意見に自信が持てず、立ち止まっている自分が情けなかった。

それでも、自分が「ダメだ」と思っていた不器用で完璧主義な部分を受け入れ、信じ続けてくれた仲間がいた。特に、何度も向き合ってくれた実行委員長のみゆ、そして親身に助言をくださったアラムナイの方々のおかげで、再び前を向くことができた。

そこからは、他者からの評価とは無関係に、「これこそが JASC で表現すべきだ」という自分の選択を信じることにした。そして、どんな時も、「あなたの力が必要だ」と言葉にし、相手の強みに合わせて責任を委ねること。仲間を信じて、最後は自分が責任を持つ姿勢は、実行委員長であるみゆの背中を見て学んだことである。「最後は私が責任を取るから、葉音ちゃんがやってみたいようにチャレンジして」

その心強い言葉に支えられ、失敗しながらも、仲間と共に新たな試みに挑戦することができた。

この会議で得た人間関係は、今もなお、私の「どのように生きたいか」という根本を揺さぶっている。この二年間から、私は、自信をもって意見を述べることに、同時に他者の意見を尊重することの大切さを学ぶことができた。また、日本人・アメリカ人という枠組みの前に、一人の人間として相互理解を深めるプロセスを体験することは、自己理解にもつながるのだと実感した。これこそが、JASC の醍醐味ではないだろうか。

もう一つ、この場をお借りして、私の人生に大きな影響を与えてくれたのは、第 16 回参加者の竹本様に感謝を申し上げたい。高校時代に取材記事を拝見して敬意を抱き、その後、春合宿でお話しし、歩く会や誕生日会にも参加させていただいた。毎回のお便りで現役生を労わる言葉をかけてくださると同時に、ご自身の多様な経験をもとに、「世界は広く、人と人がつながることの素晴らしさ」を共有してくださった。そのご縁を大切に作る姿は、「私の人生における豊かさとは何か」という問いを私に与えてくれた。

時代や文化を超えて現れる、人間の心の普遍的なもの。一人の人間として対峙してはじめて、他者とつながることの難しさ、そしてそれがどれほど豊かで素晴らしいものを身に染みて学んだ場所。そして、日本のことが大好きだと再確認した場所。

JASC という帰れる場所があるからこそ、これからも果敢に挑んでいける。第 77 回を創り上げてくれた参加者一人ひとり、最後まで挑戦する姿から勇気をくれた 15 名の EC、EC の役目を託してくださった第 76 回の仲間には、感謝が尽きない。

最後に、学生のみで第 77 回を実現することは不可能だったと強く感じている。今日の日米学生会議があるのは、社会の中で存在意義を示してきた先輩方、そして経済的援助を惜しまなかった多くの団体・個人の支えがあってこそである。選考を経て集った代表者は、多額の賛助金によって参加しており、学生主体の民間外交を担う存在であった。そして、次は、私たちがこの会議を支える社会の一員として歩んでいかなければならない。私自身、将来は日本を支える一社会人として、ひいては国際社会に還元できるよう精進していきたい。

第 77 回日米学生会議の開催を契機に、参加者一人ひとりが JASC で得た絆を大切につなぎ、社会に還元し、共に努力を重ねていけるよう願っている。関わってくださった全ての皆様、本当にありがとうございました。引き続き 78 回会議においても変わらぬご厚誼を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



## 熊本サイト企画委員

約5ヶ月間、実行委員や他の企画委員とともに協力して、より良い熊本サイトになるよう話し合いを進め、開催期間中は一部運営にも携わりました。私は人前に立つことや自分の意見を述べるのが苦手で、今回の活動に対する不安が多くありました。しかし、周りのサポートがあり、そして何よりみなさんが楽しんでいる姿を見て、自然と苦手を感じなくなり、気づけば私も楽しんでいました。また、企画を考えていくなかで、熊本に住んでいても知らないことが多くあり、改めて熊本県には多くの魅力が詰まっていると発見できました。

私がこの活動で最も感銘を受けたことは、参加者一人ひとりが自らを表現する言葉を持っていること、そしてそれを深く聞く力を兼ね備えていることです。交流を通して、参加された方全員がこれらの高度なコミュニケーションを当たり前実践されていて、その姿に敬意と憧れを抱きました。実際に会うことができたのは1週間ほどの短い期間でしたが、実行委員や企画委員、参加者のみなさんと出会えて交流ができたことがとても嬉しかったです。今回の企画委員の活動は普段の生活ではできない、とても貴重な経験となりました。

熊本大学工学部3年 両角朱莉

今回、歴史あるJASCに企画委員として参加したことは、今後の活動における新たな視点と責任感を強く意識する貴重な機会となった。

私は当初、熊本での初めての開催ということに、熊本で生まれ育ったアイデンティティを生かす好機と捉え応募した。応募時点では、日米の学生との交流に期待する程度であったが、全体会議への参加や熊本サイトの概要を聞く中で、JASCがもつ文化交流と外交における歴史的・学術的な重要性を強く実感した。これにより、ホスト側としての責任感を初めて自覚し、生半可な気持ちで臨んではならないという決意に至った。熊本サイトが始まって以降も、自分が担当した阿蘇方面の震災ミュージアム(KIOKU)を訪れ参加者の方に熊本地震の実体験を問われた際、地元出身者として橋渡し役を担う意義も強く実感した。

企画委員として最も大変だったことは、熊本サイト実施の1週間前に発覚した、熊本市内での数十人規模の公共交通機関による移動手段の確保であった。中心街にもかかわらず公共交通機関の規模が限られているという地域的な課題もあり、慣れない土地でスケジュール通りに移動を遂行できるのかという恐怖にも似た焦りを覚えた。この課題について我々は日付をまたいで議論し、代替案の検討、企画委員と熊本サイト実行委員長との綿密な調整を行った。それにより当日の移動はスムーズに進み、スケジュール通り遂行できた。この経験から、責任感をもって企画や提案、実践することを学んだ。

改めて、第77回JASCでみなさまとご縁をいただき、素晴らしいときをともに過ごせたことに、厚く御礼を申し上げる。

熊本学園大学外国語学部英米学科3年 江島菜々香

私は、日米学生会議が熊本で開催されるという発表をきっかけにその存在を知った。幼い頃から英語を学んできて異文化交流等も好きなので興味を持ったが、今後もっと実力をつけてから応募してみようと考えていた。そのような中で、大学を通して熊本サイト企画委員の募集があり、すぐに応募を決めた。

初めの頃はリモートでの会議が主だった。私にとって慣れないことで、うまく発言できず悔しい思いをすることもあった。しかし、熊本について学び直して事前学習会で発表したり、県庁訪問、記者会見などに参加したことで自信がついていった。

本会議の中では、グループで地域おこしについて話し合ったことが特に印象に残っている。ディスカッション終了後にアメリカ側参加者の一人から、地方での問題について当事者から知ることができてよかった、私が話した内容を理解できたと言われた。そのとき、生まれ育った地域について感じていることを英語を使って自分の言葉で伝えられたと、本当に嬉しく感じた。

企画委員としての活動を通して、日米の意欲ある学生たちの存在を知った。私の知らない世界の広さに気づくことができたと思う。たくさんの経験と学び、今も続いている多くのつながりを得られた貴重な機会に大変感謝している。

熊本県立大学文学部英語英米文学科2年 浦田実侑



## 第十章 第 78 回日米学生会議のお知らせ

### 開催概要

#### 【総合テーマ】

“Resilience: Forging Mutual Trust from Sincere Dialogue”

「共韌 — 誠意ある対話が紡ぐ日米の相互理解と信頼 —」

日米学生会議は、1934年に創設された日本初の国際学生交流プログラムとして、日米両国の学生の相互理解と友情を育み、両国と世界の平和に寄与することを目的として継続されてきた。戦後80年を超えた今、国際社会は分断・対立・不信といった課題に直面しており、異なる価値観を持つ人々がいかにして対話と信頼を築くかが問われている。第78回日米学生会議は、誠意と勇気をもって対話を重ねる学生たちが、「共韌」の精神のもと、異なる社会を結びつけ、新たな信頼の形を紡ぐ挑戦である。会議の終わりは、新たな対話の始まりであり、ここで築かれた関係が未来の日米関係の礎となることが期待される。

#### 【開催期間】

- ①春合宿 2026年5月3日～2026年5月5日
- ②安全保障研修 2026年6月頃予定
- ③自主研修 2026年6月上旬予定
- ④直前合宿 2026年8月1日～8月2日
- ⑤本会議開催 2026年8月2日～8月23日

※①・④・⑤は参加必須、②・③は任意参加。

※テスト等により、④・⑤の開催期間全てに参加できない可能性がある場合は応相談。

#### 【参加者】

日本側：36名（実行委員8名を含む）

米国側：35名（実行委員6名・インターン1名を含む）

計71名

#### 【開催地】

##### 第一開催地 サンフランシスコ 8月2日～8月9日

サンフランシスコは、アジア太平洋と北米を結ぶ「架け橋」として、多様性と革新の精神を体現する都市である。ゴールデン・ゲート・ブリッジに象徴される開放性のもと、異なる文化・思想・価値観が交錯し、経済・社会・技術の各分野で新たな潮流を生み出してきた。移民の歴史に根差した包摂性と、シリコンバレーを中心とする技術革新が共存するこの都市は、現代社会における「多様性と発展の共生」を考える上で格好の舞台である。本サイトでは、地域行政、企業、大学、市民団体など、多様なアクターと対話を重ねながら、経済的繁栄と社会的公正の両立という課題を探究する。特に、産学連携や社会起業、テクノロジーと倫理、環境と経済の接点といったテーマを通じ、変化を生み出す力がどのように社会の持続可能性と結びつくのかを議論する。一方で、経済成長の陰にある地域格差や社会的排除にも目を向け、革新がもたらす恩恵とリスクを多角的に見つめる。サンフランシスコは、ただの繁栄の象徴ではなく、多様な人々が共存するための試行錯誤の歴史を持つ都市である。本サイトでの学びは、急速に変化する世界の中で、異なる立場の人々がいかに協働できるかという根本的な問いに向き合う機会となるだろう。参加者は、経済・技術・文化の交差点に身を置き、日米の若者として未来志向の社会像を描く力を磨くことを目指す。

## 第二開催地 ナッシュビル 8月9日～8月15日

「ミュージックシティ」と呼ばれるテネシー州ナッシュビルは、カントリーミュージックの聖地として有名である。近年では世界的アーティストが拠点とする、ニューヨーク、ロサンゼルスに次ぐアメリカ第三の音楽都市である。テネシー州には南北戦争時代に遡る独特な南部文化が存在しており、「古き良きアメリカ像」を見ることができる。その一方、ナッシュビルは近年ビジネスの拠点として世界的に高い評価を得ており、日系企業とも強いつながりがある。歴史的に製造業の存在が色濃く、日系自動車関連企業の本社や主要工場が位置している一方、近年ではIT関連企業への投資も増えている。ナッシュビルでは、日本では容易に触れることのできないアメリカ南部の豊かな文化を知り、アメリカ社会の多様性を深く理解する機会とする。また、経済分野を中心とする日米関係の最前線を視察し、今後の二国間関係のあり方を考察する契機とする。

## 第三開催地 ワシントン .D.C. 8月15日～8月23日

ワシントン D.C. は、アメリカ合衆国の首都として、政治・外交・安全保障の中心に位置する都市である。連邦政府機関、国際機関、大使館、シンクタンク、そして市民社会団体が密集するこの都市は、国家の意思決定と国際協力の現場が交錯する場であり、グローバル・ガバナンスの縮図とも言える。また、リンカーン記念館やアメリカ先住民博物館などに象徴されるナショナル・モールの文化的風景は、アメリカの多様な歴史と社会の複雑さを映し出している。本サイトでは、政策立案や外交、安全保障、経済、環境、人権といった分野を横断的に捉え、国際社会の中で日米が果たすべき責任を考察する。政府関係者、専門家、市民社会のリーダーなどとの対話を通じて、制度と理念の関係、公共性とは何か、民主主義を支えるリーダーシップとはどのようなものかを探る。また、U ストリートに息づくアフリカ系アメリカ人の芸術と音楽の伝統や、多文化的な食文化にも触れることで、政治の枠を超えたアメリカ社会の多面性を体感する。ワシントン D.C. での学びは、単に政策を理解することではなく、「異なる価値観の共存をいかに実現するか」を考える契機となる。この都市での経験を通じて、参加者は「公共に奉仕するとは何か」という問いを自らの中に取り戻し、世界の中で自国の立場を再定義するだろう。それは、理念を語るだけでなく、現実の複雑さと向き合いながらも、対話を通じて平和と協調を追求する JASC の精神そのものである。

### 【分科会】

#### 国際政治 /International Politics

担当：手塚 颯一郎

現代の国際政治は、協調と対立が複雑に交錯する転換期にある。大国間競争が国際秩序の安定を揺るがすなかで、政治的リーダーシップと外交的対話の重要性はかつてなく高まっていると言える。ウクライナ戦争や中東情勢の緊迫化、東アジアの不安定化などにより、各国は理念と現実のはざまに難しい舵取りを迫られ、経済安全保障や気候変動といった従来にはなかった新課題も国際関係の中核に浮上している。このような時代において、日米協力は世界秩序の維持と再構築に不可欠である。終戦から 80 年、そして米国建国 250 年という節目を迎えるいま、両国はいかに民主主義、法の支配、人権といった普遍的価値を基軸に責任を果たすかが問われている。本分科会では、こうした国際環境の変化を踏まえ日米が果たすべき政治的役割と協力の在り方を多角的に議論する。国際政治を中心に据えつつ宇宙やサイバー、経済安全保障などの新たな分野にも目を向け、未来志向の対話を通じて相互理解と信頼の深化を目指す。

#### 資源と自然・社会 /Managing the Environment and Natural Resources

担当：田中遼弥

有史以来、人類は自然界に存在する資源を多様な形態で利用することにより活動領域を拡大してきた一方、その過程は賦存量や技術、社会構造など様々な要因による制約を受けてきた。現代において、それらの課題は国家、企業、地域社会といった多様なレベルで顕在化している。しかし、私たちの社会が自然との相互作用による生産活動を基盤としている以上、その利用を止めることは不可能であり、世代や各アクターの利害を超えて、公正かつ持続可能な方法で自

然を利用するための合意形成が図られなくてはならない。本分科会は、そのような均衡をいかに構築し得るかを様々な分野の知見を基に考察する。一例を挙げると、資源の利用と管理を規定する政策や制度設計については政治学や経済学等の視点が重要である。また、持続可能な資源利用のための技術的アプローチについては工学や環境学、農学等理系分野の知見が不可欠である。さらに、文化的・歴史的視点は人類が自然をどのように受容してきたか、そしてそれらが人類の意思決定にいかなる影響を及ぼしているかを理解するために必要である。資源と自然について、学問分野の枠を超えて多角的な議論を行う意志を有する参加者を歓迎する。

## **分断の時代のアイデンティティとコミュニティ /Identity, Community & Polarization** **担当：上田理紗**

政治の混乱と拡大する経済格差が、世界各地で社会の分断を生んでいる。人々の孤独が深まる現代において、分極化とアイデンティティ政治は、怒り、偏見を用いた権力闘争、そして暴力を伴う対立を生み出す。その一方で、違いを乗り越えた率直な議論は、コミュニティ構築と社会における帰属意識の醸成に寄与するだろう。

参加者は日本とアメリカにおける孤独と分断の原因に焦点を当てる。本分科会では個人の経験とアイデンティティを軸に、共韌 (Resilience) さが相互理解をもたらす瞬間を追求する。議論されるトピックとしては、個人や集団のアイデンティティが市民参加や共同体形成にどのように影響するのか、どのような政治的・社会的変容をもたらすのか、などがあげられる。幅広い分野から多様なバックグラウンドを持つ学生を歓迎する。

## **研究・産業・社会を貫くイノベーション /Innovation and Technology -Innovation across Research, Industry and Society-** **担当：伏谷飛鳥**

科学は本来、知の探究という独立した営みであった。しかし、科学技術の発展に伴い、科学は社会の構造や人々の生活を大きく変え、その実践も社会の価値観・制度・文化・経済から深く影響を受けるようになった。環境、エネルギー、資源などの地球規模の課題が顕在化する現代において、イノベーションは持続的発展を支える不可欠な手段となっている。

日本と米国では、研究資金の構造、大学研究の在り方、社会実装の経路が大きく異なる。日本では公的資金が中核を成し、大学は基礎研究を中心に安定的な研究基盤を築いてきた。一方で、課題とされてきたリスクテイクや迅速な社会実装への取り組みが進む中で、研究の性質が変化しつつある。米国では、産学連携や知的財産収入など多様な資金源が研究を支え、社会実装が加速しているが、成果偏重や格差拡大といった課題も抱えている。こうした制度の違いは、研究文化や人材育成に影響し、科学の方向性を形づくっている。

また、日米両国で基礎研究費が絶対的・相対的に縮小傾向にあり、イノベーションを支える基盤の弱体化や研究の自由の制約といった問題も見逃せない。本分科会では、科学を社会と共に未来を形づくる営みとして再考し、持続可能な未来を築くための道筋を探求することを目的とする。その上で、イノベーションの推進に向けて各機関がどのように貢献していくべきかについて、異なる学問的背景を持つ参加者同士の対話を通じて議論する。

## **報道とメディア /News and Media** **担当：山川心春**

デジタル時代が到来した現代、インターネットにより私たちは世界へ情報を手軽に発信できるようになり、同時に世界中の情報を受信することも可能になった。これにより、これまで社会に届きにくかった声が広く共有されるようになった。例を挙げると、Black Lives Matter や #MeToo などの社会運動は、今まで抑圧されていた当事者の視点を社会的な議論へと押し上げる役割を果たした。一方で、ネット空間は誤情報や偏向報道など、社会の分断を深める危険性も抱える。また、言論の自由は基本的的人権であり民主主義の要だが、誤解を招く情報や虚偽を拡散することで、他者を抑圧したり、価値観やアイデンティティを毀損する手段にもなり得る。本分科会は、政治学、社会学、法学、哲学など様々な視点から、メディアと報道、そして社会

本分科会は、政治学、社会学、法学、哲学など様々な視点から、メディアと報道、そして社会正義との関係性を考察する。多様な声をどう受け止め、伝えるか。生成 AI や誤情報が政治運動や個人に与える影響、そして情報発信における報道機関・個人・社会の倫理的責任など、日本と米国の制度や文化、歴史を比較し、これからの報道とメディアのあり方を模索する。

## 健康と革新 /Health and Reform

### 担当：大橋莉央

現代社会において、医療技術と科学の進歩は健康の概念そのものを拡張し続けている。一方で、生活習慣病の増加やメンタルヘルスの悪化、健康格差など新たな課題も顕在化している。健康はもはや病気の有無を超え、ライフスタイルや社会環境、価値観によって形成される複合的な概念として認識されつつある。一方、近年注目されるバイオデザイン (Biodesign) は、利用者中心の発想と革新性を結びつける医療機器設計の試みであり、生命倫理 (Bioethics) は遺伝子編集や AI 医療の領域で人間社会の限界と責任を問う。これらの分野は、医療を越えて健康を多角的に捉えることの重要性を示している。本分科会では、「健康と革新 (Health and Reform)」を軸に、日米の制度・文化・価値観の違いを踏まえ、健康をめぐる対話を行う。日本は予防医療や国民皆保険など「健康を守る仕組み」を築き、アメリカは研究資金とスタートアップ文化を背景に医療革新を牽引してきた。両国は「制度」と「技術」という異なる強みを有し、世界の医療を支えている。2026年、パンデミックから6年、SDGs 目標達成年まであと4年の今、技術革新が健康と幸福をいかに支えるかを共に考える。

## 芸術と文化形成 /Arts and Cultural Reflection -Shaping Culture through Artistic Mediums-

### 担当：今田真子

現在、私たちは AI による芸術生成の進展、戦争や社会的分断の深刻化、歴史の語り方や文化的記憶をめぐる対立など、文化そのものの意味が問い直される時代に生きている。グローバルな対話が叫ばれる一方で、言語や歴史的背景の違いにより、他者や他文化への「深い理解」は一層困難になっている。こうした状況の中、芸術は国家・言語・専門領域を越えて人々をつなげる共通言語であり、時に社会を動かすソフトパワーともなり得る。そして芸術は単なる文化の「反映物」ではなく、文化を能動的に形づくる力そのものでもある。本分科会では「文化は芸術を生み出し、芸術もまた文化を形成する」という双方向的な関係に着目し、絵画、映画、音楽、建築、デザイン、文学、マンガなど多様な artistic mediums (芸術的媒体) を通して、この循環構造を横断的・比較的に読み解いていく。芸術は何を語り、どのように文化的価値観や社会構造を表現し、あるいは再構築してきたのか？ そしてそれは分断を超えた対話や、新たなアイデンティティの創出にどう関与し得るのか？ 参加者の専門性や関心を活かしながら、芸術を通じた社会的変革の可能性を模索する。

## 第78回日米学生会議実行委員会紹介

### 【日本側実行委員】

(氏名、所属、担当役職)

 <p><b>伊達 早和花</b> 慶應義塾大学法学部 2年 実行委員長/財務/ナッシュビル/ 報告会/自主研修/関西業務/ JASC COMEBACK</p>	 <p><b>田中 遼弥</b> 九州大学農学部 4年 副実行委員長/選考/ ワシントン DC/報告会/報告書/ 春合宿/関西業務</p>
 <p><b>伏谷 飛鳥</b> 京都大学工学部 3年 副実行委員長/広報/ナッシュビル/ 報告会/自主研修/関西業務/ JASC COMEBACK</p>	 <p><b>今田 真子</b> 東京外国語大学国際社会学部 3年 選考/サンフランシスコ/報告書/ 春合宿/直前合宿/定例会</p>
 <p><b>上田 理紗</b> 東京大学教養学部 3年 広報/ワシントン DC/報告書/ 直前合宿/リスクマネジメント/ 定例会</p>	 <p><b>大橋 莉央</b> トリニティカレッジ (ダブリン大学) 医学部 1年 広報/サンフランシスコ/報告書/ 自主研修/リスクマネジメント/ JASC COMEBACK</p>
 <p><b>手塚 颯一郎</b> 慶應義塾大学院政策・ メディア研究科 1年 選考/ワシントン DC/自主研修/ 安全保障研修/リスクマネジメント/ 業務効率化</p>	 <p><b>山川 心春</b> 早稲田大学政治経済学部 1年 財務/ナッシュビル/報告会/ 春合宿/安全保障研修/ JASC COMEBACK</p>



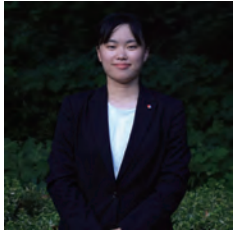
【アメリカ側実行委員】

(Name, Affiliation, Position in charge)

 <p><b>Eleanor Meunier</b> Colgate University American Chair</p>	 <p><b>Zoë Hoksbergen</b> University of California, Berkeley American Vice Chair</p>
 <p><b>Gerald Reiling</b> Duke University Recruiting &amp; Marketing</p>	 <p><b>Nil Nyah</b> Duke University Treasurer</p>
 <p><b>Maya Sasaki-George</b> Trinity College-Hartford Secretary</p>	 <p><b>Lucie Freeman</b> University of Minnesota Recruiting &amp; Marketing</p>



## 第78回日米学生会議 日本側実行委員長からのご挨拶



### 伊達 早和花

慶應義塾大学法学部2年

第78回日米学生会議日本側実行委員長

日米学生会議は2026年で92周年を迎える。戦争や資金難など、様々な事情により幾度か会議の開催が中断されたが、多大なるご支援のおかげで第78回目の開催に至ることができた。偉大な先輩方が紡いできた日米学生会議は単なる一夏の思い出を超え、日米関係を根底から支えてきた宝物である。第78回日米学生会議実行委員長としてこの長い歴史の一頁を刻むことは大変光栄であり、身の引き締まる思いでもある。

実行委員会が発足してから常に向き合ってきた問いがある。私たちは何のためにこの会議を開催するのか。なぜ2026年の夏に渡米し、日米の学生で議論をする必要があるのか。何時間にも及ぶ議論の結果、私たちが出した答えが第78回の会議テーマに反映されている。戦争、パンデミック、そして分断。目まぐるしく変動する社会情勢の中、人間関係は希薄化し、対話不足が進んでいる。そんな時代だからこそ、出身国や学生という肩書きに囚われず、本音の意見でぶつかり合う対話が重要だと考える。

少し硬い文章を書いてしまったので、日米学生会議が「意識の高い人」の集まりだというイメージを助長してしまったかもしれない。しかし、実際には所属や年齢などの肩書きは関係なく、ただひたすら全力で議論に向き合う人たちが集まる場所であることを強調したい。参加者として、ありとあらゆるバックグラウンドを持つ学生たちとの対話を通じ、自分の視野の狭さを実感するとともに他者の存在を通して自分を省みることもできた。2025年の夏が“life-changing experience”であったことに微塵の疑いもない。78回会議が参加者にとっても同様に最高の経験となるよう、実行委員一同心血を注いで準備を進めている。

第78回会議は米国で開催される。2026年夏、サンフランシスコ、ナッシュビル、ワシントンD.C.を訪れる中で、どんな発見があるだろうか。米国の学生と三週間寝食を共にして議論に向き合う中で、自分一人では見ることはできなかった世界が見えてくるだろう。来夏、人生を変える覚悟を持った学生にお会いできることを心から楽しみにしている。



## 編集後記

第 77 回実行委員会は 2024 年の 8 月末に発足し、本報告書の完成をもって活動に終止符を打つ。顧みれば、本会議終了前日、ワシントン D.C. の日本食レストランでアメリカ滞在最後の昼食を共にしたのが実行委員としての初顔合わせであった。各々が参加者としての JASC を終え、実行委員としての JASC に向けて、希望や不安そして何よりも高揚感に満ちた表情をしていた様子が思い出される。JASC に対する意味付けはそれぞれ違えど、連綿と受け継がれてきた本会議の価値を時代に合わせた形で引き継ぎたい・未来を担う参加者同士が学び、腹の底から議論できる空間を作り上げたいといった根底の想いを共有していたことが、第 77 回会議を無事終えられた最大の要因であったことに何の疑いも差し挟まない。改めて、苦楽を共にしながら第 77 回を作り上げた実行委員の皆には感謝しかない。また、日米学生会議は長年の間、国際情勢変化の煽りを受けながらも、アラムナイの皆様や各種関係者の皆様に支えられながら回数を重ねてきた。本年もまた、様々な場面でご支援・ご協力を賜った皆様に厚く御礼申し上げる。

200 ページにもわたる本報告書には、本会議中にはなかなか共有できなかったデリや実行委員の想いがまとまっている。本報告書が JASC77 で仲間と過ごした時間をふとした瞬間にでも思い出せるきっかけになれば幸いである。最後に、既に活動を開始している第 78 回日米学生会議と本報告書に目を通す未来の JASCer の更なる飛躍を願って、結びの言葉とさせていただこうと思う。

報告書担当 多田野真仁・小川志穂・野添葉音・イビネディオオン嶺・北原真悠

## 第 77 回日米学生会議 日本側報告書

発行月 2026 年 3 月  
編集者 多田野真仁・小川志穂・野添葉音・イビネディオオン嶺・北原真悠  
発行 日米学生会議実行委員会 報告書編集委員会  
表紙 北原真悠  
写真撮影 Amy Wu

この書籍に関するお問い合わせ先  
〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-6-2 コモレ四谷 グローバルスタディスクエア 3 階  
一般財団法人国際教育振興会 日米学生会議事務局  
TEL: 090-1140-4857  
日米学生会議サイト：<https://jasciec.jp/78th/>

本書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。





**尊厳を守る～敬意ある対話が紡ぐ日米の調和～**

**Upholding Dignity: Bilateral harmony through respectful dialogue**

